京都府遺跡調査概報

第90冊

1．名神大山崎ジャンクション関係遺跡

2．第二京阪道路関係遺跡

3．国道1号京都南道路関係遺跡

4．木津地区所在遺跡

5．稲葉遺跡第5次

6．長岡京跡右京第635次（7ANKNZ-10地区）

1999

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成10・11年度に実施した発掘調査のうち、日本道路公団関西支社・建設省近畿地方建設局・都市基盤整備公団関西支社・西日本旅客鉄道株式会社・京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて行った名神大山崎ジャンクション関係遺跡・第二京阪道路関係遺跡・国道１号京都南道路関係遺跡・木津地区所在遺跡・稲葉遺跡第５次・長岡京跡右京第635次に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、大山崎町教育委員会・八幡市教育委員会・久御山町教育委員会・木津町教育委員会・京田辺市教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センターなどの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成11年12月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長　樋口隆康

凡　　例

1．　本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1．名神大山崎ジャンクション関係遺跡

2．第二京阪道路関係遺跡　　3．国道１号京都南道路関係遺跡

4．木津地区所在遺跡　　5．稲葉遺跡第５次

6．長岡京跡右京第635次(7ANANKNZ-10地区)

2．　遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1．	名神大山崎ジャンクション関係遺跡			日本道路公団関西支社	
	(1)長岡京跡右京第589次(7ANSKT－3地区)	大山崎町大字下植野小字門田	平10．4．13～12．11		石井清司 竹下士郎 中村周平
	(2)ＩＫ第31次	〃	平10．12．14～平11．2．25		中村周平
	(3)ＩＫ第25次	大山崎町大字下植野小字五条本	平10．5．12～11．4		戸原和人 野島　永
	(4)ＩＫ第28次	大山崎町大字下植野小字土辺	平10．6．22～7．28		戸原和人
	(5)算用田遺跡	大山崎町大字円明寺小字井尻	平10．12．7～平11．1．26		野島　永
2．	第二京阪道路関係遺跡			日本道路公団関西支社	
	内里八丁遺跡	八幡市内里日向堂ほか	平10．4．13～6．19		森下　衛 柴　暁彦
3．	国道１号京都南道路関係遺跡			建設省近畿地方建設局	
	市田斉当坊遺跡	久御山町大字市田小字斉当坊・新珠城	平10．9．21～平11．3．12		竹原一彦 岩松　保 森島康雄 柴　暁彦
4．	木津地区所在遺跡			都市基盤整備公団関西支社	
	木津城山遺跡	木津町木津片山	平10．4．13～6．29 平10．11．11～平11．2．25		伊賀高弘
	菰池遺跡	木津町木津菰池・釜ヶ谷	平10．7．1～10．29		
5．	稲葉遺跡第５次	京田辺市田辺久戸２丁目	平11．7．7～8．6	西日本旅客鉄道株式会社	森島康雄
6．	長岡京跡右京第635次(7ANKNZ-10地区)	長岡京市天神１丁目	平11．5．20～7．15	京都府乙訓土木事務所	松尾史子

3．　本書で使用している座標は、国土座標第６座標系による。

4．　本書の編集は、調査第１課資料係が当った。

本　文　目　次

1．名神大山崎ジャンクション関係遺跡平成10年度発掘調査概要---------- 1
(1)長岡京跡右京第589次(7ANSKT-3地区)---------- 1
(2)ＩＫ第31次調査----------14
(3)ＩＫ第25次調査----------16
(4)ＩＫ第28次調査----------23
(5)算用田遺跡----------24
2．第二京阪道路関係遺跡発掘調査概要----------27
3．国道１号京都南道路関係遺跡発掘調査概要----------35
4．木津地区所在遺跡平成10年度発掘調査概要----------55
(1)木津城山遺跡----------58
(2)菰池遺跡----------72
5．稲葉遺跡第５次発掘調査概要----------87
6．長岡京跡右京第635次(7ANKNZ-10地区)発掘調査概要----------91

挿　図　目　次

1．名神大山崎ジャンクション関係遺跡

(1)長岡京跡右京第589次

第１図　調査地位置図----------2
第２図　下植野南遺跡調査区一覧----------3
第３図　長岡京跡右京第589次　上層遺構平面図----------5
第４図　下層遺構図----------7
第５図　出土遺物実測図(1)----------10
第６図　出土遺物実測図(2)----------12

(3)ＩＫ第25次調査

第７図　下植野南遺跡(ＩＫ25地区)南西壁断面図(部分)----------17
第８図　下植野南遺跡(ＩＫ25-2地区)第６層平面図----------17
第９図　下植野南遺跡(ＩＫ25・25-2地区)第８層平面図----------18

第10図　下植野南遺跡（ＩＫ25-3地区）遺構配置図----------19
第11図　下植野南遺跡（ＩＫ25-3地区）調査区西壁土層図----------19
第12図　下植野南遺跡（ＩＫ25-3地区）土坑ＳＫ02実測図----------20
第13図　下植野南遺跡（ＩＫ25-3地区）井戸ＳＥ05実測図----------20
第14図　下植野南遺跡（ＩＫ25-3地区）井戸ＳＥ05出土土器実測図----------21
第15図　下植野南遺跡（ＩＫ25-3地区）出土土器実測図----------22

(4) ＩＫ28次調査

第16図　下植野南遺跡（ＩＫ28地区）平面図----------23
第17図　下植野南遺跡（ＩＫ28地区）南壁断面図----------23

(5) 算用田遺跡

第18図　算用田遺跡調査区と検出遺構----------24
第19図　算用田遺跡調査区北壁土層図----------25
第20図　算用田遺跡ＳＤ01溝実測図----------26
第21図　算用田遺跡出土土器実測図----------26

２．第二京阪道路関係遺跡

第22図　調査地位置図----------27
第23図　調査区位置図----------28
第24図　西壁土層柱状図----------29
第25図　第４遺構面平面図----------30
第26図　第５遺構面平面図----------31
第27図　出土遺物実測図----------32

３．国道１号京都南道路関係遺跡

第28図　調査地位置図----------35
第29図　調査トレンチ配置図----------36
第30図　Ａ地区検出遺構平面図（中世・弥生）----------38
第31図　Ｂ地区検出遺構平面図（中世）----------40
第32図　Ｂ地区検出遺構平面図（弥生）----------42
第33図　Ｃ地区検出遺構平面図（平安～中世）----------45
第34図　Ｃ地区検出遺構平面図（古墳・弥生）----------47
第35図　出土遺物実測図１（弥生土器）----------50
第36図　出土遺物実測図２（石器・石製品）----------51
第37図　出土遺物実測図３（石器・石製品）----------52
第38図　出土遺物実測図４（玉作り関係遺物）----------53

4．木津地区所在遺跡

第39図　調査地位置図および周辺遺跡配置図----------56

(1)木津城山遺跡

第40図　木津城山遺跡トレンチ配置図----------57
第41図　木津城山遺跡遺構配置図----------58
第42図　木津城山遺跡ＳＢ32実測図----------59
第43図　木津城山遺跡ＳＸ68、ＳＢ69・79・80・82・83、ＳＫ73・81実測図----------60
第44図　木津城山遺跡ＳＢ61・71、ＳＸ70実測図----------61
第45図　木津城山遺跡XII トレンチ実測図----------62
第46図　木津城山遺跡XIII トレンチ実測図----------63
第47図　木津城山遺跡XIII トレンチ中央区遺構実測図----------64
第48図　木津城山遺跡片山５号墳主体部実測図----------66
第49図　木津城山遺跡出土遺物実測図(1)----------68
第50図　木津城山遺跡出土遺物実測図(2)----------69
第51図　木津城山遺跡出土遺物実測図(3)----------70

(2)菰池遺跡

第52図　菰池遺跡全体図----------73
第53図　菰池遺跡ＳＢ01、ＳＤ01実測図----------74
第54図　菰池遺跡ＳＢ02実測図----------75
第55図　菰池遺跡ＳＢ03・04・05・06実測図----------77
第56図　菰池遺跡ＳＢ08・09・10実測図----------78
第57図　菰池遺跡ＳＡ07、ＳＢ11・02・13実測図----------80
第58図　菰池遺跡ＳＫ01・02実測図----------81
第59図　菰池遺跡出土遺物実測図----------82

5．稲葉遺跡第５次

第60図　調査地位置図----------87
第61図　調査区配置図----------88
第62図　２区遺構平面図----------88
第63図　２区西壁土層断面図----------89
第64図　ピット５・６・７断面図----------90
第65図　出土遺物実測図----------90

6．長岡京跡右京第635次

第66図　調査地位置図----------91

第67図　トレンチ配置図----------92
第68図　調査地北壁および東壁土層断面図----------92
第69図　遺構平面図----------93
第70図　ＳＨ63514・ＳＨ63502実測図----------94
第71図　ＳＢ63542・63543、ＳＡ63544実測図----------95
第72図　ＳＫ63514・63533実測図----------96
第73図　ＳＸ63502出土遺物実測図----------97
第74図　ＳＫ63514出土遺物実測図----------99
第75図　出土遺物実測図----------100

付　表　目　次

１．名神大山崎ジャンクション関係遺跡
(1)長岡京跡右京第589次
第１表　上層竪穴式住居跡一覧表----------4
第２表　方形周溝墓規模一覧表----------9
２．第二京阪道路関係遺跡
第３表　古墳時代竪穴式住居跡一覧表----------30
第４表　弥生時代竪穴式住居跡一覧表----------30
４．木津地区所在遺跡
第５表　木津城山遺跡出土土器観察表----------84

図　版　目　次

１．名神大山崎ジャンクション関係遺跡
図版第１　(1)右京第589次　調査地遠景(東から)
(2)右京第589次　上層遺構完掘状態(上空から)
(3)右京第589次　下層遺構完掘状態(上空から)
図版第２　(1)右京第589次　調査前全景(南東から)
(2)右京第589次　ＳＢ07・08・19完掘状態(西から)
(3)右京第589次　ＳＨ164竈検出状態(南から)

図版第３　(1)右京第589次　ＳＨ115・116・151土器出土状態(東から)
(2)右京第589次　ＳＢ91完掘状態(北から)
(3)右京第589次　ＳＢ96完掘状態(西から)
図版第４　(1)右京第589次　ＳＨ174上面土器出土状態(北西から)
(2)右京第589次　ＳＨ174完掘状態(北西から)
(3)右京第589次　ＳＨ171、ＳＴ194完掘状態(北西から)
図版第５　(1)右京第589次　ＳＴ181・193完掘状態(西から)
(2)右京第589次　ＳＴ180・181・185完掘状態(南から)
(3)右京第589次　ＳＴ180・184・186完掘状態(西から)
図版第６　(1)右京第589次　ＳＫ173内土器出土状態(南から)
(2)右京第589次　ＳＴ180東溝内土器出土状態(東から)
(3)右京第589次　ＳＴ180東溝内土器出土状態(南から)
図版第７　(1)ＩＫ31次　第２トレンチ調査前全景(南から)
(2)ＩＫ31次　第２トレンチ完掘状態(北から)
(3)ＩＫ31次　ＳＢ03完掘状態(北東から)
図版第８　(1)ＩＫ31次　第３トレンチ完掘状態(北東から)
(2)ＩＫ31次　第３トレンチ完掘状態(北西から)
(3)ＩＫ31次　ＳＢ14・15完掘状態(南から)
図版第９　(1)ＩＫ25－２次　調査地全景(南東から)
(2)ＩＫ25－２次　第６層検出遺構(南から)　(3)ＩＫ25次　調査地全景(南東から)
図版第10　(1)ＩＫ25次　ＳＨ01検出状況(南から)
(2)ＩＫ25次　ＳＨ02検出状況(南から)　(3)ＩＫ28次　調査地全景(北から)
図版第11　(1)ＩＫ25－３次　調査前掘削状況(南から)
(2)ＩＫ25－３次　遺構検出状況(北から)　(3)ＩＫ25－３次　ＳＤ03(南から)
図版第12　(1)ＩＫ25－３次　ＳＤ01(南から)
(2)ＩＫ25－３次　遺構検出状況(東から)　(3)ＩＫ25－３次　ＳＫ02(北から)
図版第13　(1)ＩＫ25－３次　ＳＫ02土器出土状況(第15図６　北から)
(2)ＩＫ25－３次　ＳＥ05土器出土状況(第14図２・４(水面下)　南から)
(3)ＩＫ25－３次　ＳＥ05土器出土状況(第14図１・３　北から)
図版第14　(1)ＩＫ25－３次　ＳＥ05土器出土状況(第14図６　北から)
(2)ＩＫ25－３次　ＳＥ05土層断面(北から)
(3)ＩＫ25－３次　調査地遠景(東から天王山を望む)
図版第15　右京第589次　出土土器(1)
図版第16　右京第589次　出土土器(2)
図版第17　ＩＫ25－３次　井戸ＳＥ05出土土器

図版第18　(1)算用田遺跡　調査風景(南東から)
(2)算用田遺跡　ＳＤ01土器出土状況(南から)
(3)算用田遺跡　調査終了状況(西から)

２．第二京阪道路関係遺跡

図版第19　(1)Ｅ地区第５遺構面全景(北から)　(2)Ｅ地区北半部遺構完掘状況(北から)
(3)Ｅ地区南半部遺構完掘状況(北から)
図版第20　(1)Ｅ地区ＳＨ297完掘状況(南から)　(2)Ｅ地区ＳＨ300完掘状況(東から)
(3)Ｅ地区ＳＨ301完掘状況(西から)
図版第21　(1)Ｅ地区ＳＨ263遺物出土状況(西から)　(2)Ｅ地区ＳＨ301遺物出土状況(西から)
(3)Ｅ地区ＳＤ305遺物出土状況(南から)
図版第22　(1)Ｅ地区ＳＥ204遺物出土状況(南東から)
(2)Ｅ地区ＳＥ204遺物出土状況近景(南東から)
(3)Ｅ地区ＳＥ205蒸籠組の状況(北から)
図版第23　(1)Ｅ地区ＳＥ205最下層の状況(西から)
(2)Ｅ地区ＳＥ223断割りの状況(南から)　(3)Ｅ地区耕作面の状況(南から)
図版第24　(1)Ｅ地区耕作溝を切る土坑ＳＫ023の状況(南から)
(2)Ｅ地区耕作面作物痕跡の状況(竹串部分)(南から)
(3)Ｅ地区作物痕の断割り状況(南から)

３．国道１号京都南道路関係遺跡

図版第25　(1)市田斉当坊遺跡　調査地遠景(南から)
(2)市田斉当坊遺跡　調査地全景(西から)
(3)市田斉当坊遺跡　調査地全景(北から)
図版第26　(1)Ａ地区調査地全景(北から)　(2)Ａ地区ＳＤ01(北東から)
(3)Ａ地区土器溜まり検出状況(西から)
図版第27　(1)Ｂ地区北半部竪穴式住居跡群(北西から)　(2)Ｂ地区中央部竪穴式住居跡群(北西から)
(3)Ｂ地区北端部竪穴式住居跡群(西から)
図版第28　(1)Ｂ地区南北・東西坪境道検出状況交差点付近(南から)
(2)Ｂ地区南北坪境道検出状況(北北東から)
(3)Ｂ地区井戸ＳＥ500検出状況(北から)
図版第29　(1)Ｂ地区竪穴式住居跡ＳＨ536・341等検出状況(西から)
(2)Ｂ地区竪穴式住居跡ＳＨ528・529・150・151等検出状況(南南東から)
(3)Ｂ地区竪穴式住居跡ＳＨ691検出状況(南から)
図版第30　(1)Ｂ地区焼土坑ＳＸ911検出状況(西から)

(2) B地区土坑ＳＫ1201土器出土状況(西から)
(3) B地区中央土坑ＳＫ1065・1209断面(南西から)
図版第31　(1) C地区南北坪境道検出状況(北から)
(2) C地区中世遺構検出状況(南西から)
(3) C地区中世溝検出状況(東から)
図版第32　(1) C地区竪穴式住居跡ＳＨ132検出状況(南から)
(2) C地区竪穴式住居跡ＳＨ092検出状況(北から)
(3) C地区竪穴式住居跡ＳＨ080検出状況(東北東から)
図版第33　(1) C地区竪穴式住居跡ＳＨ92・138等検出状況(北西から)
(2) C地区環濠ＳＤ25・93・114検出状況(北北西から)
(3) C地区環濠ＳＤ25・93・114検出状況(南西から)
図版第34　出土遺物(1)　土器
図版第35　(1)出土遺物(2)　磨製石剣　(2)出土遺物(3)　石庖丁
図版第36　出土遺物(4)　石針・玉類・玉原石・筋砥石・石斧・石鏃

4．木津地区所在遺跡

(1)木津城山遺跡

図版第37　(1)木津城山遺跡　調査地全景(東から)
(2)木津城山遺跡　ＳＢ32検出状態(中央ピット掘削前、北から)
(3)木津城山遺跡　ＳＢ32検出状態(中央ピット掘削後、北から)
図版第38　(1)木津城山遺跡　Ｘトレンチ全景(南から)
(2)木津城山遺跡　ＳＢ61・71検出状態(南から)
(3)木津城山遺跡　ＳＢ61・71検出状態(東から)
図版第39　(1)木津城山遺跡　ＳＸ70検出状態(東から)
(2)木津城山遺跡　XIIトレンチ全景(北から)
(3)木津城山遺跡　ＳＢ121検出状態(東から)
図版第40　(1)木津城山遺跡　ＳＢ123・124検出状態(南東から)
(2)木津城山遺跡　ＳＸ112検出状態(北西から)
(3)木津城山遺跡　ＳＸ126検出状態(北から)
図版第41　(1)木津城山遺跡　片山５号墳全景(南から)
(2)木津城山遺跡　片山５号墳内部主体検出状態(南から)
(3)木津城山遺跡　片山５号墳内部主体礫敷・遺物出土状態(西から)

(2)菰池遺跡

図版第42　(1)菰池遺跡　遠景(東から)　(2)菰池遺跡　調査地全景(南から)
(3)菰池遺跡　遺構検出状態(右が北)

図版第43　(1)菰池遺跡　ＳＢ01検出状態(東から)　(2)菰池遺跡　ＳＢ02検出状態(東から)
(3)菰池遺跡　ＳＢ02・04等検出状態(西から)
図版第44　(1)菰池遺跡　ＳＢ02・03・04・07検出状態(南から)
(2)菰池遺跡　ＳＸ02東半部周辺遺構検出状態(南から)
(3)菰池遺跡　ＳＢ11・13等検出状態(南から)
図版第45　(1)菰池遺跡　ＳＡ06・ＳＤ02・ＳＢ11等検出状態(西から)
(2)菰池遺跡　ＳＢ13等検出状態(西北西から)
(3)菰池遺跡　ＳＤ01検出状態(南から)
図版第46　(1)菰池遺跡　ＳＸ04東拡張区検出状態(西から)
(2)菰池遺跡　ＳＫ01遺物出土状態(北から)
(3)菰池遺跡　ＳＫ02遺物出土状態(南西から)
図版第47　出土遺物(1)
図版第48　出土遺物(2)

5．稲葉遺跡第５次

図版第49　(1)調査前風景(北北西から)　(2)１区全景(北北西から)
(3)２区プラットホーム全景(北から)
図版第50　(1)２区全景(東南東から)　(2)出土遺物

6．長岡京跡右京第635次

図版第51　(1)調査地全景(北西から、調査前)　(2)調査地全景(北から)
図版第52　(1)ＳＨ63507検出状況(北東から)　(2)ＳＨ63507(上層)(南西から)
(3)ＳＨ63507完掘状況(南西から)
図版第53　(1)ＳＸ63502検出状況(北西から)　(2)ＳＸ63502完掘状況(北西から)
(3)ＳＸ63502(西から)　(4)ＳＸ63502北アゼ土層(南から)
(5)ＳＸ63502中央アゼ土層(南から)　(6)ＳＸ63502南アゼ土層(北から)
図版第54　(1)ＳＢ63542(北から)　(2)ＳＢ63543(南から)
図版第55　(1)ＳＫ63514遺物出土状況(西から)　(2)ＳＫ63514土層断面(西から)
(3)ＳＫ63514完掘状況(東から)　(4)ＳＫ63533土層断面(南から)
(5)ＳＰ63525軒平瓦出土状況(西から)　(6)ＳＰ63534檜皮出土状況(南から)
(7)西壁土層断面(東から)　(8)東壁土層断面(西から)
図版第56　出土遺物(1)
図版第57　出土遺物(2)
図版第58　出土遺物(3)

1．名神大山崎ジャンクション関係遺跡 平成10年度発掘調査概要

この調査は、名神大山崎ジャンクション建設に伴い、日本道路公団関西支社の依頼を受けて、当調査研究センターが実施したものである。

平成10年度は、下植野南遺跡と算用田遺跡の発掘調査を実施した。

下植野南遺跡は京都府乙訓郡大山崎町大字下植野ほかに所在し、大字円明寺小字門田(門田地区)・大字下植野小字五条本(五条本地区)・大字円明寺小字土辺(土辺地区)の調査を行った。

門田地区では、平成９年度に実施した長岡京跡右京第589次調査の継続調査(調査面積約6,000㎡)と、府道を挟んで対岸の大山崎調査第31次(ＩＫ第31次；調査面積約1,100㎡)を実施した。

第589次調査では、古墳時代後期の竪穴式住居跡とその下層で弥生時代中期の方形周溝墓群を検出した。ＩＫ第31次調査は、次年度以降も継続して調査を予定している地点であり、本年度の調査では、第589次で検出した古墳時代後期の遺構の広がりが明らかとなった。

五条本地区では、下植野南遺跡の範囲(特に南域)を確定するために、３か所の試掘トレンチを設定し(ＩＫ第25次　総試掘面積約780㎡)、試掘調査を実施した。各試掘トレンチでは門田地区に比べて遺構・遺物は希薄であるが、掘立柱建物跡や竪穴式住居跡・井戸などを検出した。

土辺地区(ＩＫ第28次)も五条本地区と同様、下植野南遺跡の範囲を確定するための試掘調査(調査面積約330㎡)であり、小泉川の旧河道跡を検出した。

算用田遺跡は、大山崎町大字円明寺小字井尻に所在し、乙訓郡条里では三条八里十二坪に位置する地点であり、調査面積約300㎡のトレンチを設定し、発掘調査を実施した。

調査は、当調査研究センター調査第２課課長補佐兼調査第４係長奥村清一郎、同主任調査員戸原和人・石井清司、主査調査員竹下士郎、調査員中村周平・野島　永・松尾史子が担当した。調査期間中、作業員・調査補助員・整理員には猛暑・極寒のなか、調査に従事いただいた。

また、調査にあたっては、日本道路公団・京都府教育委員会・大山崎町教育委員会をはじめ、各関係機関のご指導・ご協力を得た。記して謝意を申し上げる。なお、発掘に係る経費は、全額、日本道路公団が負担した。

(石井清司)

(1)　長岡京跡右京第589次(7ANSKT-3地区)

1．これまでの調査成果

下植野南遺跡は、長岡京右京の南端に隣接し、淀川に注ぐ小泉川の左岸の沖積低地に位置する複合遺跡で、『京都府遺跡地図』では、縄文時代から弥生時代にかけての、集落遺跡と記されている。

第１図　調査地位置図(1/50,000)

1.鳥居前古墳	2.石倉遺跡	3.脇山遺跡	4.大縄遺跡	5.南栗ヶ塚遺跡	6.葛原親王屋敷跡
7.硲遺跡	8.境野遺跡	9.西法寺遺跡	10.円明寺跡	11.久保川遺跡	12.里後遺跡
13.金蔵遺跡	14.松田遺跡	15.宮脇遺跡	16.山崎城跡	17.百々遺跡	18.算用田遺跡
19.下植野南遺跡	20.白味才遺跡	21.白味才古墳	22.山崎廃寺	23.堀尾遺跡	24.傍示木遺跡
25.山崎津跡	26.山崎遺跡	27.河陽離宮跡・相応寺跡・山崎国府・山崎院跡・山崎駅跡			

下植野南遺跡は、当初「宮脇松田遺跡」と呼称されていたが(注1)、昭和60(1985)年の大山崎町教育委員会による大山崎町体育館建設に伴う埋蔵文化財調査の成果を受けて、当該地が宮脇松田遺跡とは遺跡の性格を異にするため、別名称として取り扱うように検討され、新たに下植野南遺跡と呼称された遺跡である。

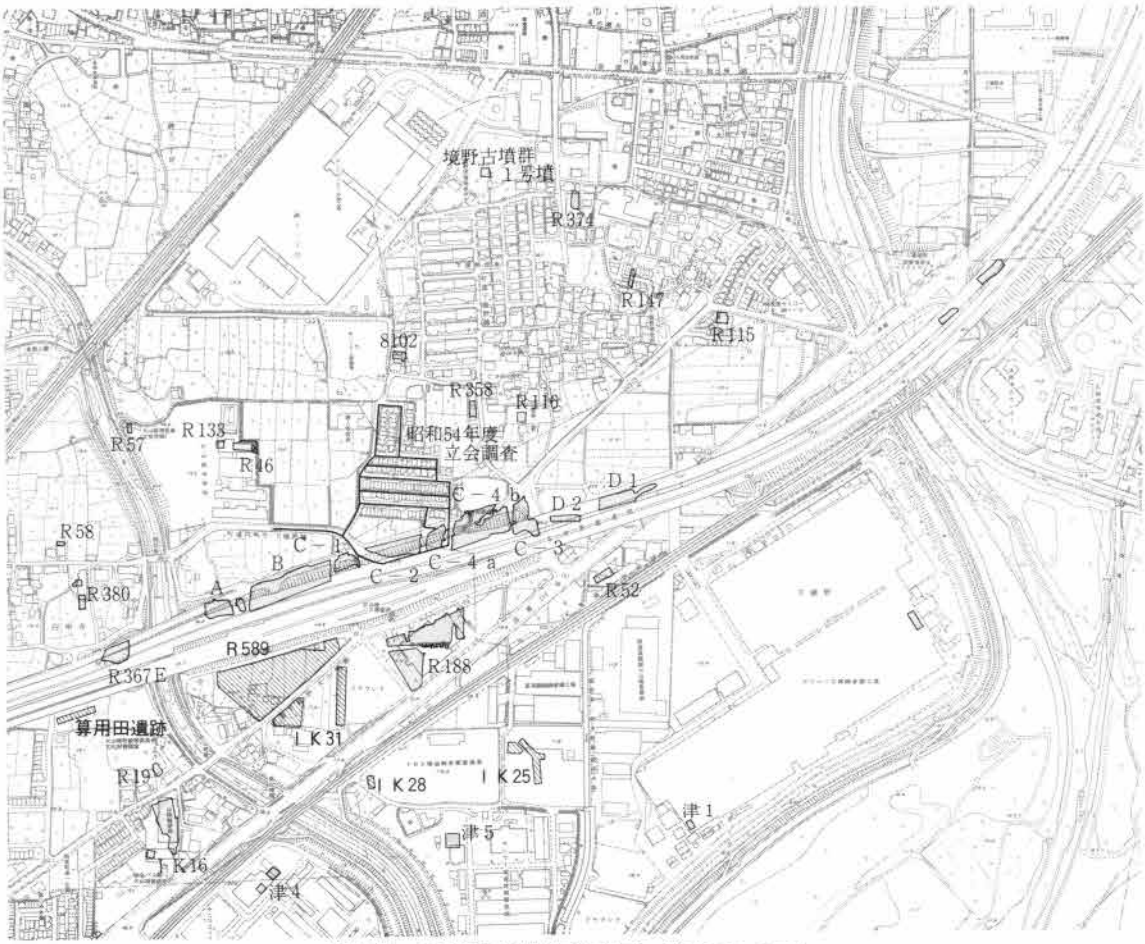
下植野南遺跡の埋蔵文化財調査は、前述の大山崎町体育館建設に伴う調査以降、中央自動車道西宮線(通称名神高速道路)の拡幅工事に伴う事前調査として当調査研究センターが、平成２年度

以降平成６年度にかけて発掘調査を実施し、下植野南遺跡の実態が明らかになりつつある。(注2)

ここでは、大山崎町体育館・名神高速道路拡幅工事に伴うこれまでの調査成果を概観する。

縄文時代の遺構としては、土坑などを検出しているが、遺構密度が低く、その実態は明らかではない。弥生時代については、名神高速道路拡幅工事に伴うＡ地区において、弥生中期の土坑と溝を、同Ｃ－１トレンチでは、小児用の土器棺墓かと思われる広口短頸壺を土壙内から検出している。また、Ｃ－２トレンチの南東約150ｍにある大山崎町体育館建設に伴う調査では、弥生時代中期の方形周溝墓６基と自然流路と思われる幅約２ｍの素掘りの溝を検出している。

古墳時代の遺構を前期、後期に分けて概観すると、古墳時代前期の遺構としては、名神高速道路拡幅工事に伴うＢ地区で、掘立柱建物跡を５棟と、同Ａ・Ｂ・Ｃ地区および大山崎町体育館の調査で竪穴式住居跡35棟を、名神高速道路拡幅工事に伴うＣ－３トレンチでは、方墳２基を確認している。同時期に属すると思われる自然流路については、Ａ地区において北東から南西に向かって流れる流路が認められている。この流路は、遺構面を直接埋める原因となる洪水を起こしたと思われる。Ｂ地区からは、旧小泉川水系のものと思われる自然流路がトレンチ北から南へ流れていたことが確認されている。また、Ｃ地区中央において、北東から南西に流れる幅約５～７ｍの自然流路を検出している。この流路については、トレンチ南の大山崎町調査地区において、その延長部分と思われる自然流路の遺構が、ほぼ同じ規模で確認されている。



第２図　下植野南遺跡調査区一覧(1/10,000)

古墳時代後期の遺構は、掘立柱建物跡がC－3トレンチから1棟、竪穴式住居跡がC－6トレンチから1棟、C－3トレンチから1棟検出されている。

（尾上　忍）

2．調　査　の　概　要

(1)検出遺構

今回の発掘調査では、上層で古墳時代後期を中心とする竪穴式住居跡群や溝跡・土坑などを、下層では竪穴式住居跡群・方形周溝墓などを検出し、それに伴う弥生土器・土師器・須恵器・滑石製玉類などの多数の遺物が出土した。本書では、整理作業が進んでいないため、その詳細は、次年度以降に報告し、各面での遺構を中心にその概略を記す。

①上層遺構

現地表面から約2.5mの深さで、上層の遺構面を検出した。上層遺構は、古墳時代後期(およそ6世紀前半)頃のものと考えられる竪穴式住居跡や掘立柱建物跡などを多数検出した。このうち竪穴式住居跡には、良好に竈の跡を残しているものもあり、さらに埋土の中からは、非常に多くの土器や滑石製臼玉なども出土した。

第1表　上層竪穴式住居跡一覧表

番号	遺構番号	規模(東西×南北)	カマドの有無	出土遺物	備考
1	SH06	4.2m×4.2m	焼土塊	土師器片	
2	SH07	5m×6m	焼土塊	土師器・須恵器片	臼玉218点
3	SH08	4m×4.4m		土師器・須恵器片	
4	SH09	4m×4.2m		土師器・須恵器片	
5	SH10	3.6m×2m(？)		土師器・須恵器片	
6	SH19	5.6m×5.6m		土師器・須恵器片	臼玉2点
7	SH20	3.8m×3.8m		土師器・須恵器片	
8	SH23	3.2m×3.6m		土師器片	
9	SH25	？m×4m		土師器・須恵器片	
10	SH36	4.2m×4.2m	焼土塊	土師器・須恵器片	
11	SH37	4.4m×4.4m		土師器・須恵器片	
12	SH38	3.6m×4.2m		土師器片	
13	SH39	4.6m×4.6m(？)	焼土塊	土師器・須恵器片	
14	SH40	4.8m(？)×4.8m	焼土塊	土師器・須恵器片	
15	SH41	？		土師器・須恵器片	
16	SH61	4.4m×？m		土師器・須恵器片	
17	SH64	3.8m(？)×5.2m	有 北辺	土師器・須恵器片	
18	SH67	2,8m×2.8m		土師器・須恵器片	
19	SH89	5m(？)×？m	焼土塊	土師器・須恵器片	
20	SH111	？m×5.2m		土師器・須恵器片	臼玉3点
21	SH113	5m×5.2m		土師器・須恵器片	臼玉34点
22	SH115	4.2m×4m	有北東辺	土師器・須恵器片	
23	SH116	5m×4m		土師器・須恵器片	
24	SH120	4m×4.4m	有北西辺	土師器・須恵器片	
25	SH121	4m×4.4m	焼土塊	土師器・須恵器片	勾玉1点
26	SH122	5.2m×4.4m	焼土塊	土師器・須恵器片	
27	SH123	4.8m×4.8m	焼土塊	土師器・須恵器片	
28	SH150	4.8m×4.5m		土師器・須恵器片	
29	SH151	4.6m×4.8m		土師器・須恵器片	
30	SH154	4m×4m		特になし	

竪穴式住居跡群　調査地中央部分を中心に30基の古墳時代の方形の竪穴式住居跡を検出した。竪穴式住居跡の規模は、4～5m四方のものが最も多く、大きいもので5.6m四方、床面積30m²を超えるものもある。住居跡内から出土した土師器や須恵器の多くは、古墳時代後期でも6世紀前半～中頃にかけてのものであり、この時期を中心に集落が営まれていたと考えられる。また、住居跡内の埋土からは、土器のほか、滑石製臼玉・滑石製勾玉な

第３図　長岡京跡右京第589次　上層遺構平面図

ども出土している。このうち、滑石製臼玉は出土数も多く、調査地北部の住居跡(ＳＨ07)の埋土からは218点、住居跡(ＳＨ19)の埋土からは２点、調査地西部の住居跡(ＳＨ11)の埋土からは３点、調査地南部の住居跡(ＳＨ113)の埋土からは34点と総数257点がこれまでに出土している。滑石製勾玉はこれまでに２点出土しており、そのうちの１点は住居跡(ＳＨ121)内の南東部から、あと１点は調査地中央部の包含層から出土した。

竪穴式住居跡の中には、造り付けの竈をもつものもある。調査地北部の住居跡(ＳＨ64)の北辺、調査地西部の住居跡(ＳＨ120)の北西辺、調査地中央部の住居跡(ＳＨ115)の北東辺には、それぞれ馬蹄形を呈した黄褐色から橙褐色の焼土の跡を検出しており、竈の跡と考えられる。その他の竪穴式住居跡内にも、黄褐色から橙褐色の焼土の跡と思われる遺構を、また、住居跡外にも焼土の跡と思われる痕跡を幾つか検出しており、さらに数多くの竪穴式住居跡が広がっている可能性がある。

掘立柱建物跡　建物跡ＳＢ96は、調査地中央北域にある３間×５間の南北棟の建物跡である。溝状遺構ＳＤ22の埋土の上面から柱穴が掘り込まれており、溝状遺構ＳＤ22よりは新しい時期に建てられたものと思われる。建物跡ＳＢ107は、調査地中央の南部にある２間×３間以上の南北棟の建物跡である。南辺が、調査地南壁にかかるため、南北３間以上の規模をもつ可能性がある。柱穴からは遺物が出土しておらず、建てられた時期は不明である。建物跡ＳＢ91は、２間×３間の南北棟の総柱建物跡である。柱掘形は直径0.8～1.0mを測る大型のもので、何らかの倉庫的な役割をもった施設と思われる。建物の建てられた時期については、柱穴から少量の土器片が出土したものの、詳しくは不明である。ただ、この建物跡も建物跡ＳＢ96と同様、溝状遺構ＳＤ22の上面から柱穴が掘り込まれていることから、溝状遺構ＳＤ22よりは新しい時期に建てられたものと思われる。建物跡ＳＢ92は、調査地東部にある２間×４間の南北棟の建物跡である。この建物の北西隅の柱穴からは、完形の須恵器杯身１点と、滑石製臼玉１点が出土し６世紀前半のものと思われる。

溝状遺構　溝状遺構ＳＤ22は、調査地中央部を北から南南東に向け流れるもので、幅約2.0m・深さ約0.4～0.7mを測り、総延長約40mにわたって検出した。断面は「Ｕ」字形を呈し、砂礫や砂質土で埋もれていた。埋土から出土した土器の多くが、６世紀前半代のものであることから、集落が営まれていた時期とほぼ同時期に機能していたと考えられる。この溝を境に、東側では竪穴式住居跡の数が少なくなっている。

②下層遺構

上層の遺構面から約20～40cmほど掘り下げると、調査地の西側半分には、小泉川の旧流路跡と考えられる砂礫や小礫が厚く堆積していた。しかし、東半分では、暗黄褐色から暗茶褐色を呈する土層をベースとする弥生時代中期～古墳時代前期の遺構面を検出することができた。今回の調査地点では、その下層で、古墳時代前期のものと考えられる竪穴式住居跡・井戸跡、さらに弥生時代中期のものと考えられる方形周溝墓群などを検出している。

竪穴式住居跡ＳＨ171　長辺約4.0m・短辺約3.5mで、やや隅丸の長方形を呈する住居跡で、

X=-121850
X=-121875
X=-121900
Y=-27700
Y=-27725
Y=-27750
Y=-27775
Y=-27800
ST191
ST195
ST190
ST192
ST198
ST188
ST186
ST187
ST189
ST184
ST185
ST180
ST181
ST183
SH171
ST196
ST193
ST194
SH174
SH175
0
30m

第4図　下層遺構図

検出面から床面までの深さは約15cmを測る。主柱穴は確認できなかったが、幅約20cm、床面からの深さ５cmの周壁溝を検出した。またこの住居跡の中央部では、炭を含む浅い土坑を検出しており、炉跡と思われる。

竪穴式住居跡ＳＨ174　一辺が約6.0mの方形の住居跡で、検出面から床面まで約50cmを測る。床面近くでは、大量の土器とともに多くの炭が出土した。また、埋め土は、数種類の色合いや質の違う土が、この住居跡の南壁部から斜めに堆積していたことから、この住居は火事で焼け落ちた後、当時の人々が人為的に埋めたものと推測される。４本の柱穴のほか、ほぼ全周で周壁溝を検出した。また、この住居跡でも中央部で炉跡を検出した。

竪穴式住居跡ＳＨ175ａ・ｂ　当初一辺が約6.0mの方形の輪郭を検出したことから、一棟の住居跡と推定して掘削作業に取りかかった。その結果、ほぼ三辺で周壁溝を確認し、４本の主柱穴を検出した(ＳＨ175ａ)。さらにこの住居跡の床面で、下層にＳＨ175ａよりもわずかに小さな住居跡が存在することが確認できた(ＳＨ175ｂ)。ＳＨ175ｂでも周壁溝が確認されたが、柱穴は検出しなかった。おそらく柱穴は、上層・下層の住居で共有されたものと思われる。埋め土の堆積状況から、ＳＨ175ｂの柱穴を共有しながらも、規模を拡張してＳＨ175ａに建て替えたものであろう。この住居跡ではほとんど遺物が出土していないが、検出面のレベルや埋め土の状況などから、ＳＨ174と同時代のものと考えている。

土坑ＳＫ173　検出面での直径は約1.8mで、最深部までの深さは約1.5mを測り、素堀りの井戸跡と思われる。埋め土は暗茶灰褐色を呈する粘土が中心で、下層は砂利・粗砂混じりとなる。この埋め土の中からは、ほぼ完形に復原できるものや、完形に近い土器が多く出土した。下層から出土した土器の特徴から、上記した竪穴式住居跡などとほぼ同時代と推定される。

方形周溝墓群　大小あわせて20基あまりの方形周溝墓を検出した。これらの方形周溝墓は、大山崎町体育館建設の際の調査の例などとも併せると、調査地の東側にも大きく広がる様相で、この付近には相当広範囲に墓域が広がっていたものと予想される。また、周溝外で出土している弥生土器の分布状況から、ＳＴ181の南側にも、今回検出できなかった周溝墓があった可能性がある。検出した方形周溝墓は、周溝を共有して連結するもの(周溝墓群１)と、しないもの(周溝墓群２)が混在していたが、およそ周溝墓群１の周辺部に周溝墓群２が位置しているようである。今後詳しい検討を加える予定であるが、周溝墓群１と周溝墓群２は、それぞれの周溝内出土の土器の中で、一番古いと考えられるものが、いずれも中期前半の特徴をもつものであることから、ほぼ同時期に存在したものと考えられる。つまり、周溝墓群１と周溝墓群２の違いは、時間差の違いを示すものではなく、それぞれの被葬者の社会的性格や身分・地位の違いなどを示すものではないかと考えられる。

方形周溝墓群１　検出面での幅約1.5～2.0m・深さ約0.5～1.0mの溝をそれぞれ共有しあい、連結した状態の方形周溝墓である。ＳＴ183のように若干小さいものもあるが、おおむね溝中心間で長辺10～14m・短辺８～10mを測るものである。各辺の周溝内ほぼ中央部の底からは、２～３個体分の土器が出土している。またそれらの中には、溝内の浅い土坑の中に土器の口縁部を向

かい合わせるように埋められているところもあり、これらは周溝内埋葬として利用されていた可能性が考えられる。周溝の埋め土は暗灰褐色から暗茶褐色を呈する粘質土が主体で、基盤とする土層と同質化しており、各溝の切り合い関係はあまり明確ではないが、周溝内から出土した土器から、この周溝墓群１の中では、およそ西から東に向かって順に築造したものと考えている。

また墳丘上では、合計11基の主体部を検出した。それぞれの主体部は、おおむね長辺が約1.4～1.6m、短辺が0.5～0.6mを測るもので、主軸を東西方向にとるものと南北方向にとるものとがある。また、ＳＴ180・181の主体部は、検出時の状況や、埋め土の断面観察から、木棺直葬であったと推定している。

第２表　方形周溝墓規模一覧表

	遺構番号	南北×東西(m)		主体部の有無
1	ＳＴ180	11.0	8.5	有
2	ＳＴ181	10.5	8.0	有
3	ＳＴ183	5.5	5.5	
4	ＳＴ184	10.0	8.5	有
5	ＳＴ185	11.5	7.5	有
6	ＳＴ186	14.5	11.5	有
7	ＳＴ187			
8	ＳＴ188		6.0	
9	ＳＴ189		6.0	
10	ＳＴ190	6.5	5.5	
11	ＳＴ191			
12	ＳＴ192	7.5	7.0	
13	ＳＴ193	7.5	4.5	
14	ＳＴ194	7.5	5.5	有
15	ＳＴ195			
16	ＳＴ196	7.5	3.5	
17	ＳＴ198			

方形周溝墓群２　これらは周溝を共有しておらず、前述した周溝墓群とは埋め土の状況も若干異なるものである。周溝墓群１とくらべると、大きさも一辺が約5.0～7.5mと小さくなり、それぞれの周溝も、幅は約0.4～1.8mとやや狭まり、深さも約0.3～0.7mと少し浅くなる。また、ほぼ方形に周溝をめぐらすものや、ややいびつな楕円に近い形に周溝をめぐらすもの、陸橋部を持つものと持たないものなど、周溝の形状が異なることなどから、この周溝墓群２の中には、またいくつかのグループがあったことが推定される。このうちＳＴ194では、主体部と推定される長方形の土坑を検出した。周溝内から出土した土器から、この周溝墓群の中では、ＳＴ192が一番古いものと考えている。

（竹下士郎・中村周平）

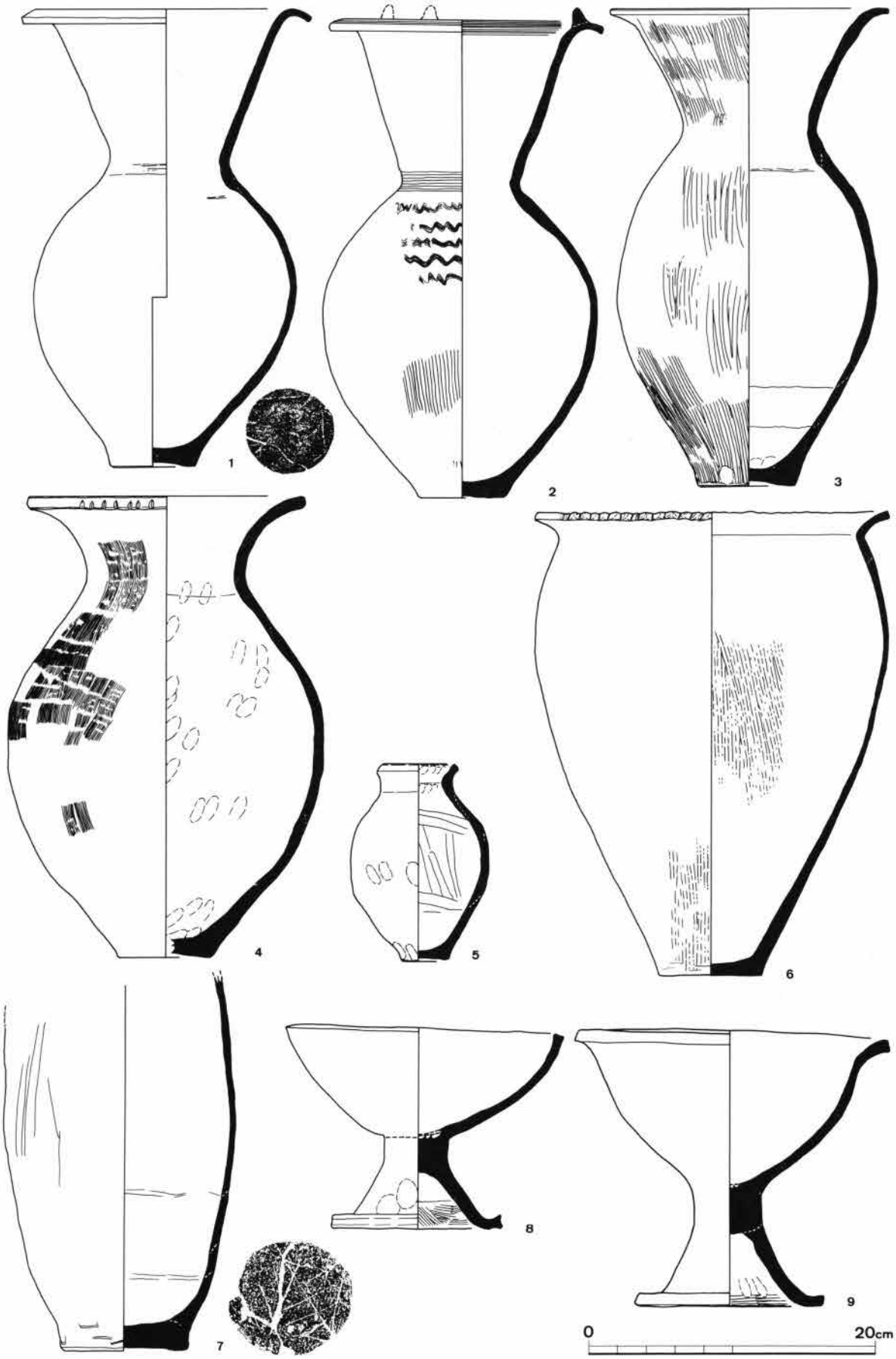
(2)出土遺物

平成10年度の下植野南遺跡の調査では整理箱にして100箱程度の遺物が出土した。遺物の整理作業は次年度以降も継続して行う予定であり、今回は上層の竪穴式住居跡、下層の方形周溝墓に関連して遺物の一部を図示した。

①下層遺構出土遺物

下層遺構では、20基あまりの方形周溝墓を検出した。図示したのは、遺物が最も多く出土したＳＴ180のものである。遺物はいずれも器体の半分以上が残存しており、完形のまま溝内に投棄されたか、墳丘上から転落したものと考えられる。

１から５は壺である。１は胴部が球形に張り、頸部から漏斗状に大きく開く広口壺である。口縁端部は内面よりやや下まで折り曲げられる。この壺は口径と胴部最大径がほぼ同じで、口頸部の高さは器高全体の1/3をこえるため、腰高で不安定な印象を与える。内外面ともに器壁の摩滅が著しく、調整等は不明である。紋様はすでに摩滅しており、頸胴部界に直線紋のかすかな痕跡



第５図　出土遺物実測図(1)

が1帯認められるのみである。2も1と同様の形態の壺である。器壁は摩滅した部分が多いが、胴部下半にはタテ方向の粗いミガキが観察できる。頸部以下には1帯の直線紋と5帯の波状紋が施紋されている。

3は胴部は強く発達せず、口径が胴部最大径を上回り、やや腰高で不安定な形態の広口壺である。頸部は強くしまり、口頸部は漏斗状に立ち上がり、口縁部はゆるやかに外反する。口縁端部はヨコナデによって面を持つが、上下への拡張は認められない。口縁内面は摩滅が著しいが、一部にヨコハケの痕跡を認める。胴部下位から頸部にかけてはタテハケの後、粗いミガキが施され、この時期の広口壺としては珍しく無紋である。

4は頸部がやや太い広口壺である。口縁は短く外反し、胴部最大径を上まわらない。口縁端部は不整形な面をもち、そこに下方から粗い刻目を施す。1から3の壺と異なり、全面をハケ調整で終了しており、ミガキやナデは施されない。

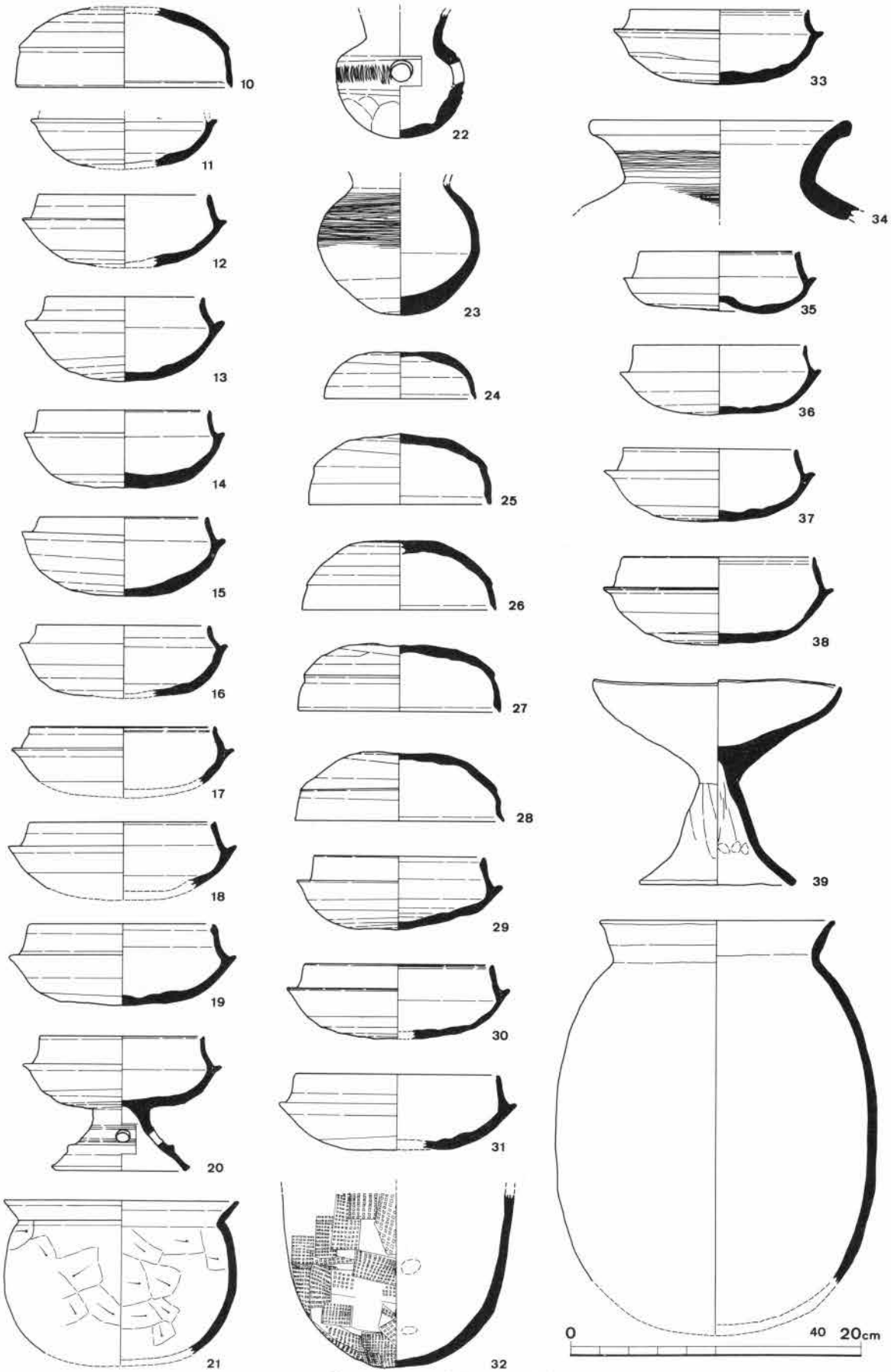
5は頸部が締まる形態の小型壺で、ほぼ完形で出土した。口縁端部は面をもち、やや受け口気味に開く。器面は摩滅しているが、ハケの痕跡は認められず、ていねいにナデ消されている。器形はやや不整形で、ミニチュア土器の可能性もあるが、この形態の大型品の出土はない。やや先行する事例としては、神足遺跡5号方形周溝墓の例があるが、最終調整が異なっている。

6・7は甕である。6は「く」の字口縁の甕である。端部は不整形ながらも面をもち、正面から粗い刻目を施す。胴部最大径が高い位置にくる腰高なプロポーションである。胴部の最終調整としては、胴部下半の一部にタテ方向のミガキが確認できるが、大半は摩滅しており不明である。

7は底部からやや直立気味に立ち上がる寸胴の甕である。口頸部は出土しておらず、どのような口縁形態となるか不明であるが、山城地域では極めて特異な甕である。胴部には粘土紐の巻き上げ痕が比較的明瞭に観察でき、器壁は5㎜と薄い。胴部外面にはハケの痕跡は認められず、ていねいにナデ消されている。さらに、ナデの後に木板の先端部や周縁部を用いて器面を調整した痕跡が認められる。また、底部側面にはやや弱いが指押さえの痕跡も認められる。底部は鈍重で器形に比べて幅が広く、底面には2枚の葉を重ねた木葉圧痕が明瞭に観察できる。この甕の胴部内面の下半にはドーナツ形のススが付着しており、少なくとも一度は使用されていることがわかる。「朝鮮系無文土器」の可能性が指摘されているが、近畿地方にはこの時期の類例はない。

8・9は椀形の高杯である。8の杯部は全体に深く、脚柱部は短く中実である。脚裾部も鈍重で、端面は発達しつつあるが、不整形である。器壁はやや摩滅しているが無紋である。9も椀型の高杯であるが、口縁部が短く外反しており、水平口縁高杯の祖形になるものと考えられる。外反した端部は面をもつが、加飾されない。形態は8と同じくやや鈍重で、器壁も厚く、重量がある。脚裾の端部は面をもつが不整形である。

方形周溝墓ＳＴ180の周溝から出土した遺物は第5図が全てである。出土総数の割に高杯の比率が高いのが特徴である。これらの遺物にはわずかな時間幅が認められる。高杯は口縁内面にハケを残し、全体的に鈍重なもので、様相としてはやや古い形態を残している。これに対して、広口壺は口縁部がゆるやかに下がる傾向にあり、また甕も口縁部を「く」の字に折り返すなど、新



第６図　出土遺物実測図(2)

しい要素を持っている。山城編年では、前者がⅡ－３、後者がⅢ－１にあたる。この小様式差は、方形周溝墓が溝を共有していることによる周溝墓間の時間差の可能性と、複数の埋葬主体が検出されていることから、それに対応するものである可能性が考えられる。

地域的な特徴としては、山城地域に特徴的な口縁端部を大きく下方に拡張する広口壺が全く見られないことや、摂津型の水差が出土することなど、その様相は摂津地域に近いといえる。地理的にも摂津と山城の境界にあたり、緊密な交流がうかがわれる。

今回の出土遺物の中で最も注目されるのは、７の甕である。器壁の最終調整や、粘土紐の巻き上げ痕などの特徴は、「朝鮮系無文土器」に特徴的なそれとの類似が指摘できる。(注3) ただし、近畿地方における「朝鮮系無文土器」は尼崎市東武庫遺跡、東大阪市亀井遺跡、神戸市本山遺跡などに報告例があるが、いずれも壺に限られており、出土時期も前期から中期初頭のもので、本例に先行するものである。下植野南遺跡の胎土を観察した結果、在地のものと考えられる胎土は、素地がやや粗く、１～２㎜程度の石英や長石、チャートを多く含むもので、いずれも亜角礫であった。これに対して７の甕には雲母が含まれており、かつチャートを含まないことなどの特徴が認められ、少なくとも在地のものではないことが指摘できる。

今回の調査においては、「朝鮮系無文土器」と考えられるものはこの甕１点のみであるが、この資料が墓域から出土したということは極めて重要な意味を持つものである。

（藤井　整）

②上層遺構出土遺物

上層遺構のうち、竪穴式住居跡ＳＨ123・37・151・164の出土遺物の一部を図示した。

ＳＨ123では須恵器杯身(11～19)・杯蓋(10)・高杯(20)・鼓(22・23)、土師器壺(21)がある。杯身は口径10.6～12.9cm・器高4.9～5.0cmで、受け部の立ち上がりは1.5～2.0cmである。底部外面は2/3程度に至るまでヘラ削りを施す。杯蓋は口径14.9cm・器高5.4cmを測り、天井部外面の3/4程度に至るまでヘラ削りを施す。高杯は口径11.4cm・器高9.2cmで、脚部には円形透かし孔をもち、杯部は扁球形で口縁部の立ち上がりは1.9cmを測る。鼓22・23はいずれも口縁部が欠損する。土師器甕は扁球形の体部で口縁部は「く」の字形に屈曲するもので、口径16.2cm、推定器高は11cm前後である。体部内・外面はいずれもヘラ削り調整を施す。

ＳＨ37では須恵器杯身(29～31)・杯蓋(24～28)・甕(32)が出土した。杯身は口径11.8～13.8cm・器高5.0～5.2cmで、受け部の立ち上がりは2.0cm前後である。底部外面は1/2程度に至るまでヘラ削りを施す。杯蓋は口縁部がやや外反ぎみであり、口径12.5～14.4cm・器高4.7～5.7cmを測り、天井部外面の1/2程度に至るまでヘラ削りを施す。32は体部片で、外面には格子目状のタタキ痕が残る。

ＳＨ151は須恵器杯身(33)・甕(34)が出土した。杯身は口径12.2cm・器高5.1cmで、底部外面は2/3程度に至るまでヘラ削りを施す。甕は口径9.0cmを測るもので口縁部がわずかに丸味をもって肥厚する。頸部および体部上半にカキ目が認められる。

ＳＨ164では須恵器杯身(35～38)・土師器高杯(39)・甕(40)が出土し、40の甕は竪穴式住居跡

の竈の支脚として利用されたものである。杯身は口径11.0～13.1cm・器高4.2～6.0cmで、底部外面は1/2程度に至るまでヘラ削りを施す。土師器高杯は口径10.8cm・器高13.9cmである。甕は底部が欠損しているが長胴形の体部で、口縁部は単純「く」の字形に外反する。口径16.2cmを測る。

上層遺構の各住居跡内から出土した遺物、特に須恵器の特徴から各住居跡は6世紀前半の時期と思われる。

（石井清司）

(3)小結

今回の発掘調査では、主に古墳時代後期と前期の竪穴式住居跡群で構成される集落と弥生時代中期前半の方形周溝墓群を検出した。

弥生時代中期前半の方形周溝墓群は、いくつかのグループに分けられるようであり、そこで使用された土器の中には、在地のものと共に朝鮮半島からの影響を受けたものもあり、何らかのかたちで朝鮮半島との関わりを持つ人たちがいたことも推定できる。

古墳時代前期の頃には、この地は墓域から集落域に変化するようである。これまでに下植野南遺跡の中で、この時代の竪穴式住居跡などが検出された例は少なく、今回の調査で複数の住居跡や井戸跡が検出されたことから、この周辺での古墳時代前期の集落の一端が明らかとなった。

古墳時代後期の竪穴式住居跡等は、弥生時代の方形周溝墓と同様、大山崎町教育委員会による大山崎町体育館建設に伴う調査においても検出されており、今回の調査成果とあわせて、多数の竪穴式住居跡等で構成された下植野南遺跡の集落の構造の一端が明らかにでき、下植野南遺跡が大規模な集落遺跡であることが明らかとなった。

（竹下士郎・中村周平）

(2) ＩＫ第31次調査

1．調　査　概　要

ＩＫ第31次調査は、長岡京跡右京第589次調査地（第１トレンチ）の府道を挟んだ南東部分に設定した、第２トレンチ（約300㎡）・第３トレンチ（約800㎡）を調査の対象とした。

調査は、重機による表土掘削を行い、表土下約1.2～2.2mで、古墳時代の遺物包含層と考えられる暗褐色から黒灰褐色の粘質土層の分布を確認した。その後、人力による掘削・精査を行い、遺構の検出につとめた。その結果、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝状遺構などを検出した。

以下、各トレンチの主な遺構を中心に調査の成果を報告する。

①第２トレンチ

自然流路跡ＳＲ01　トレンチ南端部分で検出した幅約６ｍ、検出面から最深部までの深さ約1.2mを測る流路跡である。流路跡の南肩部分は調査地南壁以南にかかるため未検出である。主な埋土は拳大の礫を含む褐色や灰褐色の砂礫土である。この流路跡は、埋土の性質や堆積状況などから、後に述べる第３トレンチ内で検出した自然流路跡（ＳＲ26）と同一の流路跡であると考え

られる。遺物は出土していない。

溝跡ＳＤ02・13　ＳＤ02は、トレンチ中央部分で検出した幅約2.5m、検出面から最深部までの深さ約0.9mを測る溝跡で、ＳＤ13はトレンチ南部で検出した幅約1.5m、検出面から最深部までの深さ約0.65mを測る溝跡である。両溝跡とも断面「U」字形を呈し、暗灰褐色・灰褐色・茶褐色・茶灰褐色の粘土がレンズ状に堆積しており、埋土の状況などから考えて、同一遺構の可能性がある。ＳＤ13の底部直上付近からは、中形の甕形土器が出土した。土器は、溝の主軸に沿うように口縁部を西に底部を東に向け、溝の中心部にほぼ水平に横位に据え置かれた状態で出土した。土器の年代、出土状況などから、両溝跡は弥生時代中期の方形周溝墓の一部である可能性が考えられる。なお、墳丘部は削平を受けており、主体部は検出できなかった。

掘立柱建物跡ＳＢ03　トレンチ北部で検出した北40°西に方位を振る東西２間以上、南北３間以上の掘立柱建物跡である。柱掘形は円形もしくは楕円形を呈し、柱心々間距離は、東西辺で約2.25m等間、南北辺で南より約2.25m・1.5m・1.5mを測る。東西辺の二つの柱穴からは直径約0.1mを測る柱痕跡を検出した。柱穴から出土した土器は、小片のために詳しい時期は決定できない。

②第３トレンチ

自然流路跡ＳＲ26　トレンチ西半部分で検出した北西から南東方向に流れる自然流路跡である。流路跡の東肩は途中で二段のテラス状地形を形成しながらも、おおむねゆるやかな勾配をもって最深部へと傾斜している。西肩は調査地西壁以西にかかるため未検出であるが、調査地南西端から北東肩部までは約25mを、検出面から最深部までの深さ約2.2mを測るきわめて大きな流路跡である。茶色粘砂土・褐色砂礫土・灰褐色の拳大の礫を含む砂礫土を主な埋土とし、砂礫土中からは11世紀の白磁碗が出土している。長岡京跡右京第589次調査において検出されたＳＲ157、第２トレンチにおいて検出したＳＲ01は埋土の性質や堆積状況からこの流路跡と同一の流路跡でと考えられ、流路は３つのトレンチにまたがり、北西から南東方向に流れていたと考えられる。

掘立柱建物跡ＳＢ14・15　ＳＢ14は、トレンチ北部で検出した北24°西に方位を振る東西１間以上、南北２間以上の掘立柱建物跡である。北側は調査地北壁のため、東側は攪乱のために柱穴を検出することはできなかったが、建物はこれらの方向に広がる可能性がある。柱掘形は隅丸方形を呈し、柱心々間距離は東西辺で約3.5m・南北辺で約1.75m等間を測る。

ＳＢ15は、掘立柱建物跡ＳＢ14の南東辺で検出した北30°西に方位を振る東西２間・南北２間の掘立柱建物跡である。北辺中央の柱穴は検出できなかった。柱掘形はおおむね円形を呈し、柱心々間距離は東西辺で約1.5m等間、南北辺で約1.75m等間を測る。いずれの建物跡も柱穴からは土師器片が少量出土したものの、詳しい時期は決定できない。ただこれらの柱穴は古墳時代の遺物包含層上面において検出したものであるが、柱掘形内の埋土はその直上の遺物包含層である淡灰褐色粘砂土層のものであり、古墳時代よりは新しい時代に掘り込まれたものと考えられる。

両建物跡は、方位も似通っており、建てられた時期もそう隔たらないと考えられる。

竪穴式住居跡ＳＨ27　トレンチ東部で北東辺約2.3m・北西辺約1.3mのみを検出した竪穴式住

居跡である。流路による削平のため遺存状態は悪く、土坑などの可能性も考えられるが、遺物の出土状況などから考えて、これを竪穴式住居跡とした。遺物は、土師器高杯・陶質土器の甕、滑石製臼玉や勾玉などであり、これらの土器が一括して投棄され、その上から滑石の玉類がばらまかれたような状況で出土しており、住居跡床面付近の遺物であると考えられる。出土した遺物からは詳しい時期は確定できない。

2．小　結

今回の調査区内においても、掘立柱建物跡や竪穴式住居跡、弥生時代中期の方形周溝墓の可能性のある溝跡等を検出することができた。このことから、長岡京跡右京第589次調査において、検出された竪穴式住居跡群や方形周溝墓群が調査区周辺にも広がっている可能性が考えられ、下植野南遺跡の集落の範囲を考える上でも成果を得ることができた。また、本調査区内において検出した自然流路跡（ＳＲ26・01）については、その規模や地理的環境からみて、旧小泉川の本流である可能性が考えられる。

（中村周平）

（3）ＩＫ25次調査

1．ＩＫ25・25－２次調査概要（第７・８・９図・図版第１・２－１・２）

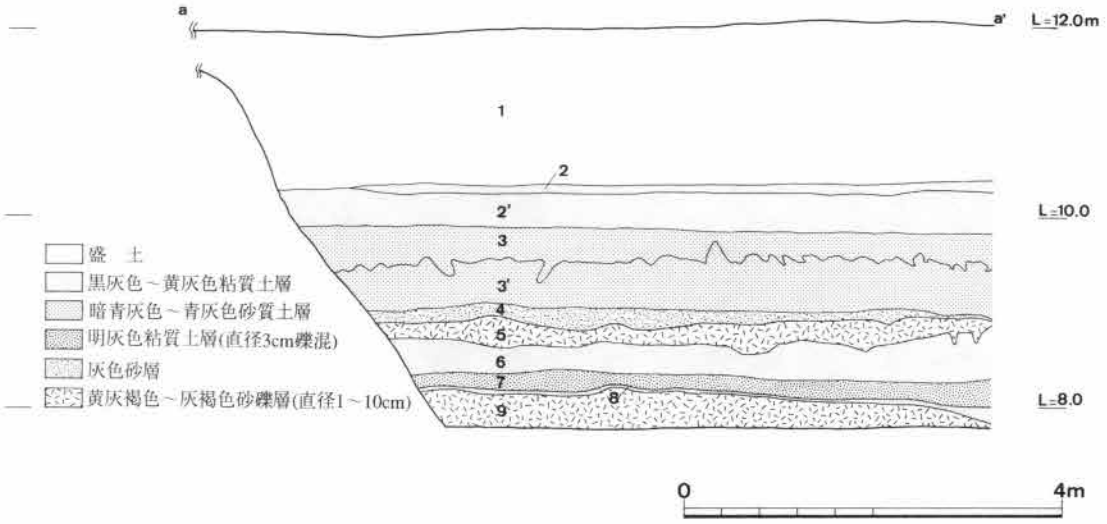
調査地は、乙訓郡条里の二条九里七坪にあたり、近接した地点では、右京第392次調査で古墳時代前期の竪穴式住居跡を検出している。調査地の標高は約12mである。

層序　地表下約-５m（標高約７m）までの地層を確認した。各層から出土した遺物を見ると、第３層の中位では地震に伴う液状化と考えられる地層の渦巻き現象が認められる。これが「慶長の大地震」によるものであれば、第３層はそれ以前に堆積したものと考えることができる。

第４・５層は、13世紀以降の堆積で、東南東から西北西への流路の方向を持つ。この流れの方向と砂礫の構成から、中世以降に調査地の東に流路を移動したと考えられている、小畑川水系の氾濫によるものとみることができる。

また、ＩＫ25－２次地点の第５層と第６層の間では、乙訓条里によって区画される水田遺構の畦畔を検出した。水田面には、人や牛の足跡が残っており、第５層の洪水性の砂礫によって埋まっていた。第７層の遺物出土状況は、下植野南遺跡に普遍的に見られる遺物包含層の状況であるが、上流域（調査地の北側）では２層に分かれて遺物を出土するものが、この地点では１層で出土している。第７層と第８層の間には部分的に西北西から東南東への流路の方向を持つ11世紀以降の堆積が認められる。この流路堆積は、流れ方向から、小泉川水系の河川堆積と考えられる。すなわち遺物包含層は希薄になってきており、遺構検出面は、第８層の上面と考えられる。

第８層上面では、軟質の緑釉陶器と弥生土器片が出土しており、この面で、直径16cm程度の小ピットを数基（ＳＢ01・02）と土坑状の落ち込みを検出している。これらの遺構は、周辺部での調査例（右京392次調査）から考えて弥生時代末から古墳時代前期までのものと考えられる。第８層

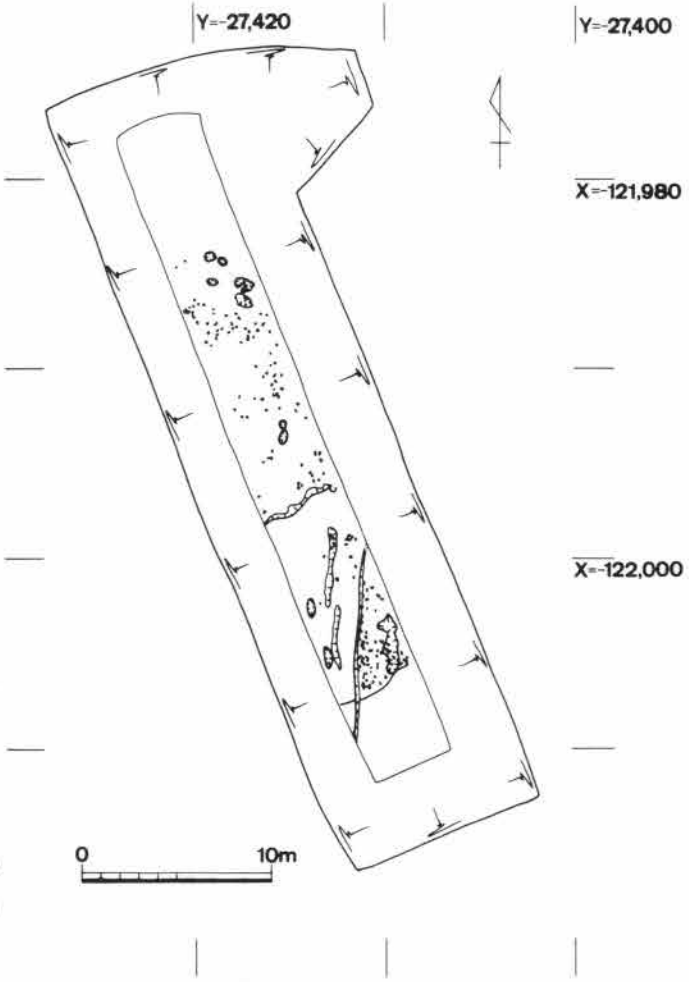


第７図　下植野南遺跡（ＩＫ25地区）南西壁断面図（部分）

以下の断ち割り調査では、弥生時代および古墳時代以前の遺構は確認していない。

(1)検出遺構

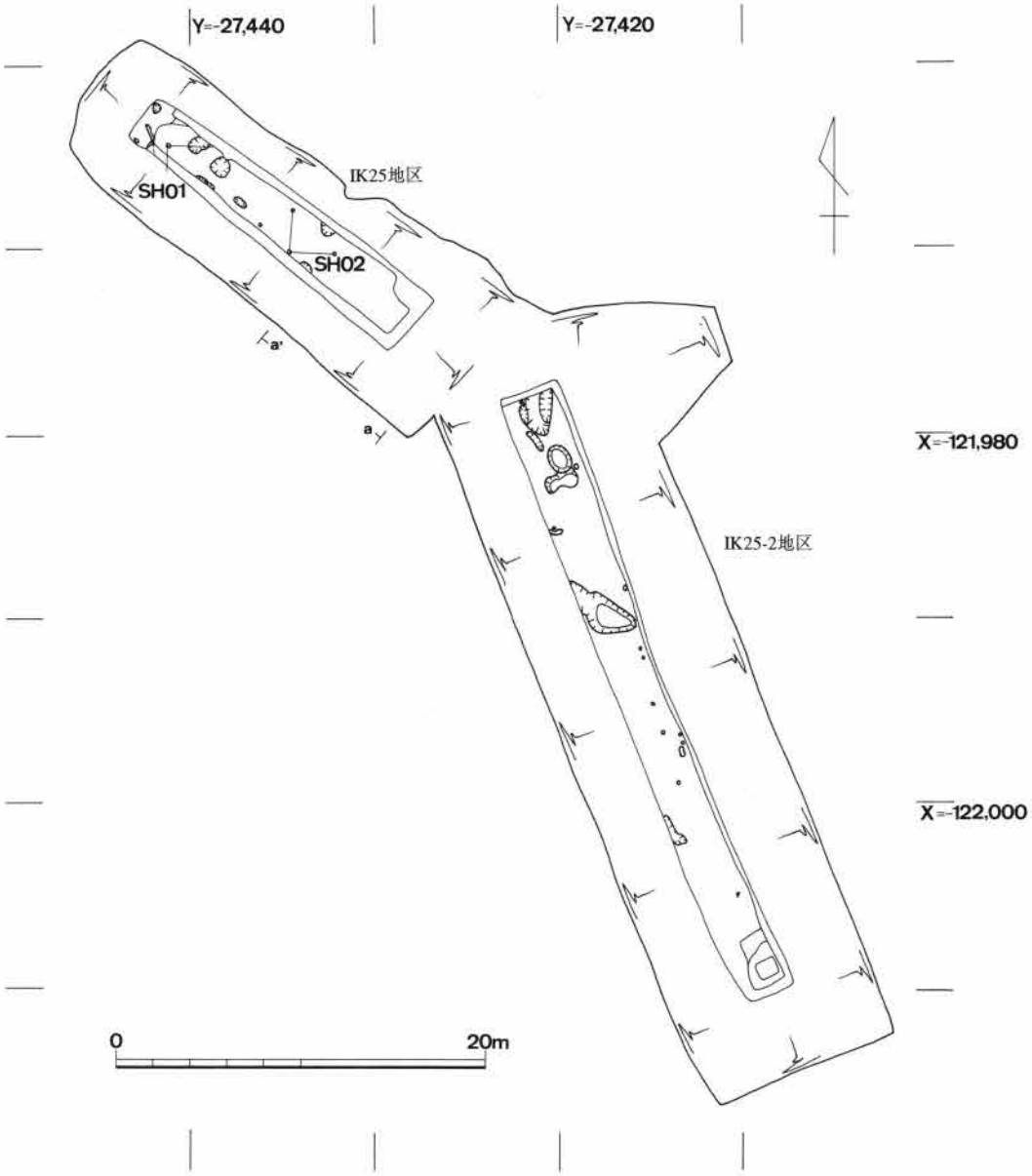
第６層の上面で、南北方向の畦畔と水田面を検出した。畦畔は、幅約0.6～1.1m・高さ約0.1mを測り、南北約10.5mにわたって検出した。X=-122,000.でY=-27,412を測り、北で2°05′東への傾きを持つ。また、Y=-27,418.3でX=-121,985.1の位置に洪水によって削平されたと考えられる東西方向の畦畔が想定される。水田面には、畦畔に沿って歩行した人や牛の足跡が残り、第５層の洪水性の砂礫によって埋まっていた。



第８図　下植野南遺跡（ＩＫ25－２）地区　第６層平面図

ＳＨ01　第８層の上面、調査地の北西部で検出した。柱穴と竪穴の一部の残欠と考えられる。上部は洪水による削平を受けており、全体の規模は不明であるが、検出状況から竪穴式住居跡の可能性が高い。

ＳＨ02　調査地の中央部で検出した。ＳＨ01同様上面の削平を受けており、壁溝などは検出していない。検出した柱穴は３基で、南北約2.3m・東西約2.5mを測る。



第９図　下植野南遺跡（ＩＫ25・25－２地区）　第８層平面図

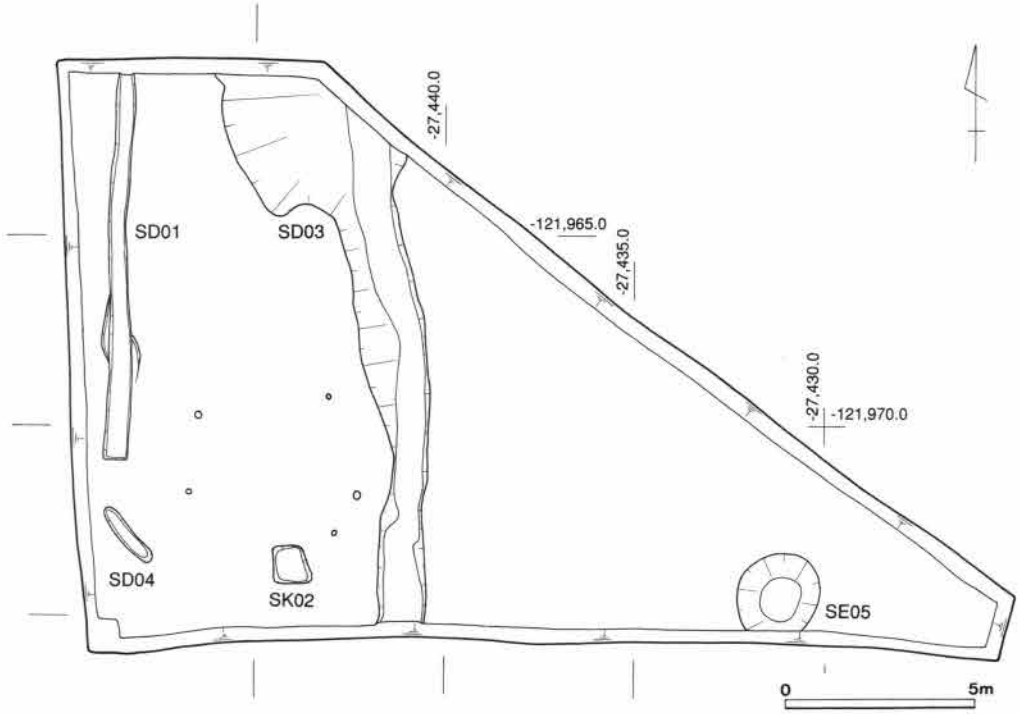
(2)小結

五条本（ＩＫ25・25－２次）地区での調査では、先に大山崎町教育委員会によって調査された長岡京跡右京第392次調査地のような明確な住居跡を検出することはできなかったが、同時期の遺物や平安時代の遺物を出土するなど、新しい知見もいくつかあった。本調査地の周辺部には、これらの遺物を出土する遺構があると考えられ、これまで考えられていた下植野南遺跡の範囲はさらに南に広がると考えられる。

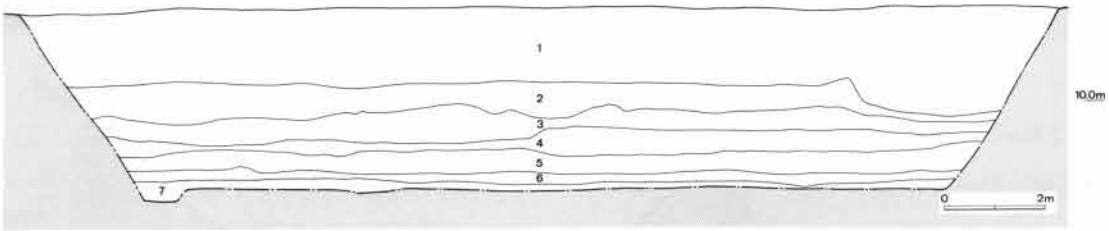
（戸原和人）

２．ＩＫ25－３次調査概要

調査地は、大山崎町下植野五条本地内にある（第２図）。調査期間は、平成10年９月21日～11月４日であり、約330㎡を発掘した。ＩＫ25－２次調査地点の北西に隣接したトレンチを設定した。乙訓郡条里では、二条九里七坪にあたり、地名として残る小字上古（十九里）の西側となる。ＩＫ



第10図　下植野南遺跡(ＩＫ25－３地区)遺構配置図(第７層上面)(1/100)



第11図　下植野南遺跡(ＩＫ25－３地区)調査区西壁土層図(1/150)　現代盛り土層

1.灰褐色細砂土層　2.濁暗青灰色シルト＋粘土層　3.褐色砂層
4.暗青灰色粘土層　5.濁明青灰色粘土層　6.明橙褐色粘質土層

25次・ＩＫ25－２次調査地同様、調査地の標高は約12m前後、トレンチ西壁の褐色砂層(第４層)で、条里に規制されたと考えられる、東西方向の畦状の高まりを認めることができた。濁暗青灰色粘土層の厚い堆積下に、奈良時代～古墳時代前期の遺構面(明橙褐色粘質土層(第７層)上面：標高8.5m前後(地表下約3.4m))が遺存していた(第11図)。

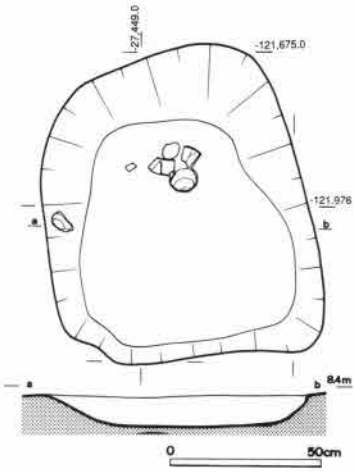
(1)検出遺構

平安時代前期までに埋没した溝ＳＤ01・03と古墳時代前期の土坑ＳＫ02、井戸ＳＥ05などがある(第10図)。

溝ＳＤ01　断面箱薬研を呈した南北方向の素掘り溝である。幅45～65cm・長さ10.1mを検出した。濁暗灰色粘土に埋まる。座標北で東に約６°ほど傾いている。

土坑ＳＫ02　調査地南東にあり、南北１mあまり、東西0.9mのややいびつな方形を呈する(第12図)。深さ10cm前後しか遺存していなかったが、土坑中央やや北側で小型丸底壺１個体が出土した(第15図６)。おそらく丸底壺１個体を埋置していたのであろう。丸底壺は、破砕されており口縁部内面には、炭化した有機物の遺存が確認できた。

ＳＤ03　調査地ほぼ中央を南北に蛇行する溝である。北側でやや西に傾き広がる。深さ10～

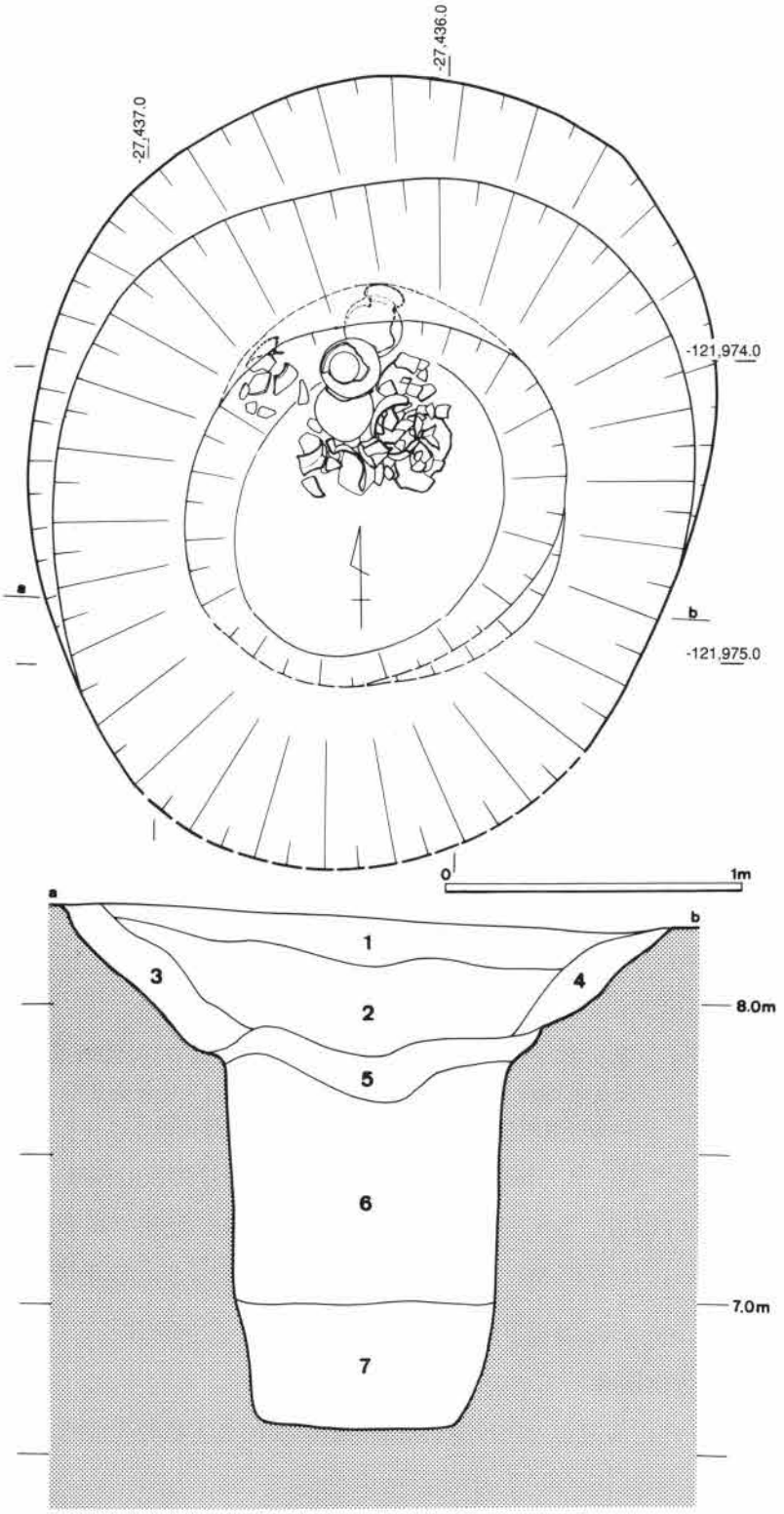


第12図　下植野南遺跡（ＩＫ25－３地区）土坑ＳＫ02実測図（1/20）

15cm前後で、浅い皿状断面を呈する。ＳＤ01同様に濁暗灰色粘土を埋土としている。

ＳＤ04　調査地南東隅、長さ18cm・幅40cmで、ＳＤ01同様の形状を示すが、遺物は土器細片のみである。

井戸ＳＥ05　直径2.3～2.6m前後の、南北に長軸を持つ楕円形の掘形を持つ素掘りの井戸である（第13図）。遺構検出面から50cm前後で直径１ｍ前後にすぼまり、1.6ｍほどで井戸底にいたる。井戸底には、完形の布留式甕などが10個体以上、垂直に堆積して出土した（第14図・第15図１～５）。甕の頸部には繊維質の紐がわずかに遺存する例が見られたことから、水汲みに使用したものと見られる。掘削時の湧水と崩落が著しく、井戸底土層堆積状況は明確ではないが、水汲みの甕が崩落土で埋没するごとに新しい甕をおいたものと思われる。

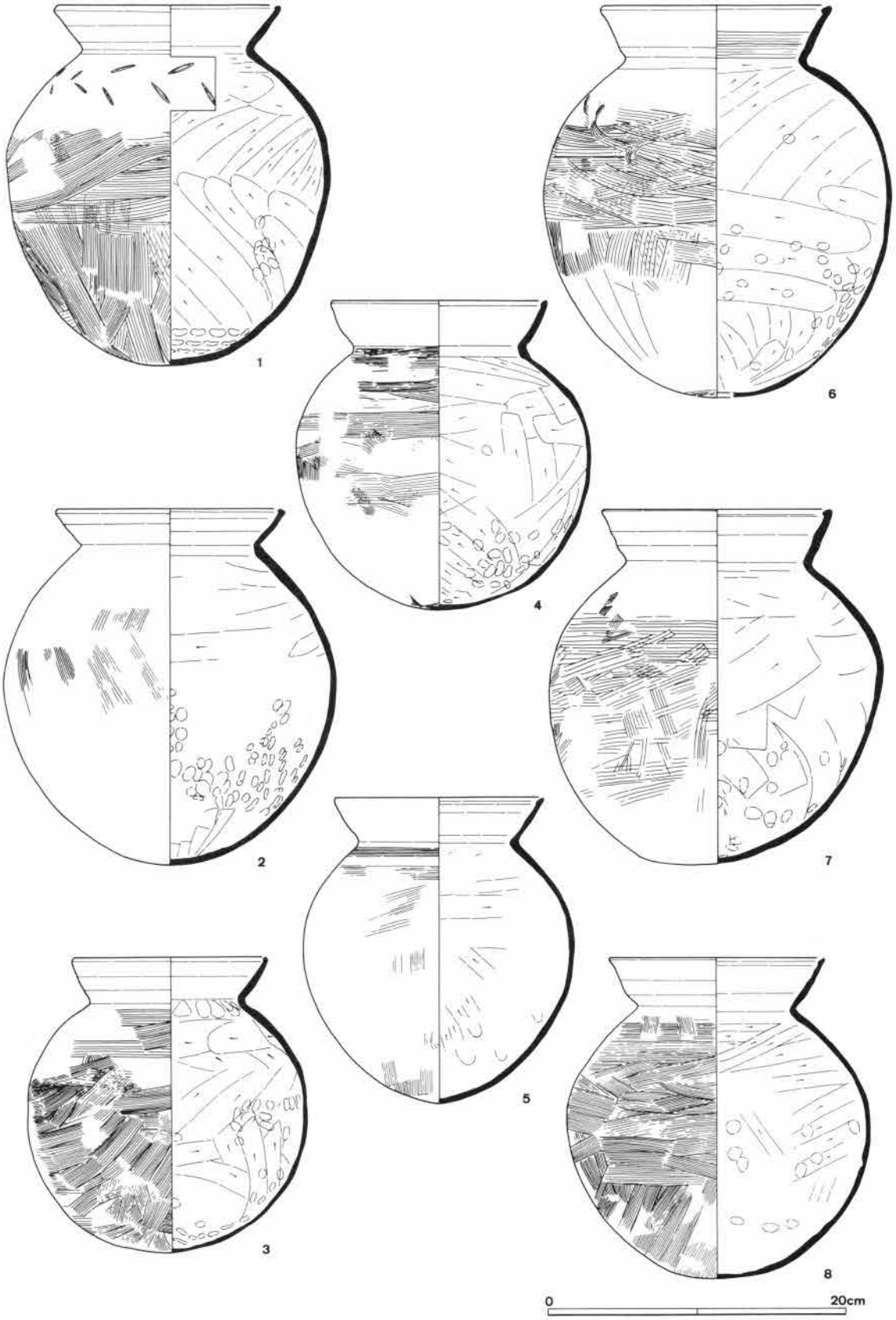


第13図　下植野南遺跡（ＩＫ25－3地区）井戸ＳＥ05実測図（1/25）

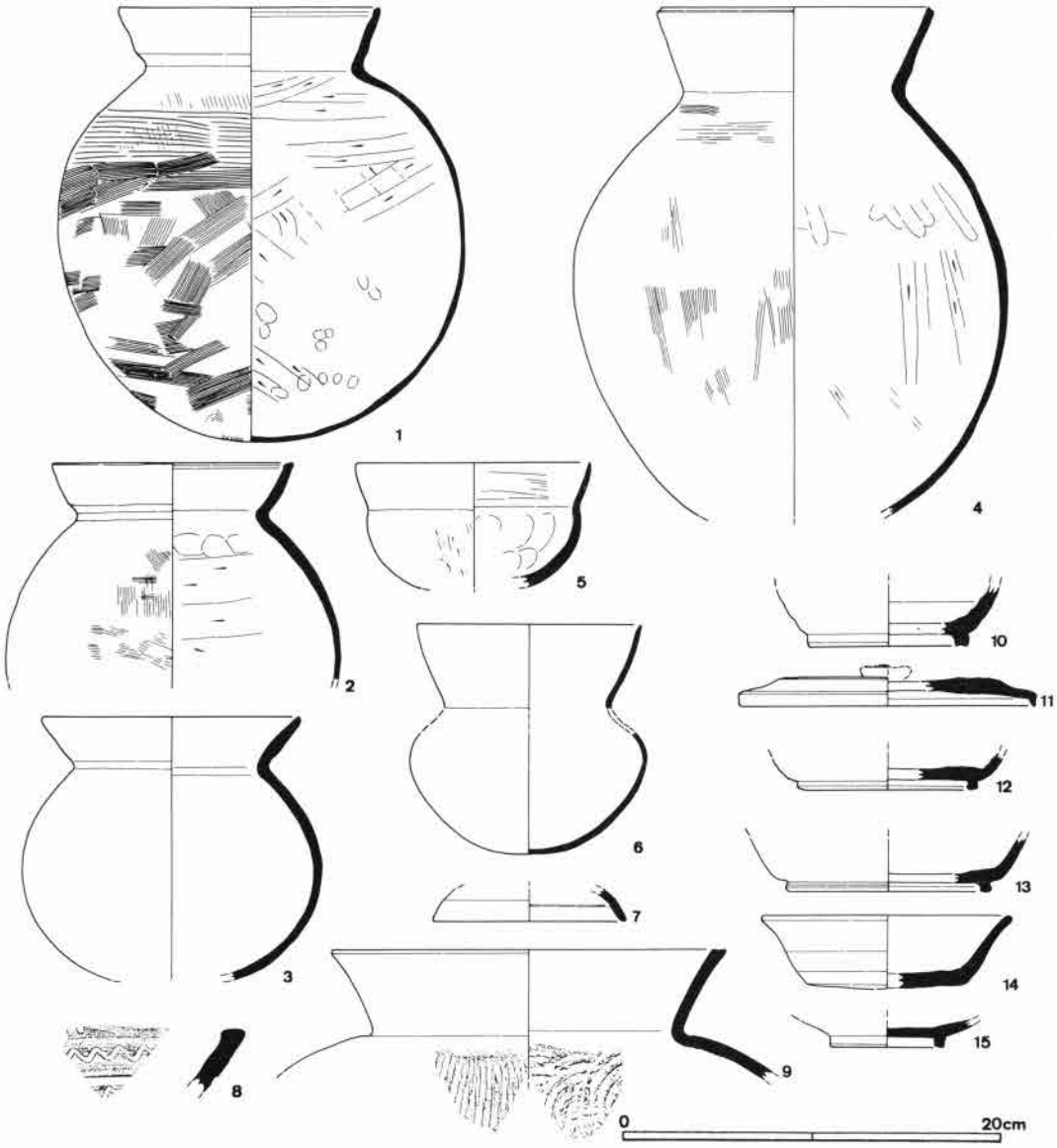
1．暗黒灰色粘質土層　2．暗灰黒色粘土層　3．暗灰褐色粘質土層
4．暗灰褐色粘質土層　5．黒色粘土層（有機質・炭を多量に含む）
6．灰色粘土層　7．黄褐色粘土層+褐色砂礫層の互層

(2)出土遺物

井戸ＳＥ05から、古墳時代前期の土師器が出土した（第14図・第15図１～５）。布留式甕は、９



第14図　下植野南遺跡（ＩＫ25－３地区）井戸ＳＥ05出土土器実測図



第15図　下植野南遺跡（ＩＫ25－３地区）出土土器実測図
１～５．井戸ＳＥ05　６．土坑ＳＫ02　７～12・14・15上面包含層　13．溝ＳＤ03

個体出土した。井戸最下層の最下部（標高6.7～6.9m）では、第14図６・８および第15図２、下部（標高6.9～7.1m）では、第14図５、中部（標高7.1～7.2m）では、第14図１・３・４および第15図４、上部（標高4.3～7.4m）では、第14図２・７がそれぞれ出土した。埋没の前後関係に明瞭な型式変遷を読みとることは困難であり、比較的短期間に埋没したと想像できる。

(3)まとめ

以上、今回の調査地では、周辺の隣接調査地同様、古墳時代前期の集落の一端を明らかにしたといえる。ＩＫ25－２次調査で確認された竪穴式住居跡の柱穴が同時期のものであるならば、井戸の周囲に古墳時代前期の集落が営まれた可能性が強いものと見られ、今後、周辺の調査に注目したい。また、古墳時代前期の良好な素掘り井戸の遺構も確認され、煮炊きに使う甕を再利用して、水を汲んでいた実態が判明した。

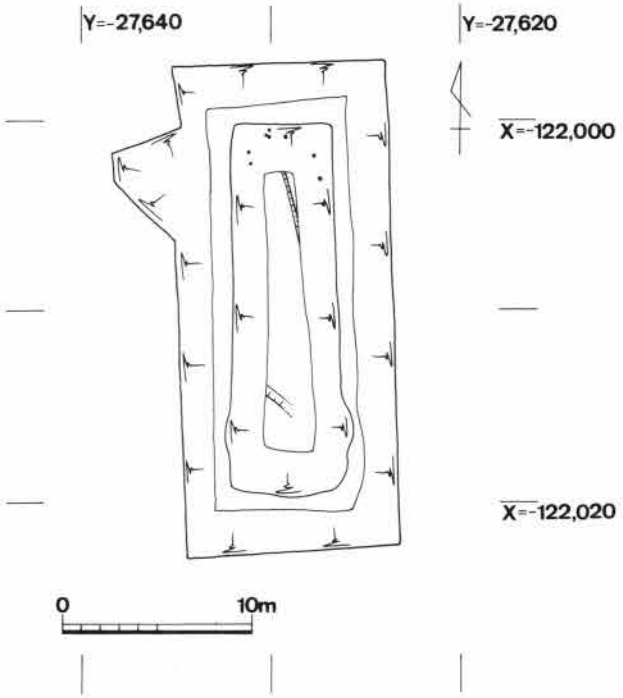
（野島　永）

(4) I K28次調査

1. 調 査 概 要(第16・17図)

調査地の標高は約12.3mを測り、地表下約-6m(標高約6.5m)までの地層を確認した。地表下約0.5mまでの盛り土層以下、標高約7mまでは、ほぼ全体が砂礫と粘質土の互層による河川性の堆積である。

ただ、調査地の北寄りでは、標高9～10m付近で青灰色の粘土と拳大の円礫を混ぜた粘土と杭を用いて、東西方向の用排水路を構築しており、南半の地層と様相が違っている。この粘土・礫層中からは、瓦質羽釜片が出土している。



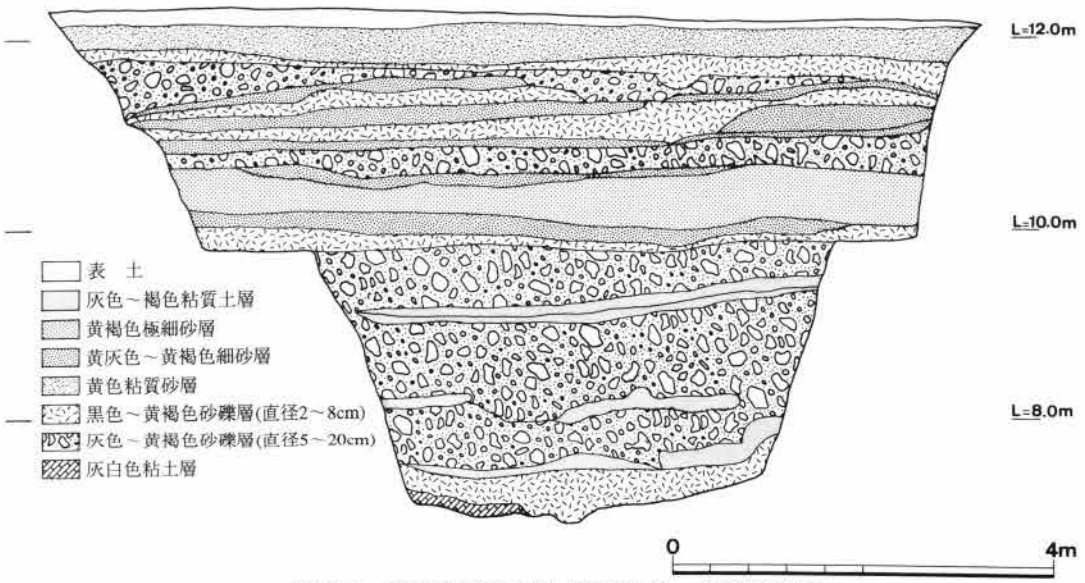
第16図　下植野南遺跡(I K28地区)平面図

標高約7～9.5mまでの砂礫層からは、弥生土器・土師器・須恵器などが出土しており、土馬・ミニチュア竈片・布目瓦片も含まれるが、いずれも上流からの流れ込みの状態で出土しており、出土遺物の磨耗が著しい。

標高約7m以下では、黄褐色の粘質土になり、上面には、河川堆積の底面を示すマンガンの沈着が認められる。

2. ま と め

土辺(I K28次)地区では、平安時代に流れていた小泉川の旧河道跡を検出した。名神高速道路の拡幅に伴う下植野南遺跡



第17図　下植野南遺跡(I K28地区)　南壁断面図

の調査では、同時代の氾濫による堆積層を確認していたが、河道跡を検出したのは、今回がはじめてである。この河道跡は、調査地の北方約200mで調査が行われた右京第589次調査でも検出しており、両者は地形図にその痕跡を残している。また、上記の調査では、河道の左岸で、弥生・古墳時代の遺構が数多く検出されていることから、本調査地の東にも同時代の遺構の広がりが想定される。

（戸原和人）

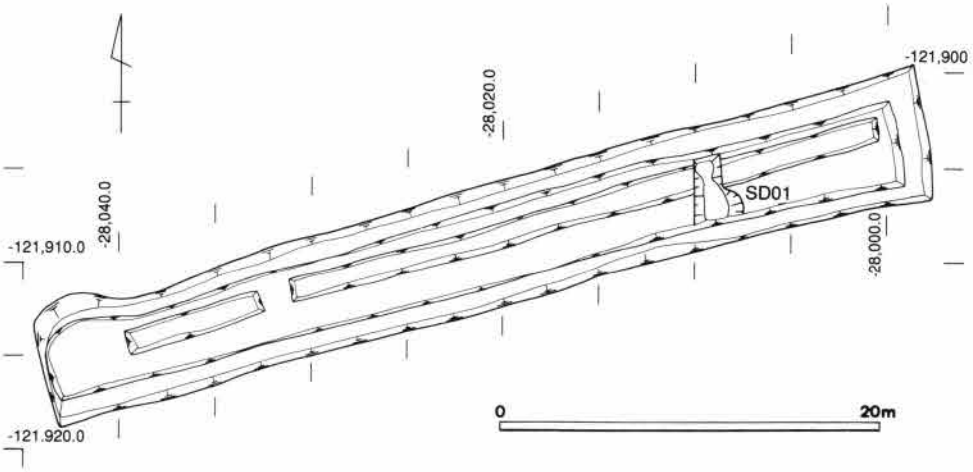
（5）算用田遺跡

1．調　査　概　要

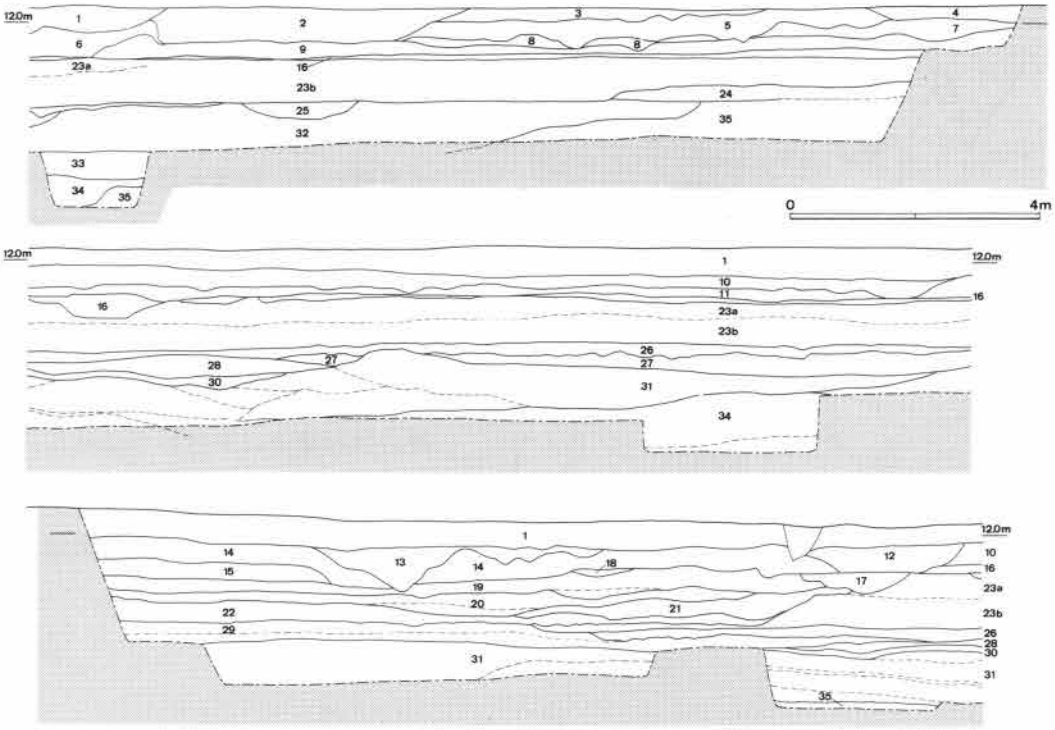
今回の調査地は、名神高速道路における大山崎ジャンクション開設に伴う発掘調査である。調査期間は、平成10年12月７日～平成11年１月23日である。調査地は、大山崎町円明寺小字井尻地内に位置する（第２図）。乙訓郡条里では、三条八里十二坪に位置する。調査地の南側に二条と三条の坪界線の遺存地割として田内小径が東西に走る。名神高速道路の車線部分の調査のため、東西に長いトレンチ（南北幅約6.3m・東西長さ約48m）、約300m²を掘削した（第18図）。壁面崩壊を防ぐために、２段に分けて重機掘削を行い、その後、遺構面検出に努めた。

当初、遺構面は東側から西側にやや傾斜し、地表下、約1.4～2.0m（標高約10.4～10.8m）の範囲で検出されるものと推測し、遺構検出につとめた（第18図）。

東側部分では、近世～近・現代の耕作土の下に砂礫土層が堆積しており、その下に淡青灰色粘土層（23層）が厚く堆積していた。遺構面は、淡青灰色粘土直下、暗黄褐色粘質土層（32層）（標高10.76m前後）をベースとしており、東壁から約10m程の地点で、南北に走るＳＤ01を検出した（第19図）。ＳＤ01は、長さ約3.5m・幅1.3～2.8mであり、溝最下面に貼り付くように、弥生時代後期の土器が出土した（第20図および第21図１～５）。中央部でも、近世～近・現代の耕作土と砂礫土層が厚く堆積している。その下には、同様に淡青灰色粘土層（23層）、有機質を含む黒灰色粘質土層（26層）が堆積しており、遺構検出面以下、濁青灰色粘土層（27層）・淡青灰色砂礫土層（31層）・暗緑灰色粘土・シルト層（34層）などが堆積していた。濁暗青灰色砂礫土層（第28層）（標高10.6～10.7m）からは、瓦器椀細片が出土しており、少なくと



第18図　算用田遺跡調査区と検出遺構（ＳＤ01）



第19図　算用田遺跡　調査区北壁土層図(1/60)

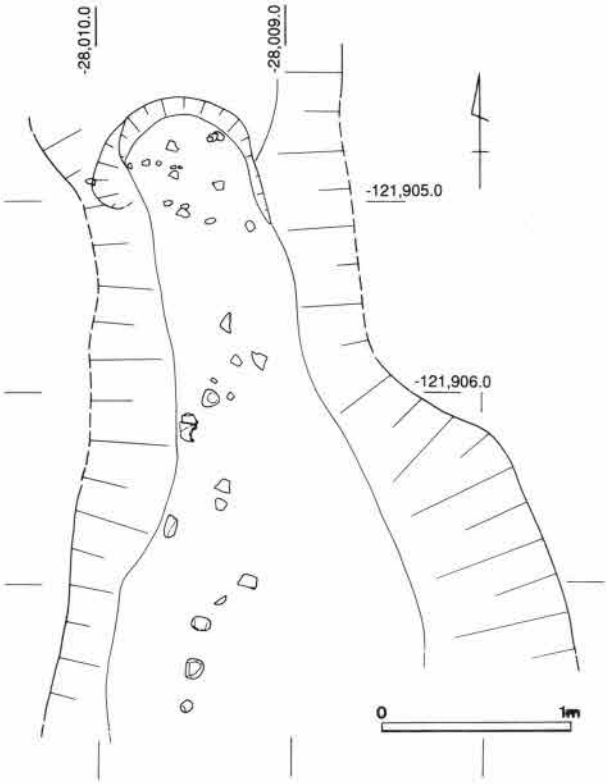
1.暗灰褐色土層　2.淡灰黄褐色シルト＋砂層　3.灰色礫砂土層　4.灰褐色礫土層
5.灰色亜角礫土層　6.明黄褐色砂礫土層　7.淡褐色砂土層　8.淡褐色砂土層
9.淡灰褐色砂礫層　10.濁暗灰色砂土層　11.明黄褐色砂土層　12.濁黄褐色礫土層
13.橙褐色粘質土層　14.濁暗灰色砂層　15.明黄橙色砂＋シルト層　16.明黄褐色砂層
17.濁淡紫灰色粘土層　18.明黄橙色砂層　19.淡青灰色シルト＋砂層
20.濁青緑灰色粘土＋砂層　21.濁青灰色粘土＋砂層　22.濁灰褐色砂土層
23a.淡青灰色粘土層(灰色気味)　23b.淡青灰色粘土層(淡緑色気味)　24.淡灰黄褐色粘質土層
25.暗黒褐色粘質土層(SD01埋土)　26.黒灰色有機土層　27.濁青灰色粘土層
28.濁暗青灰色砂礫土層　29.濁淡青灰色粘土層　30.褐色砂礫層
31.淡青灰色砂礫土層(砂礫・砂土の互層)　32.暗黄褐色粘質土層
33.淡黄灰褐色粘質土層　34.暗緑灰色粘土＋シルト　35.濁灰褐色砂礫土層

も中世以降に、洪水等に伴う暗黄褐色粘質土層の流出と砂礫層の堆積が進行したものと見られる。西側部分では、中央部とは異なり、中央部以東に厚く堆積していた淡青灰色粘土層(23層)が削平を受け、砂層の交互堆積が見られ、新たな流水による堆積が認められた。下層の淡青灰色砂礫土層(31層)は、中央部の最下層に対応する砂礫土層のみであり、遺物の出土はみなかった。

出土遺物は、ＳＤ01出土の弥生土器に特徴がある。ＳＤ01出土土器は、弥生時代後期終末～庄内式併行期に位置付けられるものである。大形の壺形土器は、西部瀬戸内系土器とされるもの(第21図１・２)で、現在の山口県近辺の在地土器に類似している。胎土も異なることから、搬入された可能性が高い。また、いわゆる生駒西麓産の土器片も含まれていた(第21図３)。

２．まとめ

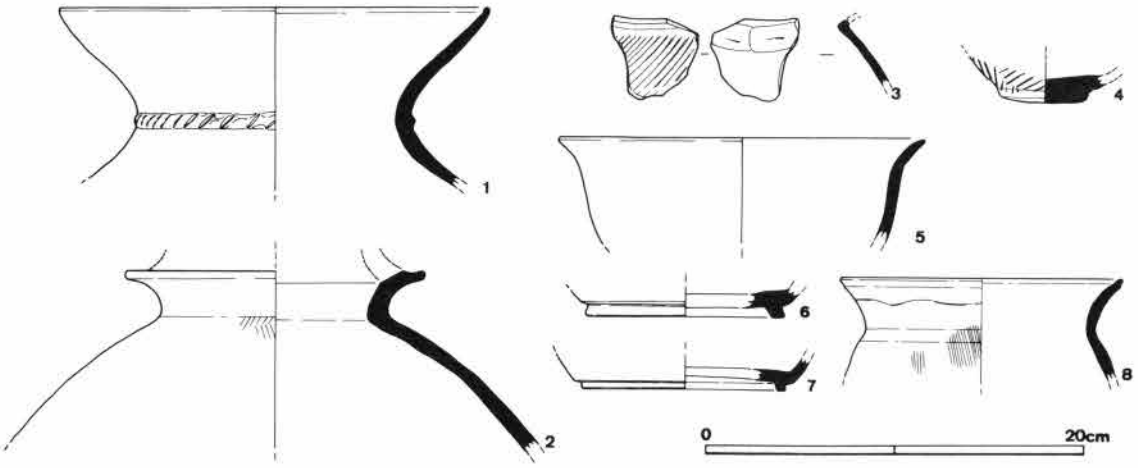
今回の調査では、部分的な調査にとどまった。三条八里十二坪では、中世以降における洪水による砂礫の堆積と中・近世の流路などの堆積状況を検出した。西側はその大半が流路となってい



第20図　算用田遺跡　ＳＤ01溝実測図(1/40)

たが、東側の中世淡青灰色粘質土層(23層)の堆積状況は、水田耕作による耕作土堆積が長時間にわたると想定される。近辺の遺存地割からみれば、調査地トレンチ東端の東、約10m程で、十二坪と十三坪の坪境が認められ、今後の調査では、坪境溝の検出が期待できる。また、弥生時代終末期、当地に他地域の土器が搬入されうる状況があり、近辺の下植野南遺跡の試掘調査における当該時期の山陰系土器なども考慮すれば、西日本の交流の一結束点として、本遺跡が機能していたことがうかがえるであろう。

(野島　永)



第21図　算用田遺跡　出土土器実測図(1～5.ＳＤ01　6～8.包含層)

調査補助員・整理員

佐々木勝・穂積祐子・中村美也・尾上　忍・山本佳子・中村武生・藤木旬子・坂元昭子・松村知也・加賀谷央・渡辺咲子・今林信佑・立石浩之・西村香代子・内藤チエ・西村敏子・長谷川マチ子・藤井矢壽子・松野元宏・堀　大輔・高田良太・西村美智子・安田祐貴子・楠木美那子・久米政代・高橋富子・石川智子・小林桂子・奥田久美子・安田純子・玉谷友子・土屋みづほ・竹隈あゆみ

注１　林　亨・近澤豊明・中塚　良『下植野南遺跡－長岡京跡右京第188次調査報告－』(『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第13集　大山崎町教育委員会)　1996

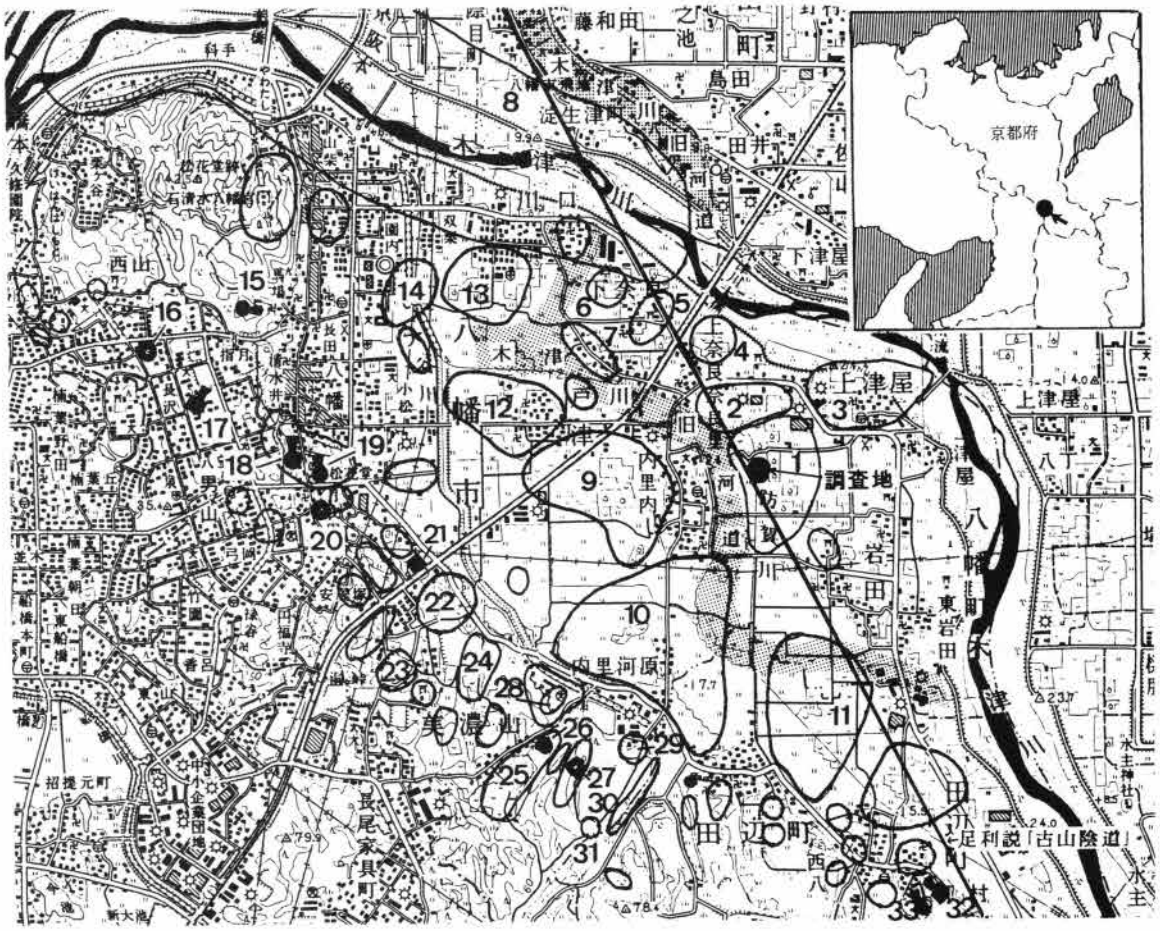
注２　中川和哉ほか『下植野南遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第25冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1999

注３　片岡宏二「朝鮮系無文土器の弥生土器化とその社会」(『ＭＵＳＥＵＭ』No.503　東京国立博物館)　1993

2．第二京阪道路関係遺跡発掘調査概要

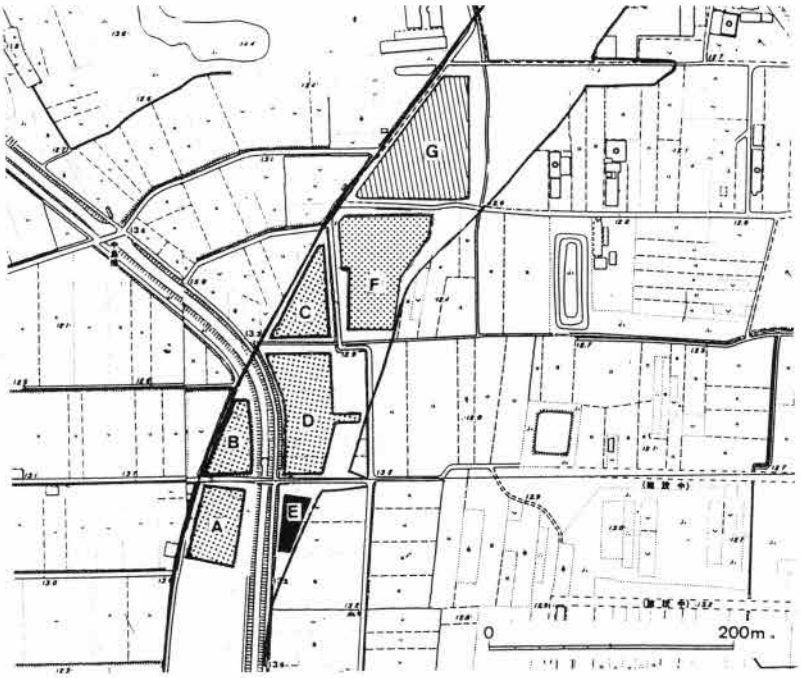
1．はじめに

平成10年度に第二京阪道路建設に先立って発掘調査を実施した遺跡は、八幡市に所在する内里八丁遺跡であった。本道路建設に先立つ内里八丁遺跡の発掘調査は、昭和63年度から継続して実施しており、平成９年度には、ほぼ全ての調査対象地の発掘調査を終了したところである。(注1) しかし、平成９度に調査を行ったＥ地区においては、当初予定した４面の遺構面の調査を終了したものの、そのさらに下層に弥生時代水田跡と考えられる遺構面が確認された。このため、日本道路公団ならびに京都府教育委員会文化財保護課等の関係機関と協議を重ねた結果、改めて平成10年度事業として、この遺構面の調査を実施することとなった。現地調査は、当調査研究センター調査第２課主幹調査第３係長事務取扱平良泰久、調査員森下　衛・柴　暁彦が担当し実施した。(注2) 調査期間は、平成



第22図　調査地位置図(1/50,000)

1.内里八丁遺跡	2.上奈良遺跡	3.上津屋遺跡	4.上奈良北遺跡	5.出垣内遺跡
6.下奈良遺跡	7.今里遺跡	8.木津川河床遺跡	9.内里五丁遺跡	10.新田遺跡
11.魚田遺跡	12.戸津遺跡	13.河口扇遺跡	14.嶋遺跡	15.石不動古墳
16.西山廃寺	17.茶臼山古墳	18.西車塚古墳	20.志水廃寺	21.ヒル塚古墳
22.幸水遺跡	23.西ノ口遺跡	24.金右衛門垣内遺跡		



第23図　調査区位置図

10年4月13日～6月19日までである。調査面積は、約1,000m²である。

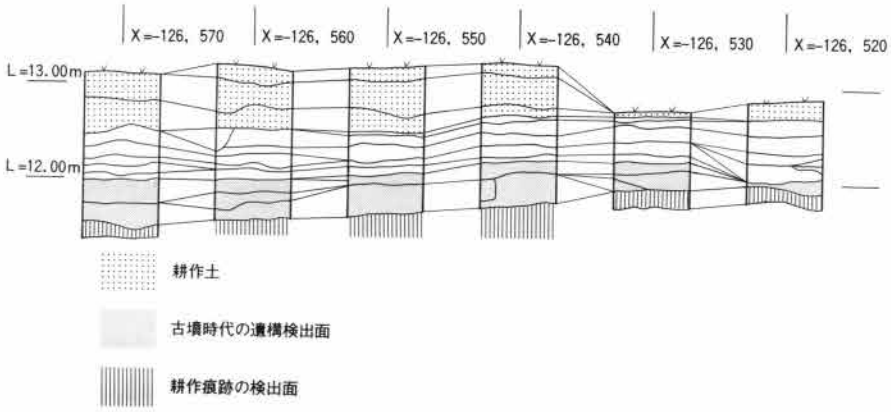
2．遺　跡　の　概　要

内里八丁遺跡は、八幡市内里日向堂ほかに所在する。当所は、八幡市の北東部、石清水八幡宮の鎮座する男山丘陵からは、東方約3.5kmの平野部に位置する。付近には、過去にいくたびもその流路を変えながら流れた木津川の旧流路の痕跡が確認され、本遺跡は、これらが形成したかつての自然堤防上に立地する。(注3)

当遺跡の過去の調査では、弥生時代後期～古墳時代初頭の集落跡や水田跡、古墳時代中期後半～後期初頭の集落跡、飛鳥時代～平安時代の掘立柱建物跡群、鎌倉時代以降に形成された島畠などが検出されている。このうち、特に奈良～平安時代の遺構・遺物に関しては、遺跡の北方にある上奈良・下奈良の地を中心に所在したとされる『延喜式』記載の「奈良園」と関連が考えられる(注4)ほか、奈良時代には「古山陰道」がこの近傍を通っていたとの説(注5)もあり、これらに関連した何らかの公的施設との関係も想定されている。また、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構は、広範囲にわたって集落跡(竪穴式住居跡群)や水田跡などが確認されており、南山城地域では数少ない低地の一大集落跡として注目されている。

3．調　査　成　果

平成9年度のE地区の調査で水田跡と判断された遺構面は、第4遺構面下に2面存在すると考えられた。これは、断割り等の作業で確認した水田面を構成する土層が、調査区の北半部と南半部で約20cmの比高差を有していたことや両者に色調の差異が認められたことなどの理由からである。このため、今年度の調査はこの2面の水田面を対象として着手した。ところが、掘削を進めると、上層の水田面をなすと考えていた暗茶褐色粘質土は、北端部から南端部へ向かってゆるやかに下がっていること、また、その色調も北端部では、暗茶褐色を呈するのに対し、南端部では暗青灰色となることが判明した。すなわち、当初は2面あると考えた水田面が、最終的には、1面であることが分かった。ただ、調査では、この水田ベース土と考えられた暗茶褐色粘質土(南半部では暗青灰色粘質土)上面では、稲株痕と考えられる砂の詰まった径3～5cm程度の小孔や



第24図　西壁土層柱状図

幅20～30cm程度の素掘り溝群などを多数確認したものの、畦畔など水田の痕跡を直接的に示す遺構は確認できなかった。こうした状況は、本遺構面を水田跡と理解するには疑問を投げかける結果となったが、上記の稲株痕と思える多数の小孔や素掘り溝の存在は、当地が何らかの耕作地の痕跡を示していることは間違いないと判断している。一方、この調査の過程では、昨年度の調査で判然としなかった弥生時代後期終末及び古墳時代中期～後期の竪穴式住居跡などが新たに確認されるなどの成果も得た。

以下、追加確認された弥生時代後期終末・古墳時代中期～後期の各遺構並びに新たに検出した耕作地の痕跡(水田跡)と考えられる遺構面の状況について、その概略を報告する。

(1)弥生時代後期終末～古墳時代後期

この時期の遺構は、第４遺構面の遺構群として、すでに昨年度の調査で、24基の竪穴式住居跡を確認している。ただ、土層の識別が困難であったり、数多くの遺構が重複していたため、第４遺構面の調査終了段階では、検出しきれなかった遺構が残ってしまっていた。このため、今年度にさらに下層へ掘り進める過程で、新たに５基の竪穴式住居跡を追加確認することとなった。

①検出遺構

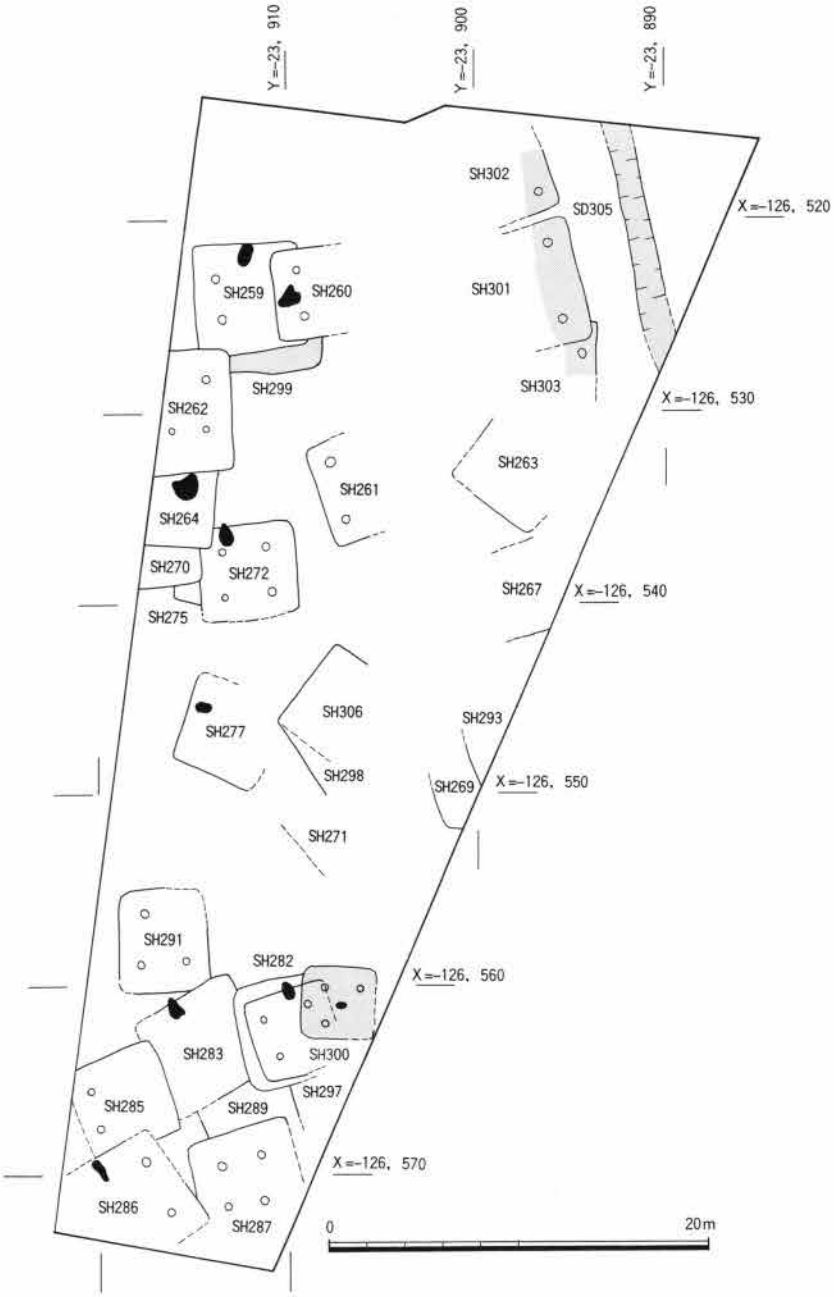
古墳時代の竪穴式住居跡２基・溝１条、弥生時代後期終末の竪穴式住居跡３基・土坑１基などを追加確認した。

ａ．古墳時代中期～後期初頭

竪穴式住居跡(ＳＨ299・302)　調査地北西側で竪穴式住居跡ＳＨ259・260とＳＨ262に切られる竪穴式住居跡ＳＨ299を検出した。また、調査区北東部で検出した３基の竪穴式住居跡(ＳＨ301・302・303)のうち、出土遺物からＳＨ302が古墳時代中期に属するものと判断している。

ＳＨ299は、その大半を周囲の竪穴式住居跡に切られ、わずかに南東隅から南辺部を残すにすぎない。ＳＨ302も、上層存在した奈良時代～平安時代の溝に大半を切られており、南東隅付近を残すのみであった。

溝(ＳＤ305)　上述の調査区北東部の３基の住居跡の東側で検出した、北西－南東方向の素掘り溝である。規模は幅約0.7m・深さ約0.2mを測り、断面「U」字形をなす。埋土は暗灰色粘砂質土である。埋土中から土師器や須恵器の高杯などが出土した。全貌は明らかではないが、何らかのかたちで集落内を区画する溝と思われる。



第25図　第４遺構面平面図　（アミ掛けが平成10年度検出遺構）

第３表　古墳時代竪穴式住居跡一覧表

遺構番号	形態	規模(m)	竈	主軸
ＳＨ299	方形	－	西辺	Ｎ５°Ｗ
ＳＨ302	方形	－	不明	〃

第４表　弥生時代竪穴式住居跡一覧表

遺構番号	形態	規模(m)	主軸
ＳＨ300	方形	3.6×3.6	Ｎ５°Ｗ
ＳＨ301	方形	3.6	〃
ＳＨ303	方形	－	Ｎ４°Ｗ

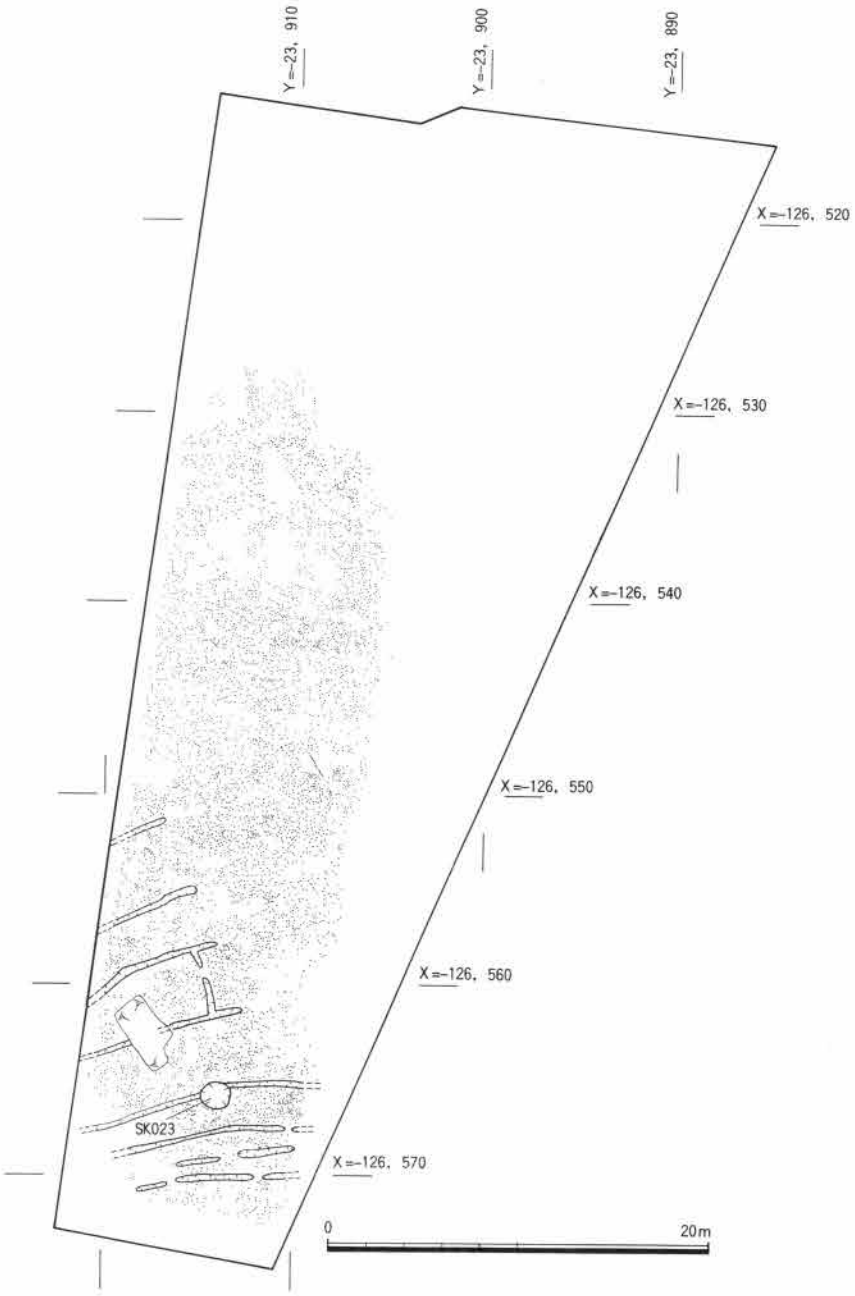
ｂ．弥生時代後期終末竪穴式住居跡（ＳＨ300・301・303）　ＳＨ300は、調査区南東部で検出した小型の竪穴式住居跡である。一部調査区外へのびるが、一辺約2.8mの隅丸方形をなし、周囲に壁溝を巡らす。住居跡の中央には、炉を配し、西側壁中央部分で貯蔵穴と考えられる土坑を検出した。また、検出範囲内で３か所の主柱穴を確認した。

ＳＨ301・303は、調査区北東部で重複した状況で検出した。いずれも奈良時代から平安時代にかけての溝に西側を切られているため、全貌は明らかではないが、ＳＨ301は一辺4.5～５mの方形をなすものと考えられる。２基とも周壁溝を有し、主柱穴はＳＨ301が２か所、他は１か所づつを検出した。

土坑（ＳＫ023）　平面形は直径約1.5mの不整円形で、断面形は浅い皿状を呈している。埋土中から、古式土師器の破片が出土した。

(2)弥生時代後期後半

先述のとおり、この時期の遺構は、Ｅ地区第５遺構面で確認した耕作地状の痕跡である。調査区南半部を中心に確認された北東－南西



第26図　第５遺構面平面図

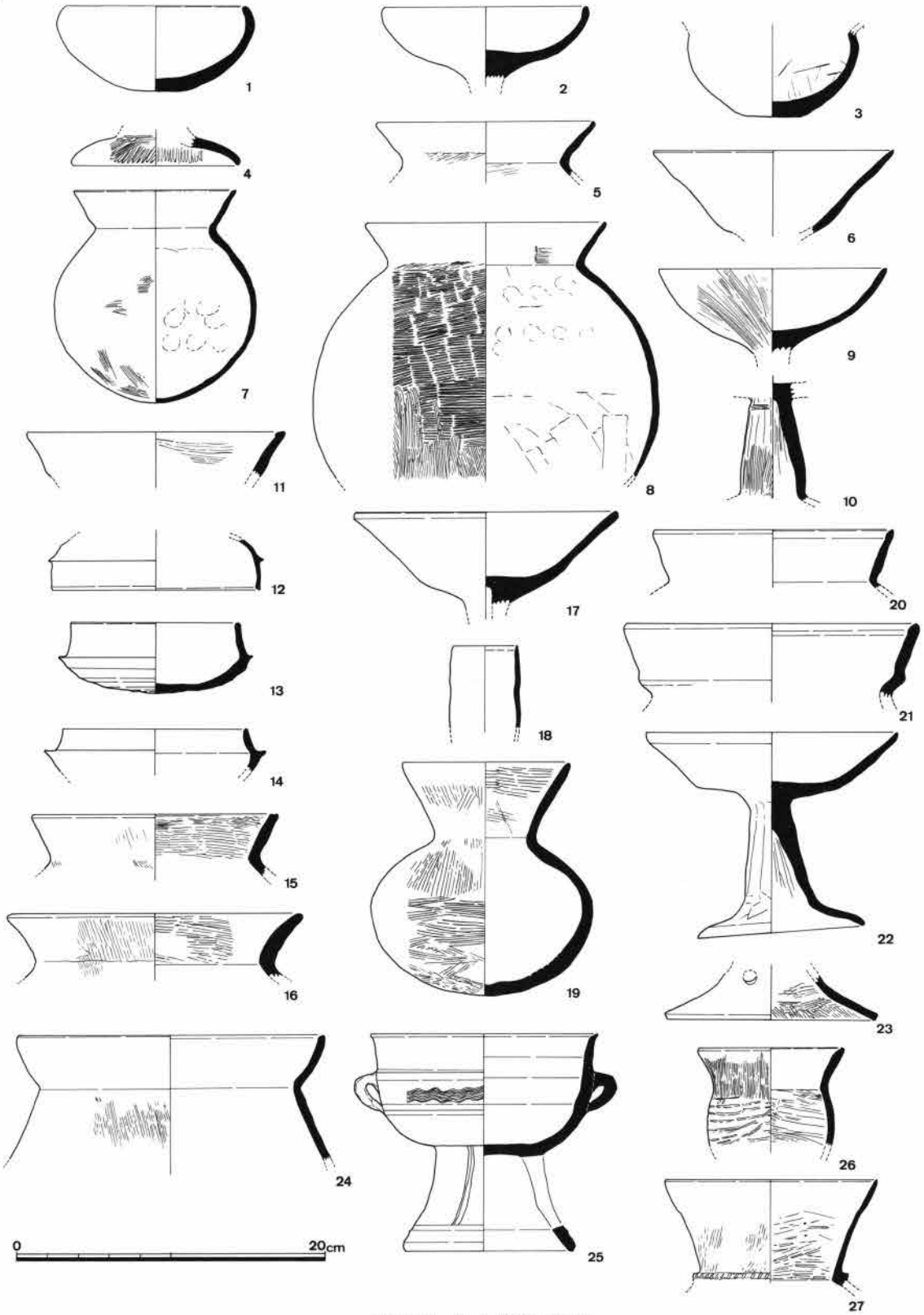
方向を主とした素掘り溝８条と、調査区のほぼ全域に認められた稲株痕跡と見られる洪水砂の詰まった３～５cm大の小孔群によって構成される。

素掘り溝は、調査区南西部で確認したが、検出部の１か所では東西方向の溝から北西－南東方向に枝状に派生する部分なども確認している。溝の形状は、幅20～30cm・深さ約10cmで断面「U」字形を呈する。

小孔群は調査区のほぼ全域で確認したが、良好に遺存していたのは西半部に限られていた。小孔を断割り、断面観察を行った結果、洪水砂が検出面から深さ約10～15cmで、垂直あるいは斜め方向に及んでおり、底部は丸くおさまる状態が見られた。この点は、従来から当遺跡で確認されている稲株痕跡と同様の状況であったが、現時点ではこの遺構が水田であるのか、他の作物の耕作痕であるのか確定には至っていない。

②出土遺物（第27図）

今回の調査での検出遺構出土の遺物を図示した。１・２は、土師器の杯と高杯である。ＳＨ299から出土した。１は口縁端部が内湾する。３・４はＳＨ300の西辺中央部分で検出した土坑から出土した。甕および高杯脚底部である。５～10はＳＨ301の埋土中から出土した土器である。８の庄内甕は体部外面上半部にタタキを施す。下半部はハケ調整である。12～16は、ＳＨ298の竈の残骸である焼土に混入していた土器である。19は、同じＳＨ298の竈の支脚に転用され焼土中に倒立した状態で出土した。17・18、20～23は、ＳＨ300との時期関係を把握するために図示



第27図　出土遺物実測図

1・2．SH299　3・4．SH300　5～10．SH301　11．SH302　12～16・19．SH298
17・18．SH282　20～23．SH297　24・25．SD305　26・27．SK023

した。22は、ＳＨ297の中央の炉跡状の遺構から出土した。杯口縁部を下に倒立したかたちで出土している。25は、須恵器高杯である。杯部外面に把手が付く。脚部は三方に長方形の透かし穴が付く。26・27は、古式土師器である。26は、甕である。外面の調整技法は、口縁部から頸部にかけては、ハケメ、以下はタタキである。27は、頸部に刻みを施した貼り付け突帯が付く。

4．ま と め

以上、今回の調査では、当初、２面の水田跡の存在を想定して調査に着手したが、最終的には、弥生時代後期後半と判断される耕作地の痕跡を１面、さらにその調査過程で弥生時代後期終末および古墳時代中期～後期の竪穴式住居跡を５基検出する結果となった。

竪穴式住居跡については、本来は、昨年度調査を行った第４遺構面で検出すべきものであったが、数多くの遺構の重複や土層の識別の難しさなどから確認できなかったものである。最終的には、これまでの調査で、弥生時代後期終末の住居跡が６基・古墳時代中期末～後期初頭の住居跡が22基と極めて多くの住居跡が確認されたこととなる。無論すべての竪穴式住居跡が同時に存在したとは考えられないものの、こうした数多くの住居跡の存在は、それぞれの時期に、当地に南山城地域でも中核的な集落が営まれたことを示すものといえるだろう。

一方、耕作地の痕跡に関しては、水田跡の可能性は高いと考えているものの、その確証を得るには至っていない。なお、これが水田跡であるにしても、これまでに当遺跡で確認された同時期の水田跡と比べ、その遺存状況は極めて悪いものと言わざるをえないだろう。

最後に、長年継続実施されてきた第二京阪道路に先立つ内里八丁遺跡の調査は、本調査をもって全て終了した。その調査成果は、弥生時代後期後半～終末期の水田跡、古墳時代中期～後期の集落跡、奈良～平安時代の道路状遺構や官衙的施設、鎌倉時代以降営まれた島畑をはじめとする耕作地の変遷など多岐にわたるとともに、非常に重要な内容を認めた。これまで木津川に沿った平野部での、遺跡調査例が少なかった南山城地域において、きわめて貴重な資料を提供したと言えるだろう。

（柴　暁彦・森下　衛）

注１　これまでに、当調査研究センターが実施した第二京阪道路建設に先立つ内里八丁遺跡発掘調査の概要は、以下の文献で報告している。

「第二京阪道路関係遺跡昭和63年度・平成元年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第38冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1990

「第二京阪道路関係遺跡平成２年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第41冊　（財）京都府埋蔵文財調査研究センター）　1991

「第二京阪道路関係遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第46冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1992

「第二京阪道路関係遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第51冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1993

「京都南道路関係遺跡平成４年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第56冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1994

「京都南道路関係遺跡平成５年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第61冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1995

「第二京阪自動車道関係遺跡平成６年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第67冊　(財)京都都府埋蔵文化財調査研究センター）　1995

「第二京阪自動車道関係遺跡平成７年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第73冊　(財)京都都府埋蔵文化財調査研究センター）　1997

「第二京阪自動車道関係遺跡平成８年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第78冊　(財)京都都府埋蔵文化財調査研究センター）　1998

注２　調査参加者(調査補助員・整理員)は以下のとおり。

奥平廣子、福田玲子、辻井和子、栃木道代、森田千代子、与十田節子、細山田章子、西脇夏海、小川正志、上田真一郎、榊原貴子、高橋あかね、坂本　薫、村山和幸、陣内高志、尾下成敏、吉村美穂、本多伯舟、川嶋聰子、永田優子、山崎美智子、木下　亮

注３　一帯の地理学的および歴史地理学的環境の把握に関しては、下記の文献を参考としている。ただし、遺跡の立地等の把握については、多分に私見を交えている。

中塚　良「木津川下流域の表層地質と遺跡立地―八幡木津川河床遺跡・新田遺跡を例に―」（『京都考古』第33号　京都考古刊行会）　1984

鳥居治夫『山城国久世郡・綴喜郡・相楽郡に於ける条里の考察』　1986

注４　『延喜式』巻三十九　内膳司

注５　足利健亮『日本古代地理研究』大明堂　1985

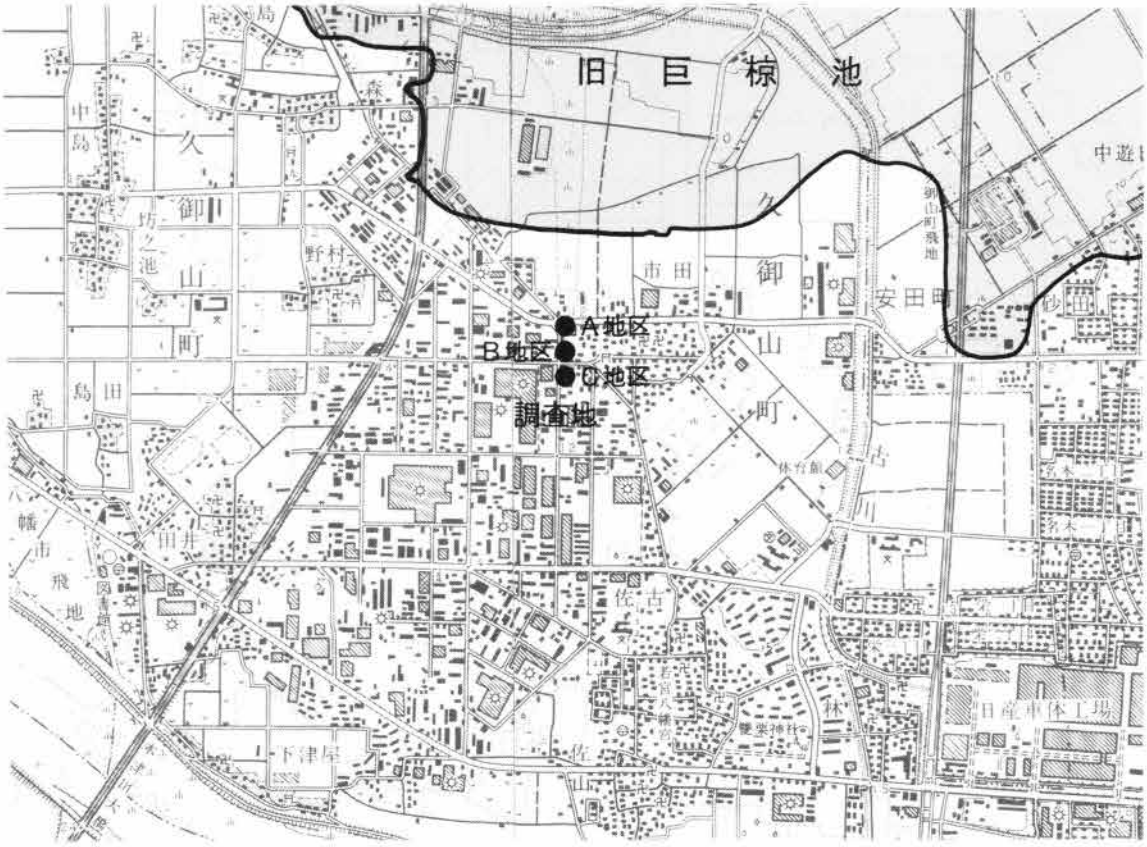
３．国道１号京都南道路関係遺跡発掘調査概要

１．はじめに

市田斉当坊遺跡は久世郡久御山町大字市田小字斉当坊・新珠城地内にあり、山城盆地南部の旧巨椋池南辺に位置している(第28図)。建設省・日本道路公団が建設している京都南道路・第二京阪自動車道が久御山町佐山遺跡の想定範囲に計画されたことから、同遺跡の範囲確認および周辺遺跡の存在を明らかにするために、平成９年度に、当調査研究センターによって２度にわたる試掘調査を実施した。その結果、佐山遺跡が当初考えられていた範囲よりも広い範囲にわたって分布していること、佐山遺跡の北と南に市田斉当坊遺跡、佐山尼垣外遺跡が別個に存在することが明らかとなった[注1]。平成10年度は、これら３遺跡のうち、市田斉当坊遺跡の発掘調査を実施した。

従来、久御山町市田斉当坊遺跡周辺は、第二次大戦中の京都飛行場建設および戦後の久御山工業団地造成のために、当時の地表に約1.5mの盛り土がなされており、そのため、遺跡の存在がほとんど分からなかった地域であった。

調査は、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて、当調査研究センターが実施した。現地調査は、

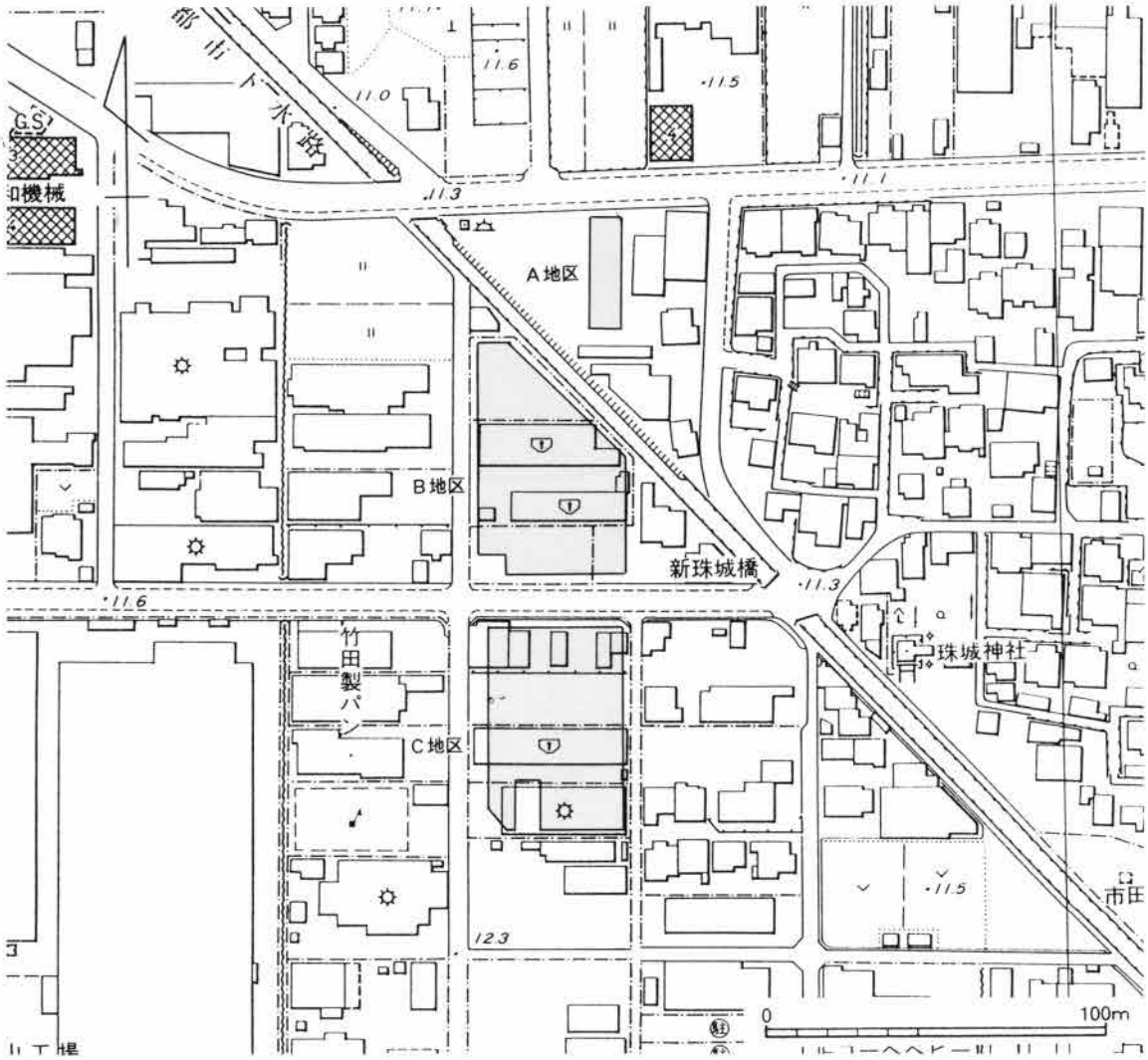


第28図　調査地位置図(1/25,000)

調査第２課主幹調査第３係長事務取扱平良泰久、主任調査員竹原一彦・岩松　保、調査員森島康雄・柴　暁彦が担当した。調査期間は平成10年９月21日～平成11年３月12日までを要し、調査面積は約6,000㎡である。現地調査は、Ａ地区は森島、Ｂ地区は岩松・柴、Ｃ地区は竹原・森島が行った。調査に要した費用は、全額、建設省近畿地方建設局が負担した。調査には、京都府教育委員会・久御山町教育委員会・久御山町国道対策室の協力を得た。また、現地調査および出土遺物の整理作業には多くの方々の参加を得た。ここに記して感謝の意に替えたい。(注2)

なお、後述のように、調査の結果、市田斉当坊遺跡は南山城地域でも最大規模の集落であることが判明した。多量に出土した遺物や多数の遺構の整理が現時点では不十分であること、平成10年度の調査に引き続いて、平成11年度にはＣ地区の南側および西側の調査が計画されており、将来的にはＡ地区全域の調査もなされる必要があることから、今回の報告は速報程度の内容にとどめた。詳細は報告書に委ねたい。本概報は、上記の各地区の担当者および当調査研究センター調査員野々口陽子が分担して執筆し、岩松がまとめた。

（岩松　保）



第29図　調査トレンチ配置図

２．調　査　経　過

市田斉当坊遺跡は、平成９年度の試掘調査の第14・15トレンチ周辺に位置し、試掘調査の成果から、弥生時代と中世の集落遺跡と推定された。調査対象地は、南北約200ｍにわたり、その間は町道や水路等で分断されているため、便宜上、北からＡ～Ｃ地区とした。Ａ地区は大内都市下水路の北側で、Ｂ地区は同下水路の南側で町道の北側、Ｃ地区は町道の南側とした(第29図)。

平成10年度の調査は、Ａ地区の一部とＢ・Ｃ地区のほぼ全域を実施した。Ａ地区は、試掘調査でトレンチを設定していなかったので、まず、約380㎡のトレンチを東辺に沿って設定し、遺構の広がりを確認することを目的とした。調査の結果、中世溝、弥生中期の溝・土器だまり・土坑が分布していることが判明した。小範囲の発掘調査のため、弥生時代の溝・土器だまり・土坑の性格は不明であるが、環濠や方形周溝墓、竪穴式住居跡の可能性がある。

Ｂ地区は、ほぼ全域を調査し、弥生時代中期の竪穴式住居跡50基以上およびそれに伴う中央土坑、多数の柱穴・土坑、溝を確認した。竪穴式住居跡の重複関係が著しいことから、この調査トレンチは市田斉当坊弥生集落の居住域の中心付近に位置していると判断される。その他に、平安時代末の井戸、中世素掘り溝、条里型地割りの坪境道とその側溝、条里型地割りに斜行する道路側溝を検出した。また、元暦２(1185)年・文禄５(1596)年の大地震の際に生じたと判断される液状化に伴う曲隆現象・噴砂を認めた。

Ｃ地区では、中世の坪境道および素掘り溝、古墳時代後期の方墳、弥生時代中期の竪穴式住居跡・方形周溝墓・大溝・井戸を検出した。方墳はその周濠の一部を確認しただけであるが、久御山町初見の古墳となった。数条の大溝は、居住域の南辺に掘削された環濠と考えられ、方形周溝墓の検出とともに、Ｃ地区の南半部は居住域の縁辺付近に位置していると考えられる。

以上のように、ほぼ全域で弥生時代と中世の遺構が分布しているのが確認でき、多大な成果をおさめることができた。

（岩松　保）

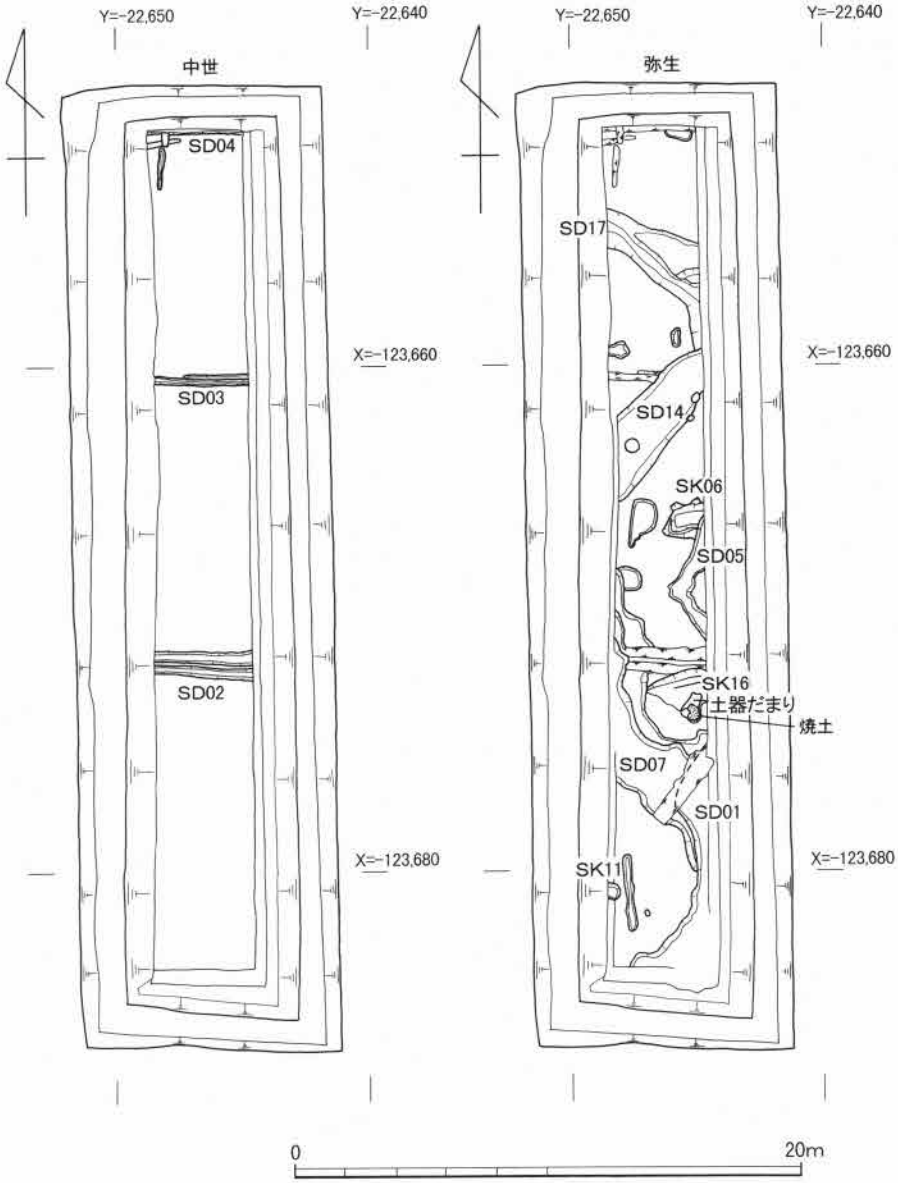
３．調　査　概　要

(1) Ａ地区

①層序

現地表下1.25ｍ付近までは近代以降の盛り土がある。盛り土を除去した面の標高は、トレンチ南端付近で10.35ｍである。以下、暗灰色粘土・暗灰青色シルト混じり粘土・暗緑灰色微砂・灰緑色シルトとほぼ水平な堆積が続くが、この間には明確な遺構面は確認できない。この下に堆積する緑灰色シルト層の上面からは、杭や土坑状の掘り込みが認められるほか、乳青灰色や暗灰色の粘土をブロック状に含む青灰色シルト混じり粘土を埋土とする深さ0.2ｍ以下の皿状の掘り込みが数か所認められることから、遺構面と判断できるが、時期は特定できない。この面の標高は、トレンチ南端付近で9.85ｍである。

この緑灰色シルト層の下層には、暗青灰色シルト混じり粘土層があるが、この上面から、中世の遺構



第30図　A地区検出遺構平面図(中世・弥生)

が掘り込まれている。この面の標高は、トレンチ南端付近で9.35mである。

弥生時代の遺構は、この層の下約0.2mで検出できる。

②中世の遺構

ＳＤ02・03・04　いずれも東西方向の溝である。トレンチの断面の観察によれば、中世の遺構面からの深さは0.5m前後を測る。埋土はいずれも暗灰色の均質な粘土である。

③弥生時代の遺構

溝ＳＤ01(図版第26－２)　トレンチ南東部で検出した南西から北東に蛇行しながら伸びる溝と推定される。溝の東肩は調査区外にあるため幅は不明であるが、断面形から判断すれば、幅約３m程度と考えることができる。埋土は大きくは３層に分かれ、上層から淡灰緑色粘土・灰黒色シルト・淡茶灰色シルトとなる。中期の遺物が主として灰黒色シルトから出土した。

溝ＳＤ07　トレンチ南部で検出した南東から北西に伸びる溝と推定される。溝ＳＤ01に切られている。埋土は大きくは２層に分かれ、上層は暗青灰色～暗茶灰色のシルト混じり粘土、下層は灰色の細砂である。中期中葉～後葉の遺物が出土した。

溝ＳＤ14　トレンチ北部で検出した南西から北東に伸びる溝である。底から完形の壺が出土した(第35図１)。埋土は暗茶褐色砂混じり粘質土層であるが、下層は砂をやや多く含む。中期中葉の遺構と考えられる。

溝ＳＤ17　トレンチ北部で検出した南東から北西に伸びる溝である。溝ＳＤ14に切られている。深さは約0.6mを測る。埋土は大きくは２層に分かれ、上層は淡緑灰色シルト、下層は暗灰褐色

シルトである。中期前葉の遺構と考えられる。

溝ＳＤ05　トレンチ東辺中央部で検出した「く」字形の溝である。底はほぼ平坦で、深さは約0.2mを測る。埋土は暗灰緑色粘土である。

土坑ＳＫ06　短辺1.2m・長辺1.6m以上の不整方形の土坑である。東側は調査区外に伸びるため、全容は不明である。溝ＳＤ05に切られている。深さは約0.8mを測る。埋土は暗茶褐色粘質土で、埋土中にわずかに炭の小片を含む。中期前葉の遺物が比較的多く出土した。

土坑ＳＫ11　直径0.7m程度の円形土坑と思われるが、西側がトレンチ外に伸びるため全容は不明である。深さは約0.45mを測る。埋土は茶褐色微砂で、中期前葉の土器が出土した。

土器だまり(図版第26－３)　トレンチ南寄りで検出した。南北1.6m・東西0.7mの範囲で、土器が集中して出土したが、掘形は確認できなかった。土器の出土した標高は、8.8～9.1m前後である。出土した土器に完形に復原できるものはなく、破損した土器が２次的に堆積したものと考えられる。出土した土器は中期前葉～中葉のものが多い。

土坑ＳＫ16　土器だまりを掘り下げると、標高8.6m付近で、南北0.7m・東西0.5mの焼土を検出し、焼土の北側に半径２m程度の扇形の土坑を検出した。土坑の掘り込みはゆるやかで、深さも５cm程度と浅い。翡翠の勾玉が出土した。土器だまりが、焼土の真上で検出されていることなどから、この遺構は、上面で検出できなかった竪穴式住居跡である可能性が高く、土器だまりは、住居廃絶後の窪みに土器が投棄されたものと考えることができる。

（森島康雄）

(2) Ｂ地区

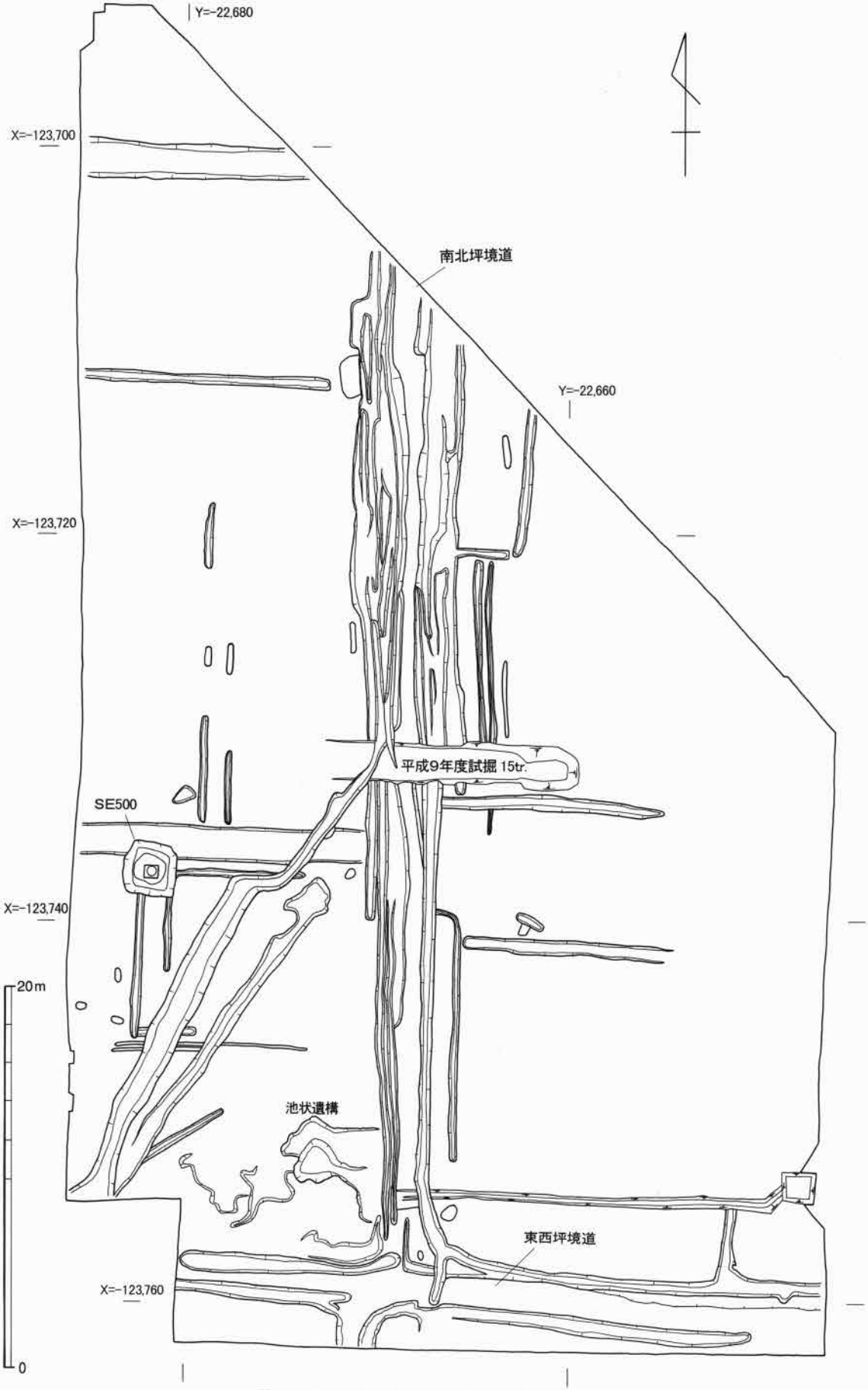
中世の遺構および弥生時代中期を中心とする遺構を数多く確認した。中世の遺構には、現地表面に見られる条里型地割りに一致する道路遺構(坪境道)および井戸、小溝群がある。その他、重機掘削時に、中世溝内から木櫃内に納められたと復原できる和鏡が出土した。

弥生時代の遺構は、中世の遺構面とほぼ同じ面で検出し、竪穴式住居跡・溝・中央土坑(炉跡)・土坑・柱穴・小ピットなどの多数の遺構を確認した。また、人為的な遺構ではないが、調査地の南半部では、大地震による液状化によって地表に吹き出した噴砂および地層の盛り上がり(曲隆)を認め、そのために多くの遺構が消失していた。

①平安時代～中世

平安時代～中世の遺構には、調査地の中央付近で南北に検出した坪境道、調査地の南辺に沿って検出した東西方向の坪境道、調査地の西南部で検出した北東―南西に斜行する道路状遺構、小溝群・井戸がある。南北坪境道と東西坪境道は、調査地の南辺で交差点を形成しており、その北西部では池状遺構を検出した。

南北坪境道(図版第28－１・２)　調査地のほぼ中央で南北方向で検出した道路状遺構である。現地表面に見られる条里型地割りの坪境道とほぼ合致するものである。路面幅２～2.5mで、東・西側溝は何度も掘り返されていた。これらの溝は、北半で、最大８回程度の重複関係を確認できたが、南半は比較的単純で、１ないし２回程度の掘り直しを認めたに過ぎない。さらに、北



第31図　B地区検出遺構平面図(中世)

半の溝群からは、平安時代末以降の土器が出土するのに対して、南端部の交差点付近では16世紀の遺物が路面上や側溝内から出土している。

東西坪境道(図版第28－１)　調査地の南辺で検出した道路状遺構で、南北坪境道に直角に取り付くものである。路面幅は、1.5～1.8mである。

池状遺構　坪境道交差点の北西部で検出した池状の土坑で、曲隆した黄色砂を５m×６m、深さ約0.7mに掘り下げている。埋土は黄色砂混じりの灰色粘質土で、木屑や土器片が入り込んでおり、地震後にごみの後片づけをした土坑と考える。

井戸ＳＥ500(図版第28－３)　一辺2.4m×2.7mの方形の掘形を有し、深さ約1.8mを測る。掘形は２段に掘られており、下段は1.4m×1.5mの方形である。井戸側は縦板組横桟留めで、内部には曲物が２段に組まれていた。埋土中より平安時代末頃の瓦器椀が出土した。

②弥生時代の遺構

竪穴式住居跡50基以上を検出した。これらの住居跡以外にも、住居の中央炉と判断される土坑が単独で検出されており、さらに多くの住居跡が分布していたと判断される。これらの遺構から出土する遺物は、中期のものである。南半部は後述の地震による曲隆のため、弥生時代の遺構の分布は希薄である。

北端部には、竪穴式住居跡および中央土坑と判断される土坑が多く分布しており、遺構の密集度は高い。遺構の残りは概して悪く、竪穴式住居跡は、壁溝の一部がかろうじて残ったもの、竪穴式住居跡と判断される窪みがかろうじて残存しているもの、竪穴は全く削平されてしまい、中央土坑と判断される土坑のみが確認されているものがある。

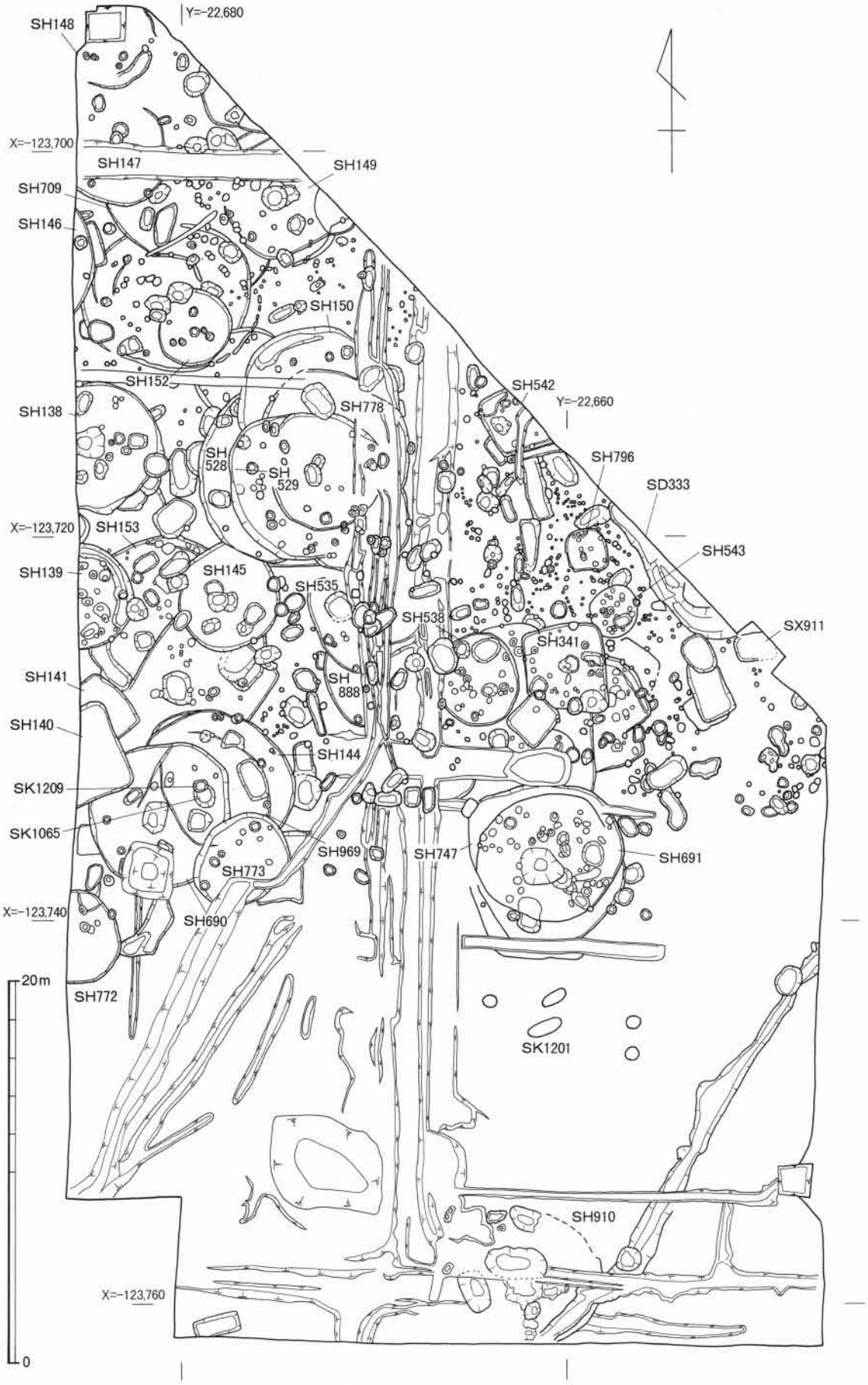
住居跡は、７～８基が重複しているものを単位に６～７群が見られる。ＳＨ152・529・139・690・341・691の周辺に重複が見られ、それぞれが単位を形成しているようである。

竪穴式住居跡ＳＨ538(図版第29－１)　調査地の中央部やや東で検出した円形の竪穴式住居跡で、径約５mを測る。

竪穴式住居跡ＳＨ341(図版第29－１)　調査地の中央やや東側で検出した方形の竪穴式住居跡で、一辺約4.1mである。この竪穴式住居跡は７～８基の切り合った竪穴式住居跡の最も新しいものである。中期中葉から後葉の遺物が出土した。

竪穴式住居跡ＳＨ529(図版第29－２)　調査地中央部よりやや北側で検出した円形の竪穴式住居跡で、７～８基の重複した竪穴式住居跡のうち、最も新しいものである。東半は坪境道の西側溝群によって削平を受けている。径約８mのいびつな円形に復原できる。床面は、地震動による液状化のために不定形に波打ち、しかも床面が乱れており、主柱穴や土坑を十分には検出できていない。埋土中に混じる土器は中期後葉のものである。

竪穴式住居跡ＳＨ150(図版第29－２)　竪穴式住居跡ＳＨ529に切られる円形の竪穴式住居跡で、径約8.3mである。竪穴式住居跡ＳＨ529と同じく、床面が地震動の影響のために融解しており、柱穴等の検出はほとんどできなかった。しかし、床面の中央付近は平坦で、住居の北壁付近が幅50～80cm・長さ約３mにわたって、約15cmの深さでゆるやかに掘り窪められているのが確認



第32図　B地区検出遺構平面図(弥生)

できた。中期後葉の遺物が出土した。

竪穴式住居跡ＳＨ691(図版第29－３)　調査地中央やや南で検出した円形の竪穴式住居跡で、短径6.8m×長径7.6mを測る。複数の住居跡が重複しているが、地震による曲隆により南側が急激に隆起しており、かつベースと埋土の融解も見られる。中期中葉の土器が出土した。

竪穴式住居跡ＳＨ910　調査地の南端で検出した竪穴式住居跡であるが、地震の影響により、竪穴式住居跡全体がベースの黄色砂に置き換わっている。西半部は黄色砂と埋土が混じり合い、掘形ラインは認識できなかったが、東半部は、かろうじて認め得た。しかし、実際に掘削にかかると、埋土とベースとが混じり合っており、埋土のみを除去することができなかった。また、大形の土坑状の遺構も、竪穴内部で確認したが、竪穴式住居跡と同じく、境界面が乱れており、形状を正確に掘削することは不可能であった。内部からは中期後葉の土器が出土した。径は、約８ｍである。

焼土坑ＳＸ911(図版第30－１)　調査地の中央部東端で検出した土坑で、調査地を一部拡張して調査した。溝ＳＤ333や周辺で多く検出している小ピット群に切られている。土坑の規模は、南北1.45m・東西は焼土の範囲より、2.4m程度と判断され、西半部は最大で深さ約20cmの掘形を有していた。土坑内は焼土塊が充満していた。焼土塊には厚さ10cm弱の大きなものも入り込んでいたが、両面から熱を受けており、土坑の壁面に沿って立ち上げた壁が崩落したものとは考えにくい。土坑東半部を拡張したが、土坑の肩部は削平されたためにほとんど検出できず、熱により変色・硬化した土坑の床面を検出するにとどまった。底面は一様に焼けているのではなく、４か所に焼土の分布が認められ、うち３か所は直径20～50cmの不定形に赤化した焼土が広がっているだけであるが、１か所は１ｍ×１ｍの広範囲にわたって熱を受けている。かなり高温で長期間にわたり被熱したらしく、炭化物が沈着して黒化したり、オレンジ色～白色に変色して硬度を増している。

中央土坑ＳＫ1065・1209(図版30－３)　竪穴式住居跡の中央土坑と判断される土坑で、２基の土坑が切り合っている。土坑ＳＫ1209が土坑ＳＫ1065を切る。土坑ＳＫ1209は竪穴式住居跡ＳＨ144、土坑ＳＫ1065は竪穴式住居跡ＳＨ969のほぼ中央に位置するので、それぞれの中央土坑と判断される。中央土坑の内部は、底部および壁面に炭層が堆積しており、その上位には、住居跡の埋土とよく似た土で埋まっている。土坑の壁面は、被熱のために赤変・硬化しているわけではない。炭層には、土や砂が筋状に入り込んでおり、数回にわたって堆積したことがわかる。

溝ＳＤ333　調査地中央東辺で検出した溝で、焼土坑ＳＸ911を切っている。調査区内では「Ｌ」字もしくは弧状にめぐっているが、全容は不明である。溝幅は１～1.8mで、検出した深さは、最大で0.95m、溝肩はほぼ垂直に掘削されている。埋土中には炭・焼土の小片が多く混じり、調査地内にはそれに関する遺構が認められないので、この溝で囲まれた中央に何らかの施設が存在するものと思われる。

土坑ＳＫ1201(図版30－２)　竪穴式住居跡ＳＨ691の南方で検出した土坑で、直径1.8m・短径0.8mの楕円形をなし、検出した深さは約15cmである。この周辺はベースが隆起しており、遺構

の分布密度は低い。内部には土器がまとまって出土しているが、南側が隆起しているために、土器も同様の傾斜をして検出された。

④地震による曲隆

南半部では、黄色砂が一面に分布している。これは、遺構面の下位に堆積した砂層が地震によって液状化し、砂層が不規則に盛り上がったり、上位に噴き出したりしたためである。下位の砂層が大きく盛り上がったために、ほとんどの遺構が削平されたと推定される。かろうじて残存している遺構を観察すると、黒灰色土系の埋土は、ベースとなる黄色砂との境界面がはっきりとしない。地震時に、遺構内の埋土が周囲の液状化した黄色砂に取り込まれたために、層理面が乱れてしまったためと判断される。このような現象のために、周囲の砂層に溶け込んで消失してしまった遺構も存在したと推測される。そのため、見かけの遺構分布密度は高くないが、B・C地区の遺構の検出状況などを考え合わせると、本来は、それらと同じ程度の密度で竪穴式住居跡をはじめとする遺構が分布していたものと考えられる。

残存している遺構には、竪穴式住居跡の残欠と考えられる円形に近い黒灰色土の分布や土坑があるが、先述のように、輪郭が溶解したり、遺構の底面が波打ったり、砂脈の噴出による切り裂きなどのため、その元々の形状を検出することは不可能であった。

この曲隆現象はC地区の北側1/3でも観察され、弥生時代の遺構は大きく損壊を受けている。

B地区の南半およびC地区の北半では、曲隆した砂層の上から平安時代末頃の坪境溝が掘削されているので、曲隆現象を引き起こした地震は、法勝寺九重塔などが損壊した元暦2(1185)年の地震の可能性がある。しかし、噴砂の一部は、中世堆積層と判断される層を切り裂いており、伏見城が損壊した文禄5(1596)年の地震に際しても甚大な影響を受けたものと判断される。(注4)

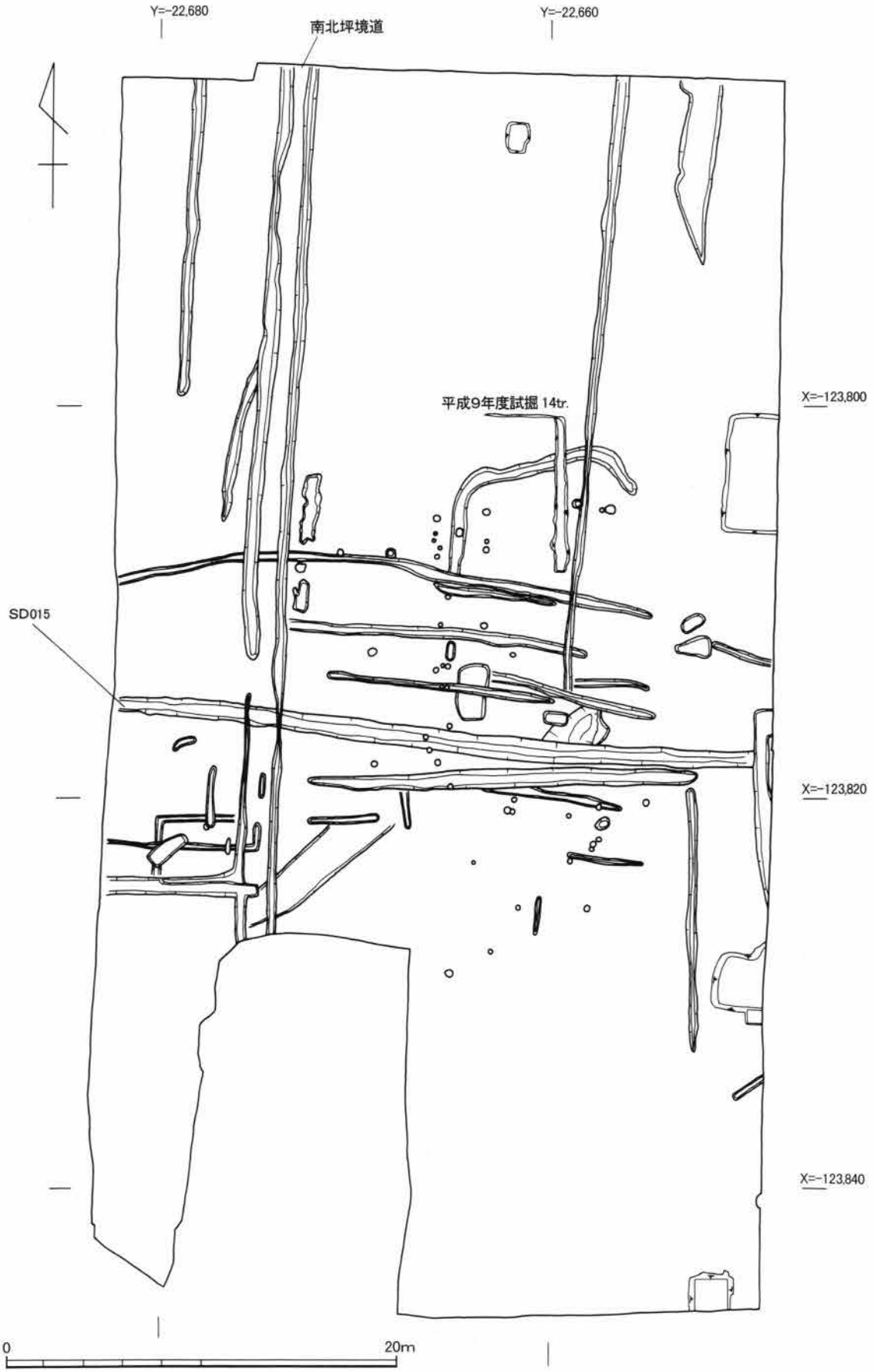
(岩松　保)

(3) C地区

調査は2面で行い、平安時代～中世、弥生～古墳時代の遺構がそれぞれ分布する遺構面である。弥生時代の遺構では、竪穴式住居跡・方形周溝墓のほかに、集落の南辺を画すると推定される溝群、多数の土坑がある。古墳時代の遺構には、方墳の周濠および溝、平安時代～中世の遺構には、条里型地割りの坪境道がある。

①層序

現地表下1.2m付近までは近代以降の盛り土がある。盛り土下面の標高は、10.5m前後にある。盛り土下面から標高9mの間は暗褐色系・暗青灰色系の粘質砂・微砂・シルト系の土砂がほぼ水平な堆積層(中世～近代の水田か)を形成している。また、標高10.2m付近には、5～7cmの厚さで洪水砂(黄色・灰色)の堆積が認められる。C地区では弥生時代遺物包含層が残っておらず、地山面直上においても中世遺物が出土する状況にあることから、中世初期段階で地山面に達する大規模な削平を受けたと見られる。淡緑灰色砂質土もしくは淡黄灰色粗砂を主体とする地山の上面は、北から南にかけてゆるやかに下がり、北端での標高は9m、南端では8.8mである。認識した遺構面は、地山面の1面であるが、地山が下がる南部域では、中世面とそれ以前の弥生時代面



第33図　Ｃ地区検出遺構平面図（平安～中世）

の２面がかろうじて分離できた。地山を掘り込む中世遺構・弥生時代遺構では、中世遺構の埋土は灰色粘質砂が多くを占める。一方、弥生～古墳時代遺構の埋土は、黒灰色・暗茶褐色系の砂質土が多くを占める。

②平安時代～中世の遺構

Ｃ地区で検出した当該期の遺構には、坪境道の側溝および溝・小溝群・小ピット群がある。

南北坪境道　調査地の中央やや西側で２条の南北溝によって画される南北道路で、溝心々で1.6mを測る。Ｂ地区の北半部の坪境道と違って、側溝の掘り直しはほとんど認められない。その方向は北でやや東に振れるもので、Ｂ地区で検出した南北坪境道とは交差点で約３mの食い違いが認められる。出土した瓦器椀より、13世紀と判断される。これらの側溝および路面に相当するトレンチ北壁や東壁には、時期が下るごとに上位に造り替えられて、現地表に残る坪境溝が構築されるまでの過程が、土層の観察により確認できる。

溝ＳＤ015　調査地の中央付近で検出した東西方向の溝である。内部からは、須恵器杯身が出土した。平安時代の遺構である。

③古墳時代の遺構

古墳時代に属する遺構には、古墳周濠・井戸および溝がある。

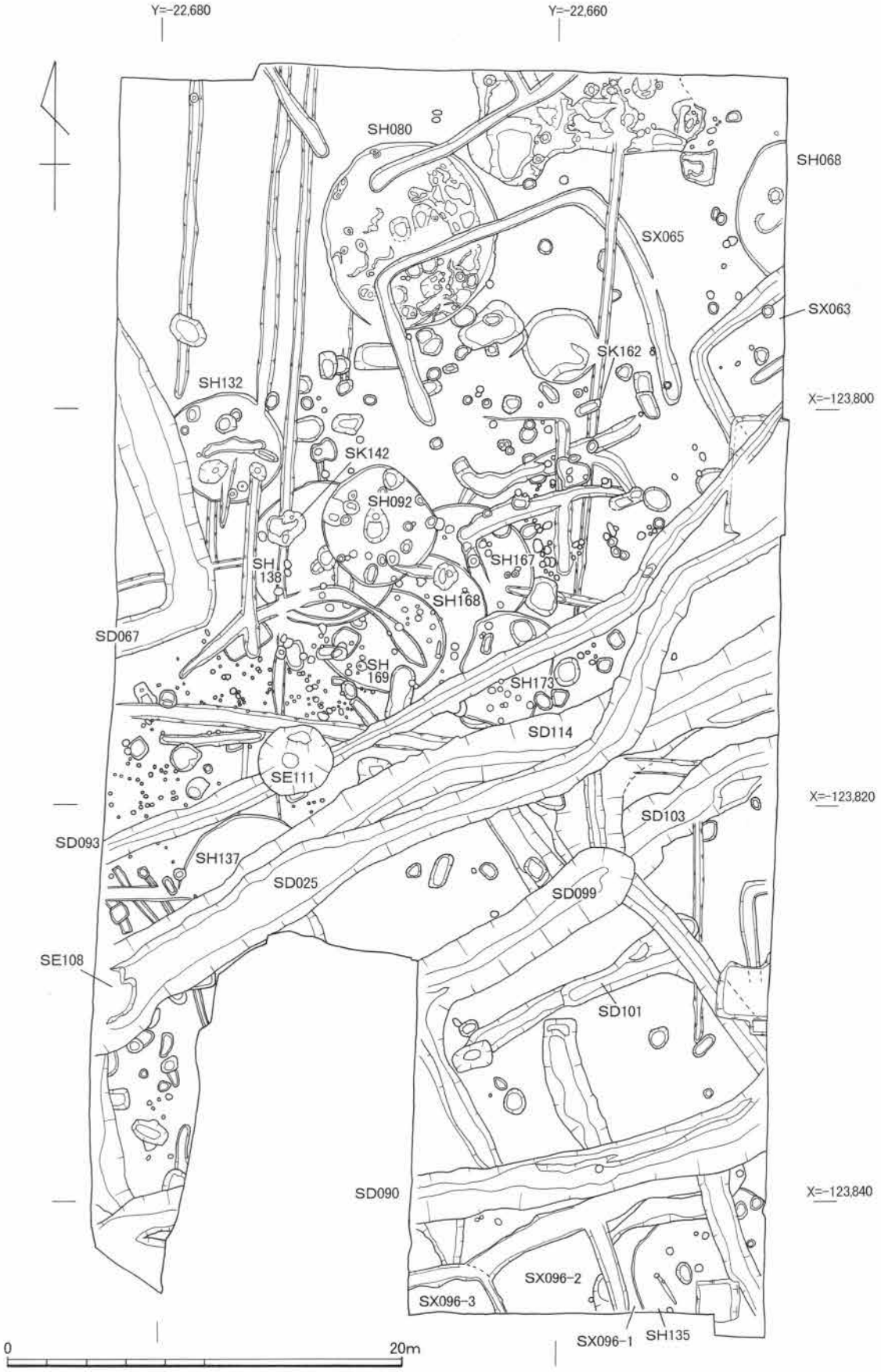
古墳周濠ＳＤ067　調査地の西辺で「Ｌ」字状に検出した溝である。幅は狭いところで約1.7m、広いところで約３mで、溝からはＴＫ10型式併行の須恵器高杯がほぼ完形で出土している。周辺の重機掘削・荒掘り時に埴輪片が出土しており、古墳の周濠と判断した。その形状から、方墳の一部と判断する。

環濠ＳＤ025(上層)　調査地の中央部やや南で検出した北東―南西にやや蛇行して掘削された溝である。ＳＤ025は、下位には弥生時代中期を中心とする土器片が多く混じり、埋土の最上層には布留式の土器片が含まれている。弥生時代中期に掘削され、その一部を重複させて古墳時代前期に再掘削されたと考える。

井戸ＳＥ108　ＳＤ025・114と重複した井戸で、層位的にはＳＤ114・025を切っており、ＳＤ025(上層)との切り合い関係は未確認である。この井戸は、復原径1.3～1.4mの丸太刳り抜き井戸を縦に４分割し、そのうちの２個の端部を組み合わせて再転用し、井戸枠を構築している。井戸の掘形は２段に掘削されており、上段はＳＤ025との切り合い関係を平面的に確認できなかったが、土層断面より、一辺3.4m程度に復原できる。２段目の掘形は、一辺約2.2m×2.6mの方形を呈している。井戸側底までは、検出面から1.8mを測る。井戸の内部から、布留式土器が出土している。

④弥生時代の遺構

弥生時代の遺構はすべて中期のもので、竪穴式住居跡11基・井戸１基・方形周溝墓群のほか、環濠と考えられる溝・土坑・柱穴などを検出した。方形周溝墓ＳＸ065や方形周溝墓ＳＸ170など、竪穴式住居跡と切り合い関係を有する方形周溝墓は、すべて竪穴式住居跡を切っており、墓域が南から北に移動しているものと考えられる。また、溝ＳＤ090や溝ＳＤ114・025、溝ＳＤ093など



第34図　Ｃ地区検出遺構平面図(古墳・弥生)

も、竪穴式住居跡を切っている。以下、主要な遺構について概述する。

竪穴式住居跡ＳＨ080(図版第32－３)　調査地の北辺部で検出した円形の竪穴式住居跡で、径約9.5mの大形の住居跡である。地震による液状化のため、床面は凸凹に隆起し、かつ、主柱穴・土坑などとともにその一部がベースの砂層に溶けて込んでいる。そのため、詳細については不明である。内部からは中期後葉の土器が出土している。

竪穴式住居跡ＳＨ132　古墳周濠ＳＤ067に切られている竪穴式住居跡で、径約5.5mを測る。床面は地震動の影響を受けており、柱穴等の検出は十分ではない。中期後葉の土器が出土している。

竪穴式住居跡ＳＨ092(図版第32－２)　竪穴式住居跡ＳＨ168・138を切る竪穴式住居跡で、長径6.2m・短径5.8mのいびつな楕円形を呈している。重複関係で見ると、４ないし５基の竪穴式住居跡のうちで最も新しいものである。床面上には、広範囲に炭化物・灰・焼土が分布しており、焼失住居と判断される。床面上の土坑内部からは、ほぼ完形の高杯(第35図６)、水差し形土器(第35図３・４)が出土している。中期後葉の住居跡である。

竪穴式住居跡ＳＨ138　竪穴式住居跡ＳＨ168・169を切り、ＳＨ092に切られている。径約７mの円形竪穴式住居跡で、住居の南壁に沿って、幅約30cm・深さ約５cmの周壁溝を検出している。中期中葉頃の土器が出土している。

方形周溝墓ＳＸ065　竪穴式住居跡ＳＨ080の廃絶後に造られたもので、方台部の規模は11.2m×11.7mである。一部周溝が途切れているが、検出時には方台部を全周していた。台状部で多くの土坑を検出しているが、主体部の一部であるかどうかは不明である。周溝の幅は0.3～1.1m・深さ約15cmで、埋土中には中期の土器片が混じる。

方形周溝墓ＳＸ096　調査地の東南部で検出した方形周溝墓群で、竪穴式住居跡ＳＨ135に切り勝ち、環濠ＳＤ090に切られている。周溝墓が３基東西に連なったもので、当初は東西方向の溝と認識していたが、最終的に方形周溝墓群と判断するに至った。ＳＸ096－１とＳＸ096－２の切り合い関係は確認できなかったが、ＳＸ096－３はＳＸ096－２を切っており、東から西へ順に築造されたと復原できる。中期前葉から中葉の土器片が出土している。

環濠ＳＤ025(下層)　上半は古墳時代初頭の土器群が混じっているが、下位は中期中葉から後葉の土器のみが入っており、この時期の溝が重複しているものと判断する。環濠ＳＤ114を切っている。幅1.6～1.8m・深さ1.2mを測る。

溝ＳＤ090　調査地の東南部および西南部で検出している溝で、幅は最大2.8m・検出した深さ約0.9mの大溝である。方形周溝墓ＳＸ096およびその北側の北西―南東の溝を切っている。埋土中には中期後葉の土器が多く混じる。

環濠ＳＤ093　環濠ＳＤ025の北側で検出した溝で、調査地中央部の竪穴式住居跡群を切っている。幅0.8～1.3m・深さ約0.8mで、環濠ＳＤ025やＳＤ090とくらべて規模はやや小さいが、断面「Ｖ」字形をなしており、環濠の可能性がある。中期後葉の土器が出土している。

環濠ＳＤ114　環濠ＳＤ025に切られており、調査地西部では、環濠ＳＤ025とほぼ重複している。幅が分かる東端部での溝幅は、約2.5mで、検出した深さは約0.7mである。中期後葉の土器

が出土している。

（竹原一彦・岩松　保）

４．出　土　遺　物

今回の調査では、整理箱約350箱の多量の遺物が出土した。その大半は、弥生土器であるが、石器や玉作り関連の遺物も多く出土している。玉作り関連の遺物は、竪穴式住居跡の埋土を洗浄して回収したもので、量の多寡はあるが、すべての竪穴式住居跡から出土している。

出土した土器の大半は、弥生時代中期のものである。第35図は出土遺物のうち、弥生土器の実測図で、１はＡ地区の溝ＳＤ14、２・５がＣ地区の溝ＳＤ099、３・４・６がＣ地区の竪穴式住居跡ＳＨ092から出土している。１は中期中葉の範疇におさまり、他は中期後葉のものである。

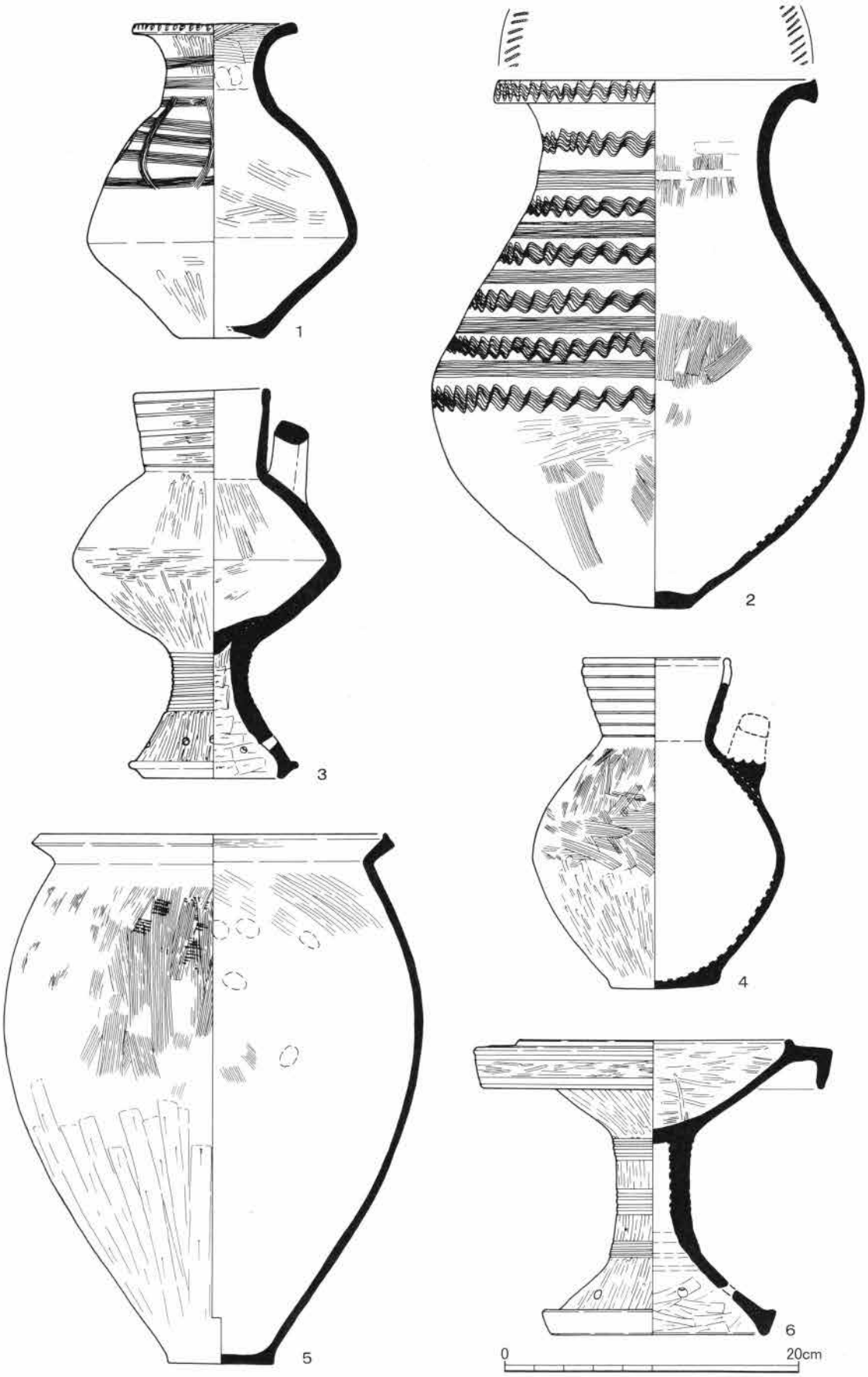
石器は磨製・打製の２種がある。磨製石器では、石剣・石鏃・石包丁・石斧・砥石・石錘等が認められる。打製石器には、石剣・石槍・石鏃・小石刀・スクレイパー等がある。出土石器には加工途中の未製品が多数含まれる。ここでは代表的な石器について一部を図示した。

第36図１～10は打製石鏃である。Ｂ地区ＳＨ690の中央土坑ＳＫ846出土の石鏃10点を図示した。石鏃の形状から大きく茎部が舌状に貼り出すのもの（１～５・８・９）と、凸基無茎のもの（６・７・10）に分けられる。また、鏃身の形状から、木葉形をなすもの（１～７）、柳葉形を成すもの（８～10）に分類できる。木葉形のものは、背面は鏃身部分まで剥離調整を施しているものが多いが、腹面は刃部を作り出すための剥離調整にとどめているものが多く見られる。７は背面・腹面とも主剥離面を多く残しており、未成品であろう。８は刃部が丸みを帯びるが、９は逆にやや内側にえぐれる。また、刃部は中軸線に対して、非対称である。10は背面・腹面とも刃部を作り出すための剥離調整であり、全体的に調整が粗く、製作途中の未成品と思われる。使用している石材はいずれもサヌカイトである。

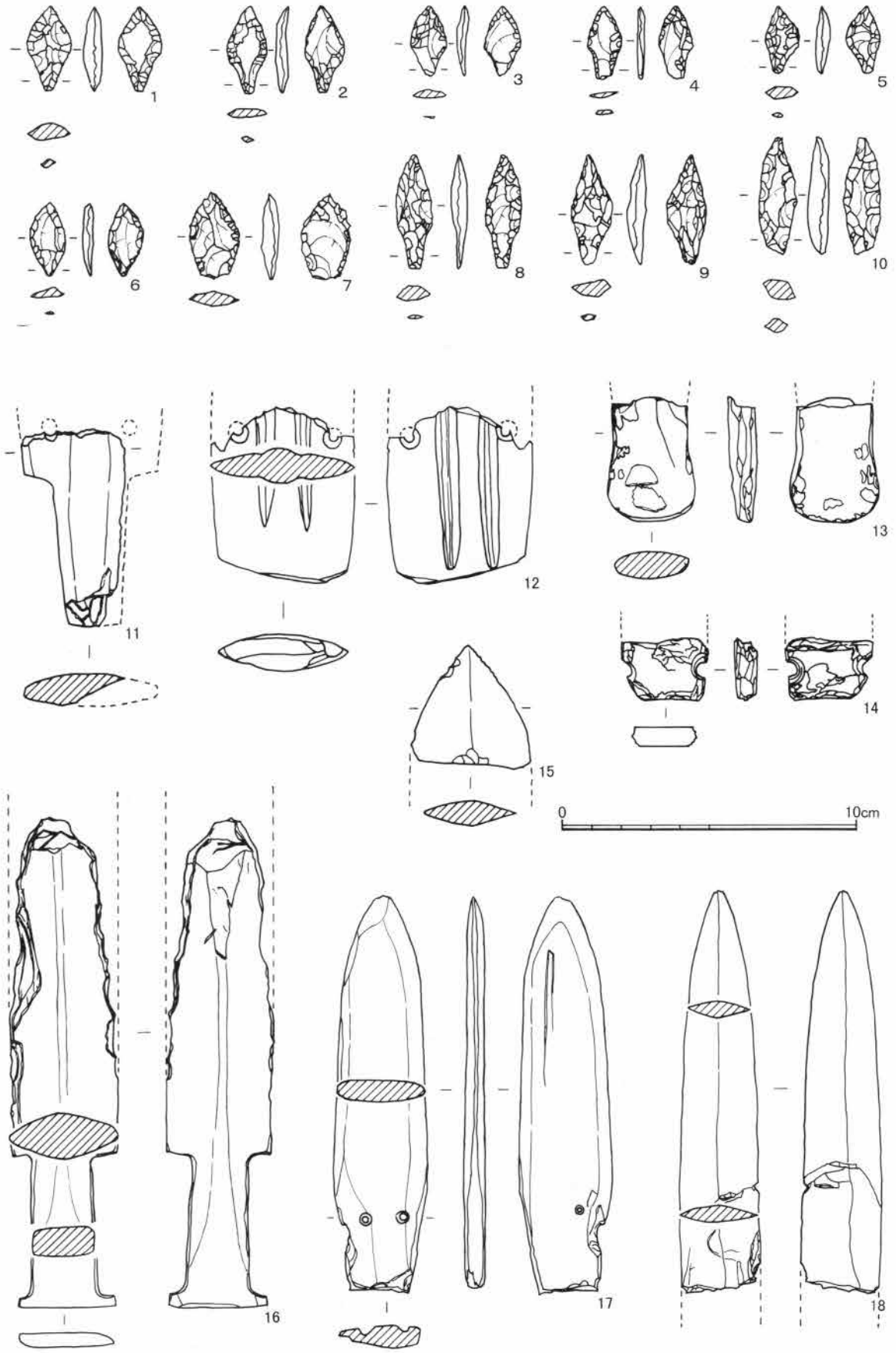
石剣（第36図11～18）には、銅剣形磨製石剣（11・12）と鉄剣形磨製石剣（13～18）の２種がある。12は表裏両面に樋を有する。柄部を欠損しているが、破断面は再調整によって平滑に仕上げられている。15は柄部分を削り出す一体型の石剣である。厚みのある柄部分から柄尻にかけて急激にその厚みは減じる。さらに、柄尻端部は左右に突出させて終わる。竪穴式住居跡（ＳＨ080）埋土中からの出土である。17は未製品である。柄部上端付近に穿孔（未穿孔）が認められることから、鉄剣を模したものと思われる。

第37図19～22は、扁平片刃石斧である。石斧は、この他に太型蛤刃石斧・環状石斧・柱状片刃石斧が出土している。23～30は石包丁で、全て粘板岩製である。刃部が直線的な直刃型が多数を占める中にあって、30のみ弧状に張り出す刃部をもつ。石包丁には今回図示できなかったが、緑泥片岩製の石包丁も数点出土している。

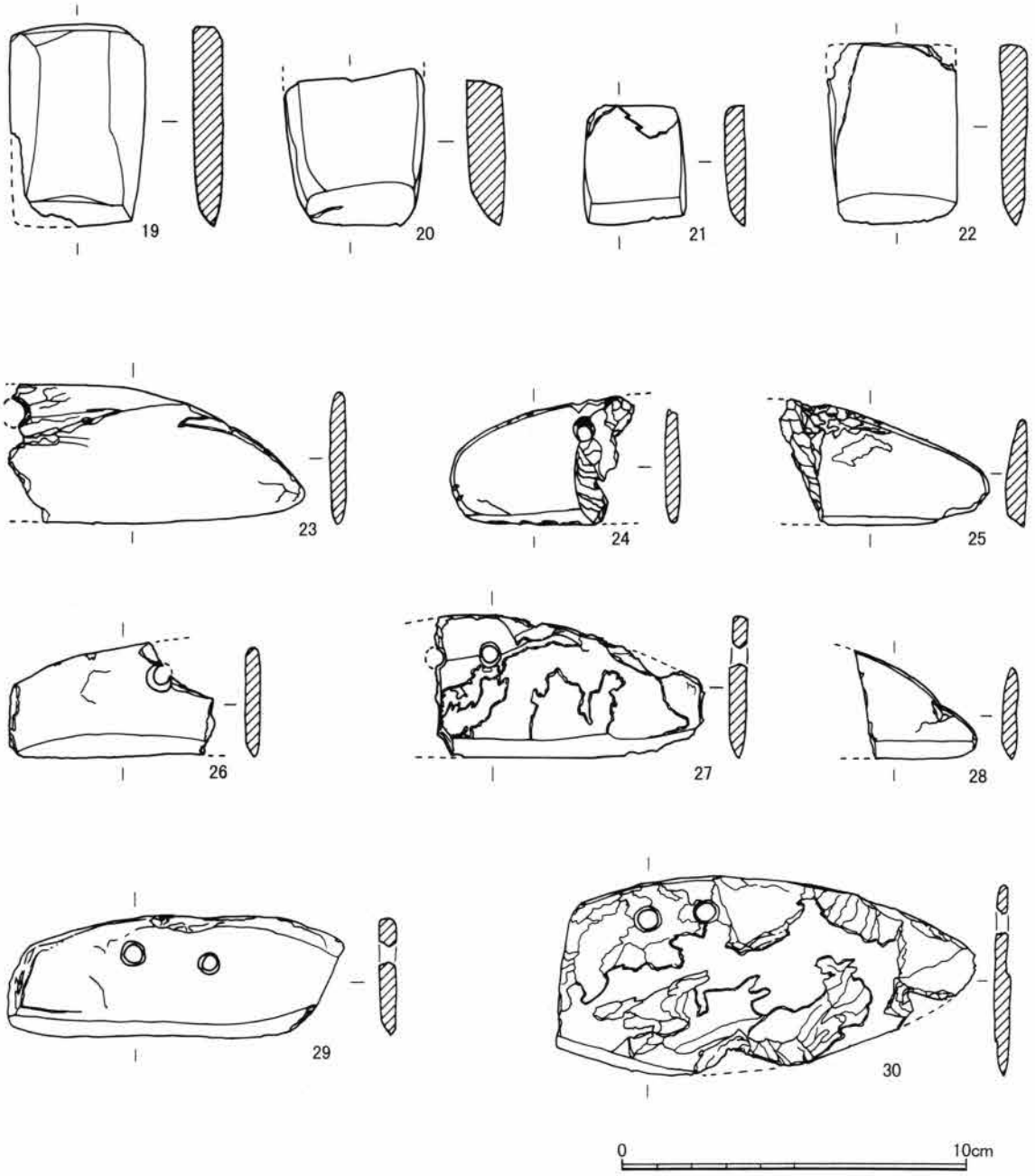
第38図は玉作り関連遺物である。１は、Ｂ地区竪穴式住居跡ＳＨ149から出土した硬玉製勾玉である。長さ1.25cm・厚さ0.27cmを測る。２は、Ａ地区土坑ＳＫ16から出土した硬玉製勾玉で、長さ0.65cm・厚さ0.1cmを測る。１・２とも穿孔方法は、石核となる硬玉から採取した剥片の、



第35図　出土遺物実測図１（弥生土器）

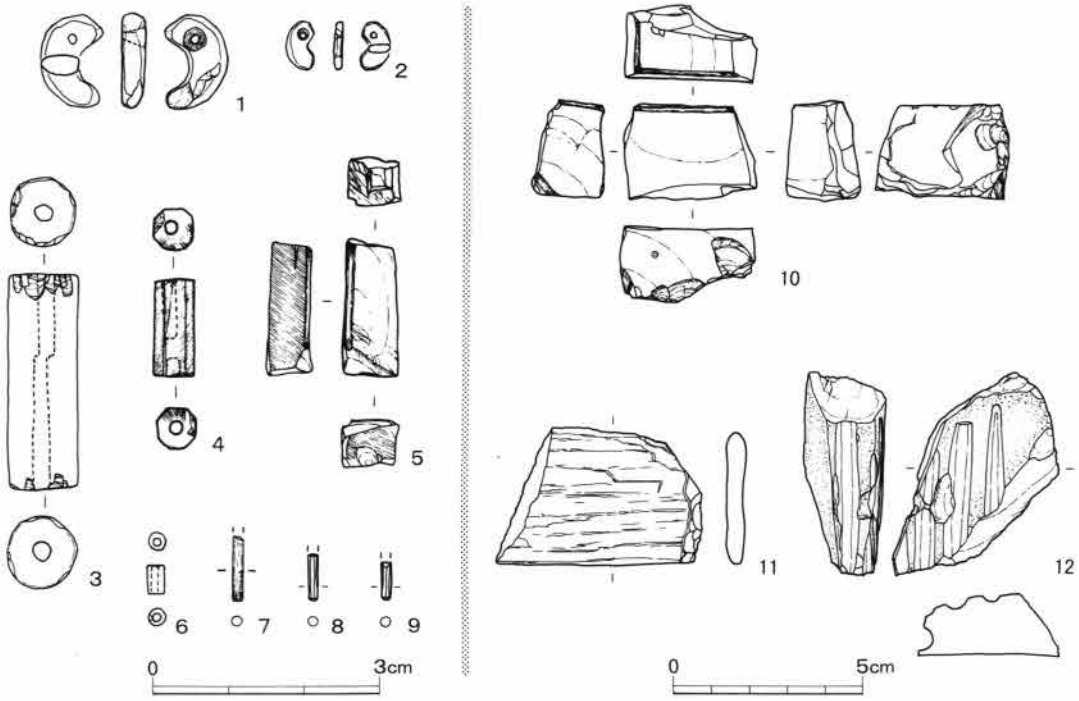


第36図　出土遺物実測図２（石器・石製品）



第37図　出土遺物実測図３（石器・石製品）

ネガティブな面から片面穿孔が行われている。３・６は、碧玉製管玉である。３は、Ｂ地区土坑ＳＫ884から出土した。両面穿孔によるもので、長さ2.85cm・厚さ0.93cmを測る。６は、Ａ地区土坑ＳＫ016から出土した。長さ0.37cm・厚さ0.24cmを測る。４は、Ｂ地区竪穴式住居跡ＳＨ147から出土した碧玉製管玉未製品である。八角柱体をなし、両面穿孔が試みられているが、貫通していない。５は、Ｂ地区包含層中から出土した碧玉製管玉未製品である。四角柱体をなし、施溝分割痕が認められる。７～９は、玉類の穿孔用具と推定される。サヌカイト製の石針である。７は、Ｂ地区竪穴式住居跡ＳＨ147から、８・９は、Ｂ地区竪穴式住居跡ＳＨ152から出土した。いずれも、折損している。７は、断面がほぼ円形をなし、下方先端部に回転研磨痕が認められる。



第38図　出土遺物実測図４（玉作り関係遺物）

８・９は、研磨によって、多角柱状に仕上げられている。10は、Ｂ地区包含層中から出土した。素材石核を、施溝分割により、角柱体状に整えたものである。11は、Ｂ地区包含層から出土した結晶片岩製の石鋸である。下方先端部に、横方向の使用痕が認められる。12は、Ｂ地区竪穴式住居跡ＳＨ735から出土した砂岩製の筋砥石である。２面に、断面「Ｕ」字形の筋状の使用痕が認められる。これまでに判明している剝片や未製品の形状は、素材石核を施溝分割し、角柱体を作り出して、研磨により製品に仕上げるという一連の過程で得られるものがほとんどである。こうした点から、本遺跡の玉作り製作技法はいわゆる大中の湖技法の範疇に含まれると考えられる。

（竹原一彦・岩松　保・柴　暁彦・野々口陽子）

５．ま　と　め

旧巨椋池周辺での発掘調査は、今までほとんど実施されておらず、遺跡の分布状況は全く知られていなかった。今回、はじめて旧巨椋池周辺地で本格的な発掘調査を実施し、市田斉当坊遺跡が、南山城地域で最大規模の弥生集落遺跡が旧巨椋池の南辺に存在したことが判明した。

Ａ地区では、竪穴式住居跡と判断される掘形と焼土遺構が確認されており、これが竪穴式住居跡とすれば、少なくともＡトレンチの中央部からＣトレンチの南端付近にいたるまで、南北約180m以上にわたって居住域が分布することが想定される。この範囲で、竪穴式住居跡が60棟以上、単独で中央炉のみを検出したものを含めると、さらに多くの竪穴式住居跡が分布している。両地区の間にある町道部分をはさんで、南北約50mにわたっては、地震の影響によって遺構がほとんど確認されていないが、ここにも同じ程度の住居跡が分布していたとすると、総数約90棟以上の竪穴式住居跡が分布していたこととなる。

従来の南山城地域の弥生時代集落では、木津町大畠遺跡や精華町畑ノ前遺跡例のように、竪穴式住居跡どうしの切り合いは見られないものが多い。それに対して、市田斉当坊遺跡の竪穴式住居跡は、その多くが多数の切り合いを有しており、住居の密度の高い状況が長期にわたっていたことが推測される。このような状況は、京都府長岡京市神足遺跡や大阪府和泉市池上・曽根遺跡など、地域の拠点集落的な様相を示している。

Ｂ地区は、竪穴式住居跡の密集度から、市田斉当坊弥生集落の居住域のほぼ中心付近を調査しているものと判断される。一方、Ｃ地区は、竪穴式住居跡を検出しているとはいえ、調査地の中央より南では環濠とみられる数条の溝や方形周溝墓が分布しているので、居住域と墓域の境界付近に位置していると思われる。Ａ地区の東辺に設定したトレンチは、竪穴式住居跡が密に分布する様相を示していないため、居住域の周縁に位置しているものと推測される。以上のことから、市田斉当坊弥生集落の居住域は、Ｂ地区付近を中心に、その西側もしくは西北側に広がっていると推測される。Ｃ地区の南側およびＡ地区の北・東側は、墓域が形成されている模様である。

また、緑色凝灰岩片やサヌカイト片などの玉作り・石器製作関連の遺物は、住居跡を中心とする埋土の洗浄の結果、ほとんどの住居跡の埋土から出土することが判明した。このことは、当地における玉作り・石器製作の形態を考える上で重要な要素となろう。

歴史時代においては、現地表の条里型地割りに一致する坪境道と判断される道路の交差点を検出した。Ａ・Ｃ地区の調査地においても、坪境道の交差点が検出されることが予想され、久世郡条里を考察する上での定点となろう。

今回の調査では、地震による大規模な曲隆が認められ、そのため遺構が広範囲にわたって消失しているのを認めた。これには、曲隆のために上位の遺構が消失した場合と液状化のために遺構の埋土が周囲のベースに融解した場合とが想定できる。今後、地震による埋蔵文化財への影響を考える上で、貴重な事例となろう。

（岩松　保）

注１　岩松　保・森下　衛「第二京阪自動車道関係遺跡平成９年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第84冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1998

注２　現地調査および出土遺物整理参加者

調査補助員　小川正志、川嶋聰子、木下　亮、才本佳孝、鴫原佐和、陣内高志、鈴木香織、田中由美、遠山昭登、永田優子、西垣彰博、馬場順平、本多伯舟、松尾郁子、村山和幸、吉村美穂

整理員　東　政江、梅本真理子、大島栄美、奥平廣子、繁田真理、関野雅子、竹内和子、辻井和子、寺尾貴美子、栃木道代、西島真由美、西村　寛、西脇夏海、服部喜代子、福田玲子、山崎美智子、与十田節子、山中道代

このほか、以下の方々から助言を得た。

調査指導者　中澤圭二、足利健亮、都出比呂志、深澤芳樹、伊藤淳司、寒川　旭、木立雅明、森岡秀人、山中　章、國下多美樹、中島信親

注３　森下　衛・上田真一郎「木津川河床遺跡の地震痕跡」『京都府埋蔵文化財情報』第72号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1999

注４　文部省震災予防評議会編『増訂大日本地震資料』第１巻　1941

4．木津地区所在遺跡平成10年度発掘調査概要

はじめに

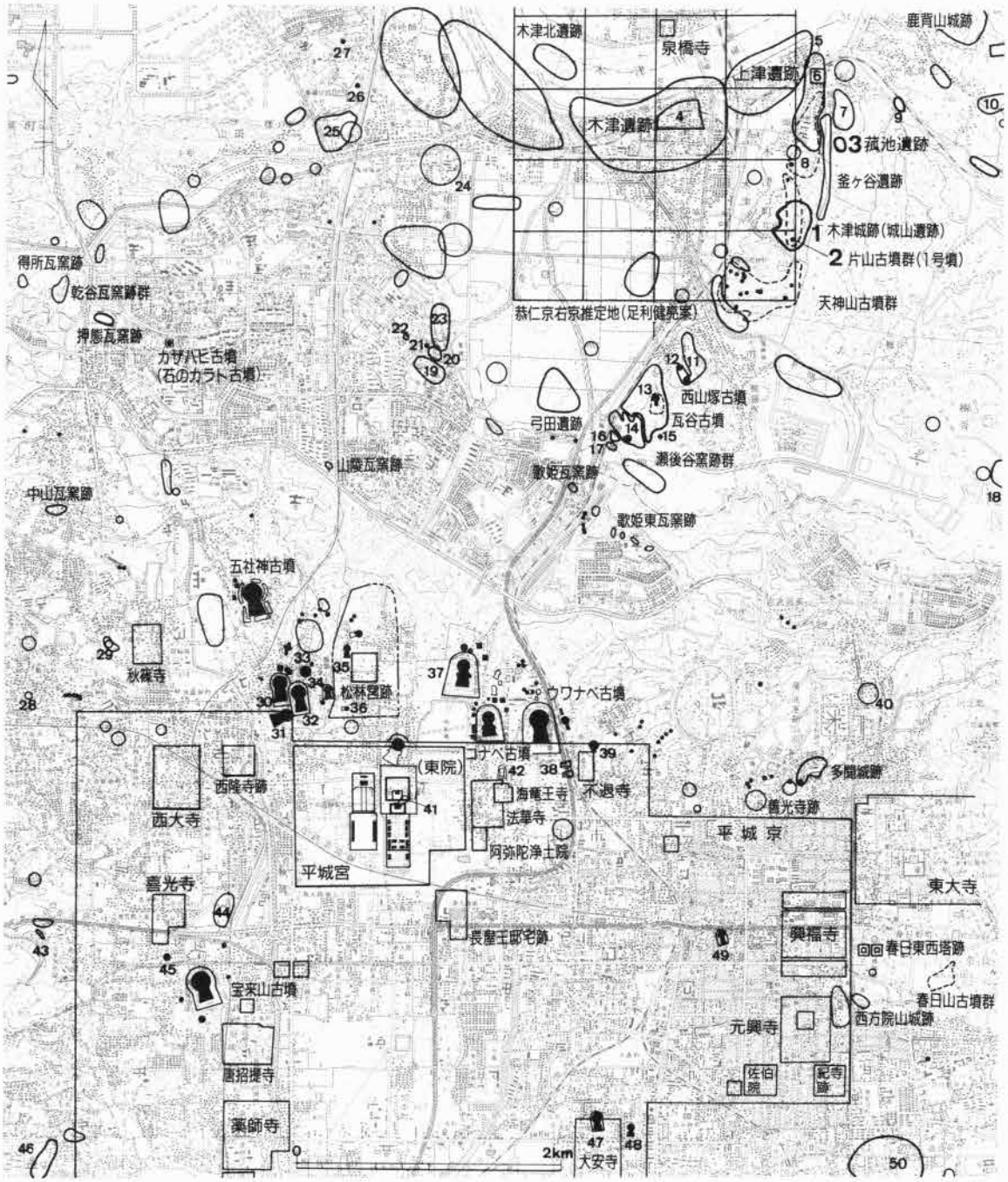
ここに報告する調査は、関西文化学術研究都市の整備事業に伴い、都市基盤整備公団関西支社の依頼を受けて実施したものである。当事業に係る事前の発掘調査は、昭和59年度から継続して行っている。近年は、発掘調査対象地が木津市街の東方の丘陵部(木津中央地区)に移り、昨年度は当地区内の木津城跡(木津城山遺跡)・片山古墳群・天神山古墳群の調査を実施した。

今年度(平成10年度)は、顕著な遺構・遺物を確認し、その立地条件などから典型的な弥生時代の高地性集落および古墳時代終末期の古墳群と評価された木津城山遺跡と、弥生時代の遺物の散布が知られる赤ヶ平遺跡の南側隣接地(菰池遺跡)について、発掘調査を実施した。これらの遺跡は、木津川やその支流の沖積作用によって形成された山城盆地(京都盆地)の南端を馬蹄形に取り囲む鮮新～更新統(大阪層群)からなる洪積丘陵上に立地する。対象地周辺の地形は、西側の平野側の斜面が急峻な丘陵であり、通称「城山」と称するその最高所(標高107m)を中心に木津城山遺跡は立地している。また、当遺跡の東側には南北方向に直線的に延びる断層起源の「釜ヶ谷」と称する谷地形が縦走しており、この谷に面した東側の低い丘陵上に菰池遺跡が立地している。

木津城山遺跡については、緑地として保存される木津城主郭部分の南側に隣接する地区において、配水池の建設が計画されたため、平成９年度は主として主尾根の東側斜面を面的に調査し、弥生時代後期の集落遺構と終末期古墳を検出した(１次調査[注1])。今年度は防災対策の整った主尾根西側斜面を含め、既掘部分の周囲を含めたより広範囲を調査対象とした(２次調査)。調査期間は平成10年４月13日から同年６月29日までと、平成10年11月11日から平成11年２月25日までの２期に分けて実施し、総調査面積は約2,000m²を測る。

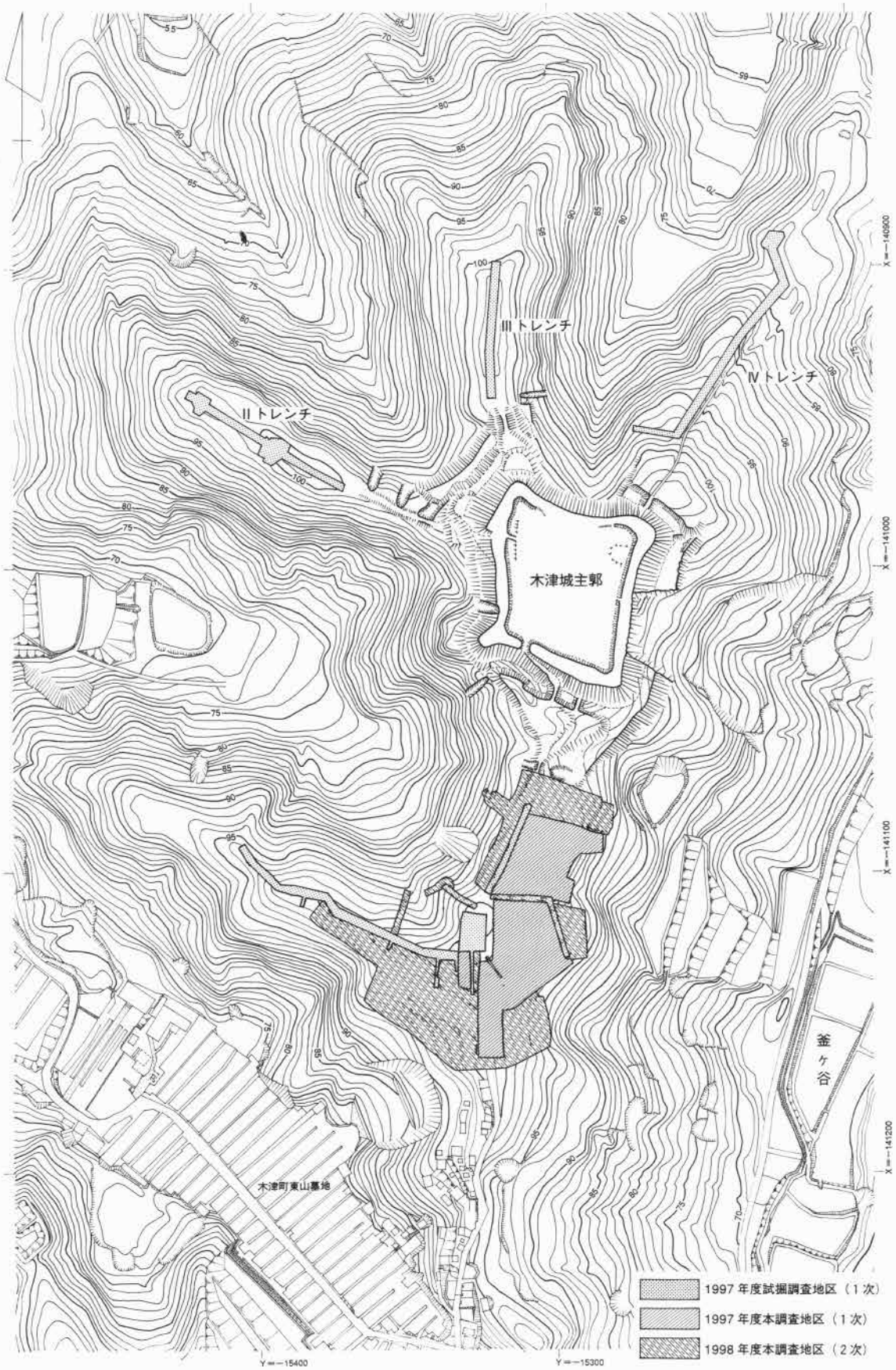
一方、菰池遺跡は、木津城山遺跡の北北東約500mに位置し、木津川に流下する釜ヶ谷川の流域(河口から800m上流)で、南北に延びる尾根状丘陵の先端付近に立地する。この地点は、北側に隣接する周知の遺跡である赤ヶ平遺跡とは小さな谷を挟んで地形的に区別されるが、事前に踏査したところ、丘陵上に一定の広がりをもつ平坦面が確認されたことから、発掘調査の対象となった。幅３mの試掘トレンチを「Y」字形に配した結果、整然と並ぶ掘立柱柱穴跡と奈良時代の土器を含む土坑を検出したため、所在地の字名をとって菰池遺跡と命名し、丘陵上の平坦部のほぼ全域に調査範囲を広げて面的な調査を行った。調査期間は平成10年７月１日から同年10月29日で、調査面積は約1,900m²となる。

これら一連の現地調査については、当調査研究センター調査第２課主幹調査第３係長事務取扱平良泰久・主査調査員古瀬誠三、調査員伊賀高弘・森島康雄が担当した。調査に係る経費は、郡



第39図　調査地位置図および周辺遺跡配置図(1/50,000)

1.木津城山遺跡(木津城跡)　2.片山古墳群　3.菰池遺跡　4.木津平城跡　5.燈籠寺遺跡
6.燈籠寺廃寺　7.赤ヶ平遺跡　8.内田山古墳群　9.鹿背山瓦窯跡　10.巾ヶ谷遺跡　11.西山遺跡
12.西山古墓　13.瓦谷古墳群　14.上人ヶ平遺跡　15.幣羅坂古墳　16.市坂瓦窯跡
17.五領池東瓦窯跡　18.梅谷瓦窯跡　19.歌姫西瓦窯跡　20.音如ヶ谷瓦窯跡
21.音乗谷古墳　22.相楽山銅鐸出土地　23.大畠遺跡　24.相楽遺跡　25.樋ノ口遺跡
26.白山古墳　27.坊谷古墳　28.新堂寺古墳　29.秋篠銅鐸出土地　30.佐紀石塚山古墳
31.佐紀高塚古墳　32.佐紀陵山古墳　33.マエ塚古墳　34.瓢箪山古墳　35.塩塚古墳
36.猫塚古墳　37.ヒシアゲ古墳　38.平塚古墳群　39.不退寺裏山古墳　40.般若寺
41.神明野古墳　42.木取山古墳　43.宝来横穴古墳群　44.菅原東遺跡　45.兵庫山古墳
46.六条山遺跡　47.杉山古墳(瓦窯跡)　48.墓山古墳　49.念仏寺山古墳　50.南紀寺遺跡



第40図　木津城山遺跡　トレンチ配置図(1/2,000)

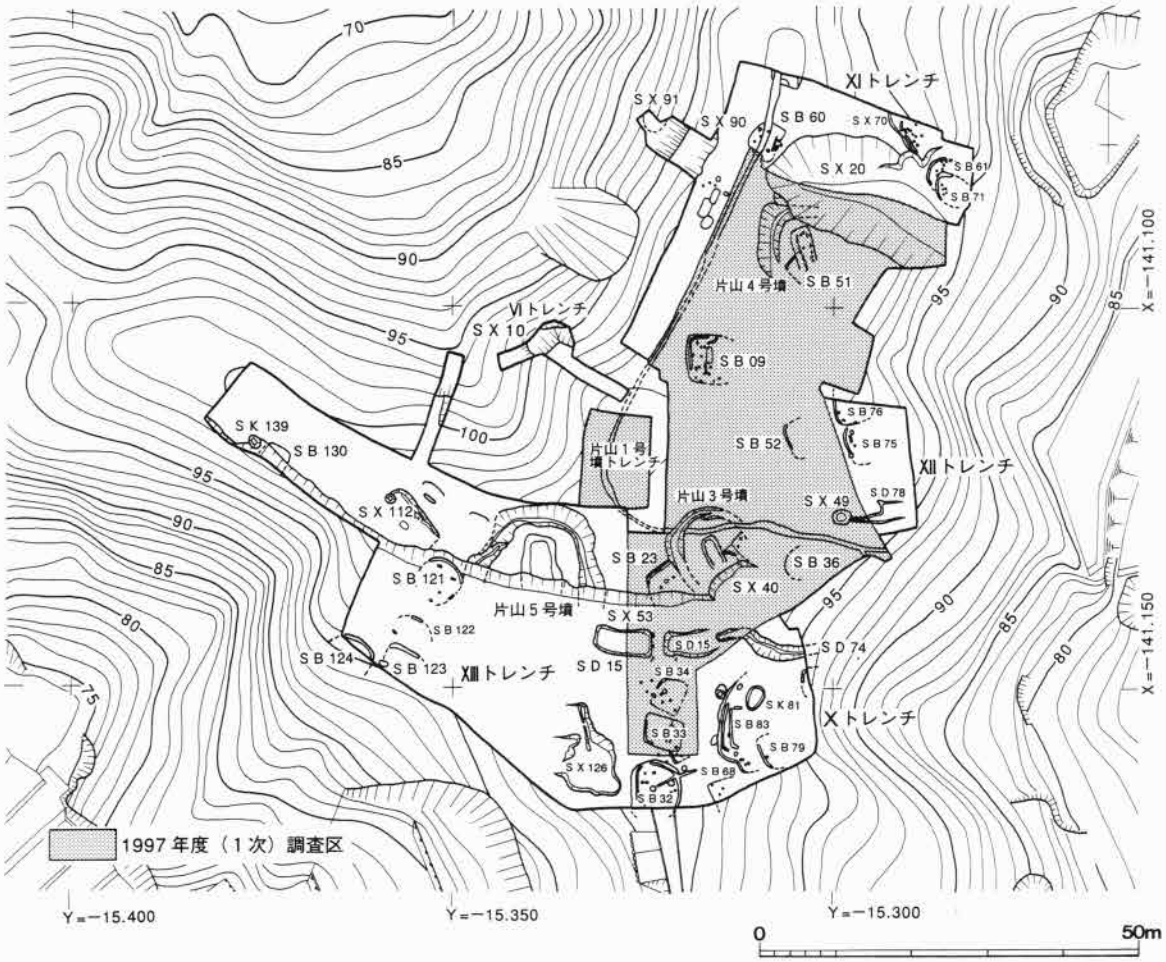
市基盤整備公団関西支社が負担した。本概要の執筆は、木津城山遺跡の「出土遺物」の項目を奈良大学学生萩谷良太が、それ以外を伊賀が行った。なお、京都府教育委員会・木津町教育委員会・京都府立山城郷土資料館・木津の緑と文化財を守る会などの関係諸機関からご教示、ご協力いただいた。また、遺構・遺物の解釈・分析にあたっては、川上　貢・藤井　学・都出比呂志各理事のご教示をいただいた。さらに、調査および報告書の作成にあたっては、多くの作業員・調査補助員・整理員の協力をいただいた。(注2) 末尾ではあるが、感謝の意を表したい。

(1) 木 津 城 山 遺 跡

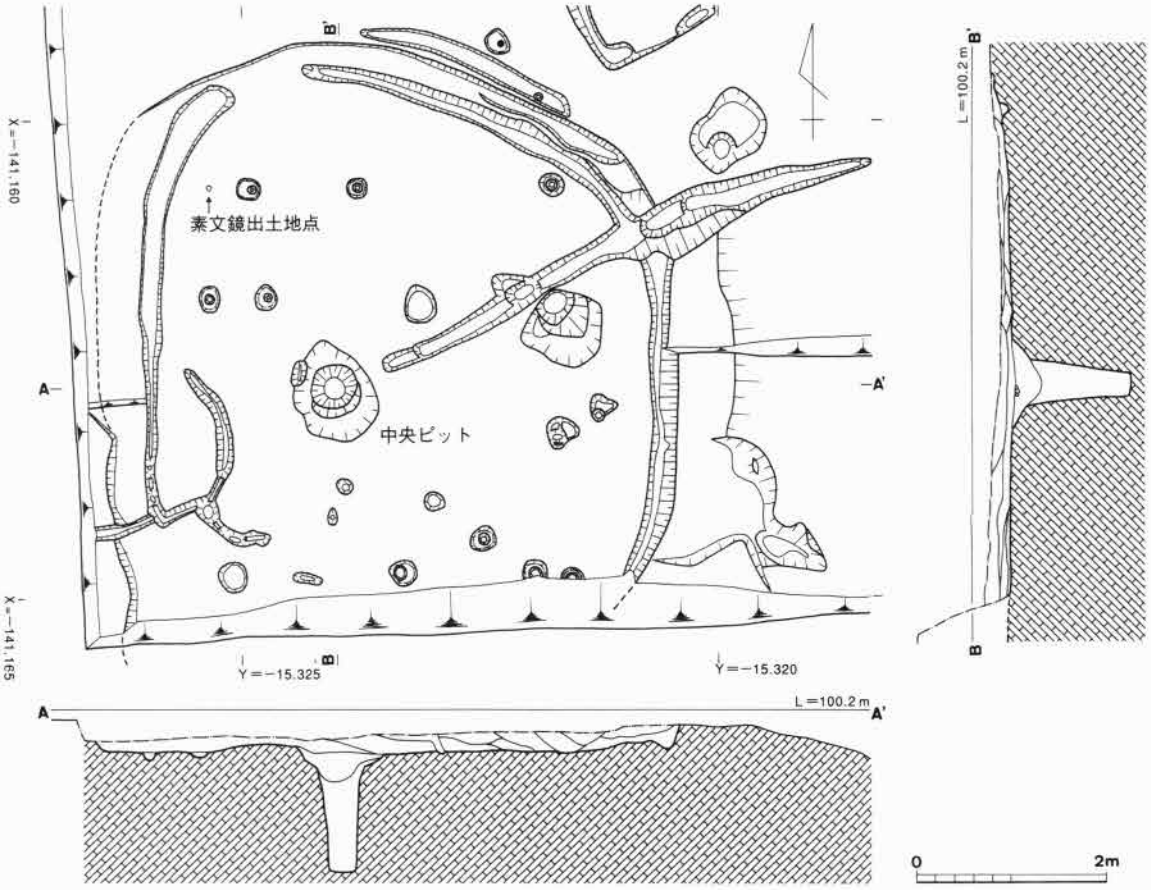
1．検 出 遺 構

①Xトレンチ

ＳＢ32(第42図)　調査区南端で検出した竪穴式住居跡である。北半部は昨年度調査区に入り、すでに確認していたが、今回その南半部を調査した。周壁の残存度は概して悪く、北西側は削平を受けて消失している。住居の平面形(周壁の描くライン)は、円形を指向しつつも正方位に平行する辺がいくぶん直線的な隅丸方形とみるべきであろう。住居の規模は、南辺が調査区外に出る



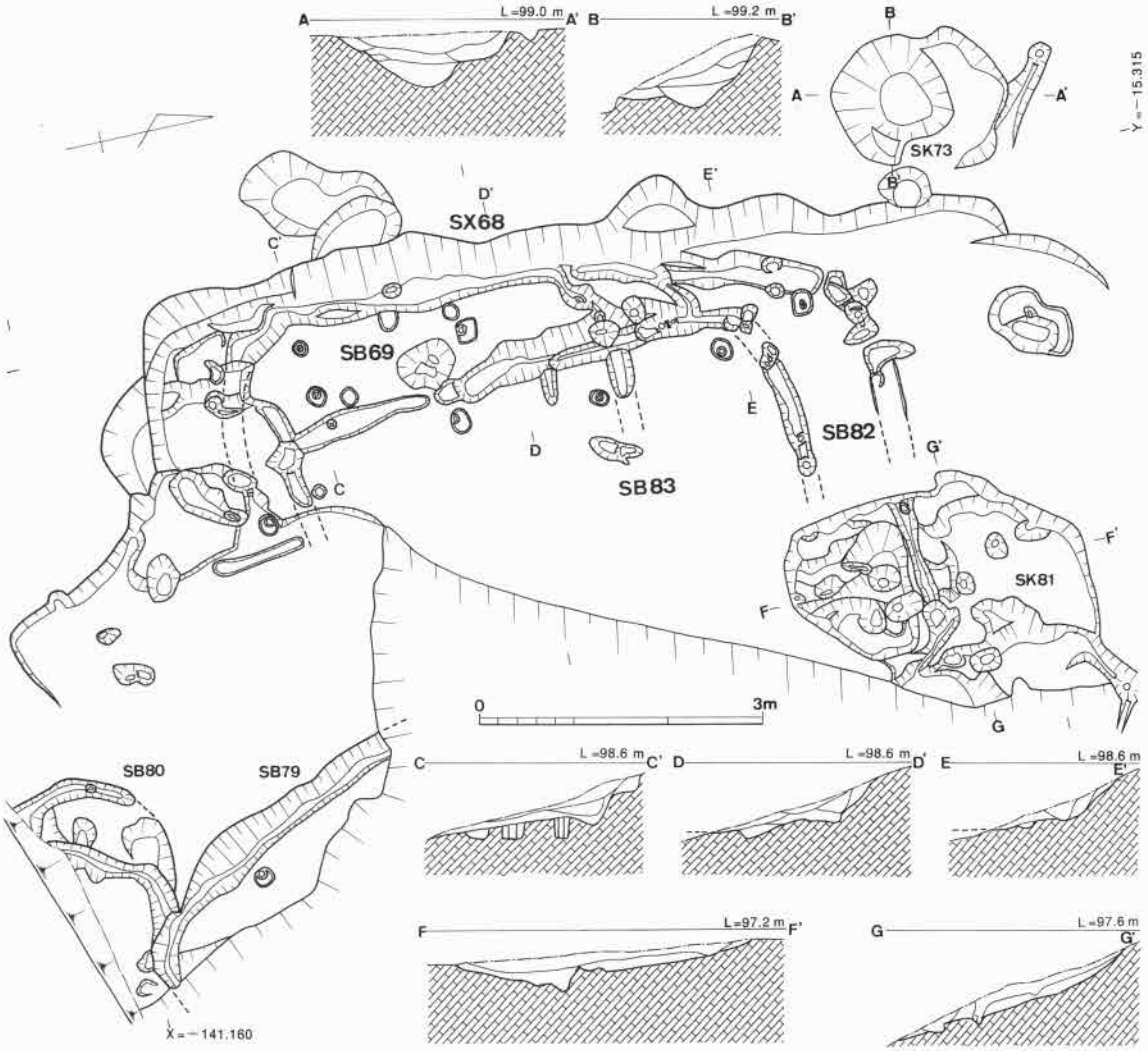
第41図　木津城山遺跡　遺構配置図(1/1,000)



第42図　木津城山遺跡　ＳＢ32実測図(1/80)

ため全容を知り得ないが、少なくとも東西長は6.1mを測る。周壁溝は、東壁部分では壁体部に内接しているが、他の２辺は壁体部より中心寄りにめぐる。主柱穴は、径20～30cmの円形掘形をもち、一見その配列に規則性はなさそうだが、注意深く観察すると近接する２個一対の柱穴群を抽出可能で、同一円周上に不等間隔で４柱以上の柱穴が配されているパターンが２重に重なっている様子が看取される(主柱穴配列求心構造(注3))。住居のほぼ中央には中央ピットがあり、そこから東北東方向に１条の直線的な溝が住居外に延びている。中央ピットは断面が傾斜を違えて２段構造を呈し、上段部分には拳大の自然石と少量の炭が埋土に混入していた。下段部分の側壁はほぼ垂直に近く掘り込まれており、底部は平坦な円筒形を呈する(床面からの深さ1.2m)。その機能として、灰穴炉(注4)、柱穴、貯水土坑などの可能性が指摘できる。

ＳＸ68・69・82・ＳＢ83(第43図)　ＳＢ32の東側の斜面で検出された段状遺構(ＳＸ68)と、その内部に営まれた住居の痕跡である。段状遺構の壁体が示すラインは、等高線と平行しており、南北方向に直線的に走る(壁長約10m)。段状遺構によってその内部に確保された造成面の幅は、現状では３m前後と狭く、地形の低い側はすでに流失している。住居跡は、造成面のやや南に偏して重複しあった３基分の住居の周壁溝を確認している。その重複関係から、ＳＢ69→ＳＢ82→ＳＢ83の構築順が確認できる。それぞれの住居の規模(南北方向の規模)は、対向する周壁溝間の

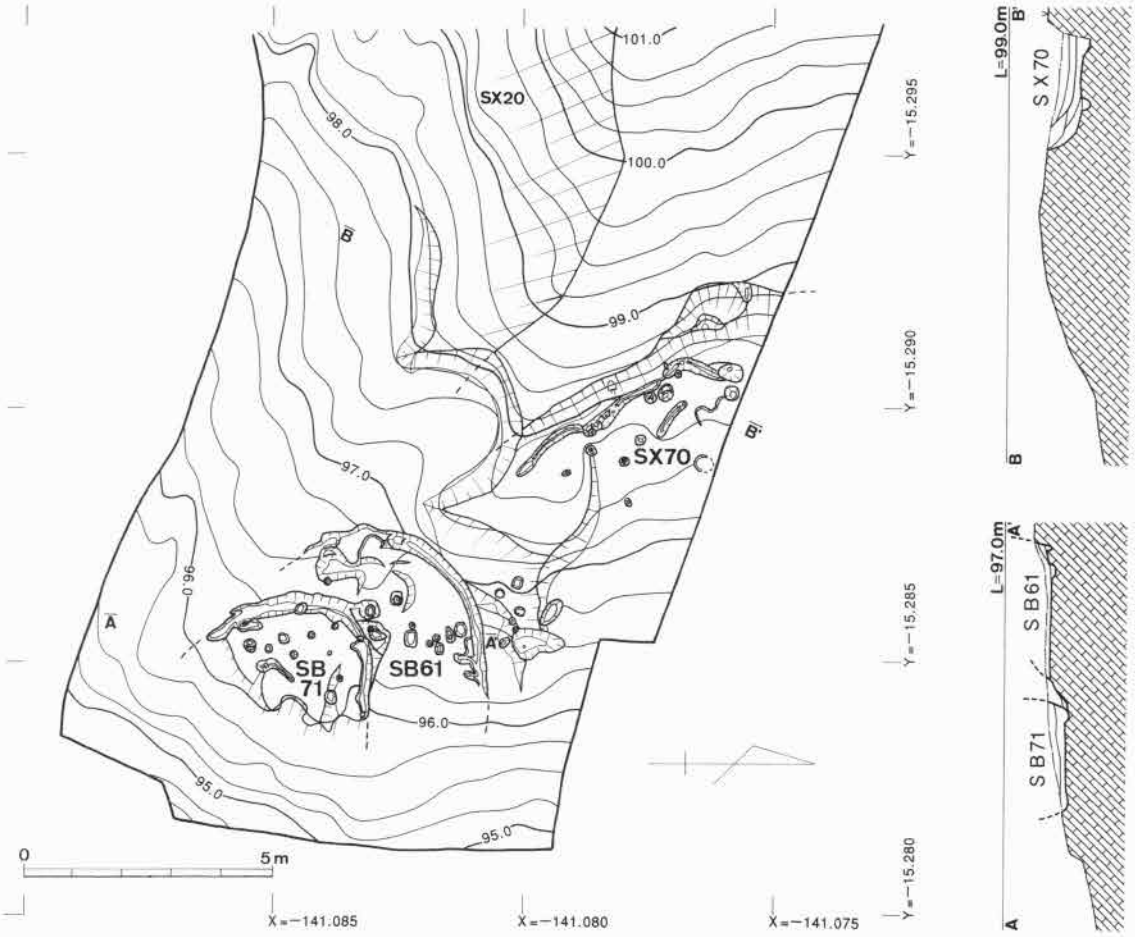


第43図　木津城山遺跡ＳＸ68、ＳＢ69・79・80・82・83、ＳＫ73・81実測図(1/80)

距離を計測すると、ＳＢ69が4.4m、ＳＢ82が5.5mを測る。床面には、径20～25cmの掘形をもつ柱穴が壁溝に沿うように穿たれている。各周壁溝中から土器資料がややまとまって出土しているが、その様相に目立った差はなく、おおむね弥生時代後期前葉の範囲におさまるものである。

ＳＢ79・80(第43図)　ＳＸ68の南側で検出したテラス状住居跡(注5)である。いずれも斜面の低い側が削平を受け、水平面をなす床面はわずかに残されているにすぎない。壁体が示す平面形は、検出部分が少ないものの、隅丸方形を示すとみられる。周壁溝はＳＢ68では確認できなかったが、それ以外の住居では壁体部に沿ってめぐっている。床面で検出された柱穴は、いずれも壁体に近接しており補助支柱とみられる。

ＳＤ74　Ｘトレンチの北端部で検出した溝である。調査区内では等高線と直交する方向に開削されており、その軸線はわずかに中心を北側におく円弧を描く。溝の断面は「Ｖ」字形で東にいくほど検出面からの深さは増す。この溝の西側延長には１次調査で確認した集落内区画溝ＳＤ15があり(第41図参照)、その東延長部の可能性がある。出土遺物は弥生土器に限られるが、ＳＤ15に比べてその量は極めて少ない。



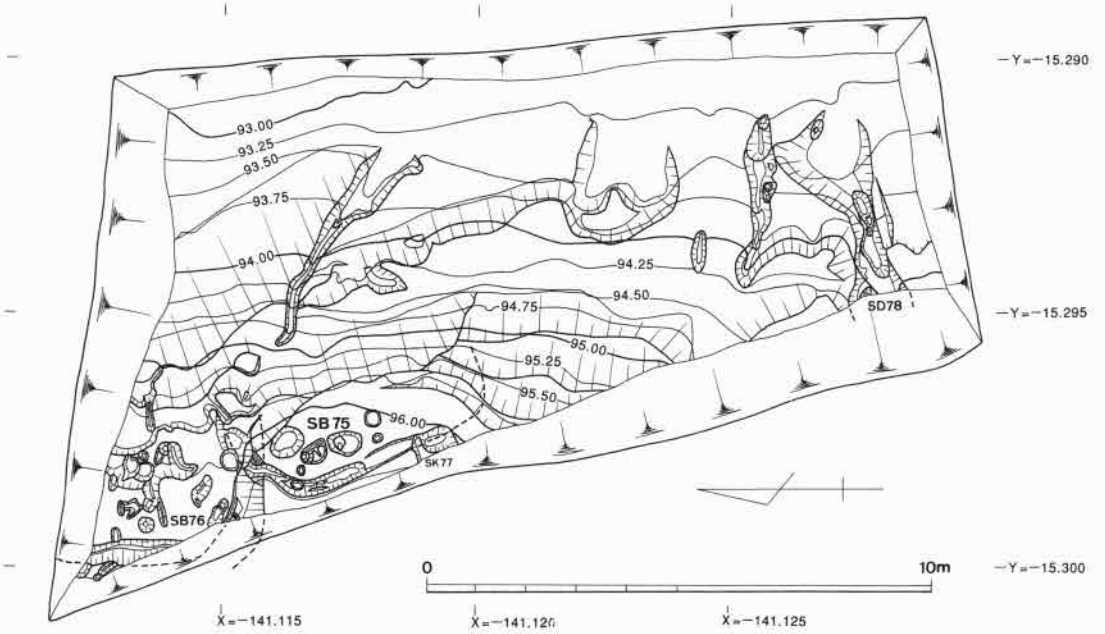
第44図　木津城山遺跡　ＳＢ61・71、ＳＸ70実測図(1/150)

②ＸＩトレンチ

ＳＢ60　木津城主郭へと延びる主尾根の頂部で検出された竪穴式住居跡である。遺存状態は悪く、壁体や周壁溝が部分的に残るにすぎない。住居の中央に近世以降の地境溝が南北方向に深く掘り込まれている。断片的に残る周壁溝から、住居の平面形はやや南北方向に長いいびつな隅丸方形とみられる(南北主軸長5.5m・東西主軸長3.7m)。床面には大小の柱穴や小溝が不規則にみられ、その中から主柱穴を見いだすことは困難である。

ＳＢ61・71(第44図)　ＳＢ60の東方で、標高差にして約７m下りた地点で検出されたテラス状住居跡である。両者は東西方向に並んで重複しており、下位のＳＢ71がより新しい。住居の平面形は、斜面の低い側が流失して全容をうかがい知ることはできないが、遺存する壁体が示すラインから、ＳＢ61は円形、ＳＢ71は隅丸方形とみられる。周壁溝は、壁体部に沿ってめぐっており、床面には大小の柱穴が複数認められる。周壁溝部を中心に、弥生土器がややまとまって出土している。

ＳＸ70(第44図)　ＳＢ61の北西に位置し、高い側の地山を切り出した段状遺構である。壁体の示すラインは等高線とほぼ平行している。造成された平坦部は現状では幅が狭く、壁体下に沿って住居の周壁溝とみられる小溝が掘削されている。また、床面で若干の柱穴を検出したが、いずれも規模が小さく住居の支柱であろう。



第45図　木津城山遺跡　XII トレンチ実測図(1/150)

ＳＸ20　城山の南方に延びる主尾根の東側斜面を大きく開析する東西主軸の谷状地形である。南側斜面は１次調査ですでに確認しており、今回その対面の北側斜面を検出した。検出範囲の中央部での幅は15m前後で、横断面は下底幅の狭い逆台形を示す。斜面上縁の切り込みが鋭く、直線的で、自然の開析とは考えにくい。終末期古墳である片山４号墳を切っており、より新しいが、時期を示す遺物は出土していない。

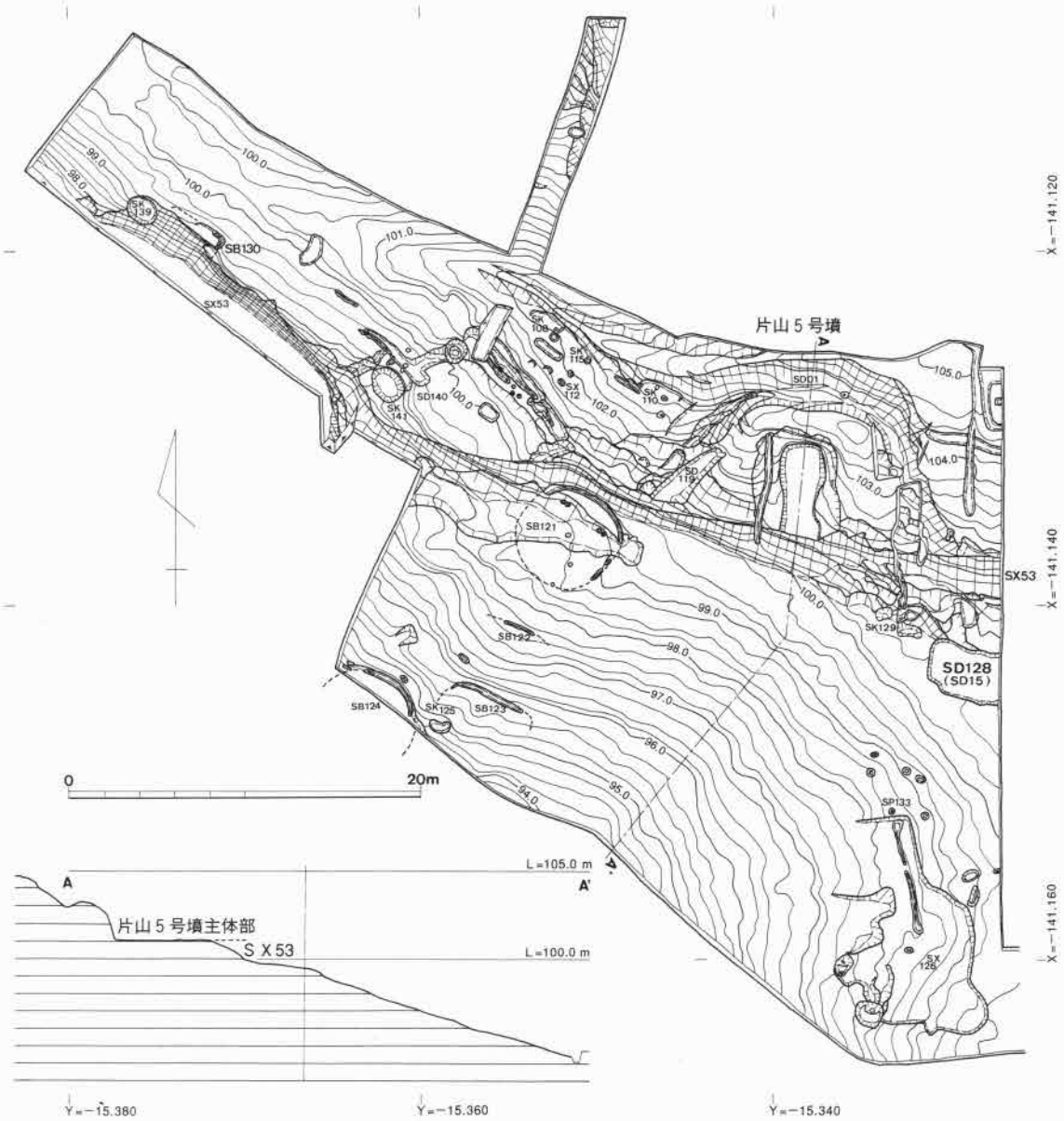
ＳＸ90　主尾根の西側斜面側で検出した崖状遺構である。勾配は現在の地表の傾斜よりも急な角度で降下し、約45°を測る。ただ、この傾斜は調査区の西端でゆるくなっている。深いところで1.5mを越える堆積層が認められたが、遺物は出土していない。なお、ＳＸ90の堆積土上面(現在の表土直下)に、焼土が厚く堆積する領域がある(ＳＸ91)。中世に帰属する遺構であろうか。

③ＸＩＩトレンチ

ＳＢ75(第45図)　ＸＩＩトレンチはその北西部が高く、南東部に向かって傾斜しているが、その標高の高い地点で検出したテラス状住居跡である。直接地山を掘り込んだ地形の高い側だけに痕跡を残し、地形の低い側は床面を含めてすでに流失している。壁体が示すラインは直線的で、住居の平面形は隅丸方形とみられる。壁体に接して周壁溝が掘削されているが、遺存するのは北西隅付近のみである。住居埋土から弥生土器がややまとまって出土した。

ＳＢ76(第45図)　ＳＢ75の北に接して営まれたテラス状住居跡である。その西辺と南辺の一部を確認した。ＳＢ75よりも一段深く地山を掘り込んでおり、標高の高い側(西側)の壁高も0.5m近く残っている。壁体が直角に曲折することから、住居の平面形は隅丸方形とみられる。周壁溝は西辺のみ確認した。床面には不整形の浅い土坑がみられるのみで、主柱穴は確認できなかった。ＳＢ75と一部重複しており、より新しい。

ＳＤ78(第45図)　１次調査で浄水施設の可能性を指摘した礫充填土坑ＳＸ49から東方に延びる溝の延長部である(第41図参照)。今回の調査区内では溝幅を大きく広げ、横断面が浅い「Ｕ」字



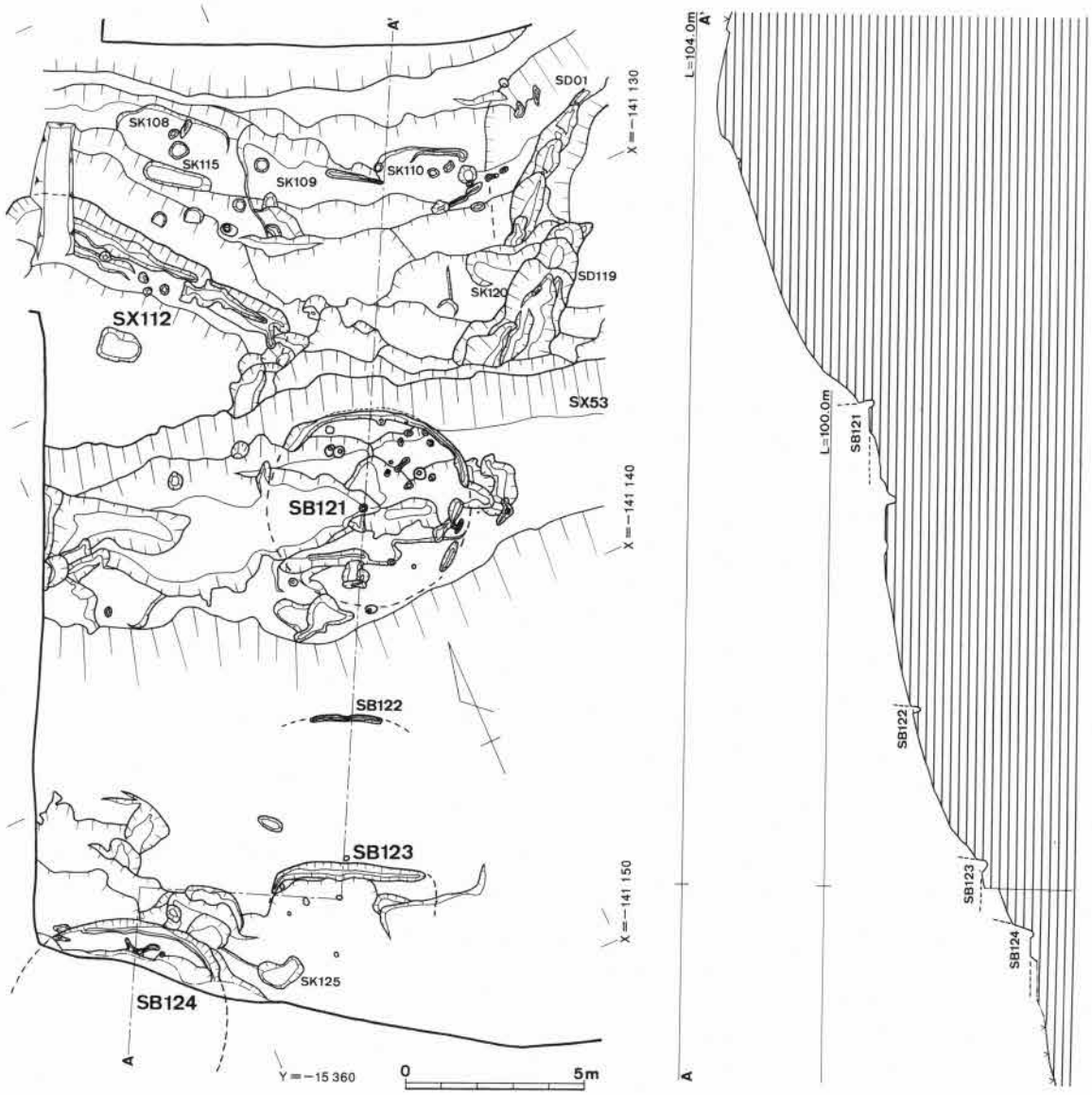
第46図　木津城山遺跡　ＸⅢトレンチ実測図(1/400)

形のものへと変化している。出土遺物は１次調査と同様全くなかった。

④XIIIトレンチ

ＳＢ121(第47図)　ＸⅢトレンチ調査区のほぼ中央で検出したテラス状住居跡である。後出する崖状遺構ＳＸ53に切られて遺存状態は良くないが、北側半部の壁体が残っている。周壁溝は壁体に沿ってめぐっているようで、そのラインから住居の平面形は円形(直径約5.5m)とみられる。床面は、西方から延びてくる浅い溝状遺構が住居内に貫入するため、フラットではないが、２個一対の主柱穴が２か所で確認でき、その配列状況から元来は４主柱であった可能性がある。また、住居のほぼ中心に径約25cmの小規模な中央ピットがあり、炭が混入する土が堆積していた。

ＳＢ122(第47図)　ＳＢ121の南にやや下った地点で検出されたテラス状住居跡の残骸である。高位側の周壁溝が長さ2.0mにわたって確認されたのみで、それ以外の柱穴等は傾斜面のため残



第47図　木津城山遺跡　XⅢトレンチ中央区遺構実測図(1/200)

っていなかった。周壁溝の描く平面形から、円形住居であった可能性がある。

ＳＢ123(第47図)　ＳＢ121の南方7.0mで検出された等高線と平行する方向に掘られた素掘り溝で、テラス状住居の周壁溝の可能性がある。その場合、周壁溝が描くラインが直線的であることから隅丸方形プランの平面形態を想定できる。

ＳＢ124(第47図)　ＳＢ123の西側でさらに下った地点に営まれたテラス状住居跡である。大半が調査区外に外れるが、この部分はすでに削平を受けているものとみられる。周壁溝は壁体に沿って床面周縁部に掘られている。壁体の描くラインが円弧を呈することから、径６ｍ前後の円形住居と考えられる。

ＳＸ112(第47図)　ＳＢ121の北西側のより上位に位置する段状遺構である。壁体の示すラインは等高線と平行して直線状を呈する(壁長8.7m)。壁体の内側に造り出された平坦面は後世の削平にともない幅1.0m弱と遺存状態は悪いが、側壁に沿って２条の溝(住居の周壁溝か？)や小柱

穴が存在する。

ＳＫ108・ＳＫ109・ＳＫ110(第47図)　ＳＸ112のさらに上位で尾根の稜線にほど近い地点に東西に並ぶ地山削り込み地形である。削り出された側壁が示すラインは直線的で規模こそ小さいもののテラス状住居の壁体の一部の可能性がある。

ＳＤ140・ＳＫ141(第46図)　ＳＤ140は、ＳＸ112の西に位置する北西から南東に等高線に沿って直線的に延びる溝である(検出長5.0m)。西半部は溝幅を減じた２条の溝に分岐して併走する。内部から弥生土器がややまとまって出土しており、この時期の同一地点での建て替えを伴う住居の周壁溝の可能性がある。ＳＫ141は、ＳＤ140の南に隣接する楕円形プランの土坑である。長軸(長さ2.2m)の示す方位がＳＤ140の主軸と一致し、関連性が指摘できる。

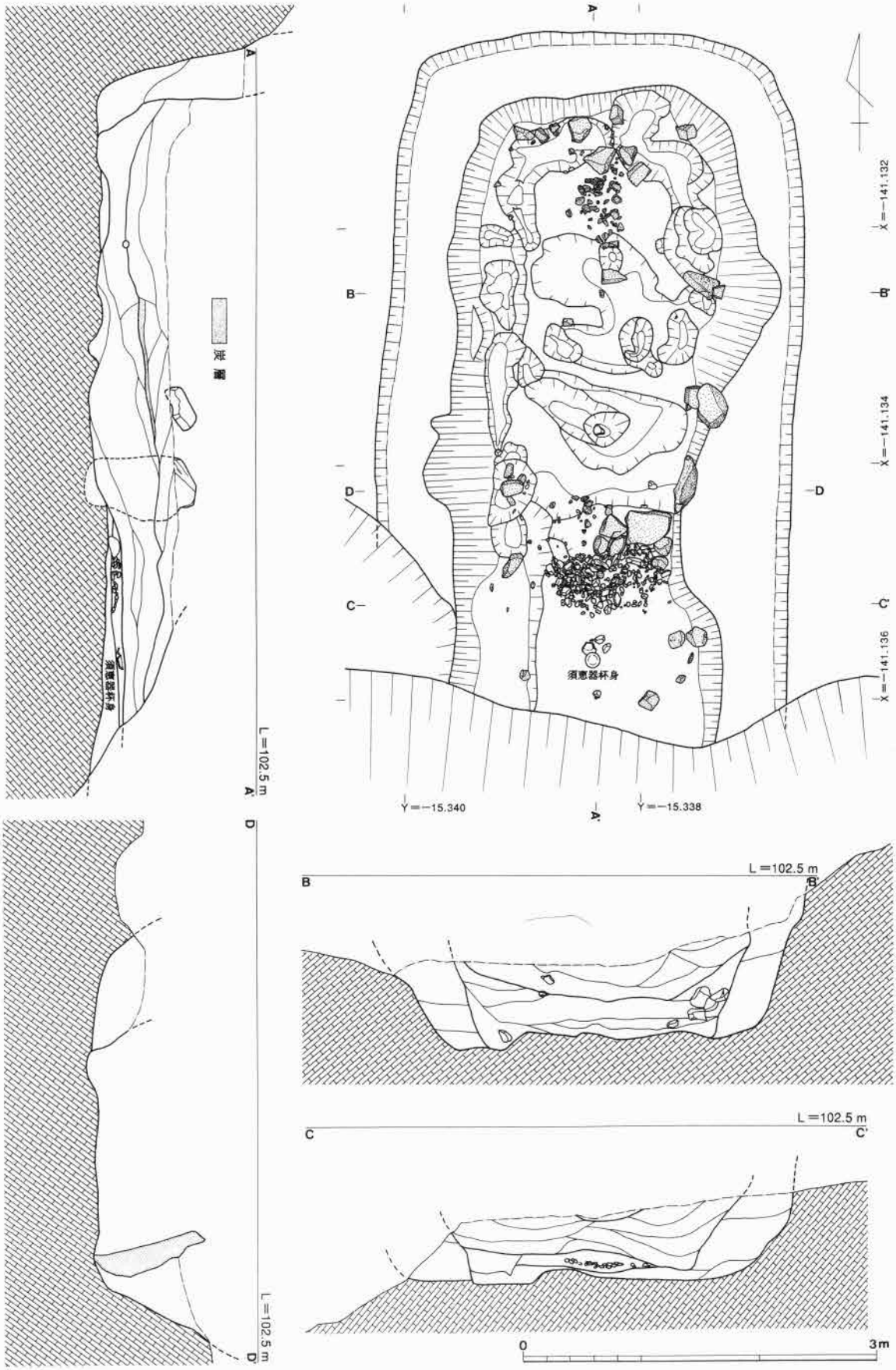
ＳＢ130(第46図)　ＳＤ140の北西9.0mに位置する傾斜地に営まれた小規模なテラス状地形である。南西側は後出する崖状遺構(ＳＸ53)に切られて残らないが、斜面の下位側に開く「コ」字形のプランを呈する。切り込まれた壁体下の一部に周壁溝とみられる小溝があることから、テラス状住居の残骸とみられる。

ＳＫ139(第46図)　調査区の西端で検出された平面が円形を呈する土坑(直径約1.8m)である。ＳＸ53の崖面と重なり、より古い。断面形は垂直に近い側壁から平坦な底部に至る円筒形を呈し(最大深さ2.0m)、内部から弥生土器の小片が少量出土した。雨水を蓄える貯水施設であろうか。

ＳＤ128(第46図)　調査区の東端中央で検出した東西主軸の浅い溝である。１次調査で確認していた集落内を区画する壕と解釈したＳＤ15の西延長部に相当する。現状での遺存状態は、北側に後出するＳＸ53の大規模な切り込み造成があるために悪く、深さは0.1～0.3mと浅い。西側は調査区東壁から4.0mの地点で途切れる。先述したＳＤ74も一連の溝と考えると、陸橋部を含めて長さ28.0mにわたって検出したことになる。溝底から弥生土器がややまとまって出土する状況は１次調査区のＳＤ15と同様である。

ＳＸ126(第46図)　ＳＤ128の南方の西側に降る斜面地で検出した平面形が不整形の段状遺構である。遺構が位置する周囲の地山は浸食されやすい土壌のため、比較的早い時期に壁体が崩れてその上縁ラインが変形したものと考えられる。住居の周壁溝かとみられる、幅が狭く直線的な溝が北寄りに１条認められる以外は、ゆるく傾斜する造成面から柱穴等の住居に関連する遺構は検出されていない。ただ、堆積土下の層から弥生土器が多く出土しており、自然の地滑り等の崩落地形とは考えにくい。ここでは段状遺構が崩れて変形してしまったと理解しておきたい。

片山５号墳(第48図)　１次調査では弥生時代の環壕と理解していたＳＤ01が、より広範囲な調査によって古墳の背後を外部から画す周溝であることが判明した。また周溝で囲まれた内部からは調査前から現況地形に窪地が認められ、調査の結果、主体部の痕跡であることが判った。このため、当遺構を古墳と認め、片山５号墳と命名することにした。周溝は主体部の背後を中心にめぐらされているが、主体部の東西両側に至ると不明瞭となり、さらに南半部はＳＸ53に切られている。周溝の平面形は半円弧を志向しているようだが、北東側がやや角をもって屈折していることから、各辺がやや丸味をもった方形を示すとみられる(方墳、一辺約15m)。内部施設は横穴式



第48図　木津城山遺跡　片山５号墳主体部実測図(1/50)

石室であるが、後世に大規模な破壊を受けて、石室を構築する石材もほとんど残っていない。すなわち、元来玄室内床面には、川原石の小礫と花崗岩の板石が敷かれ敷石面を構成していたようだが、調査時に遺存していたのは玄門付近と考えるわずかな部分で、玄室内の大半はこの敷石面より深く掘り込まれて、その底面は起伏が激しく旧状を失う。わずかに側石の１石のみが東側壁に残るが、それは長軸95cm・短軸55cm・厚さ25cmの斑状花崗岩を横口縦積みして基底石としたものである。石室の入り口寄りの部分は玄室内敷石面とほぼ同一レベルを保つものの、そこに敷石はなく羨道部として床構造を区別していた可能性がある[注6]。この部分からは、床面に接して須恵器杯身が２個体正立した状態で出土している(第50図50・51)。石室の形式は、石材抜き取り穴等を参照すると無袖式の可能性が高い(石室残存長約５ｍ・玄室長約3.7ｍ・玄室幅約1.35ｍ)。

ＳＸ53　調査区の中央寄りを東西方向に直線状に走る崖状遺構である。東延長部は１次調査区に及び、総検出長は74ｍを測る。東西に延びる支脈尾根の稜線よりやや南に下った位置に等高線とほぼ平行する方向に地山斜面を急角度で切り込んでいる(比高差約１～２ｍ)。弥生時代の諸遺構や片山５号墳を切っており、より新しいが、時期を決める出土遺物がなくその手がかかりがない。ＳＸ20と同様、中世木津城の何らかの防御を目的とした遺構の可能性もある。

(伊賀高弘)

２．出　土　遺　物

(1)弥生土器(第49・50図)

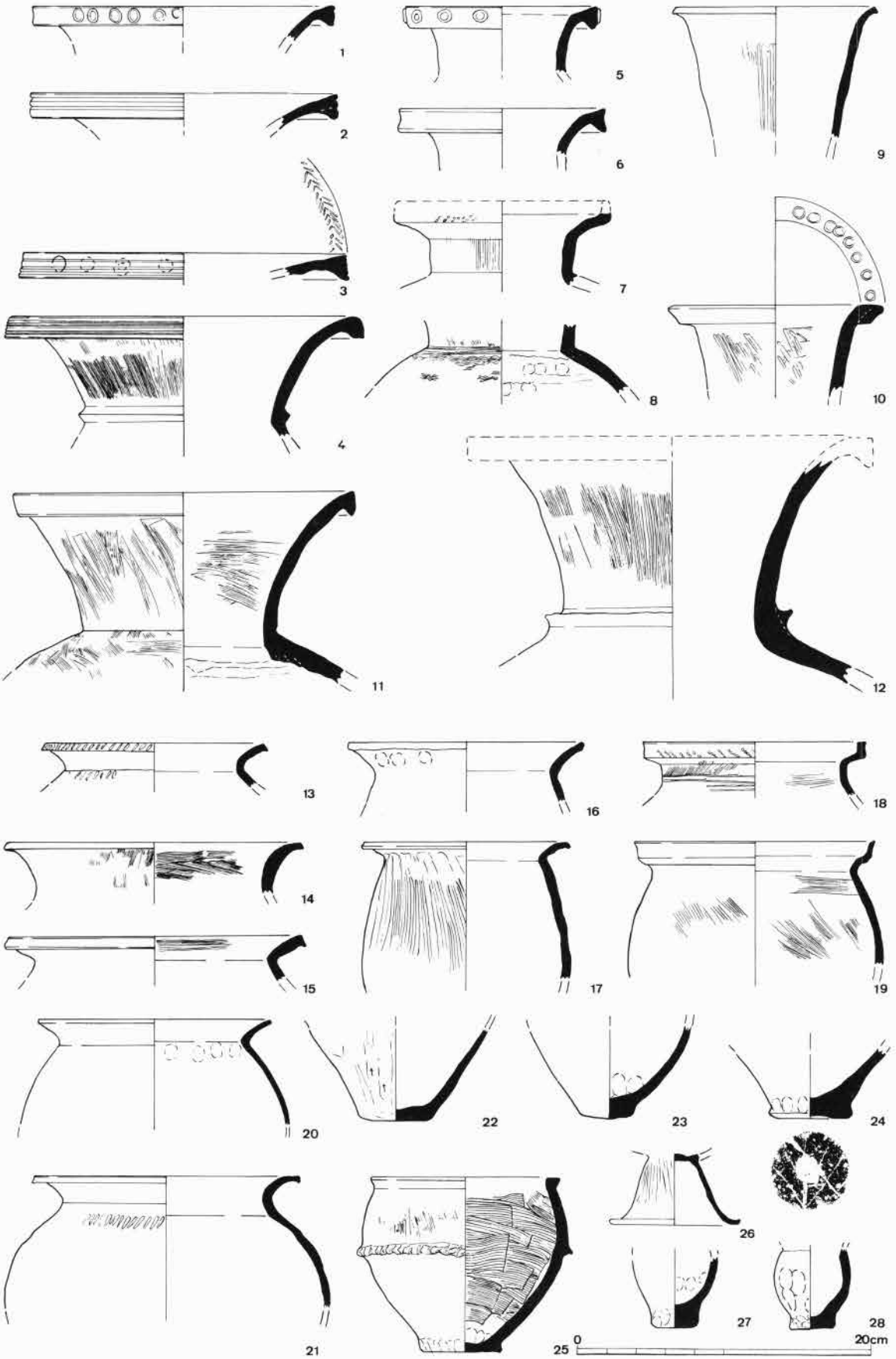
城山遺跡より出土した遺物の大部分を占めるのは後期前半に比定される弥生土器である。以下、器形ごとにその概要を述べる。掲載した土器については観察表を付した。なお、本遺跡の土器は丘陵上の遺跡に通有に見られるように、摩滅が激しく調整などの判別が困難なものが多い。

広口壺形土器は口縁端部を下方に拡張し、擬凹線や円形浮文等の施文をするものが多い。４・12のように頸部に断面三角形の突帯を貼り付けるものもある。内外面はハケ調整を主体とする。７は近江系の受け口状口縁を呈する。口縁部には刺突列点文が巡る。９は長頸壺形土器である[注7]。口縁端部に面をもつ。

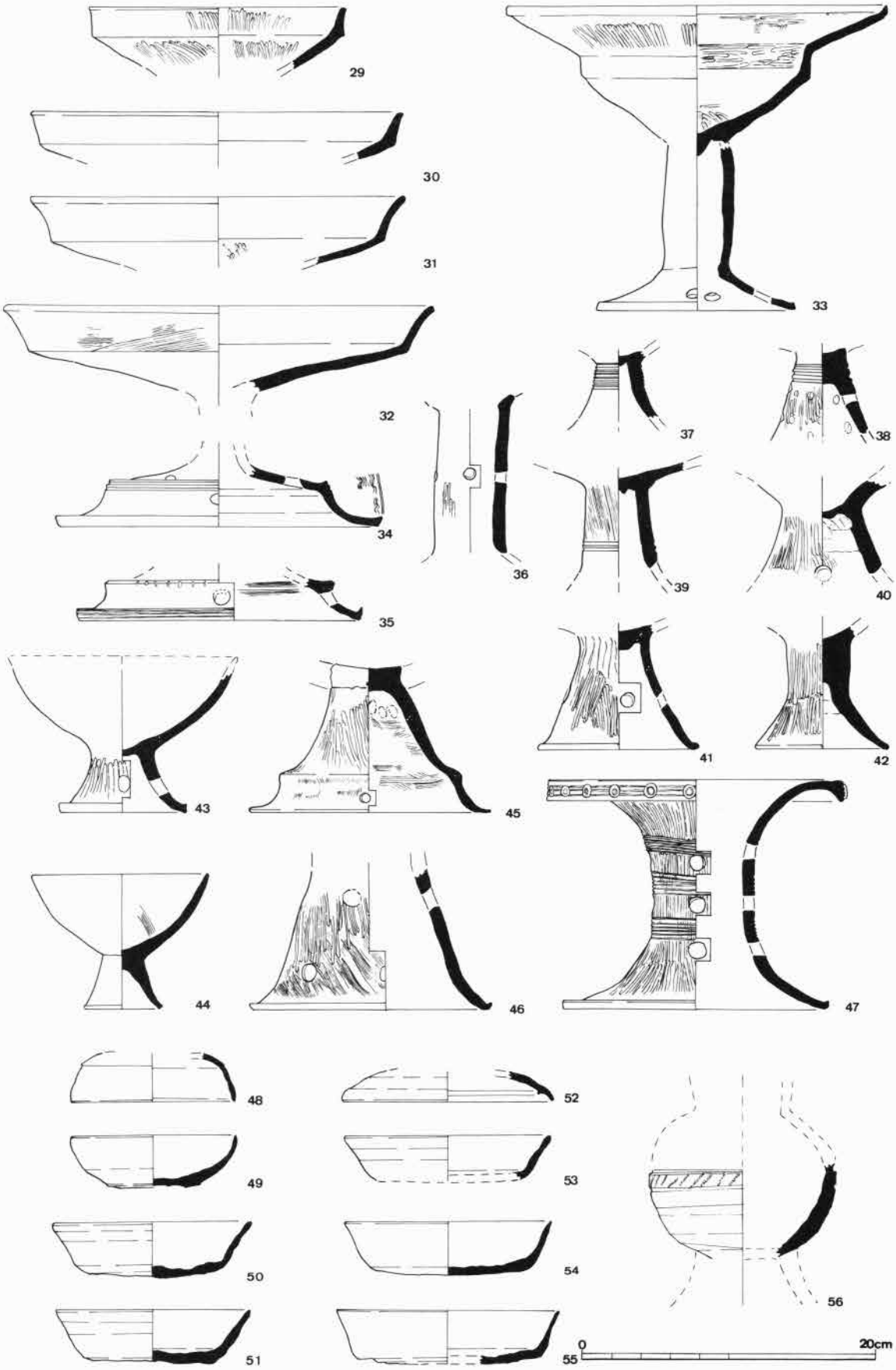
甕形土器もハケ調整を主体とするものがほとんどである。口縁部の形態はさまざまである。全体の形を復原できる資料は見られなかった。また、13・21のように口縁部に列点文や頸部に刻目文を施すものもある。近江系土器としては18・19がある。頸部内面にはヨコハケがなされる。

鉢形土器には体部に突帯が巡る25がある。突帯は体部にナデつけた後、ハケ状工具の先端で押しつけ、波状にする。口縁部は短くおさめ、端部に面を持つなど中期的な要素をもつ。内外面はハケ調整を主体とする。

高杯形土器は、皿形の杯部を有するもの(29～32)と、椀形の杯部を有するもの(43・44)とがある。前者には直立するものとやや外反するものとがあり、時期差として捉えられる。また脚部の形態も中空の柱状(36)のもの、脚裾がゆるやかに開くもの(37～41)、中実のもの(42)までの形態がある。このうち裾部がゆるやかに開く形態のものが多い。脚部には下半が２段に屈曲するもの



第49図　木津城山遺跡　出土遺物実測図(1)　(1/4)



第50図　木津城山遺跡　出土遺物実測図(2)　(1/4)

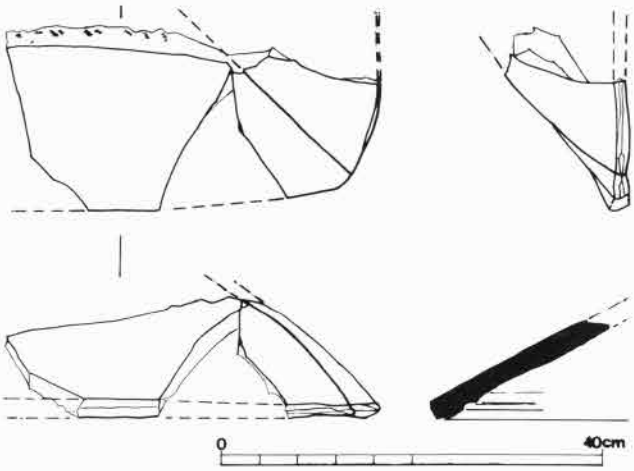
がある(34・35・45)。1段ないし2段の透かし孔を穿つ。完形に復原できる個体は見られなかったが、脚裾部と脚柱部との関係では、34が中空の柱状になると考えられ、円錐形のもの(45)もあることから組み合わせは多様であると想定される。屈曲部も凹線を施すもの(34)と刻み目を施すもの(35)や、脚端部に面をもたせるもの(34・35)と丸く収めるもの(45)などがあり、一様ではない。後期前半において、この様な脚部の形態をとる高杯形土器は組成するが、「第V様式を通じてたどりにくい」とされる[注8]のは、この様な形態の多様性に起因するものと考えられる。なお、45は脚部下段と上段の接合面にハケ調整が残り、製作時にブレスを有していることが分かる。また、33は、深い杯部に短く直立して大きく直線的に外反する口縁部がつく特異な形態の高杯形土器である。口縁端部は短く直立する。杯部と脚部の接合には円盤充填技法をとる。脚部は中空の円筒状であり、裾部は屈曲して広がる。透かしは四方に入る。脚端部は二段であった可能性もある。製作技法や脚部の形態より後期前半の範疇で考えうる高杯形土器である。

器台形土器は、2点図化した。46は、ハケ調整をした後に粗くミガキを施している。47は、口縁部に3条の擬凹線文を施し、竹管を施した円形浮文を貼り付ける。体部には3段に透し孔と擬凹線がめぐる。

今回出土した遺物は、弥生時代後期初頭から前半にかけての時期に比定される。当該地域におけるこの時期の資料は少なく、特に山城地域における後期初頭の土器様相を知るうえで良好な資料と考えられる。

(2)須恵器・陶棺(第50・51図)

48から56は須恵器である。48は杯H蓋である。口縁部と体部の間にわずかに段がつき、退化した稜がめぐっている。52は杯G蓋で、内面に下方へ突出しないかえりがつく。49～51、53～55は杯身である。いずれも底部はヘラ切リ後、未調整である。56は長頸壺である。体部下半はケズリ調整を施し、最下端には脚部の剝離した痕跡が残る。これら須恵器のうち、片山5号墳の横穴式石室内より出土したものは48～54である。石室床面直上より48・50・51が出土したほかは、すべて石室内の攪乱された層より検出した。そのためこれらの遺物が本墳に伴うとは限らないが、仮に本墳に副葬されたとすれば、副葬に時期差があった可能性を想定しなければならない。杯身50・51・53・54は、口径などから杯Aと考えられ、杯G蓋との間には、ある程度の時期差を考慮するからである。終末期古墳における追葬例は少ないが、ここでは追葬が行われた可能性も想定しておきたい。



第51図　木津城山遺跡　出土遺物実測図(3)　(1/8)

また、遺物包含層より須恵質四注式陶棺の棺蓋隅部が出土している(第51図)。内面には短く形骸化した棺身受部がつき、

明瞭に棺身受部を作り出さない。棺蓋の稜や両側縁部は一定方向のケズリを施し成形する。外面はケズリ調整を主とし、内面はナデ調整が主となる。また粘土板の接合時には接合面にハケ調整を施す。1次調査、2次調査において3基の終末期古墳(片山3・4・5号墳)が確認されているが、この陶棺がいずれの古墳に伴うものかは不明である。

(萩谷良太)

3．小　結

今回の調査成果を以下に要約して列挙する。

(1)今回の調査で確認された遺構は、木津城主郭の南地区における1次調査で検出されたものとほぼ同様の内容をもつもので、弥生時代後期前葉の集落関連遺構、および古墳時代終末期の古墳がさらに広範囲に展開している状況が明らかとなった。

(2)弥生時代の集落遺構については、とくにその立地環境、すなわち比高差約60mを測る急峻な丘陵上に位置することから、典型的な高地性集落であることは言うまでもない。出土遺物から判断される集落の時期は、弥生時代後期前葉(Ⅴ期前葉)に納まるもので、その時期は比較的短い。とくにその開始期がⅣ期末－Ⅴ期初頭の無文化・小型化を指向する土器様式の転換期に位置することは注意を要する。近年当該期に集落関連の一大変動を見いだす考証が存在するためである。森岡秀人は、石器から鉄器への生産様式・生産手段の急テンポな移行が絡む物流の異変、すなわち鉄を軸とする新たな流通構造の成立が原動力となって、自然成長的な中期安定型の集落構成・集団結合関係は瓦解し、これらの拠点的集落の近傍においてその衰退を伴う社会現象の中で、それを補完するように今までみられなかった巨大な高地性集落がやや内陸的な位置に出現することを説いた。さらに同氏は、ここにみる集落関係の変動パターンを類型化し、高地性集落の形態を採る場合に、集住型と群棲型に区分することを提唱した[注9]。木津城山遺跡の場合、集落の中心部と想定される木津城主郭部分を初めとして未掘部分をいまだ多く残しているが、これまでの調査で少なく見積もっても南北300mを測る規模を有することは明らかで、高地性集落としては大規模な部類に入る。いわば、平地の拠点的集落の分枝領域圏内に営まれた母集団の移村を前提とした集住型高地性集落の範疇で理解すべきであろう。この場合、平地の拠点的集落の候補としてⅣ期末に終焉する大畠遺跡を挙げることができる。なお、この種の高地性集落は、何らかの緊張状態に対処する防御的機能として周囲に空壕をめぐらせる例が多分にあるが、木津城山遺跡の場合、集落を取り囲むような壕は今のところ検出されていない。ただ、今次調査の北西地区(XIトレンチ)で検出した崖状遺構ＳＸ90やⅥトレンチの崖状遺構ＳＸ10は、斜面下位側の立ち上がりこそ確認していないが、そこに人為的な加工痕が認められる以上、中世の山城の切岸に相当する対人的な防砦遺構の役割を十分果たしたと考えられる。今後、周辺域で同種の遺構が確認される公算は十分にあるものとみられる。

(3)今回の調査で古墳をさらに1基確認し、これまでの調査で木津城主郭の南側の一定の限られた地区において、終末期古墳が3基営まれている状況が判明した。いずれの古墳も尾根の稜線上に線状に分布するのではなく、尾根脊梁部からわずかに下った山腹斜面、すなわち城山の南北

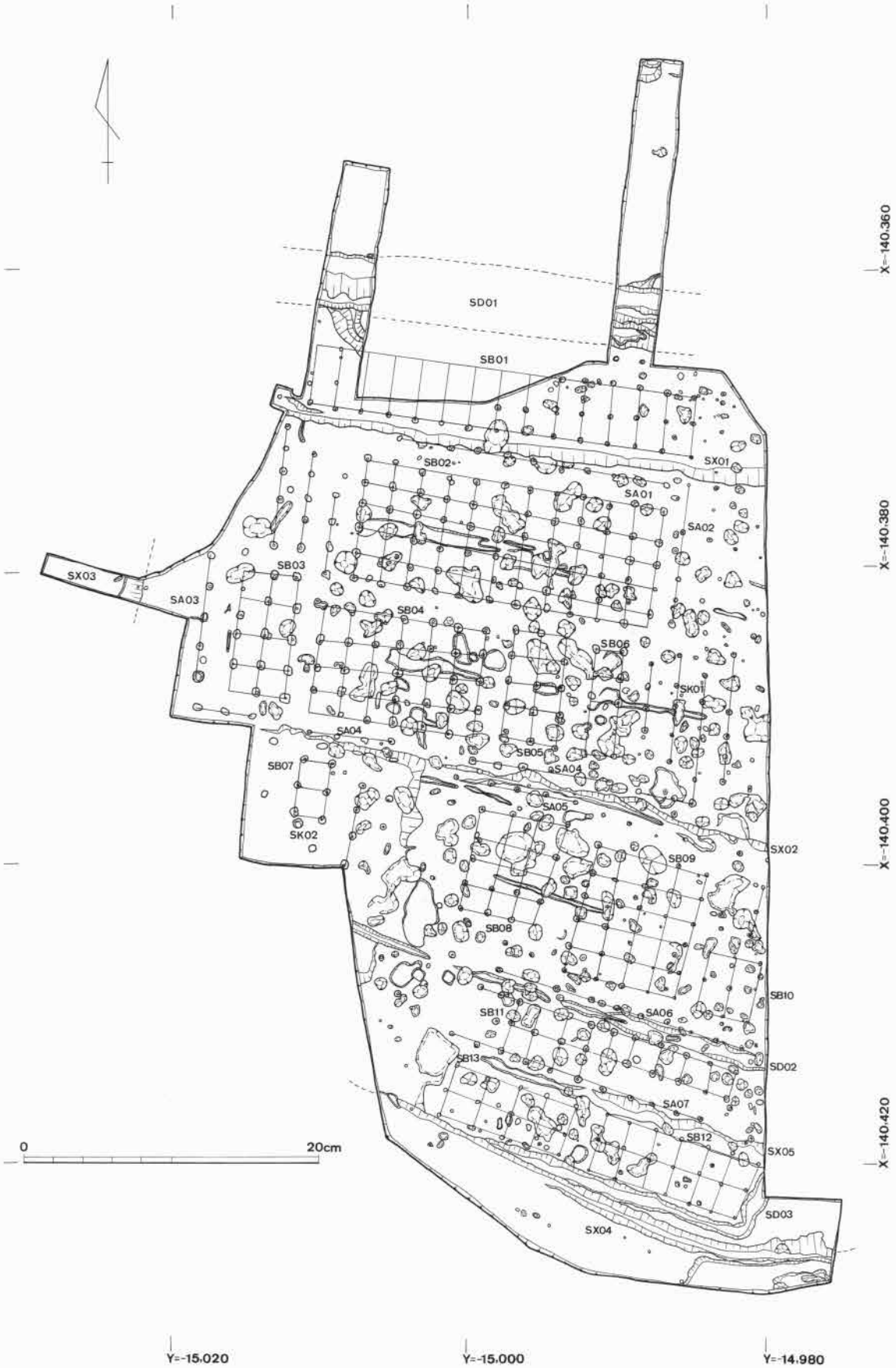
方向の主尾根の南東斜面、および、そこから西へ延びる派生支脈の南側斜面に面状の墓域を設けて、やや散在的に営まれる。墳形は、主体部の背面及び両側辺にめぐる周溝の平面形から、一部弧状に展開する様相も認められるが、設計段階では、方形(方墳)を意識して造営された形跡がある。内部主体は横穴式石室とみられるが、いずれの古墳も遺存状態が悪く、多くの石材と石室開口部側を失う。石室の袖形式は礫敷の境界を玄門部と想定すれば、石材の抜き取り痕跡から少なくとも４・５号墳は無袖式とみられる。このうち、片山５号墳の石室は内法で計測して玄室長約3.7m、同幅約1.4mを測り、畿内における他の無袖式石室を採用する終末期群集墳の中では、やや規模の大きな部類に入る。また、５号墳の場合、石室の容積から２棺重葬が可能な空間を有しており、副葬されていた須恵器にも追葬を示す時期差が見受けられる(ＴＫ217→ＴＫ48)。棺の構造は、４号墳から鉄釘が出土しており木棺使用を想定できるのに対し、５号墳からは鉄釘の出土はなく、かわって古墳の前面に広がる包含層中から須恵質四注式陶棺片が出土していることから、初葬、追葬の区別はできないが、葬送時には陶棺が使用されていたものとみられる。須恵質四注式陶棺を棺として用いる終末期群集墳はそれほど多くなく、近傍では京田辺市下司１号墳や東大阪市墓尾１・３号墳などが知られるが、それぞれの古墳群中では最大規模の石室を有し、その古墳群中における造営主体の優勢がうかがえる。いずれにせよ、これまで古墳の立地環境や墳丘・内部主体の構造、副葬遺物の少なさなどから古墳時代終末期の年代観を当古墳群に漠然と与えてきたが、今回の５号墳の調査により副葬遺物(須恵器)が遺存していたことから、片山古墳群の築造期の１点をより具体的に把握できたのは大きな成果といえる。

(2) 菰 池 遺 跡

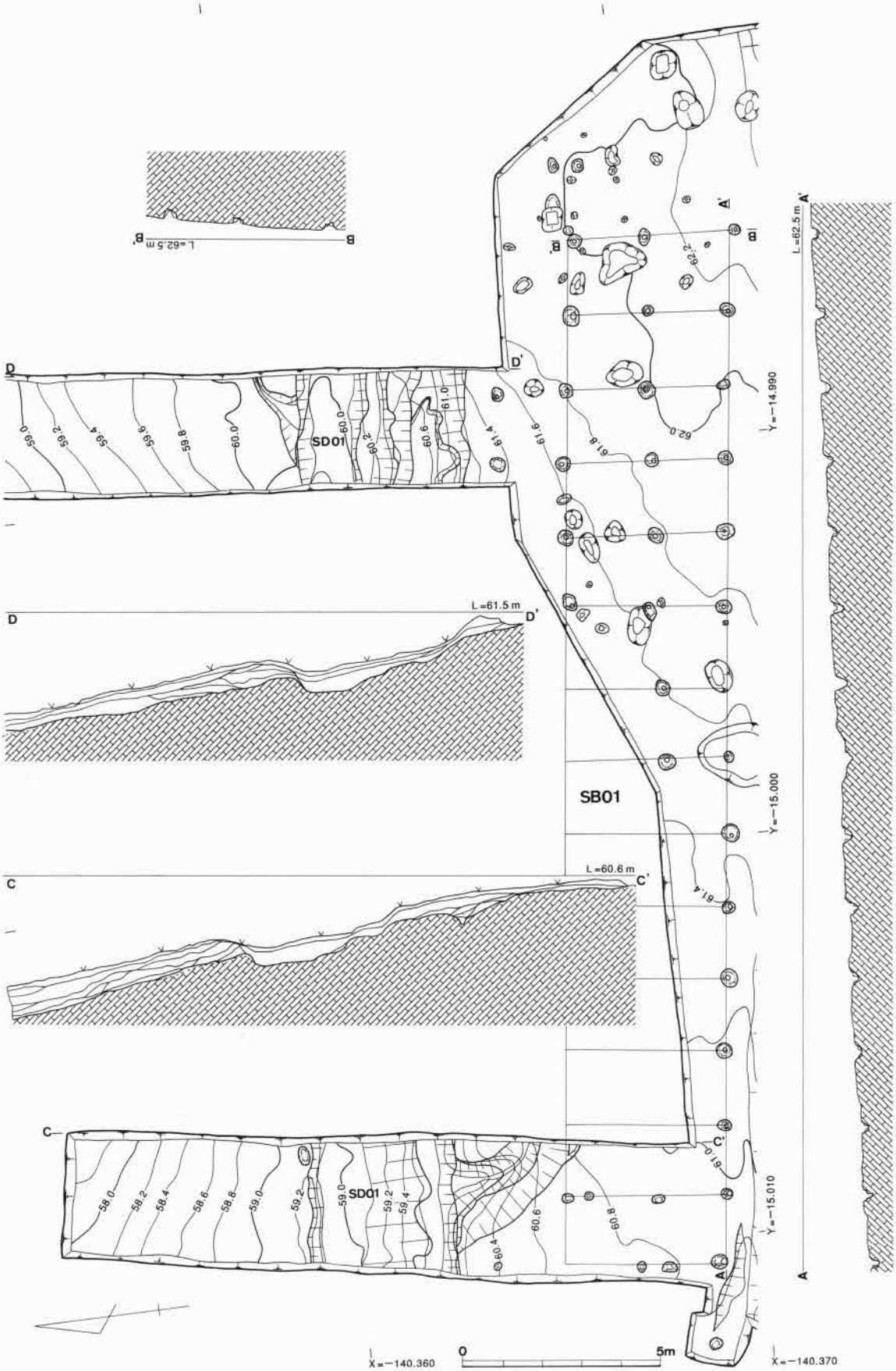
１．検 出 遺 構

ＳＢ01(第53図)　面的な調査区の北端で検出した14間(26.4m)×２間(4.1m)の東西方向に長大な総柱構造の掘立柱建物跡である。建物の敷地は、東西方向に直線状に走る段状遺構ＳＸ01によって一段低く削り出された平坦面に位置する。この平坦面は南北幅が約３mと狭く、北側は傾斜面に移行している。また、敷地は西側に向かって一定の勾配をもってゆるく傾斜しており、建物両妻間の検出面の比高差は1.4mを測る(以下に記述する建物跡も同様に緩斜面に立地する)。柱間構成は、桁行がほぼ等間隔柱間を採り、その寸法はほぼ６尺を測り、基準尺は曲尺を使用しているとみられ、約0.3mを測る。これに対して、妻側柱筋の柱間は等間隔ではない。側柱の内側にある柱穴は、床束の束柱穴とみられ、その柱通りは桁・梁行方向とも直線的に通っているが、桁行方向では棟通り線(建物中軸線)に対して西側で南に偏している。柱の掘形は、側柱・束柱とも特に区別することなく、一辺20～45cmの円形に近い隅丸方形プランを呈し、内部に径10cm前後の柱痕跡をとどめる。以下に記す建物跡同様、柱掘形内より18世紀の土師器・陶磁器小片が少量出土している。

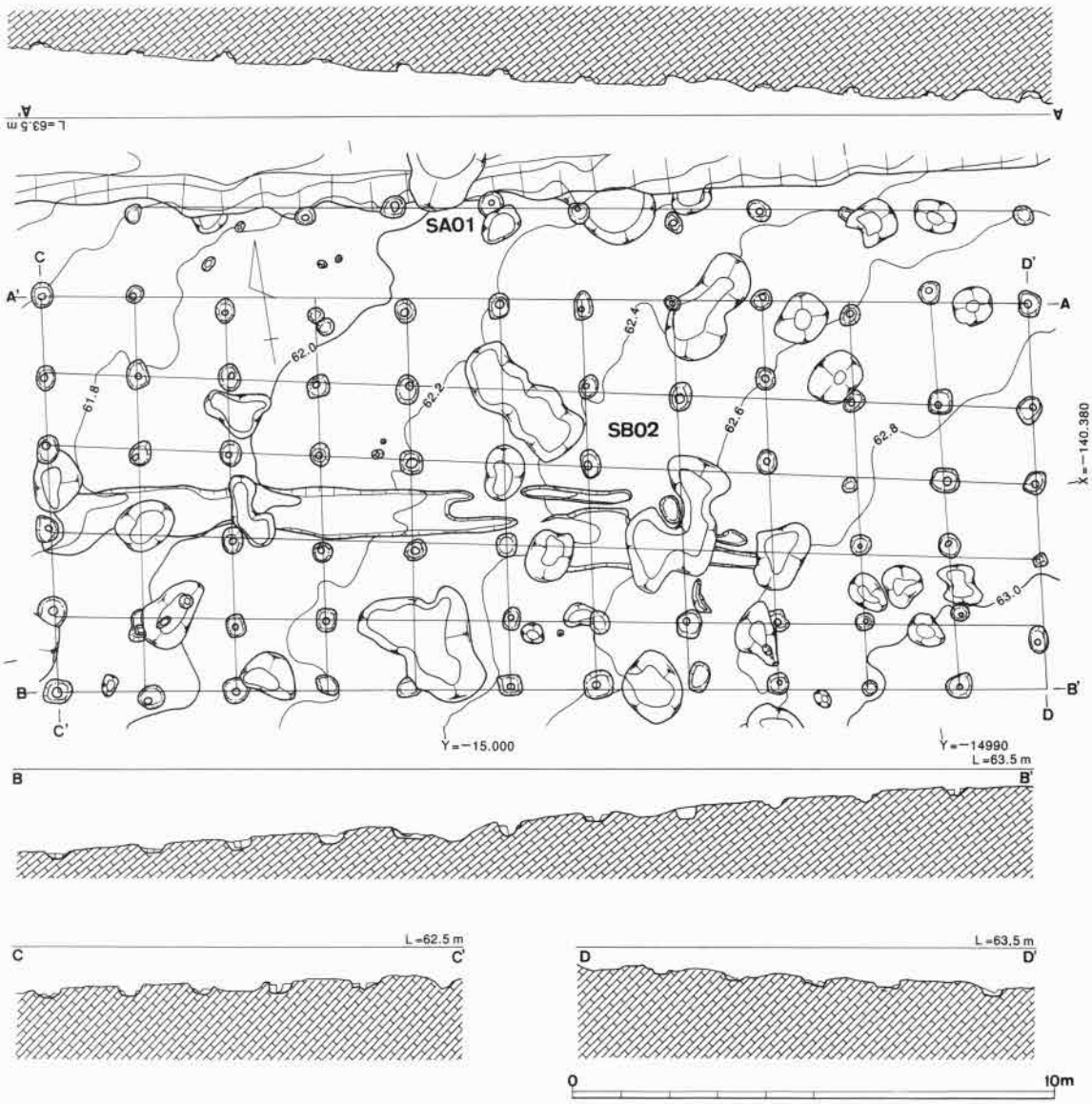
ＳＢ02(第54図)　南北側を段状遺構ＳＸ01とＳＸ02によって一段高く削り出された基壇状敷地



第52図　菰池遺跡　全体図(1/400)



第53図　菰池遺跡　ＳＢ01、ＳＤ01実測図(1/150)



第54図　菰池遺跡　ＳＢ02実測図(1/150)

の北半部に位置する、当調査区では最大の床面積(約170m²)を有す掘立柱建物跡である。建物構造は11間(20.65m)×５間(8.05～8.25m)の東西棟建物で、総柱構造を採る。建物主軸はＮ(座標北)９°Ｅを示す。柱間構成は、桁行方向がほぼ等間隔柱間で、柱間寸法は曲尺を基準尺としてほぼ６尺等間に割り付けている。一方、梁行方向の柱間は、それぞれの床束を結ぶ柱筋が東に向かって南に偏していることから、西妻柱列では南１間が、東妻柱列では北１間が他に比べて広くなる。なお、この建物跡の南側１間は、柱間寸法が他に比べて狭く(約1.5m)、廂、もしくは縁とみられる。柱掘形は、側・束とも同規模同形態で、一辺25～60cmの隅丸方形を呈する。柱当たりは径約15cmを測る。掘形内の埋土は１層のみの単層で、版築状を呈さない。掘形内から土師器・陶磁器小片が少量出土している。

ＳＡ01(第54図)　段ＳＸ01の上縁付近に位置し、ＳＢ02の北側1.8mで、その建物主軸に平行する方向に軸をもつ１本柱列で、柵とみられる。ＳＢ02の東妻筋延長線から始まって西に延び、同建物の西妻の１柱間手前まで延びる(全長18.6m)。柱間寸法は1.8m等間で、掘形は一辺約

40cm内外の隅丸方形プランを呈す。柱痕跡は径約10cmを測り、ほとんどの柱穴内に認められる。

ＳＡ02(第52図)　ＳＢ02の東妻柱筋と平行して約1.8mの間隔を保って平行する柱筋をもつ柵である。柱間寸法は不等間隔で、掘形は径および一辺が25～40cmのやや規模の小さい円形あるいは隅丸方形で、内部に径10cm前後の柱痕跡をとどめる。

このほか、遺構番号は付していないが、ＳＢ02の西側にも南北主軸の３条の柵が同じ間隔(1.8m)を保って存在する。これらは東西に柱筋が通らないため柵と認識したが、検出総長は5.3m(３間)から8.2m(５間)と短く、ＳＢ02の西側を外部から遮蔽する役割をもっていたものとみられる。

ＳＢ03(第55図)　ＳＢ02が占地する敷地の南半部の西端に位置する３間(6.25m)×２間(3.9m)の南北棟の総柱の掘立柱建物跡である。柱間寸法は、桁行は北端間がやや広いのを除けば、桁行・梁行ともにおよそ2.0mで割り付けられる。ただ、北西と南西の隅柱を欠く。柱掘形は、側・束柱とも同規模で、一辺55～65cmと他の建物と比べるとやや規模の大きな隅丸方形を呈す。柱当たりは径約15cmを測る。

ＳＢ04(第55図)　ＳＢ03の東1.85mに位置する掘立柱建物跡である。建物構造は６間(11.25～11.5m)×４間(7.2～7.5m)の東西棟の総柱構造を採る。柱間寸法は、桁行はほぼ６尺(1.8m)の等間隔であるが、床束柱を結ぶ東西方向の柱筋が西で南に偏るため、梁行の柱間は西妻の北１間と東妻の南１間がやや広い不等間隔柱間となる。柱掘形は規模にややばらつきがあるが(一辺30～70cm)、いずれも隅丸方形を呈する。

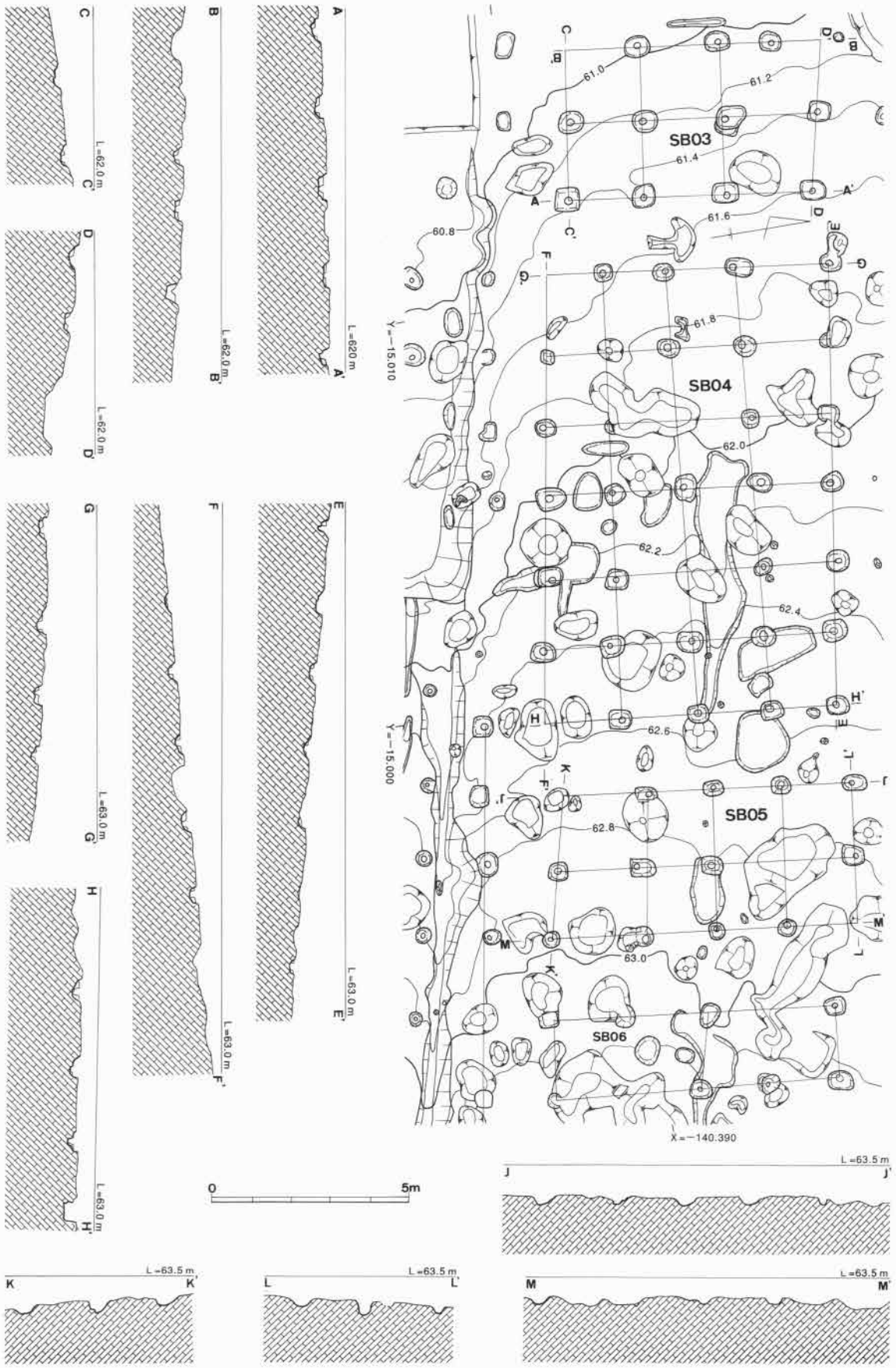
ＳＢ05(第55図)　ＳＢ04の東に接する２間(3.6～3.7m)×４間(7.4～7.9m)の南北棟の掘立柱建物跡である。やはり床束柱穴を有する。柱間寸法は、南１間がやや長い以外は桁行・梁行ともに６尺(1.8m)等間を測る。掘形は一辺40～60cmの隅丸方形プランで、内部に径15cm前後の柱痕跡をとどめる。

ＳＢ06(第55図)　ＳＢ05の東2.05mに占地する東西１間(1.8～2.05m)×南北４間(7.2～7.3m)の小規模な掘立柱建物跡である。柱間寸法は攪乱により欠落する柱穴もあるが、おおむね1.8m等間を測る。掘形は隅丸方形(一辺35～60cm)で、径15cm前後の柱痕跡を有するものがある。

ＳＡ04(第52図)　段状遺構ＳＸ02の上縁に沿って東西方向に断続的に延びる柵である。間に柱穴を欠き不連続部分が３か所あるが、検出総長は34.2mを測る。不連続部分を境に柱筋がわずかにずれるため、それぞれ別の柵の可能性もある。掘形は隅丸方形(方35～65cm)を呈し、内部に径10cm前後の柱痕跡をとどめる。この柵の東西両端から直角に北方向に延びる柵列がある(西側のそれはＳＡ03)。とくに東側では４条の柵が等間隔で平行しておりＳＢ05の東を厳重に画している。

ＳＢ07(第52図)　ＳＢ04と西側柱通りを一致させてその南側に位置する２間(3.7m)×１間(2.0m)の小規模な南北棟の掘立柱建物跡である。建物の敷地は、北と東を逆Ｌ字形に一段低く削り出した空間であり、建物の東側には柱筋を揃える１条の柵(３間分確認)を伴う。

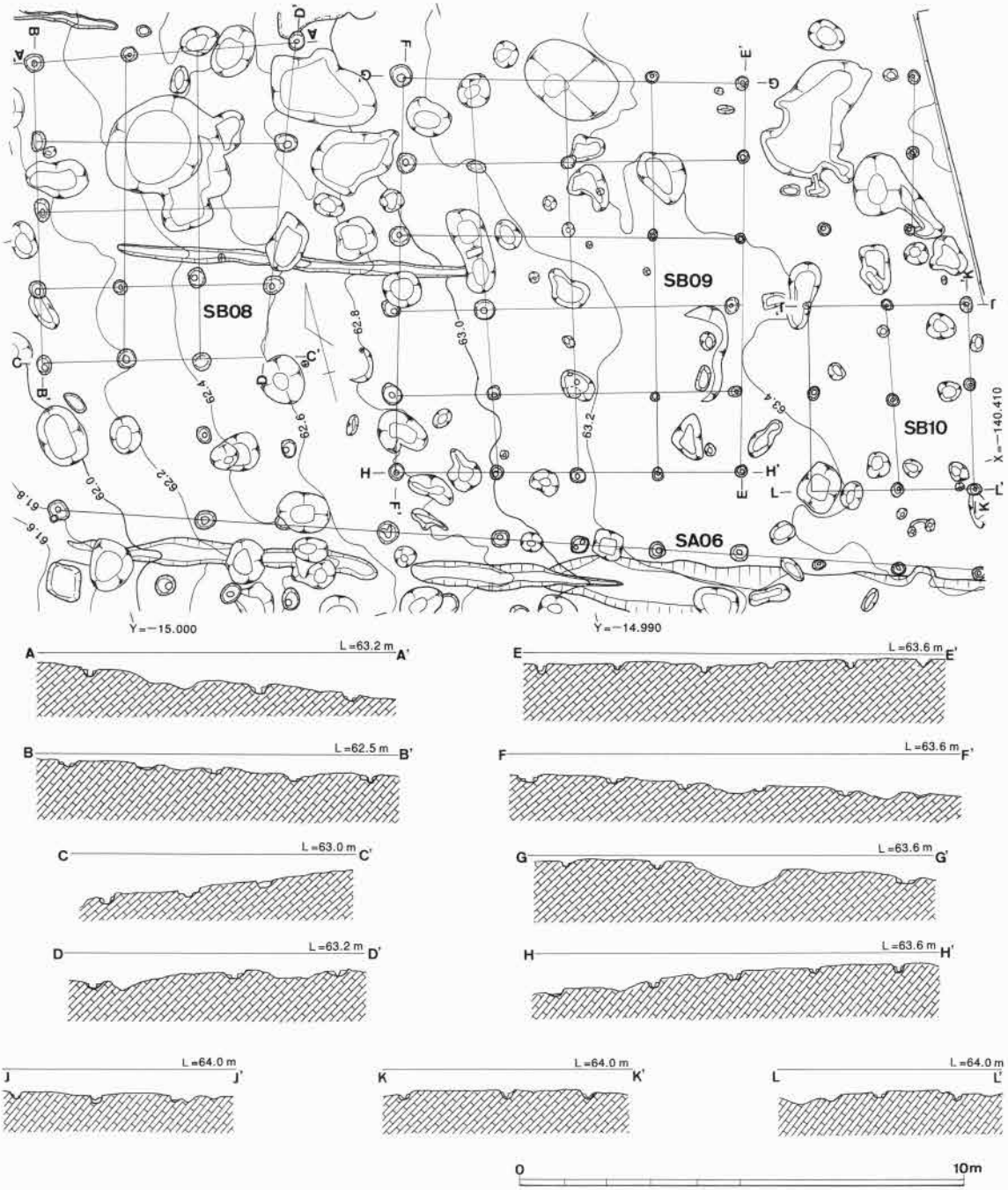
ＳＢ08(第56図)　ＳＢ05の南5.0mに位置する掘立柱建物跡である。建物構造は東西３間、南北４間の総柱建物である。建物の平面形は整った方形をなさず、対向する側柱筋が平行しない矩形を呈する。柱掘形は、側・束柱とも特に区別することなく同形同大を示し、直径もしくは一辺



第55図　菰池遺跡　ＳＢ03・04・05・06実測図(1/150)

35～45cmの円形または隅丸方形を呈する。多くの柱穴には径10cm前後の柱痕跡をとどめる。柱間寸法は、1.6～2.3mと一定しないが、桁行、梁行とも中間が狭く、脇間が広い傾向がある。

ＳＢ09(第56図)　ＳＢ08の東約2.5mに位置する掘立柱建物跡である。東西４間(7.7m)、南北５間(8.9m)の総柱構造を採る。建物の主軸方位は、ＳＸ02以北の建物群より北で東に振っており、N(座標北)16°Ｅを測る。建物主軸の正方位に対する東への偏向の度合いは、調査区内の南側の建物ほど大きくなる傾向がある。柱掘形は標高が低い西側ほど規模が大きく(径または一辺0.2～0.5m)、掘形の大きさに関係なく径10cm前後の柱痕跡をもつ。柱間寸法は1.5～2.3mと不揃いだが、桁行(南北)方向は、中間１間を狭く(1.5～1.7m)、脇間・端間を広くとる(1.6～2.0



第56図　菰池遺跡　ＳＢ08・09・10実測図(1/150)

m)構成が読み取れる。

ＳＢ10(第56図)　ＳＢ09の東1.5mに位置し、南側柱筋をＳＢ09のそれにほぼ揃える桁行２間(4.2m)×梁行２間(3.7m)の小規模な南北棟建物である。柱掘形は、円形に近い隅丸方形を基本とし、規模は径(一辺)20～30cmと小振りである。柱痕跡は円形で径5～10cmと小さい。柱間寸法は不等間隔柱間を採り、ばらつきがあるが、全体として梁行(1.7～2.0m)より桁行(1.9～2.3m)を広くとる傾向がある。この建物に方位を揃える柱間２間分の柵(検出総長3.4m)がある。

ＳＡ06(第56図)　上記の３棟の建物の南を限る柵で、敷地を区画する直線に走る溝ＳＤ02と平行して、その上縁付近に位置する。10間分を確認したが、その西端はＳＢ08の西側柱筋とほぼ一致する。掘形の平面形は隅丸方形で、その規模は標高が低くなる西側ほど大きい(一辺25～40cm)。柱間寸法は東側６間は1.8m等間であるのに対し、それより西は1.8～3.3mと広くなる。

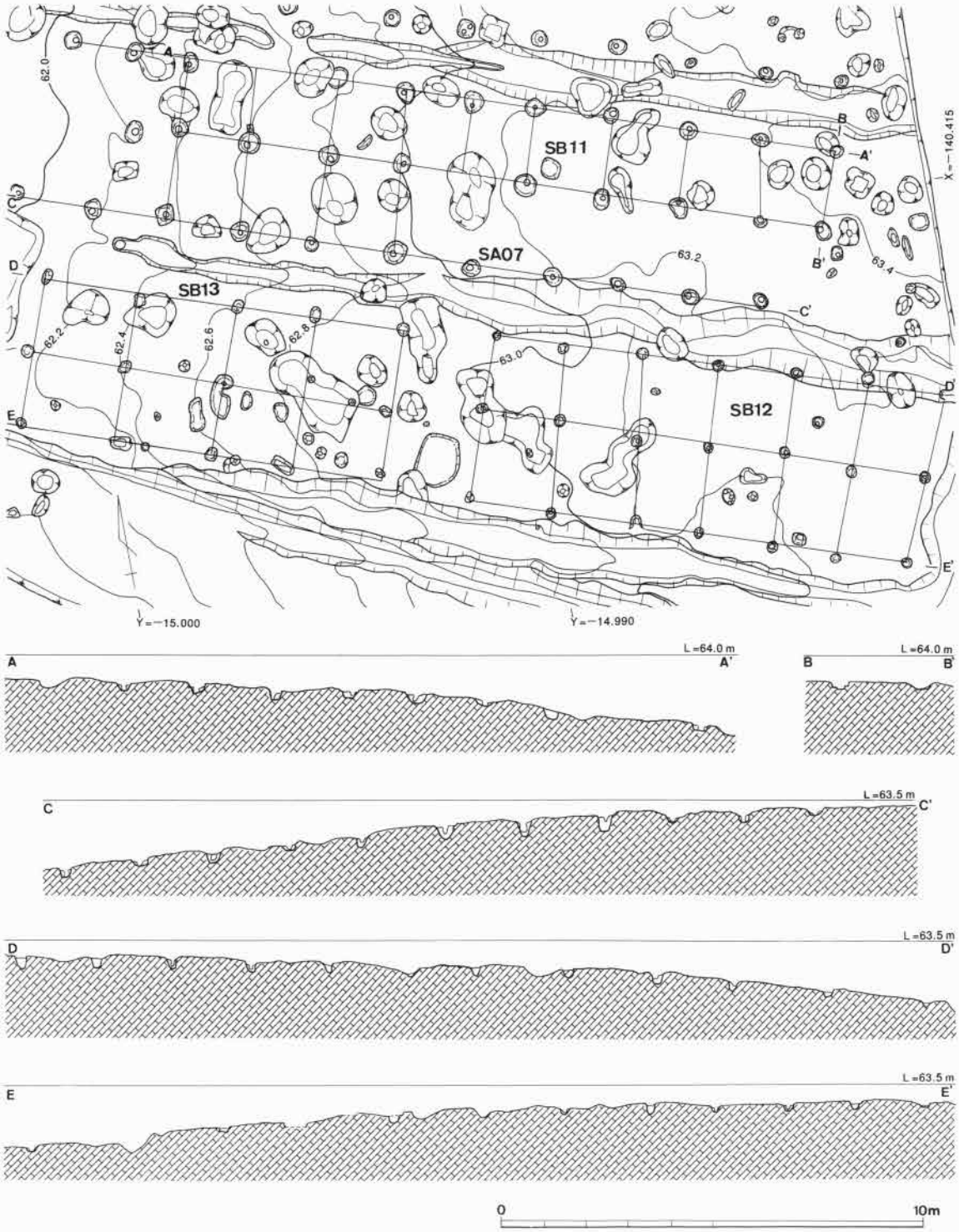
ＳＢ11(第57図)　ＳＤ02の南に隣接するように建てられた東西９間(15.5m)×南北１間(1.8m)の狭長な掘立柱建物跡である。西側４間分は南に平行して走る柵ＳＡ07の柱穴と南北方向に柱筋が通る。建物の主軸はＳＢ09よりさらに正方位に対して斜向し、Ｎ(座標北)19°Ｅを示す。柱の掘形は隅丸方形プランで、その規模は建物規模が小さいにもかかわらず一辺30～50cmと大きい。各掘形内には径10cm前後の柱痕跡をとどめる。柱間寸法は曲尺で６尺(約1.8m)を基準とするが、桁行方向でのそれは若干乱れて1.5～2.0mの範囲で長短がみられる。

ＳＡ07(第57図)　ＳＢ11の南2.1mでＳＢ11建物主軸と平行する柵である。柱間にして10間分を確認した。西第３～５間がＳＢ11の梁方向で柱筋が通るため、この部分のみ建物の南側柱を構成していた可能性がある。掘形はおおむね平面形が隅丸方形を呈し(一辺30～50cm)、全て柱痕跡(径約10cm)をとどめる。

ＳＸ05(第52図)　ＳＡ07の南に接し、その軸線と平行する溝状遺構である。断面形でみた場合、南側斜面が北側より極端に短くその立ち上がりが低いため、この溝を境に南北で南側が低い高低差が生じている。

ＳＢ12(第57図)　ＳＸ05とＳＤ03にはさまれた東西方向に狭長な敷地にも柱穴群があり、柱通りの違いなどから２棟の建物に復原した。ＳＢ12はその東側の建物である。桁行６間(10.8m)×梁行２間(4.0m)の東西棟の総柱建物である。建物方位はＳＢ11と同じである。束柱穴は対向する入側柱を結ぶ線上にのるが、その柱筋は妻側柱筋に対して中柱筋のみ平行関係を保つので、西第４柱(中柱)は間仕切りかもしれない。掘形は径20～25cmの円形プランを呈し、他の建物より平面形は小さいが、深さは30cmほどあって相対的に深い。柱間寸法は６尺(1.8m)を基準とするも、全体に不揃いで1.5～2.2mの間で変化している。

ＳＢ13(第57図)　ＳＢ12の西方2.15mに位置する４間(8.6m)×２間(3.6m)の東西棟の総柱構造をもつ掘立柱建物跡である。建物主軸はＳＢ11・12と同方位を示す。柱掘形は円形に近い隅丸方形(方25～40cm)プランで、相対的に深く掘り込まれている。柱痕跡を確認できたものは少ない。柱間寸法は桁行方向が広く1.9～2.4mを測るのに対し、梁行は西妻柱列で６尺(1.8m)等間に割り付けられている。



第57図　菰池遺跡　ＳＡ07、ＳＢ11・12・13実測図(1/150)

ＳＤ01(第53図)　調査区の北側に延ばした２本のサブトレンチで検出した東西方向の溝状遺構である。この溝の位置する地点は、建物群が占地する平坦面から北側に下る傾斜面に移行する斜面側の上縁付近に掘り込まれている。溝の外側線は直線的で、その主軸方位は調査地北半の建物群と一致する。溝の断面形は、平坦な底部から両側壁がやや内湾気味に立ち上がる逆台形を呈する。また斜面の下位側に位置する北側斜面の上半部分は、地山の傾斜面上に盛土をすることで形

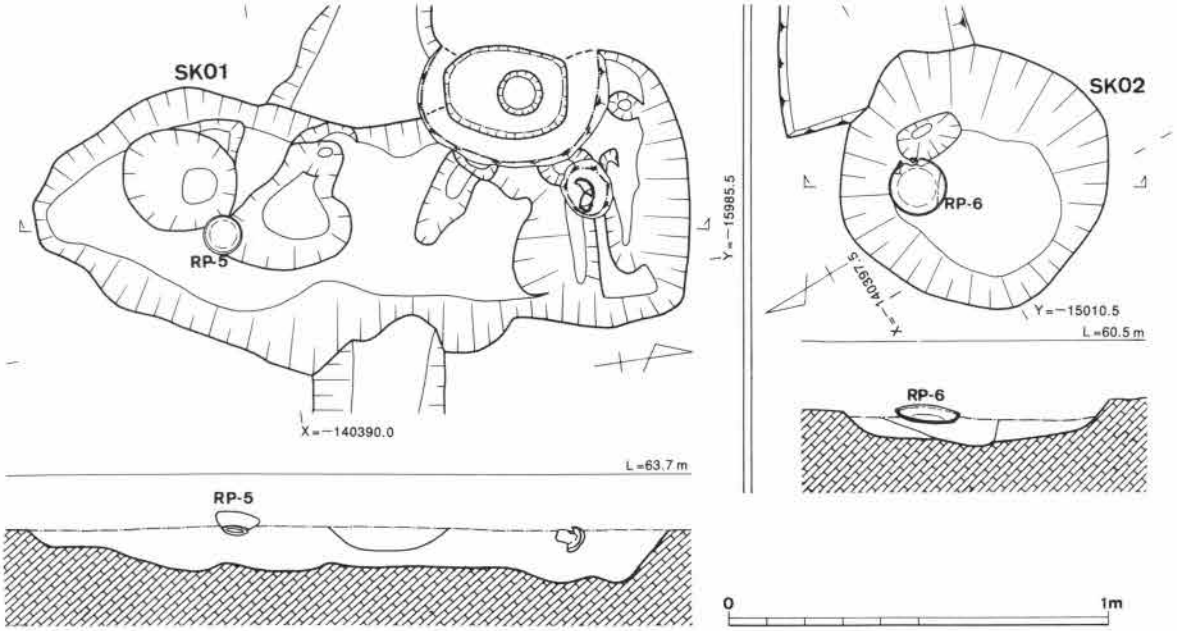
成している。規模は上縁幅3.6～4.3m、南上縁からの深さ1.0～1.4mを測る。溝内からの出土遺物はきわめて少なく、斜面北縁を構成する造成土から、土師器壺Cがほぼ完形で1点出土している(第59図1)。

SX04(第52図)　調査区南端で検出した東西方向に延びる段状遺構である。その上縁線が示すラインは、隣接する北側の建物群の主軸と一致し、E19°Sの方位を示すが、その東端はゆるい円弧を描いてやや北側に曲折する。また、段の下縁部分は溝状に一段深く掘り込まれ、さらに東端部分では溝よりさらに南側の底部を一段掘り下げている。出土遺物は非常に少ないが、東端の深掘り部分において土鈴(第59図10)が1点出土している。

SX03(第52図)　西に延ばしたサブトレンチで検出した段状遺構である。サブトレンチ内の遺構面は緩い勾配で西に向かって下降しているが、トレンチのほぼ中程で傾斜角を強めて段状を呈した部分を遺構と認識した。断面観察の結果、堆積層が西側に向かって立ち上がる状況が観察されたことから、当初は溝状を呈していたものとみられる。土馬の小片が数点出土した。

SK01(第58図)　SB05の約2m東に位置する土坑である。遺存状態は悪く、底部付近のみが残存したものとみられるが、検出面での平面形は、南側を舳先とする南北に主軸をもつ、ややいびつな舟形を呈する(長軸長1.7m・短軸長0.75m)。断面形はやや凹凸のある底部から屈折して側壁が外上方に立ち上がる形状を示す。内部からほぼ完形の須恵器杯B1個体(第59図5)と土師器壺C3個体(第59図2～4)が土坑底よりやや浮いた層位で正立した状態で出土した。

SK02(第58図)　SB07の南に接する地点で検出した土坑である。平面プランは円形に近い隅丸方形(一辺0.7m)で、断面形は平坦で広い底部から側壁が内湾気味に立ち上がる形状を示す(検出面からの深さ約0.12m)。坑内埋土は炭を多く含む層で、坑底から5cm浮いた位置で土師器杯Aが正立した状態で出土した。なお土器は二次被熱を受けた形跡はない。



第58図　菰池遺跡SK01・02実測図(1/20)

2．出　土　遺　物

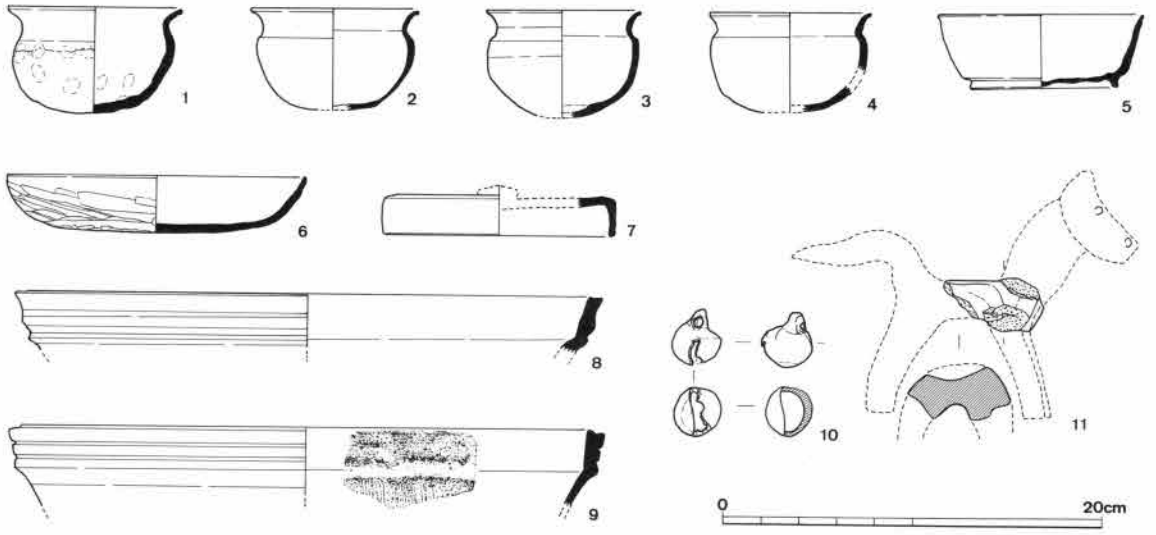
今回の調査で出土した遺物は、コンテナ・バットにして１箱分相当と少ない。その内訳は古代の土器・土製品と近世の土器で、前者は図化できるものが多いが、後者は大半が小片資料で図示できるものは少ない。

１～４は土師器壺Ｃで、いわゆる祭祀用土器の「カマコ」である。やや平底ぎみの扁球形の体部に短く外反する口縁部を付したものである。調整技法の細部を遺存状態の良い１でみてみると、粘土紐巻き上げで成形した後、体部内外面をユビオサエで整形し、さらに体部内面のみ回転ナデを底部は乱雑に、上位ほどていねいに施す。最後に口縁部内外面に横位のユビナデを加えて仕上げるが、特に口縁部外面は指１本分の幅でナデ付けるため、体部との境界に段差を生じさせる。胎土は精良で焼成は堅緻、外表面は褐色を呈する。２～４は、遺存状態が悪く調整技法の詳細を知り得ないが、法量、形態とも１に近い。淡黄褐色を呈する。

５は須恵器杯Ｂである。平坦な底部からやや丸みをもって屈曲する腰部を経て、口縁部に移行し、口唇部は尖りぎみに丸くおさめる。口縁部は下位の1/3はやや内湾ぎみに立ち上がり、端部付近でわずかに外反する形態を呈する。径高指数(器高÷口径×100)は40を測り、口縁部の外傾度は低い。高台は腰部の内方４㎜に位置し、その断面形態はわずかに「ハ」字形に開く低く短いもので、脚端面は内傾して高台外端で接する。器面調整は、口縁部外面から内面全体にわたってロクロナデを施し、底部内面に数条の軽い乱ナデを加える。底部外面はロクロケズリの後、軽い一定方向のユビナデを加える。

６は土師器杯Ａで、広く平らな底部から腰部に稜を設けず、口縁部は全体に内湾する弧を描きながら外上方に立ち上がり、口唇部は肥厚せずに尖りぎみに丸くおさめる(Ｂ形態)。器面調整はヨコナデ調整した後、底部から口縁部外面にかけてヘラケズリをするいわゆるＣ０手法を用いる。外面のケズリは、底部は一定方向に強く削るのに対し、口縁部外面は器体を回転させながら横方向に断続的に削る。表面の色調は褐色を呈し、焼成は堅緻である。

７は須恵器壺Ａの蓋の小片である。頂部から鋭く垂直に折れる縁部をもつ。縁端部の形状は、



第59図　菰池遺跡　出土遺物実測図(1/4)

縁部内端を下方に突出させて外側に段を作る。

10は鈴形土製品である。直径約2.6cmの中空の土球の上端に円錐台形の釣り手(鈕)を付す形態を示す。鈴本体の下方には刀子のような工具で縦一文字の孔を刻み入れる。鈕には直径2.5～3.0cmの円孔が1か所丸棒状の工具による片面穿孔であけられている。手づくねで整形されたようで、外面に指頭圧痕が、内面鈕寄りに絞り目が残る。奈良時代の土鈴の可能性がある。

11は土馬の胴部である。頸部(頭部)や脚部は折損しているが、脚部の破断面は胴部との付け根においてはヘラにより多角形状に整形している。表面は著しく磨耗しており調整手法はうかがえない。外表面は淡黄褐色、断面は暗灰色を呈する。このほかに図示していないが、土馬の脚部が数個体出土している。

8・9は陶器擂鉢の口縁部の細片資料である。胴部と口縁部の境は「く」字形に屈折し、直立する口縁部は外側に肥厚して縁帯状をなす。口縁部の外側面には深くて断面が丸みをもつ沈線を2条刻む。外表面には釉薬が光沢のある海老茶色に発色する。胎土はやや粗く、長石砂粒を多く含んで淡黄灰色を呈する。信楽焼の擂鉢であろう。

3．小　結

今回の調査成果のうち、奈良時代については、多くの遺構が削平された状況が判明した。ただ、出土遺物中に祭祀色の高いものが目立って多い点や、調査区の西に面する釜ヶ谷遺跡で同種の遺物が多量に出土していることから推測すると、律令祭祀と結びつく遺構がかつて存在したことをうかがわしめる。一方、多くの建物遺構は出土遺物などから18世紀代に営まれたもので、その性格については、さまざまな状況から判断して、一過性の高い非日常的性格を読みとれる。また、造成を加えて敷地を確保していることや、建物規模が大きいことから農林業に関わる施設とも考えにくい。その性格の一案を示すと、南都諸寺院の建造物修築等に関わる用材の管理運営施設(木屋)が考えられないだろうか。たとえば、江戸期における東大寺大仏殿再建のおり、その材木の多くが木津川舟運を経て木津で陸揚げされ、そこから陸路南都まで寄進引きと称する大勢の人夫が動員され、運漕した様子が記録に残されている。(注10) 今回検出された建物群は、その構造から用材を加工する施設(作事場)とみるよりは、むしろ木引工の宿営施設と推測するのがふさわしいと考えられないだろうか。

(伊賀高弘)

第５表　木津城山遺跡　出土土器観察表

番号	器種	器形	遺構	法量（ｃｍ）	残存率	胎土	色調	焼成	内面調整	外面調整	特　　徴
1	弥生土器	広口壺	ＳＸ107	20.4	1/8	やや粗	黄白色	比硬	ナデ	ナデ	口縁部に竹管文を施す
2	弥生土器	壺（器台）？	ＳＸ126	20.9	1/10	比密	黒褐色	比硬	摩滅不明	摩滅不明	口縁部に２条の凹線が巡る
3	弥生土器	壺（器台）？	ＳＤ128	11.0	1/6	密	茶褐色	やや軟	ナデ	摩滅不明	口縁部内面に綾杉文、4条の擬凹線が巡り円形浮文の痕跡
4	弥生土器	広口壺	ＳＤ128	24.4	1/3	やや粗	茶褐色から黄褐色	やや軟	ハケ？	ハケ	口縁部に擬凹線文、頸部に突帯を貼り付ける
5	弥生土器	広口壺	ＳＸ126	13.4	1/3	比密	黄白色	やや軟	摩滅不明	摩滅不明	口縁部に竹管文を施す円形浮文を貼り付ける
6	弥生土器	広口壺	包含層	14.0	1/5	比密	にぶい黄褐色	比硬	ナデ	ナデ	
7	弥生土器	壺	ＳＢ69	14.6	1/6	密	黄白色	軟	ナデ	摩滅不明	近江系、口縁部列点文
8	弥生土器	壺	包含層	10.0	1/4	密	茶褐色	比硬	ナデ	摩滅不明	頸部に直線文と波状文
9	弥生土器	長頸壺	ＳＸ10	13.8	1/6	密	赤褐色	やや軟	摩滅不明	ミガキ	
10	弥生土器	広口長頸壺	ＳＤ140	14.7	1/6	密	茶褐色	比硬	ナデ	ミガキ	口縁部に竹管文
11	弥生土器	広口壺	ＳＸ126	23.0	1/2	比密	黄白色	比硬	ハケ	ハケ	頸部以下に粘土紐単位が明瞭に残る
12	弥生土器	広口壺	包含層	17.5	1/2	比密	赤褐色	比硬	摩滅不明	ハケ	頸部に突帯を貼り付ける
13	弥生土器	甕	ＳＢ75	14.8	1/6	粗	茶褐色	比硬	ナデ	ナデ	口縁部に刻み目、頸部に列点
14	弥生土器	甕	包含層	20.0	1/16	やや粗	にぶい黄褐色	比硬	ハケ	ハケ	
15	弥生土器	甕	ＳＸ126	20.6	1/9	やや粗	茶褐色	比硬	ハケ	ナデ	外面頸部に煤付着
16	弥生土器	甕	ＳＤ128	16.1	1/8	比密	黒褐色	比硬	ナデ	ナデ	外面頸部に煤付着
17	弥生土器	甕	ＳＫ73	14.2	1/8	比密	にぶい黄燈色	比硬	ナデ	ハケ	
18	弥生土器	甕(壺)	ＳＤ128	15.2	1/2	やや粗	暗茶褐色	硬	ハケ	ハケ	近江系、搬入品か？
19	弥生土器	甕	ＳＤ76	16.4	1/8	密	淡黄燈色	軟	ハケ	ハケ	近江系、在地産か？
20	弥生土器	甕	ＳＤ61	16.0	1/5	やや粗	黄白色	やや軟	摩滅不明	摩滅不明	
21	弥生土器	甕	ＳＢ69	18.0	1/20	密	黄白色	やや軟	摩滅不明	摩滅不明	頸部に列点、頸部以下煤付着
22	弥生土器	甕（壺）？	包含層	5.0	100%	比密	赤褐色	比硬	ハケのちナデ	ケズリ	外面下半ケズリ調整
23	弥生土器	鉢（甕）？	ＳＢ71	3.5	100%	やや粗	淡赤褐色から黄褐色	やや軟	摩滅不明	摩滅不明	
24	弥生土器	壺(甕)	ＳＤ128	5.7	100%	密	にぶい黄褐色	硬	ハケ	摩滅不明	底部に木葉痕
25	弥生土器	鉢	ＳＤ140	13.0	70%	粗	黄白色	硬	ハケ	ハケ	刻み目を有する突帯が巡る
26	弥生土器	高杯？	ＳＢ69	9.0	100%	比密	茶褐色	やや軟	摩滅不明	ハケ	
27	弥生土器	小形壺	ＳＢ121	3.1	100%	密	黄白色	軟	摩滅不明	摩滅不明	
28	弥生土器	小形壺	ＳＢ121	5.2	100%	密	黄白色	やや軟	摩滅不明	ハケ	

29	弥生土器	高杯	包含層	17.4	1/12	密	黄褐色	比硬	ミガキ	ミガキ	
30	弥生土器	高杯	ＳＸ126	25.2	1/16	密	赤褐色	やや軟	摩滅不明	摩滅不明	
31	弥生土器	高杯	ＳＸ126	25.2	1/8	密	黄白色	比硬	ミガキ	摩滅不明	
32	弥生土器	高杯	ＳＸ10	19.0	1/10	密	明茶褐色	やや軟	ミガキ？	ハケ	
33	弥生土器	高杯	包含層	25.7	4/5	やや粗	黄橙色	やや軟	ハケ→ミガキ	ミガキ	２段の杯部、透し３残存、円盤充填技法
34	弥生土器	高杯	包含層	21.6	1/8	密	明茶褐色	硬	ナデ	ハケ	脚部有段、段部に２条の擬凹線、透し。
35	弥生土器	高杯	ＳＤ76	19.4	1/10	密	黄白色	硬	ハケナデ	ハケ	脚部有段、段部に刻み目、透し、脚端部に４条の擬凹線
36	弥生土器	高杯	ＳＤ128	4.8	100%	やや粗	黄白色	やや軟	摩滅不明	ミガキ？	円盤充填技法
37	弥生土器	高杯	ＳＢ32	3.0	70%	やや粗	淡黄白色	軟	摩滅不明	ミガキ	7条の擬凹線
38	弥生土器	高杯	包含層	3.5	30%	密	明茶褐色	硬	ナデ	ミガキ	脚部に３条の擬凹線と多孔
39	弥生土器	高杯	ＳＢ75	4.2	80%	密	黄白色	硬	ナデ	ハケ	２条の擬凹線
40	弥生土器	高杯	ＳＤ76	5.6	70%	密	淡赤褐色	軟	ナデ	ミガキ	
41	弥生土器	高杯	ＳＢ71	10.8	90%	密	茶褐色	硬	ナデ	ミガキ	円盤充填技法
42	弥生土器	高杯	ＳＸ107	9.1	1/2	やや粗	茶褐色	比硬	ナデ	ミガキ	中実の脚部
43	弥生土器	高杯	包含層	8.6	60%	やや粗	茶褐色と赤褐色	比硬	摩滅不明	ミガキ	杯部と脚部で粘土を使い分ける
44	弥生土器	高杯	ＳＸ79	11.8	30%	密	黄白色	比硬	ハケ	ナデ	
45	弥生土器	高杯	ＳＢ69	16.3	70%	密	黄白色	やや軟	ハケ	摩滅不明	脚部有段、下段３方透かし、接合時にハケ調整
46	弥生土器	器台	ＳＢ75	15.9	1/6	密	暗茶褐色	硬	ナデ	ハケ・ミガキ	ハケ調整の後粗くミガキ調整
47	弥生土器	器台	ＳＢ71	20.0	1/2	密	淡赤褐色～黄白色	硬	ナデ	ミガキ	12個、円形浮文、擬凹線文
48	須恵器	杯蓋	片山５号墳	11.1	1/6	密	青灰色	硬	ヨコナデ	ヨコナデ	
49	須恵器	杯身	片山５号墳	11.1	1/12	密	青灰色	硬	ヨコナデ	ヨコナデ	底部外面ヘラ切り未調整
50	須恵器	杯身	片山５号墳	13.6	1/2	密	青灰色	硬	ヨコナデ	ヨコナデ	底部外面ヘラ切り未調整
51	須恵器	杯身	片山５号墳	13.2	100%	密	青灰色	硬	ヨコナデ	ヨコナデ	底部外面ヘラ切り未調整
52	須恵器	杯蓋	片山５号墳	14.2	1/9	密	青灰色	硬	ヨコナデ	ヨコナデ	
53	須恵器	杯身	片山５号墳	13.6	1/6	密	青灰色	硬	ヨコナデ	ヨコナデ	
54	須恵器	杯身	片山５号墳	14.0	1/3	密	淡灰色	やや軟	ヨコナデ	ヨコナデ	底部外面ヘラ切り未調整
55	須恵器	杯身	片山５号墳	15.0	1/9	密	青灰色	硬	ヨコナデ	ヨコナデ	底部外面ヘラ切り未調整
56	須恵器	壺	包含層	12.6	1/2	密	青灰色	硬	ヨコナデ	ケズリ	

観察表の見方：法量は基本的に口径(復原を含む)を示すが、口縁部が残存していない場合は底径もしくは頸部径で示した。残存率も、口縁部残存のものは口径(復原を含む)に対する残存部位の割合を分数比で示したが、その他のものは、図化した部分に占める残存部位の程度を百分率で表した。また、胎土・焼成における「比」は「比較的」を意味する。

注１　伊賀高弘・萩谷良太「３.木津地区所在遺跡　平成９年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第85冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1998

注２　調査に参加していただいた調査補助員・整理員は以下の通りである(五十音順・敬称略)
秋本哲治・井上綾子・岩戸晶子・奥村茂輝・小原志奈子・勝山紀子・久田　亨・小西千春・小松厚子・坂手華子・佐藤美穂・城本愛美・須田千代・関野雅子・高橋純子・田中美恵子・筒井由香・萩谷良太・林　益美・福島　緑・堀　大輔・前山華苗子・松田早映子・宮崎　敦・室林由香・山口良太・山田三喜子・山中道代・山本弥生・和田明日香

注３　都出比呂志は、主柱配置原理における東・西日本の相違を見いだし、住居の平面形や規模の大小に関係なく、その配列を東の主柱配列有軸対称構造と西の主柱配列求心構造・二本主柱配列構造の３類型を抽出した(都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』　岩波書店　1989)。

注４　都出比呂志は、炉の構造を「地床炉」と「灰穴炉」に二分し、後者は西日本に多いことを指摘した(都出比呂志　前掲注３文献)。

注５　傾斜地に営まれた竪穴構造の住居のことで、「半竪穴半平地式住居」(森岡秀人)、「傾斜地性住居」(石野博信)ともいう。

注６　同じ片山古墳群に属す４号墳では床面がよく残されており、玄室のみ礫敷が施されるという床構造の区別が認められた(伊賀高弘・萩谷良太　前掲注１参照)。

注７　１次・２次調査を通じて、第Ⅴ様式の一つのメルクマールとされる長頸壺形土器が、出土土器全体に対して占める割合は少ない。山城地域の後期初頭の土器様相を考える上で、今後検討を重ねたい。

注８　森岡秀人「山城地域」(『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ）　1989

注９　森岡秀人「弥生時代抗争の東方波及－高地性集落の動態を中心に－」(『考古学研究』第43巻第３号　考古学研究会）　1996、「高地性集落研究の現状と課題－保存と活用を含めて－」(『明日への文化財』第41号　文化財保存全国協議会）　1998、「高地性集落が語る列島の動乱－倭国大乱と鉄のルート－」(『別冊歴史読本　最前線シリーズ〈日本古代史〔争乱〕の最前線〉』　新人物往来社）　1998、「年代論と邪馬台国論争」(『古代史の論点④権力と国家と戦争』　小学館）　1998、「弥生集落研究の新動向(Ⅰ)－小特集「瀬戸内東部地域に寄せて－」(『みずほ』第30号　大和弥生文化の会）　1999

注10　江戸期の東大寺大仏殿再建および材木の運漕については、江戸期に編纂された『大佛殿再建記』『公慶上人年譜』『大佛殿再興発願以来諸興隆略記』に詳細に記述されている(堀池春峰「元禄時代・大仏殿虹梁の運漕」(『大和文化研究』第５巻第８号）　1960、平岡定海「江戸時代における東大寺大仏殿の再興について－勧修寺蔵「大佛殿再興発願以来諸興隆略記」を中心として」(『南都佛教』第24號　南都佛教研究會・東大寺）　1970)。

５．稲葉遺跡第５次発掘調査概要

１．はじめに

今回の調査は、西日本旅客鉄道株式会社（ＪＲ西日本）の片町線輸送改善計画による、京田辺駅改良工事に伴って実施した。現地調査の期間は平成11年７月７日から同年８月６日まで、調査面積は約290㎡である。調査に要した費用は、全額、西日本旅客鉄道株式会社が負担した。

稲葉遺跡はＪＲ西日本京田辺駅西側から近鉄新田辺駅西側まで、東西約550m、南北約950mにわたって広がる遺跡である。稲葉遺跡ではこれまでに４次の発掘調査が行われているが、京都府田辺総合庁舎建設に伴って行われた第１次調査で時期不明の溝状遺構が検出され(注1)、ショッピングセンター建設に伴って行われた第４次調査で弥生時代の方形周溝墓が検出されている(注2)ほかは、顕著な遺構は認められない。今回の調査地は京田辺市田辺久戸２丁目１番地ほかに所在する。

今回の調査では、京田辺駅の駅舎北側に、下り線プラットホームに平行する南北約60mの細長い調査区を設定する予定で掘削を始めたが、調査区北端から約20m付近で埋設管が調査予定地を横断していることが判明したために、この部分の掘削を中止し、埋設管より北側（１区）と南側（２区）のふたつの調査区に分けて調査を行った。

２．調査成果

(1) １区

西側では枕木を転用した土留め工が行われており、その東側では枕木が元の位置を保ったまま並んでいた。これらは、かつて利用されていた引き込み線とプラットホームであることが判明した。東側は引き込み線の敷設に伴って現地表下1.7m（標高25.6m）前後まで掘削されており、遺構面はすでに削平されているものと思われた。西側は、プラットホームの土留め工と調査区西辺とが近接しており、掘削によって調査区西壁が崩落するおそれが強く、また、土留め工に伴う攪乱を受けていることも予想されたため、プラットホーム検出面以下の掘削は行わなかった。１区は、危険防止のために、記録作業終了後、ただちに埋め戻した。

第60図　調査地位置図（1/25,000）

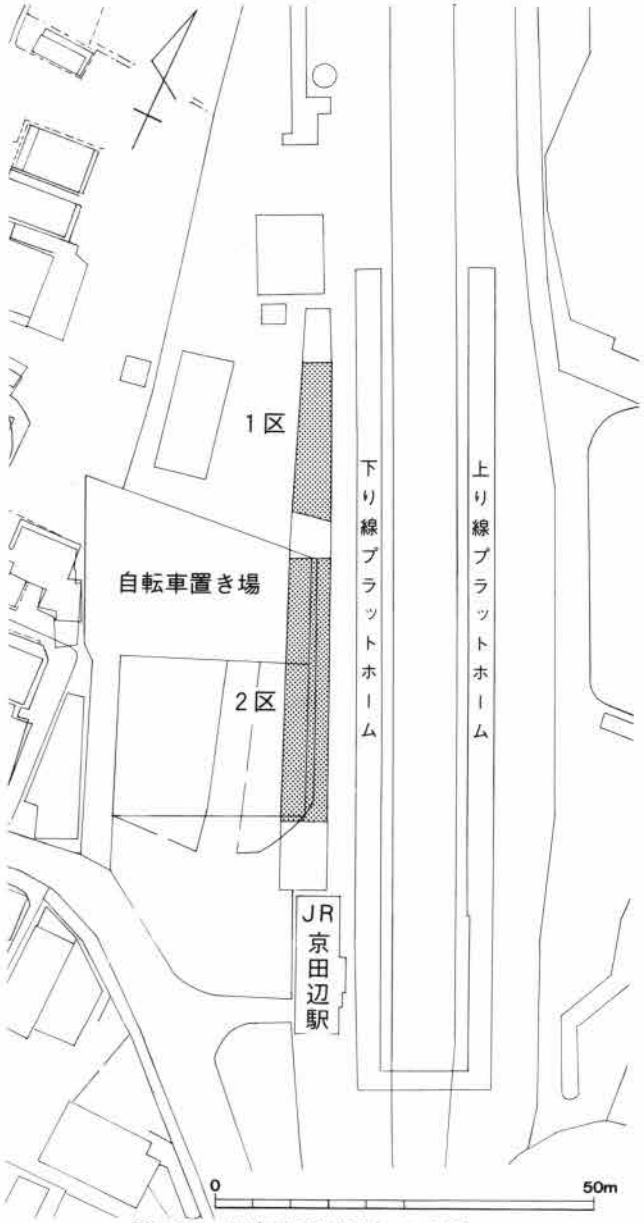
(2) ２区

１区で検出したプラットホームの延長線上で煉瓦積みのプラットホームを検出した。この東側は、１区と同様に、引き込み線敷設に伴って削平されており、遺構面はまったく残っていなかった。一方、西側は、煉瓦積みのプラットホームの掘形やプラット

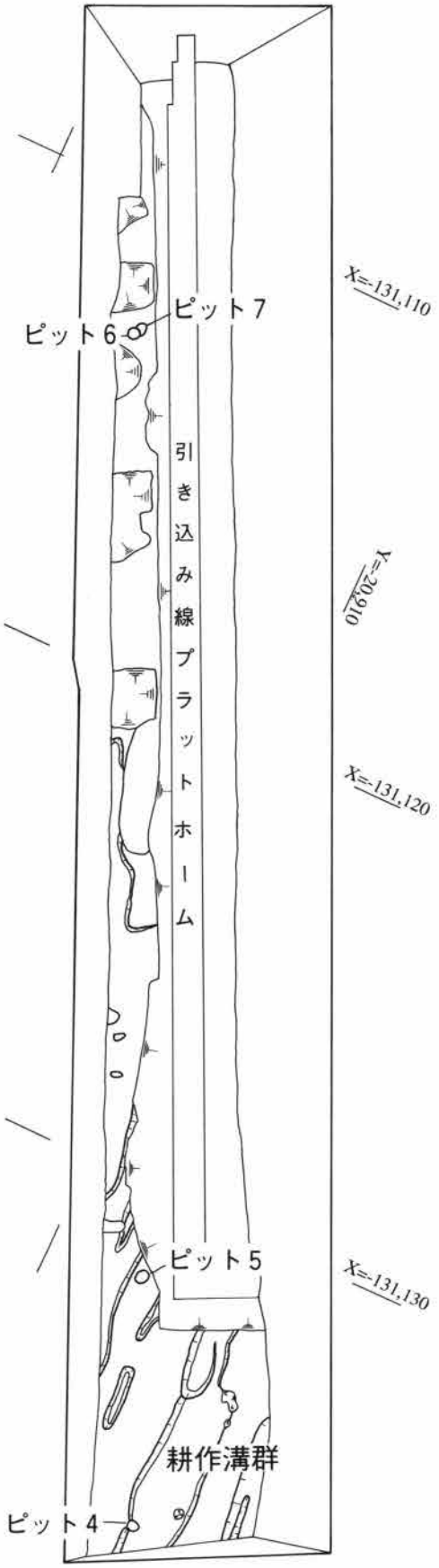
ホームに平行する建物の基礎掘形による攪乱を受けてはいるものの、遺構面が残っていた。

また、２区南端の北側約６ｍ付近で引き込み線が終わっており、これより南側では遺構面が残っていた。

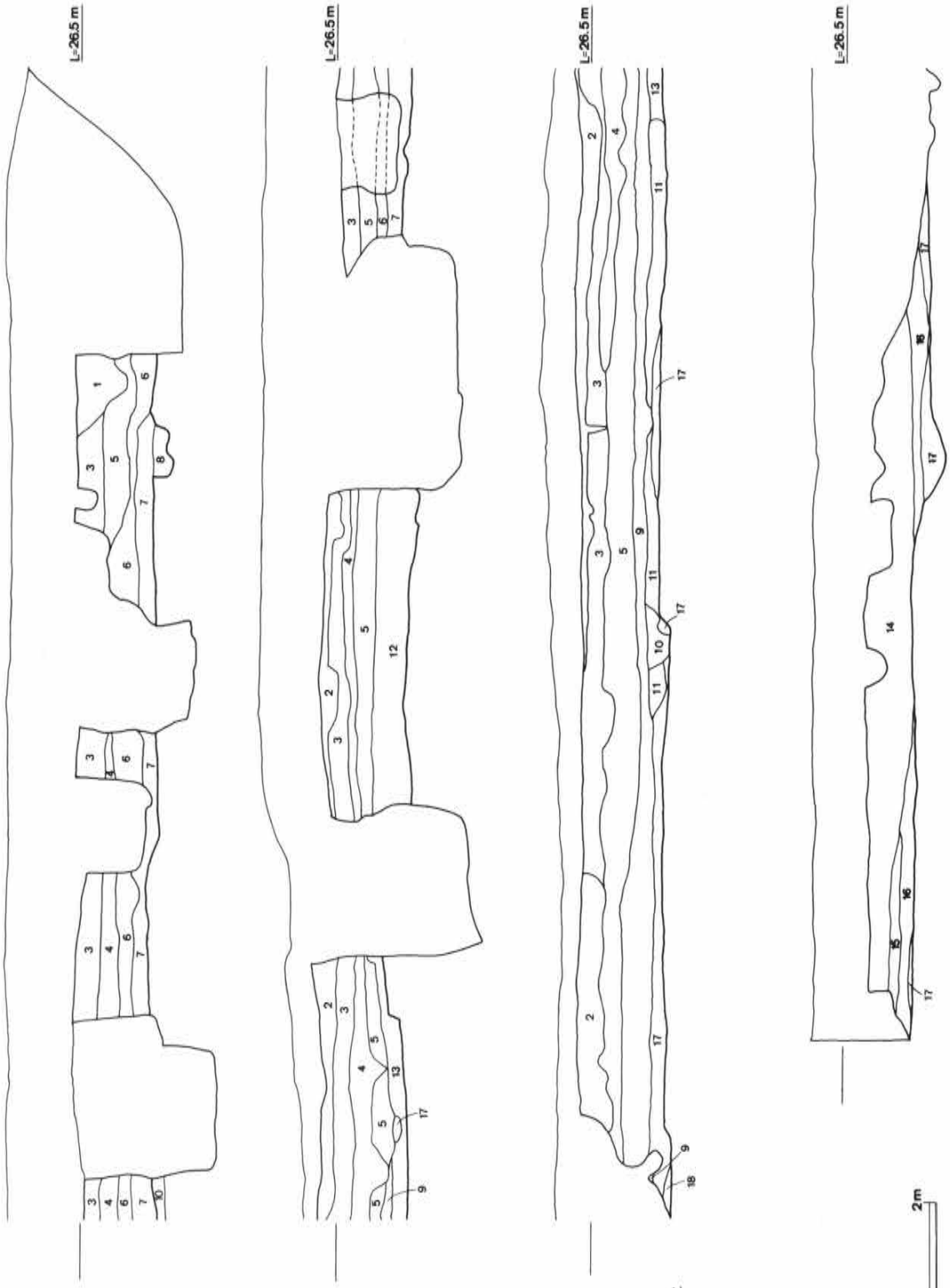
２区の基本層序は、現地表下約0.2～0.5m付近までの現代の盛土の下は、灰色～黄灰色の砂質土が水平に堆積しており、灰黄色砂質土の遺構検出面に達する。遺構検出面は標高25.9～26.0mで、南の方がやや高い。また、２区北端から12.3～14.8mの範囲にのみ暗茶褐色粘質土の遺物包含層が認められ、古



第61図　調査区配置図(1/1,000)

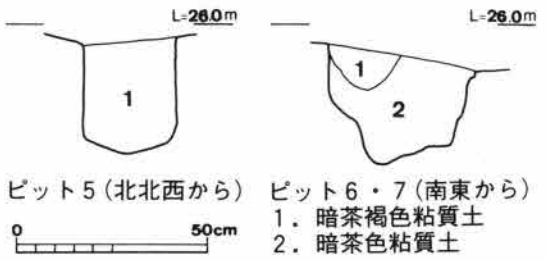


第62図　２区遺構平面図(1/150)

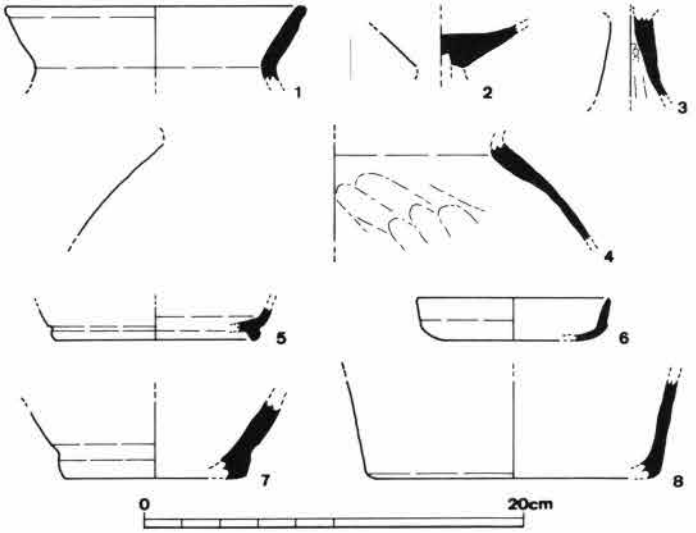


1. 灰色砂質土
2. 灰色礫混じり砂質土
3. 淡灰黄色砂質土
4. 明灰色砂質土
5. 灰黄色砂質土
6. 灰黄色砂混じり粘質土
7. 暗灰黄色砂質土
8. 灰黄色砂混じり粘質土
9. 灰黄色礫混じり砂質土
10. 暗灰黄色砂
11. 暗茶褐色礫混じり粘質土
12. 暗茶褐色粘質土（古墳時代包含層）
13. 茶褐色粘質土
14. 灰色礫混じり砂質土
15. 明灰色砂質土
16. 黄灰色砂質土
17. 茶褐色粘質土

第63図　２区西壁土層断面図(1/50)



第64図　ピット５・６・７断面図(1/20)



第65図　出土遺物実測図(1/4)

墳時代の土師器・須恵器が出土した。

２区で検出した遺構は耕作溝群とピットである。耕作溝群は２区の南端部分で検出した。耕作溝群の方位はほぼ南北で、調査地周辺に広く認められる方格地割りの方向と一致する。

ピットは合計４基検出したが、相互に関連の認められるものはなかった。このうち、ピット５は直径25cm、深さ30cmを測り、埋土は暗茶褐色粘質土である。ピット６は直径20cm、深さ10cmの小さなピットで埋土は暗茶褐色粘質土である。ピット７は長径40cm、短径20cmの楕円形で、ピット６に切られている。底部は凹凸が激しく、深さは最も深いところで30cmを測る。埋土は暗茶色粘質土である。

出土遺物は小さな破片が多く、実測可能なものも口径の復原などは誤差が大きいと考えられる。１～４は暗茶褐色粘質土から出土した古墳時代の土師器である。１は甕で、口縁端部に水平な面を持つ。２・３は高杯である。２は脚部が接合面で剝離している。４は壺である。内面はユビナデによる凹凸がみられる。５は重機掘削中に出土した奈良時代の須恵器杯である。６は土師器小皿、７は信楽焼鉢である。ともに２区南部で耕作溝群検出中に出土した。８は瓦質土器鉢である。底部は砂底である。プラットホームの掘形から出土した。

３．ま と め

今回の調査では、調査区の大半が引き込み線とプラットホームの掘形で攪乱を受けていたが、鉄道敷設以前には、調査地周辺にみられる方格地割りの方向と一致する南北方向の耕作溝群が存在したことが判明し、また、標高26m前後で検出した遺構面では、古墳時代以前の可能性が高いピットを確認した。今回の調査地より南側は、遺構面の遺存状況が今回の調査地よりも良好であることが予想されるので、建物跡などの検出される可能性が考えられる。

（森島康雄）

注１　平良泰久「東薪遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』京都府教育委員会　1977

注２　鷹野一太郎『稲葉遺跡第４次発掘調査概報』京田辺市教育委員会　1998

調査参加者　安達華孝・山中道代・山本佳子

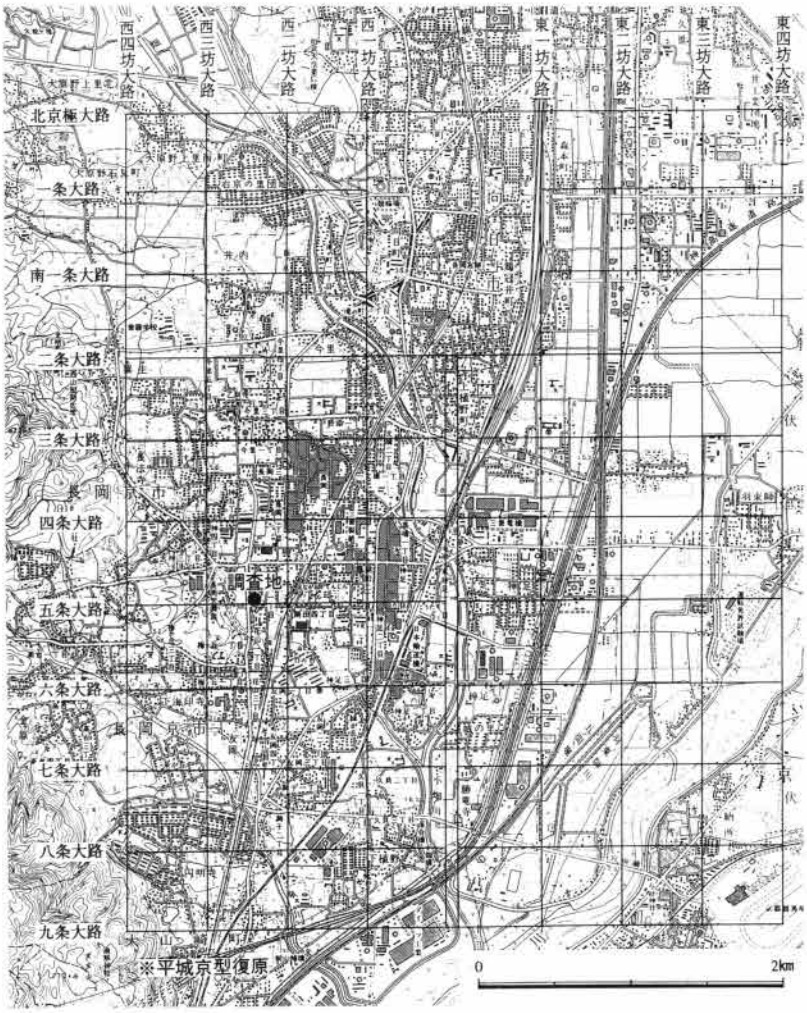
6．長岡京跡右京第６３５次(7ANKNZ-10地区)発掘調査概要

1．はじめに

今回の調査は、府道石見下海印寺線の拡幅に伴う事前調査で、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。調査地は、長岡京市天神１丁目地内に所在し、長岡京跡右京五条三坊五町(注1)(新呼称右京六条三坊七町)・五条大路(新条坊六条条間小路)の推定地にあたる。当初、五条大路北側溝(新条坊六条条間小路北側溝)の所在が予想された。

現地調査は当調査研究センター調査第２課課長補佐兼調査第４係長奥村清一郎、同調査員松尾史子が担当した。調査期間は平成11年5月20日から7月14日までで、調査面積は約280㎡である。

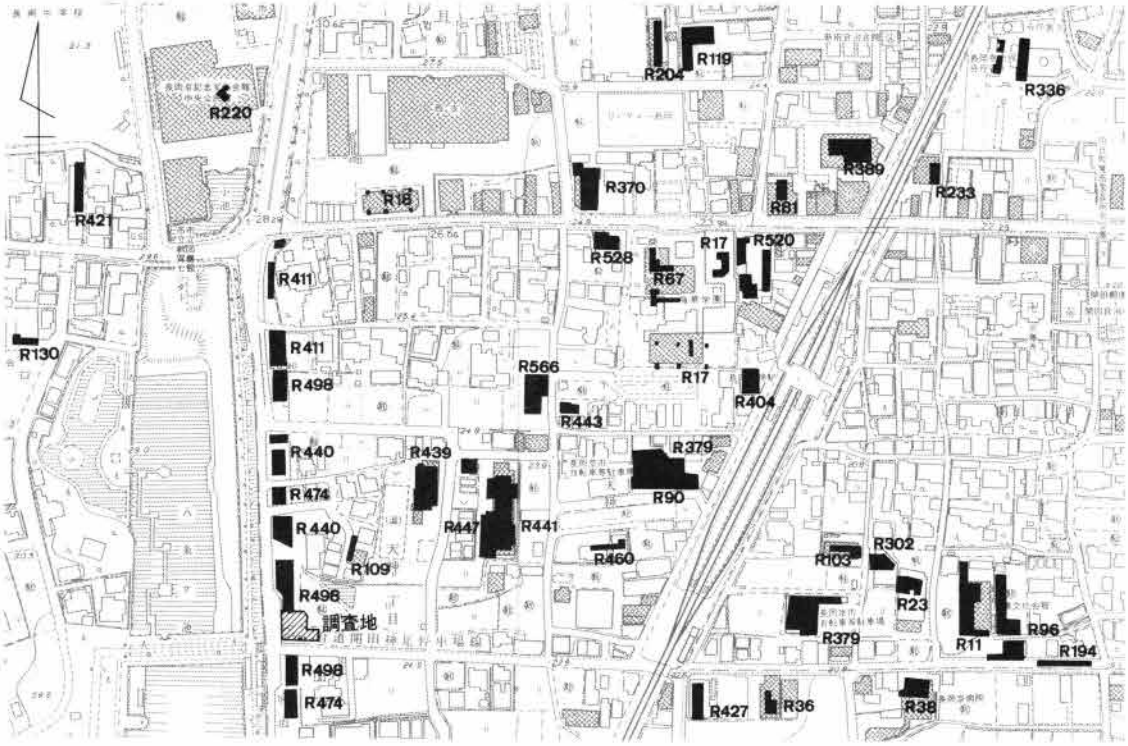
調査にあたっては、京都府乙訓土木事務所・京都府教育委員会・長岡京市教育委員会・向日市教育委員会・大山崎町教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・(財)向日市埋蔵文化財センター・(財)京都市埋蔵文化財研究所などの関係各機関および学生諸氏の指導・協力を得た。記して感謝したい(注2)。なお、調査に係る経費は、京都府乙訓土木事務所が全額負担した。



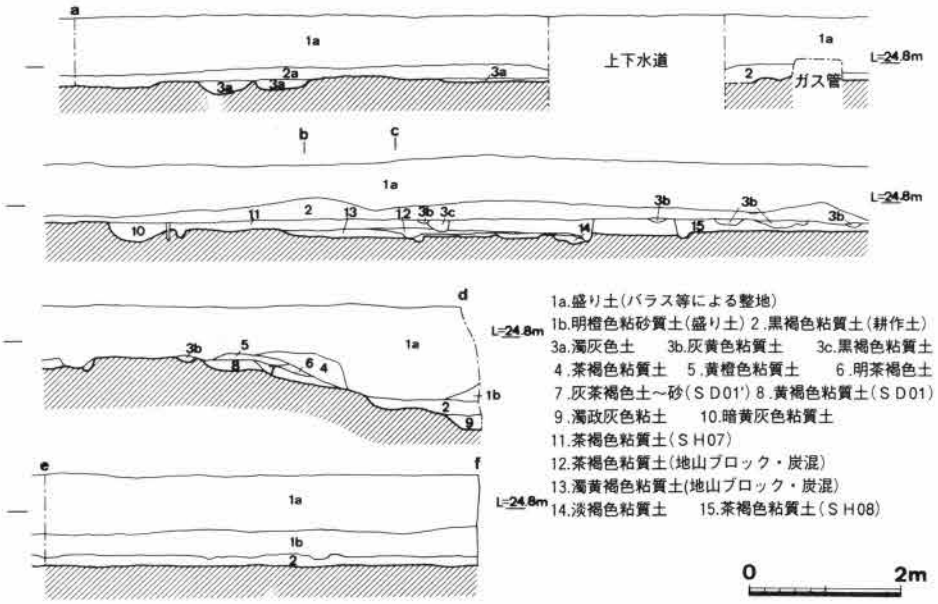
第66図　調査地位置図

2．地理的・歴史的環境

調査地は、向日丘陵の西に広がる緩扇状地の西南端に立地しており、標高は約24.5mである。付近は昭和の初め頃までは水田が広がっており、昭和40年代には宅地化が進んでいる。調査地南側は北側より約１m低くなっているが、その段差は当時の水田の畦境と一致する。調査地周辺ではこれまで府道の拡幅や宅地造成

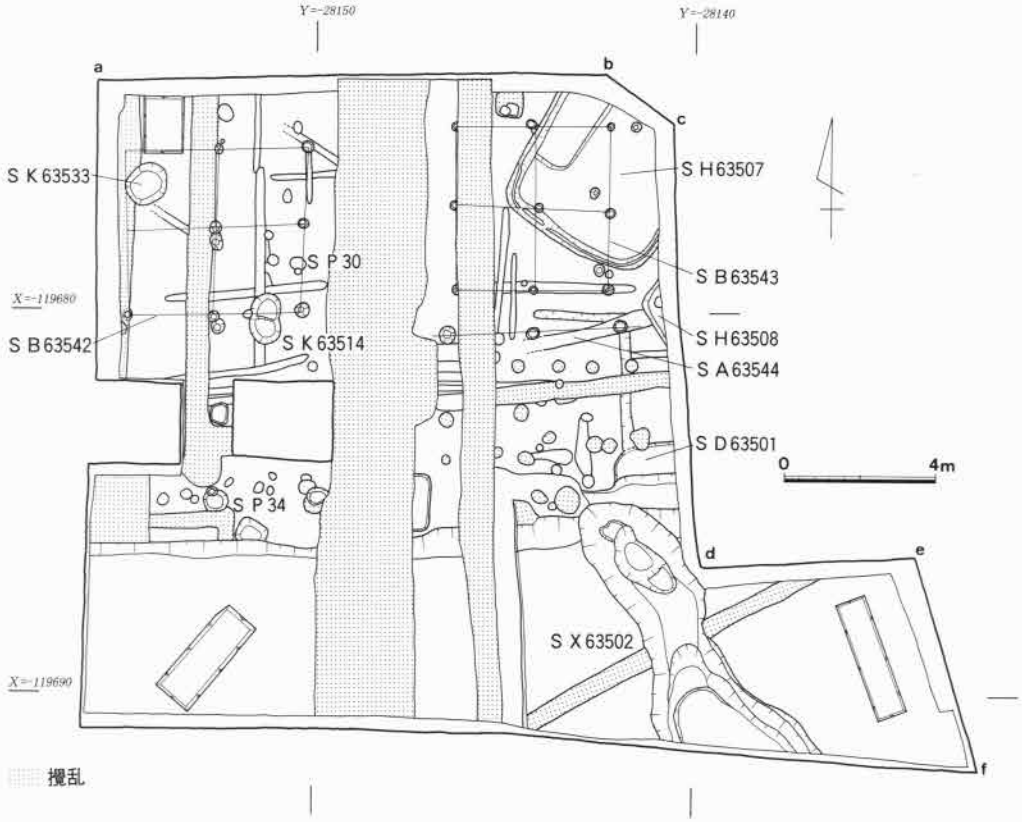


第67図　トレンチ配置図(1/5,000)



第68図　調査地北壁および東壁土層断面図

に伴って発掘調査が行われ、当地域の歴史的環境を復原する上で多くの成果が得られている。まず、右京第370次調査[注3]で弥生時代後期の溝や竪穴式住居跡、右京第447次調査[注4]で古墳時代前期および後期の竪穴式住居跡、右京第90次調査[注5]で古墳時代後期の竪穴式住居跡が確認され、弥生・古墳時代の集落が存在したことが明らかになった。長岡京期に関しては、隣接する右京第498次調査[注6]と右京第474次調査[注7]で掘立柱建物跡が検出されたほか、右京第441・447次調査で掘立柱建物群とともに鋳造炉群が確認され、官営鋳造工房跡と想定されている[注8]。また、右京第566次調査では平安時代から鎌倉時代の



第69図　遺構平面図

遺物や柱穴群が確認され、開田一帯で確認されている９世紀から10世紀前半にかけての遺跡とあわせて開田院との関係が指摘されている(注9)。また、府道沿いの各調査で旧石器が出土していることも注目される(注10)。

３．調　査　概　要

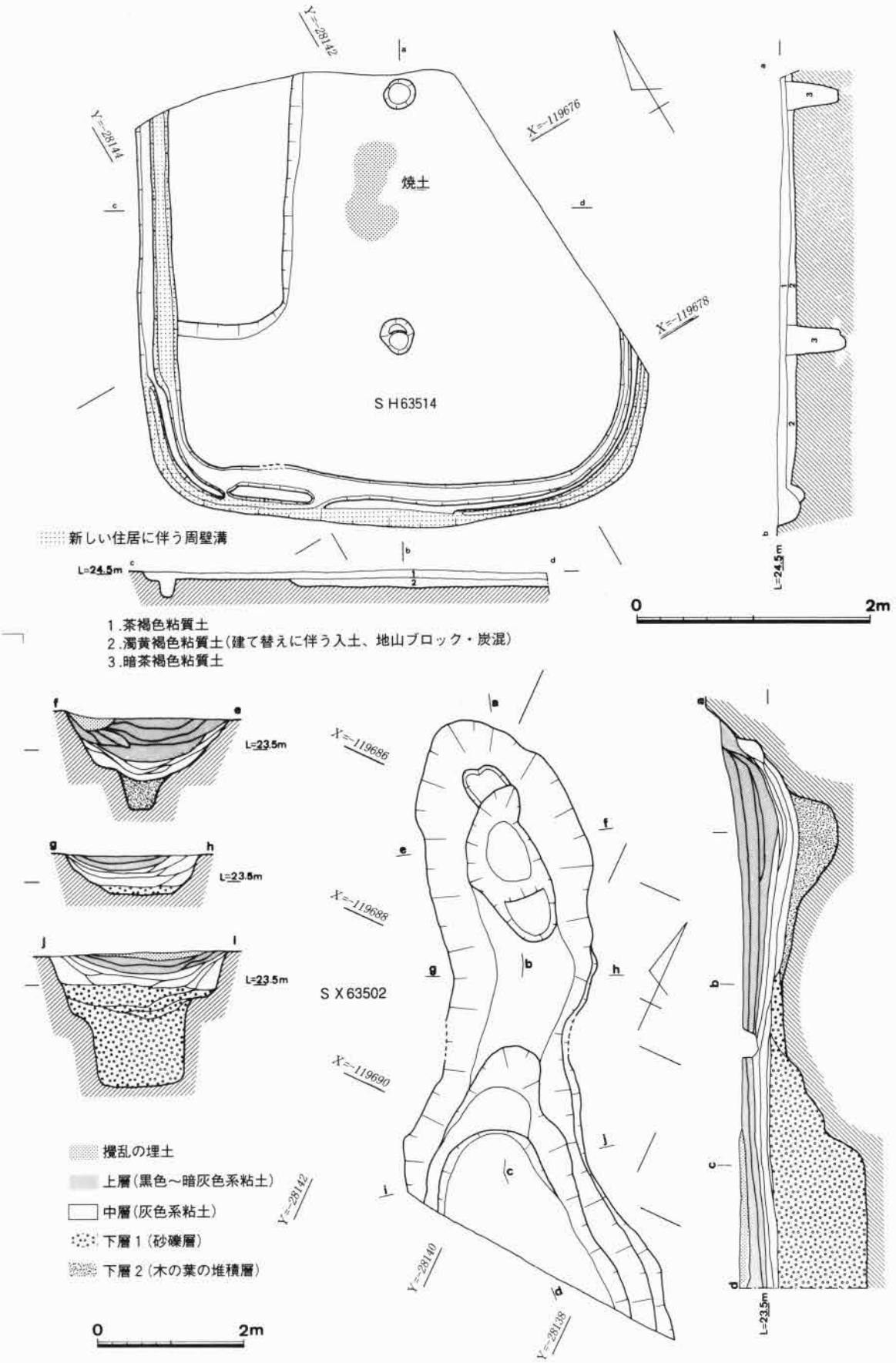
基本層序は、上から宅地造成に伴う盛土、水田耕作土、地山の順で、地山は小礫を部分的に含む黄褐色系粘質土である。遺構はすべて地山上面で検出した。また、調査地南西および南東隅にサブトレンチを設けて、下層の確認を行ったところ、約１ｍ下で褐色砂礫層に達した。

調査の結果、古墳時代および長岡京期から平安時代の遺構を確認することができた。以下時代を追って主な遺構・遺物の概要を報告する。

(1)検出遺構

Ａ．古墳時代の遺構

竪穴式住居跡ＳＨ63507　平面形が隅丸長方形で、主柱は２本ある。建て替えが１回行われており、古い住居の規模は一辺約4.1ｍ×5.0ｍで深さ約15㎝、新しい住居は一辺約4.3ｍ×5.3ｍで深さ約25㎝を測る。古い住居の床面は、北西側で地山を長方形状に掘り残している。周辺と約８㎝の高低差があることからベッド状遺構と考える。新しい住居は古い住居の西側および南側を約10㎝拡張したものである。周壁溝は、南側は新しく掘り直しているが、西側は古い溝を踏襲して

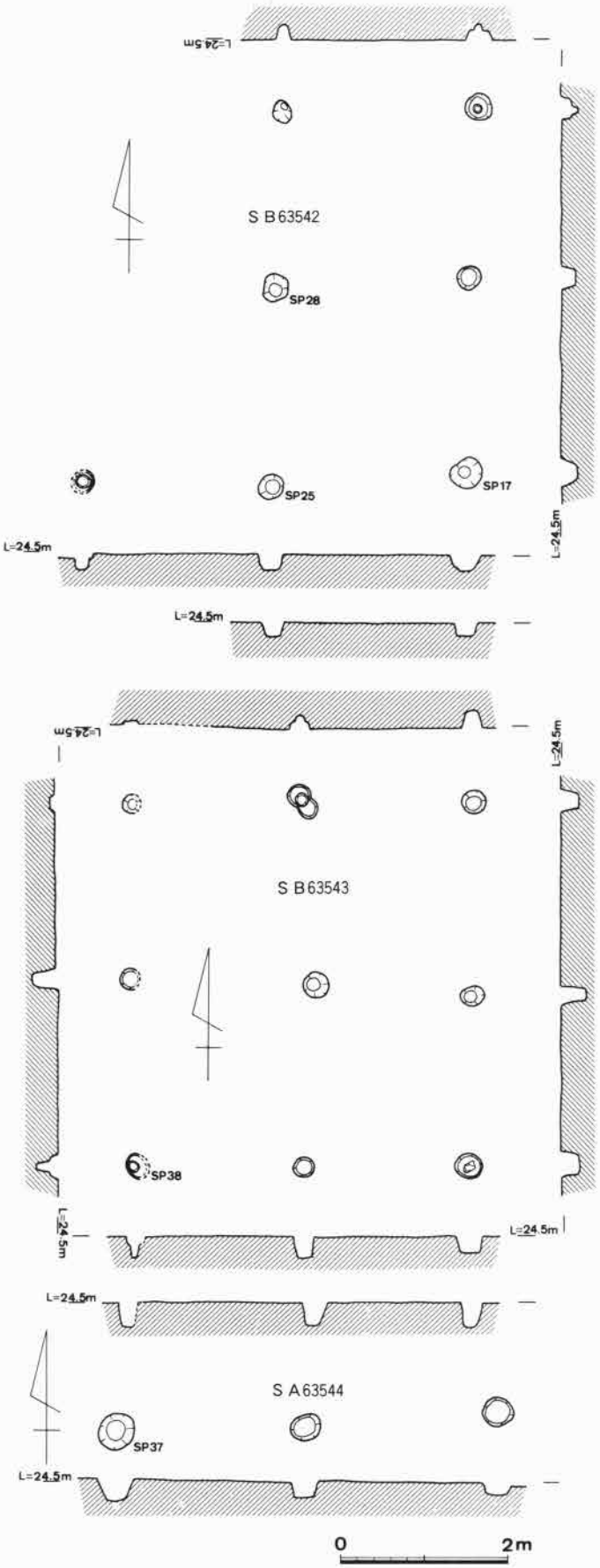


第70図　S H63514・S X63502実測図

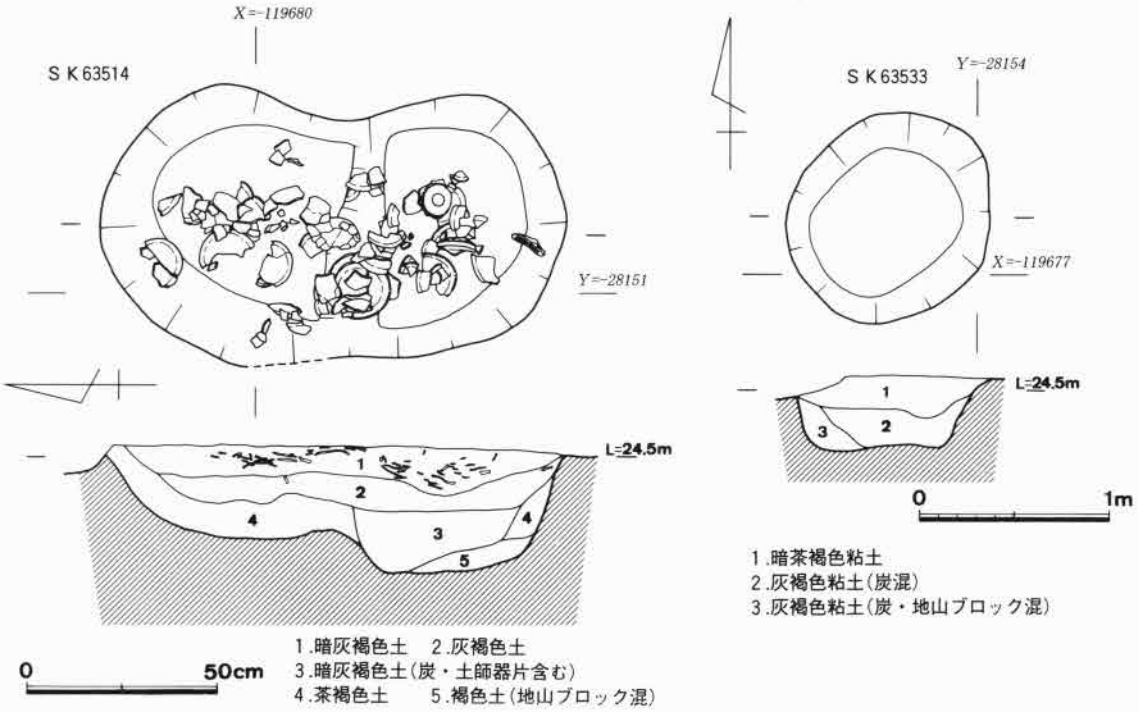
いるため、西南隅で食い違いになっている。また、古い床面からベッド状遺構のレベルまで炭混じりの土を敷き詰め、その上を新たな床面として使用している。中央やや北よりには焼土が約1cm堆積しており、炉があったと推定できる。周壁溝の埋土から古墳時代の土師器甕が出土した。遺物の残りは非常に悪いが、胎土等から古墳時代前期と判断した。

竪穴式住居跡ＳＨ63508　北西隅部分のみ確認した。本体は調査地外に続く。出土遺物が無く、時期確定の根拠はないが、ＳＨ63507と同時期のものと考えておきたい。

溝状遺構ＳＸ63502　平面は北西から南東方向に走る溝状の遺構で、南側は調査地外へ続く。幅1.6～2m・長さ約6.5m分を検出した。遺構は南に向かって深くなり、南壁で深さ約1.8mである。また、北側1/3は井戸状に深く掘り窪められており、深さ約1.5mを測る。埋土は大きく3層に分けることができ、上層は炭・土器を多量に含む粘土層、中層は薄い粘土の互層、下層は井戸状の掘り込み部分が木の葉の堆積層で、溝の部分は砂礫層である。上層から古墳時代前期の遺物が出土した。土層を観察するかぎりでは、井戸状掘り込みと溝に重複関係は無く、当初は井戸もしくは貯水槽とそれに取り付く溝という一連のものとして機能してい



第71図　ＳＢ63542・63543、ＳＡ63544実測図



第72図　S K63514・63533実測図

たと考えられる。井戸状掘り込みが埋没して、機能が停止した後の埋没段階で、溝部分に土砂が流れ込んで砂礫が堆積し、浅い溝状になった段階でゴミ捨て場として利用されたと考えられる。

B．平安時代の遺構

掘立柱建物跡S B63542・S B63543　いずれも総柱建物跡で、S B63542は梁間２間(4.4m)×桁行２間(4.6m)分を、S B63543は梁間２間(4.3m)×桁行２間(4.1m)分を確認したが、調査地外へ続く可能性がある。柱間は不規則で、2.0～2.3mを測る。柱穴はいずれも小規模で直径0.2～0.3mである。柱穴から平安時代の土器や瓦が出土した。

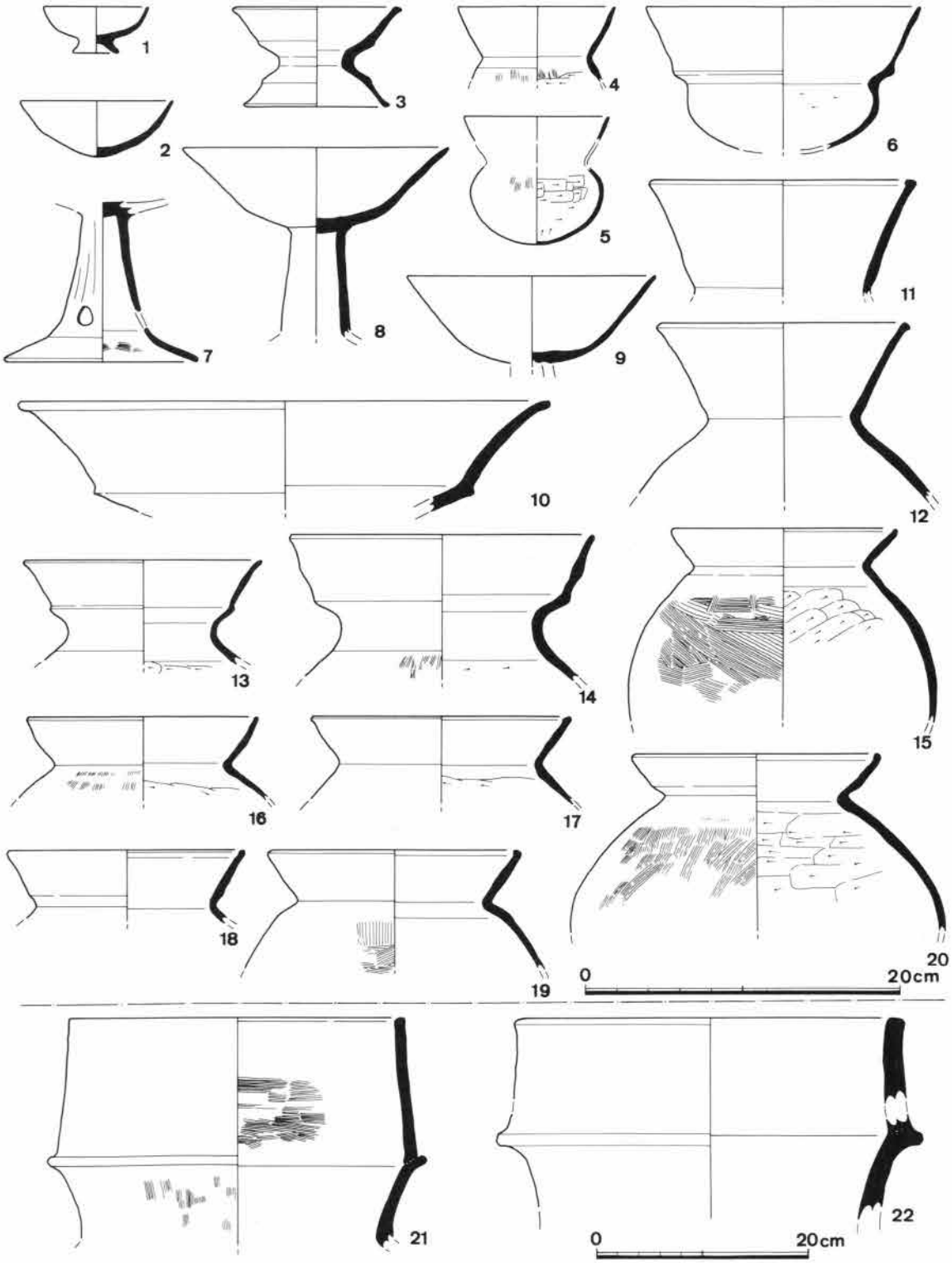
柵S A63544　掘立柱建物跡63543の南側に東西に並ぶピットで、２間分検出した。柱間寸法は2.9m等間である。ピットはいずれも小規模で直径0.2～0.3mである。柱穴から平安時代の土器が出土した。

土坑S K 63514　平面形が中央で少しくびれる楕円形で、長辺約1.2m・短辺約0.5m・深さ約0.5mである。最上層で土師器皿等がまとまって出土した。出土遺物の年代から、10世紀代のものと考えられる。

土坑S K 63533　平面形が直径約１mの円形の土坑で、深さ0.4mである。チャートの剝片が１点出土した。

その他　L字に並ぶ長辺0.5～0.6mの隅丸方形の柱穴を３基確認した。建物になる可能性がある。S P34の底には薄い板状のもの(檜皮か)が３・４枚重ねて敷いてあり(注11)、長岡京期から平安時代前期の遺物が出土した。

(2)出土遺物



第73図　ＳＸ63502出土遺物実測図

出土遺物は遺物整理箱で20箱分ある。大半がＳＸ63502およびＳＫ63514からの出土で、古墳時代前期の土師器、長岡京期および平安時代の土師器・須恵器・瓦・黒色土器・緑釉陶器・無釉陶器・軒平瓦などのほか、時期不明の剝片(チャート)がある。

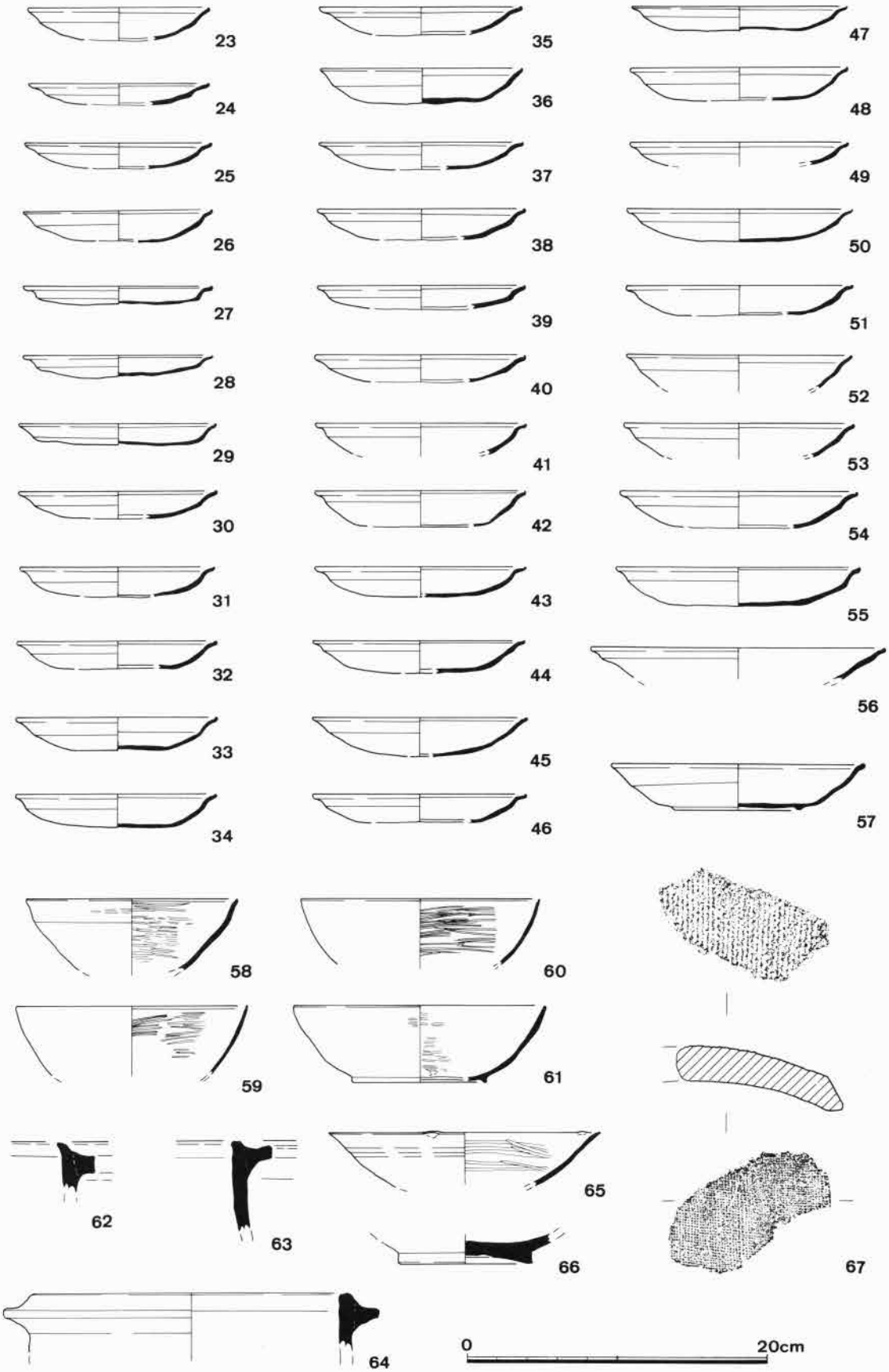
①古墳時代の遺物　古墳時代の遺物はコンテナ・パットで10箱分あり、出土遺物の半分を占める。ほとんど溝状遺構ＳＸ63502から出土した。すべて土師器で、須恵器は出土していない。１は山陰系の低脚杯である。２は小型鉢である。摩滅がひどく調整は不明である。３は鼓形器台である。外面はナデ、内面はケズリで調整する。４・５は小型丸底壺で、体部外面はハケメ、内面はケズリで調整する。６は複合口縁小型鉢である。7～10は高杯である。杯部の稜が明瞭なもの(10)と不明瞭なもの(８・９)がある。７は脚部のみで、三方に透かしがある。外面はミガキ、内面はケズリ、裾部外面はナデ、内面はハケメで調整する。11・12は直口壺で、11は口縁端部が内側に肥厚し、12は外側に端面を持つ。13・14は、山陰系の複合口縁壺である。15～20は甕である。いずれも体部外面にハケメ調整をした後、頸部を強くヨコナデする。内面は頸部より少し下からケズリで調整する。15～17・19・20は口縁部が内湾しながら立ち上がり、端部が内側に肥厚する。17は口縁端部の内側に、19・20は外側に端面をもつが、15・16は丸く収まる。18は口縁部が直線的に立ち上がり、口縁端部は肥厚して丸く収まる。21・22は中部瀬戸内系の複合口縁壺である。いずれも、口縁部が内傾する大型の壺である[注12]。胎土は21が淡褐色、22が淡黄褐色で石英や長石を多量に含む。これらの遺物の時期は布留Ⅱ期と考えられる[注13]。その他、砥石が１点出土した(図版56－ｂ)。

②平安時代の遺物　平安時代の遺物はＳＫ63514および掘立柱建物跡の柱穴から出土した。

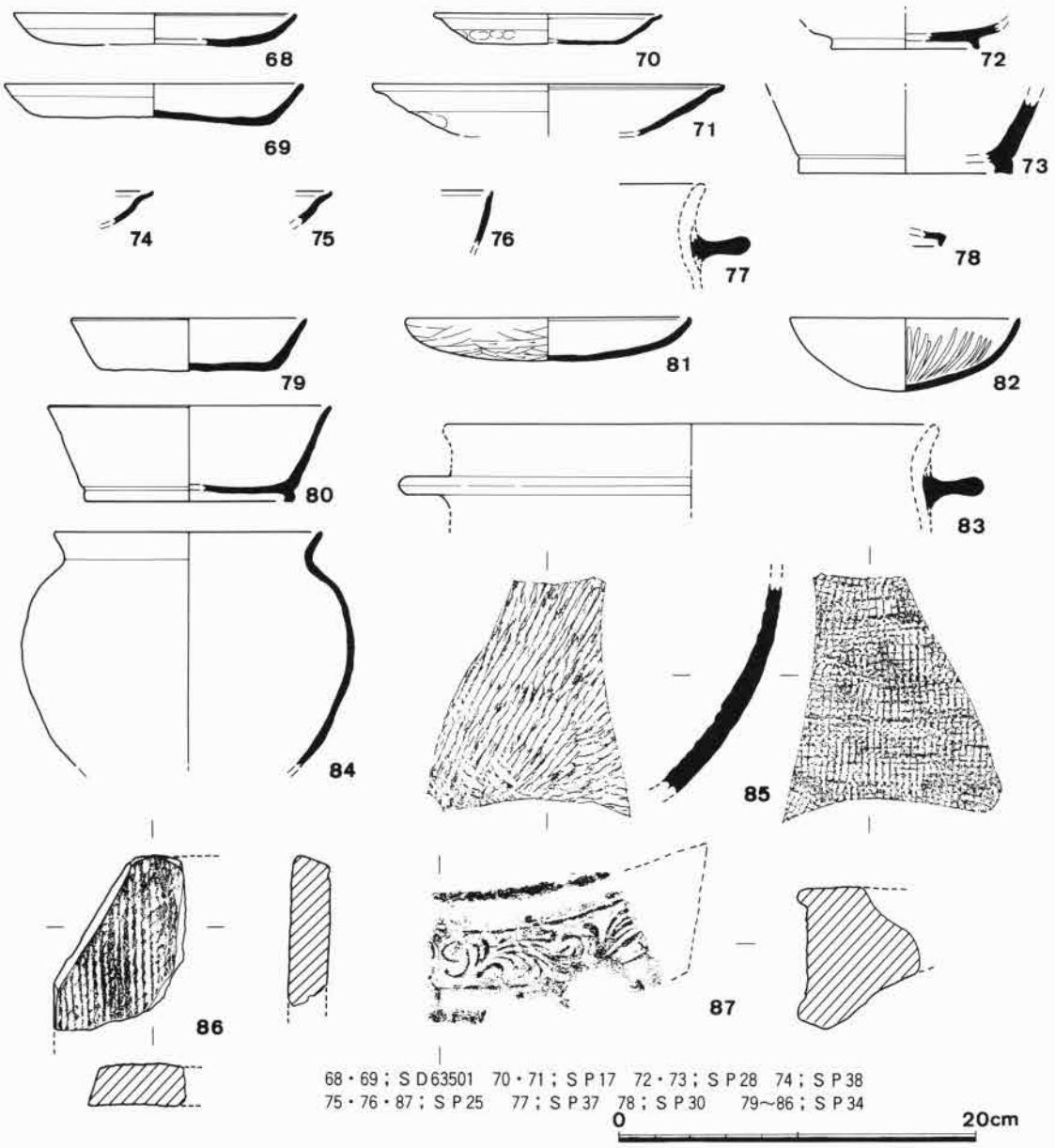
ＳＫ63514出土遺物(23～67)　23～57は土師器杯・皿である。口径は12～15cmのものがほとんどで、13cmに集中する。いずれも薄手で、口縁部を強いヨコナデによって外反させ、口縁端部をつまみ上げる。口縁部下半から底部にかけては指頭圧痕が残る。57は高台がつくタイプである。58～61は黒色土器Ａ類の椀で、器壁は薄くミガキはていねいである。62～64は摂津型の羽釜である。65・66は無釉陶器で、65は輪花椀、66は蛇の目高台を有する底部である。いずれもミガキは粗い。67は外面に縄目タタキ痕を残す平瓦である。これらの遺物は、土師器の器壁が薄く杯・皿の差が不明瞭であること、法量が全体に小さいこと、および羽釜の形態から平安京出土土器編年[注14]のⅢ期中段階併行のものと考える。

ＳＰ63534出土遺物(79～86)　79・80・85は須恵器である。85は甕の体部で、外面に格子目タタキ、内面に平行タタキを施す。類例は右京第451・515次調査[注15]でみられる。81～84は土師器である。81は杯で、口縁端部をわずかに肥厚させる。口縁部および底部にケズリで調整する。82は椀で、内面に放射状の暗文を施す。外面の調整は摩滅がひどく不明である。83は河内Ａ型羽釜の鍔と考えられる。84は甕である。86は隅平瓦(道具瓦の一種)で、隅切りがされている。凸面には縄目タタキ痕が、凹面には布目圧痕が残る。これらの遺物の時期は、平安時代前期と考えられる。

その他の遺構出土の遺物　68と69は土師器皿でＳＤ63501から出土した。口縁端部が肥厚し、外面はケズリで調整する。70・71は土師器杯で、ＳＰ17から出土した。いずれも薄手で口縁部を強いヨコナデにより外反させる。72・73はＳＰ28から出土した。72は緑釉陶器皿の底部である。削り出し高台で、高台部分を除き全面に施釉する。内面には重ね焼きの痕が残る。74は土師器杯でＳＰ38から出土した。75は土師器杯、76は黒色土器椀、87は均整唐草文軒平瓦で、ＳＰ25から



第74図　S K63514出土遺物実測図



第75図　出土遺物実測図

出土した。87は中心飾りに対向C字形を置き、外区の珠文の間隔は広い。同文の軒平瓦が京都市中京郵便局の調査で出土しており、平安時代中頃のものと考えられている。(注16) 77は河内A型羽釜(注17)の鍔で、SP37から出土した。78は須恵器杯蓋の口縁端部で、SP30から出土した。

その他SK63533からチャートの剝片が出土した(注18)(図版56－a)。

4．まとめ

今回の調査では、五条大路北側溝の有無は解明できなかったが、古墳時代および平安時代の土地利用の状況が明らかになった。各時期の成果を整理しておくと次のようになる。

まず、古墳時代については竪穴式住居跡および井戸とそれに付属する溝を確認し、古墳時代前期の土器が多量に出土した。遺物の中に地域色を残すものがある点が興味深い。周辺の調査との

関連をみると、北に隣接する右京第498次調査[注19]で前期の遺物が出土した溝が検出されており、さらに調査地から1.5m北東の右京第447次調査[注20]では古墳時代前期から後期の竪穴式住居跡が数基確認されている。これらの遺構は一つの集落としてとらえることができ、当時の集落の範囲を検討する上で重要な資料を追加したといえる。

平安時代については掘立柱建物跡2棟分と柵列および土坑を確認し、土坑からは平安時代中期の良好な資料を得ることができた。建物および柵列に関しては、柱穴から出土した遺物の時期が平安時代で、瓦器などの新しい時期の遺物が含まれていないことから、現段階では平安時代の遺構と考えておきたい。また、冒頭で述べたように、開田一帯では平安時代の遺構・遺物が集中し、遺物の中には瓦がしばしばみられる[注21]。これらの存在は、都が平安京に移った後の土地利用の状況、特に開田院との関係を考える上で興味深い[注22]。

最後に、五条大路北側溝について少し触れておきたい。今回の調査では、条坊側溝に比定できる遺構はなく[注23]、その存否を解明するには至らなかった。この点については、条坊制の施行が実際にどこまで行われたかという問題に関わってくることから、周辺の調査成果を待って検討する必要があろう。

(松尾史子)

注1　長岡京跡の条坊呼称については、三重大学山中　章氏により新条坊が提唱されているが、ここでは旧呼称を用い、括弧書きで新呼称を記載する。なお、第66図は平城京型復原によるものである。山中氏の論考については「古代条坊制論」(『考古学研究』38－4　考古学研究会　1992)を参照されたい。

注2　現地調査および整理作業にあたっては、以下の方々にお世話になった(順不同・敬称略)。
安達華孝・壱岐一哉・石丸和正・今林信祐・岩戸昌子・尾上　忍・奥島かおり・奥田久美子・楠木美奈那・久米政代・小山達也・小林桂子・内藤チエ・中村美也・西村敏子・西村美智子・長谷川マチ子・平林千佳・古川智子・穂積優子・岩崎　誠・小田桐淳・木村泰彦・中島皆夫・花村　潔・山本輝雄・古閑正浩・植山　茂・中島信親・清水みき・中尾芳正

注3　山本輝雄・木村泰彦「右京第370次調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成3年度1993)

注4　小田桐淳「長岡京跡右京第447次調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第32冊　(財)長岡京市埋蔵文化財センター)　1994

注5　岩崎　誠ほか「長岡京跡右京第90次調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第9冊　(財)長岡京市埋蔵文化財センター)　1982

注6　奈良康正「長岡京跡右京第498次」(『京都府遺跡調査概報』第70冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1996

注7　野島　永「長岡京跡右京第474次」(『京都府遺跡調査概報』第66冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1995

注8　注4に同じ

注9　原　秀樹「長岡京跡右京第566次調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第38冊　(財)長岡京市

埋蔵文化財センター）　1998

注10　石尾正信「長岡京跡右京第440次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第58冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1994
奈良康正「長岡京跡右京第498次」（『京都府遺跡調査概報』第70冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1996

注11　平城京跡でも同様のものがみつかっているようである。

注12　接点がなかったために、図面上で復原したが、口縁部の傾きについてはなお検討を要する。

注13　古墳時代の遺物については当調査研究センター調査員野々口陽子の教示を得た。

注14　小森俊寛「土師器・黒色土器・瓦器」（『平安京提要』　(財)古代学協会・古代学研究所）　1994
古代の土器研究会編『古代の土器』２・４　1992・1994

注15　中島皆夫「長岡京跡右京第515次調査概要」（『長岡京市文化財調査報告書』第36冊　(財)長岡京市埋蔵文化財センター）　1997・「長岡京跡右京第451次調査」（『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成５年度　(財)長岡京市埋蔵文化財センター）　1995

注16　『平安京跡研究調査報告』第３号((財)古代学協会　1977)、時期等については大山崎町古閑正浩氏・京都府京都文化博物館植山　茂氏にご教示を得た。

注17　菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」（『文化財論叢』　奈良国立文化財研究所）　1983

注18　混入の可能性があるため、トレンチ北西隅にサブトレンチを設けて、石器の確認調査を行ったが、他には出土しなかった。

注19　注６に同じ。

注20　注４に同じ。

注21　第95274次立会調査で西寺の軒平瓦が出土している。（『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成７年度　(財)長岡京市埋蔵文化財センター）1997。(財)長岡京市埋蔵文化財センター小田桐淳・山本輝雄氏の御教示による。

注22　(９)に同じ

注23　新条坊六条条間小路北側溝については、国土座標で①X=-119,682.20②X=-119,684.13③X=-119,688.57の３つの推定ラインがある。すべて今回の調査地内に含まれたが、①のラインでは条坊側溝に比定できる遺構はなく、②のラインについてはＳＤ01があるが、途中で途切れるため、条坊側溝とは判断しがたい。③のラインについては調査地が大きく削平を受けている部分にあたるため、その存否を解明するには至らなかった。(注１山中前掲論文、中島信親氏条坊制検討会資料、岩松保「長岡京条坊計画試論」（『京都府埋蔵文化財情報』第61号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1996・岩松　保「長岡京条坊計画再論」（『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』　大阪大学考古学研究室　1996)などを参照)。

京都府、長岡京跡（R635次）における花粉分析

株式会社　古環境研究所

1．試　料　と　方　法

試料は、長岡京跡（R635次）ＳＸ02アゼ１北側断面において採取された試料１、２、３、４、５、６、７、８の計８点である。上位より、試料１～７は黒色から灰色を呈する粘土ないし粘質土で、試料８は褐色の砂混じりの木葉の堆積である。

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にして、水酸化カリウム処理、沈澱法による砂粒の除去、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理の順に行い、石炭酸フクシンを加えて染色しグリセリンゼリーで封入してプレパラートを作製した。分類は、同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で計数を行った。イネ属に関しては、中村(1974、1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

2．結　果

分析結果を表１、図１に示す。また、主要な分類群については顕微鏡写真を示す。

花粉の産出状況は下位より、試料８では、コナラ属アカガシ亜属とコナラ属コナラ亜属が優占し、シイ属やスギなどが伴われる。草本花粉の占める割合は低い。試料４～７では、イネ属型を含むイネ科、ヨモギ属を主にカヤツリグサ科などの草本花粉が増加し、樹木花粉ではシイ属がやや増加するが、コナラ属アカガシ亜属とコナラ属コナラ亜属は減少する。試料１～３では花粉がやや少なくなる。草本花粉のヨモギ属とアカザ科－ヒユ科が特徴的に出現し、イネ科、カヤツリグサ科、マメ科などが伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属とコナラ属コナラ亜属が低率になり、シイ属が優占しクリが伴われる。

3．花粉分析から推定される植生と環境

長岡京跡（R635次）ＳＸ02アゼ１北側断面の花粉群集は、下部（試料８）、中部（試料４～７）、上部（試料１～３）と変遷し、植生と環境の変化が認められる。下部（試料８）は、コナラ属アカガシ亜属のカシ林とコナラ属コナラ亜属のナラ林が分布し、周囲は森林状態であった。コナラ属コナラ亜属は生態上からコナラやクヌギの二次林性の樹種と考えられ、二次林性の森林であったかやや乾燥した環境に立地する森林であったと推定される。中部（試料４～７）になると、イネ属型を含むイネ科やヨモギ属等の人為的要因で増加する草本が多くなり、周辺はヨモギ属の生育するやや乾燥した人為地と水田などが広がっていたとみなされる。周囲には森林が比較的多く分布す

るが、カシ林とナラ林が減少し、これらの分布域が人為地に変わったと推定される。上部(試料1～3)では、畑地などのやや乾燥した人為地に生育するヨモギ属とアカザ科－ヒユ科が生育し、畑地や集落域の人為環境が拡大したと推定される。なお、花粉の検出数が少ないことから、花粉などの植物遺体の分解する乾燥か乾湿を繰り返す堆積環境であったと考えられる。周囲の森林では、カシ林とナラ林が減少する一方、乾燥を好み二次林要素でもあるシイ属やクリが増加することから、シイを主とする乾燥した環境下の二次林が分布していたと推定される。

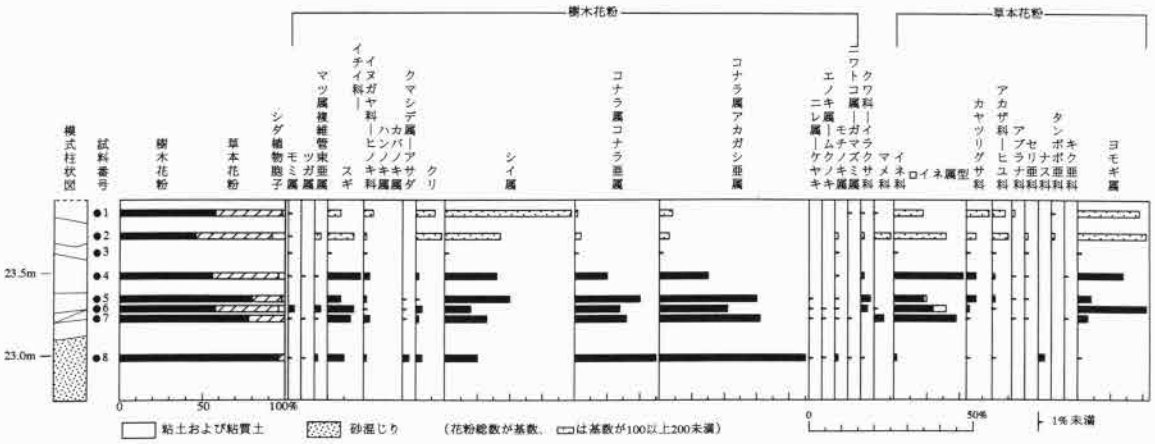
参考文献

中村　純　1973　花粉分析　古今書院　p.82-110

金原正明　1993　花粉分析法による古環境復原　新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法　角川書店　p.248-262

中村　純　1974　イネ科花粉について、とくにイネ(Oryza sativa)を中心として　第四紀研究　13　p.187-193

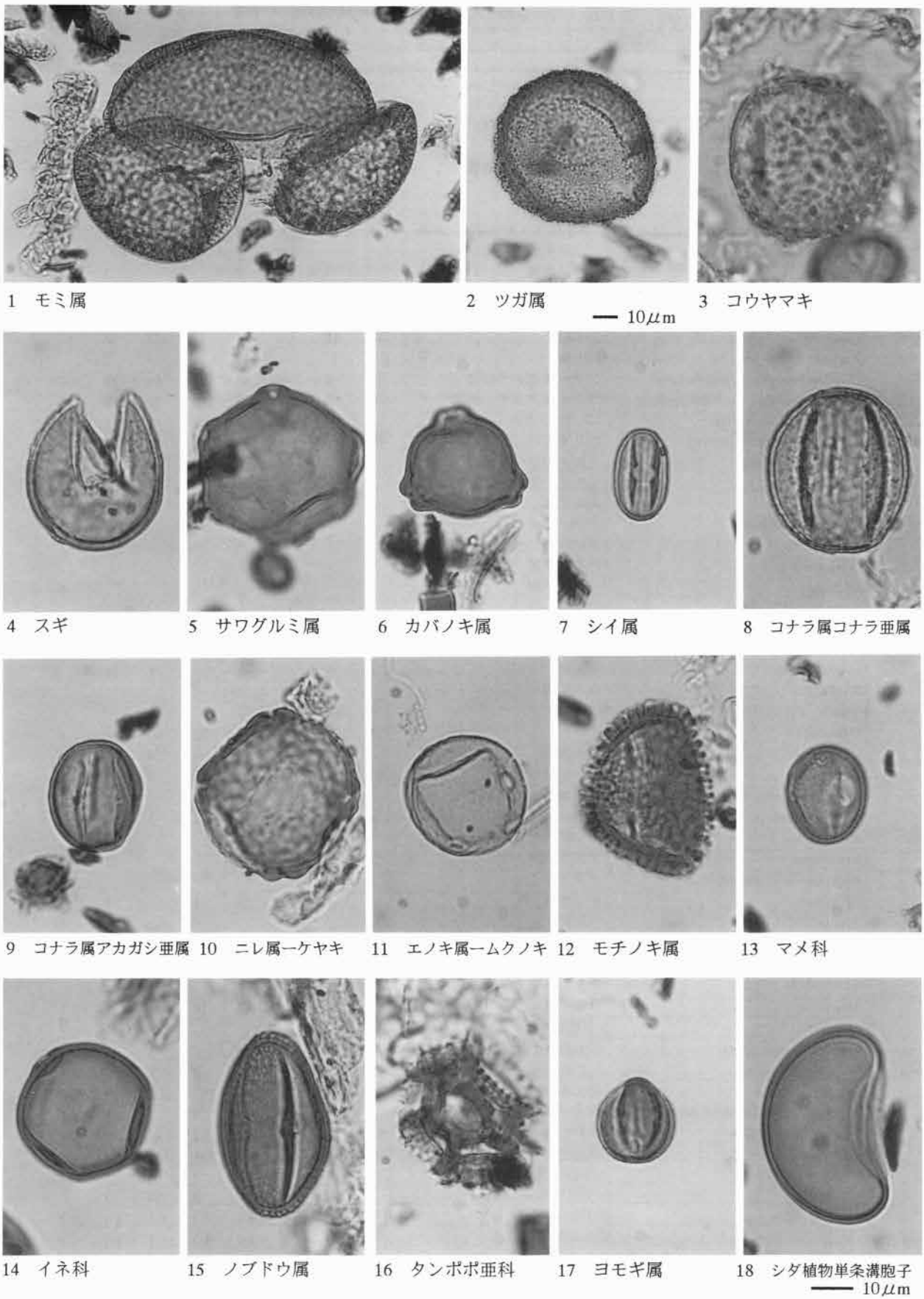
中村　純　1977　稲作とイネ花粉　考古学と自然科学　第10号　p.21-30



第1図　長岡京跡(R635次)SX02アゼ1における花粉ダイアグラム

第１表　長岡京跡（Ｒ635次）の花粉分析結果

分類群		ＳＸ０１アゼ１北側断面							
学名	和名	1	2	3	4	5	6	7	8
Arboreal pollen	樹木花粉								
Abies	モミ属	1	5	1	2		6	1	1
Picea	トウヒ属		1						
Tsuga	ツガ属				2			1	1
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属		2		2		5	1	4
Cryptomeria japonica	スギ	6	8	6	33	16	27	31	21
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ						2		3
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	4	1	3	7	4	3	7	4
Alnus	ハンノキ属				1	2			
Betula	カバノキ属				2			3	1
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ					2	3	4	7
Castanea crenata	クリ	9	8		5	3	6	6	7
Castanopsis	シイ属	58	18	13	54	73	27	58	43
Fagus	ブナ属				1			2	
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	2	2	9	36	72	46	69	103
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	6	3	4	53	110	71	138	185
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ					1	1	2	2
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ						2	4	1
Mallotus japonicus	アカメガシワ							1	
Ilex	モチノキ属		1	1	1	3	1	3	5
Acer	カエデ属				1				
Aesculus turbinata	トチノキ								1
Vitis	ブドウ属								1
Symplocos	ハイノキ属				1				
Oleaceae	モクセイ科								1
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属	1						2	1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉								
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	1	1		4	12	6		2
Leguminosae	マメ科	1	5				1	11	
Araliaceae	ウコギ科			1					
Nonarboreal pollen	草本花粉								
Gramineae	イネ科	13	17	10	74	32	40	82	4
Oryza type	イネ属型					4	14		1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	10	3	3	10	10	4	1	2
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節								1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	6	5	1	4	4	2		2
Ranunculus	キンポウゲ属				1				
Cruciferae	アブラナ科	2			1	1		1	
Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ								2
Apiodeae	セリ亜科		1	1	3	1		1	
Solanaceae	ナス科								7
Valerianaceae	オミナエシ科					1			
Lactucoideae	タンポポ亜科	1	1						
Asteroideae	キク亜科				1			1	
Artemisia	ヨモギ属	29	22	10	47	14	71	11	2
Fern spore	シダ植物胞子								
Monolate type spore	単条溝胞子	1		4	9	6	5	1	
Trilate type spore	三条溝胞子	1	9	6	9	2	5	2	
Arboreal pollen	樹木花粉	87	49	37	201	286	200	333	392
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	2	6	1	4	12	7	11	2
Nonarboreal pollen	草本花粉	61	49	25	141	67	131	97	21
Total pollen	花粉総数	150	104	63	346	365	338	441	415
Unknown pollen	未同定花粉	5	4	5	11	7	8	5	4
Fern spore	シダ植物胞子	2	9	10	18	8	10	3	0
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

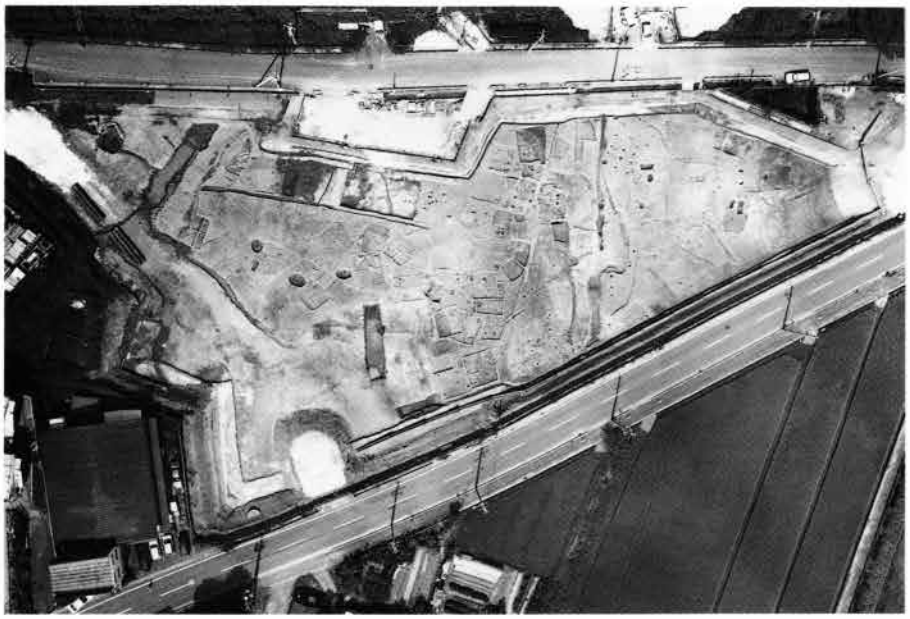


第２図　長岡京跡（R635次）の花粉・胞子遺体

図　　版

図版第１　名神大山崎ジャンクション関係遺跡

(1)右京第589次調査地遠景
(東から)

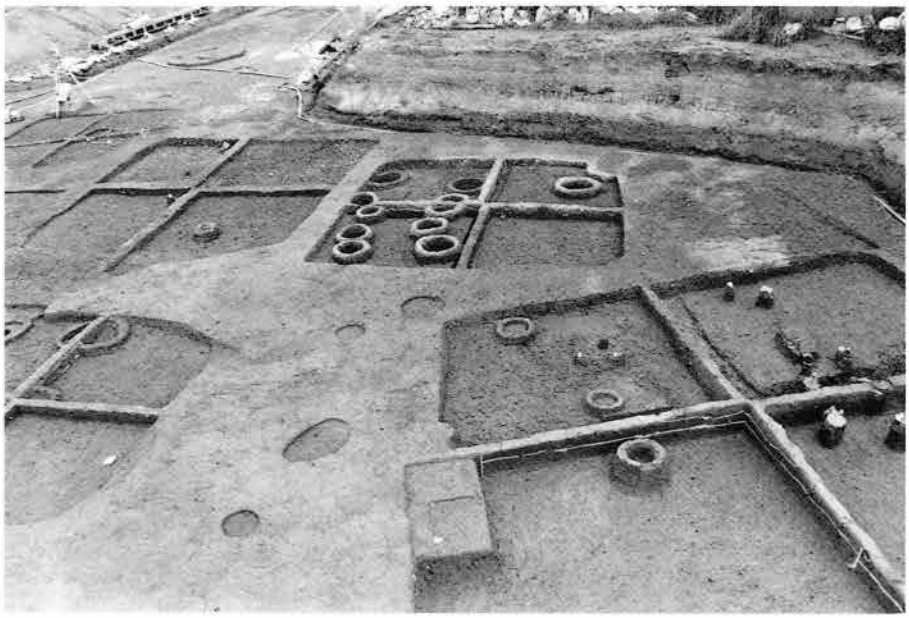


(2)右京第589次上層遺構完掘状態(上空から)

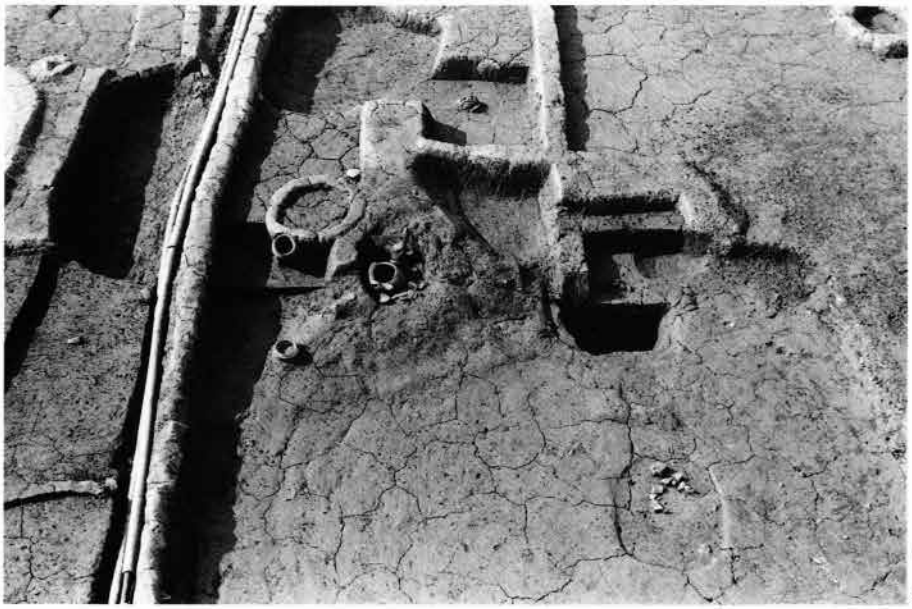
(3)右京第589次下層遺構完掘状態(上空から)

図版第２　名神大山崎ジャンクション関係遺跡

(1)右京第589次調査前全景
(南東から)

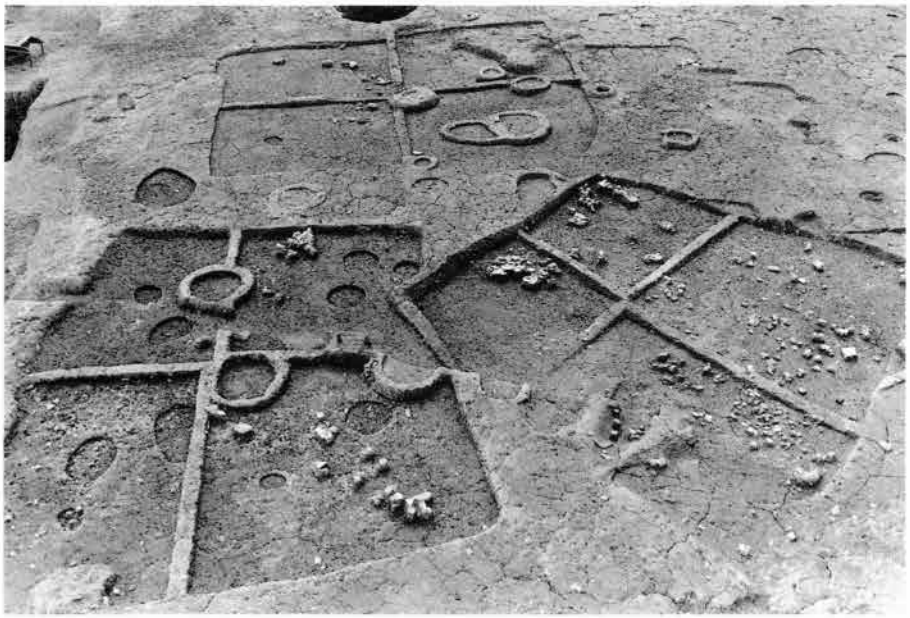


(2)右京第589次ＳＢ07・08・19
完掘状態(西から)



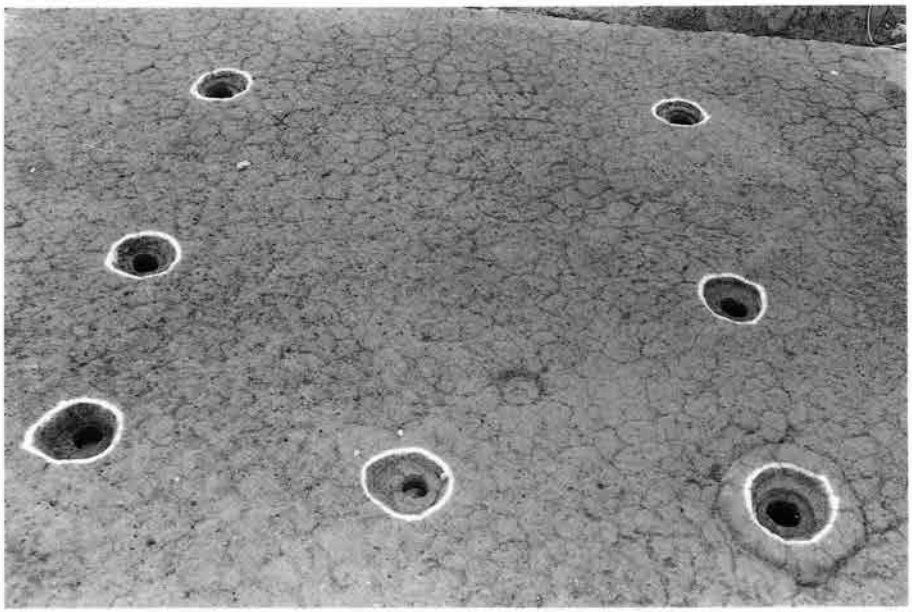
(3)右京第589次ＳＨ164竈検出
状態(南から)

図版第３　名神大山崎ジャンクション関係遺跡



(1)右京第589次ＳＨ115・116・151土器出土状態(東から)

(2)右京第589次ＳＢ91完掘状態(北から)

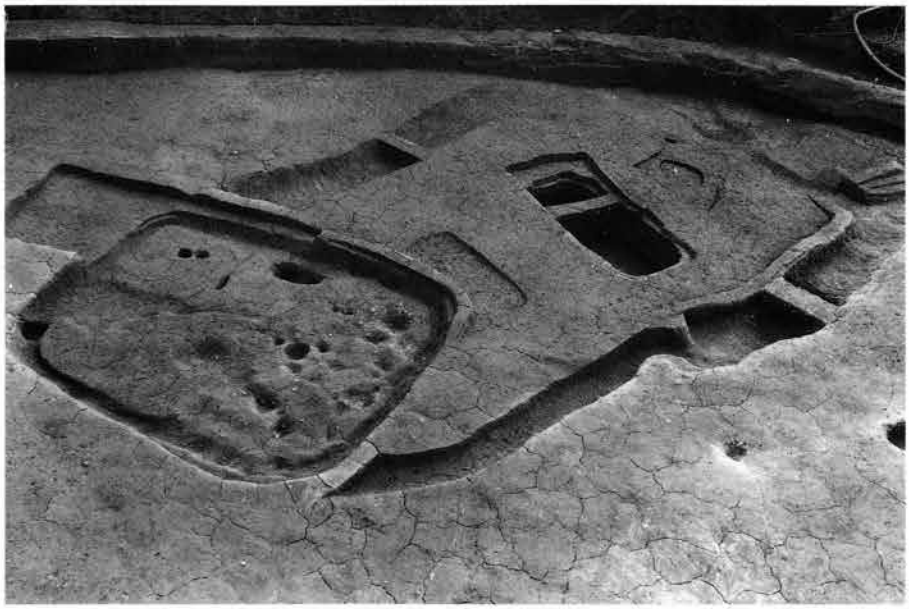


(3)右京第589次ＳＢ96完掘状態(西から)

図版第４　名神大山崎ジャンクション関係遺跡

(1)右京第589次ＳＨ174上面土器出土状態(北西から)

(2)右京第589次ＳＨ174完掘状態(北西から)



(3)右京第589次ＳＨ171、ＳＴ194完掘状態(北西から)

図版第５　名神大山崎ジャンクション関係遺跡

(1)右京第589次ＳＴ181・193完掘状態(西から)

(2)右京第589次ＳＴ180・181・185完掘状態(南から)

(3)右京第589次ＳＴ180・184・186完掘状態(西から)

図版第６　名神大山崎ジャンクション関係遺跡

(1)右京第589次ＳＫ173内土器
出土状態(南から)

(2)右京第589次ＳＴ180東溝内
土器出土状態(東から)

(3)右京第589次ＳＴ180東溝内
土器出土状態(南から)

図版第７　名神大山崎ジャンクション関係遺跡

(1) ＩＫ31次第２トレンチ調査前全景(南から)

(2) ＩＫ31次第２トレンチ完掘状態(北から)

(3) ＩＫ31次ＳＢ03完掘状態(北東から)

図版第８　名神大山崎ジャンクション関係遺跡

(1) ＩＫ31次第３トレンチ完掘状態(北東から)

(2) ＩＫ31次第３トレンチ完掘状態(北西から)

(3) ＩＫ31次ＳＢ14・15完掘状態(南から)

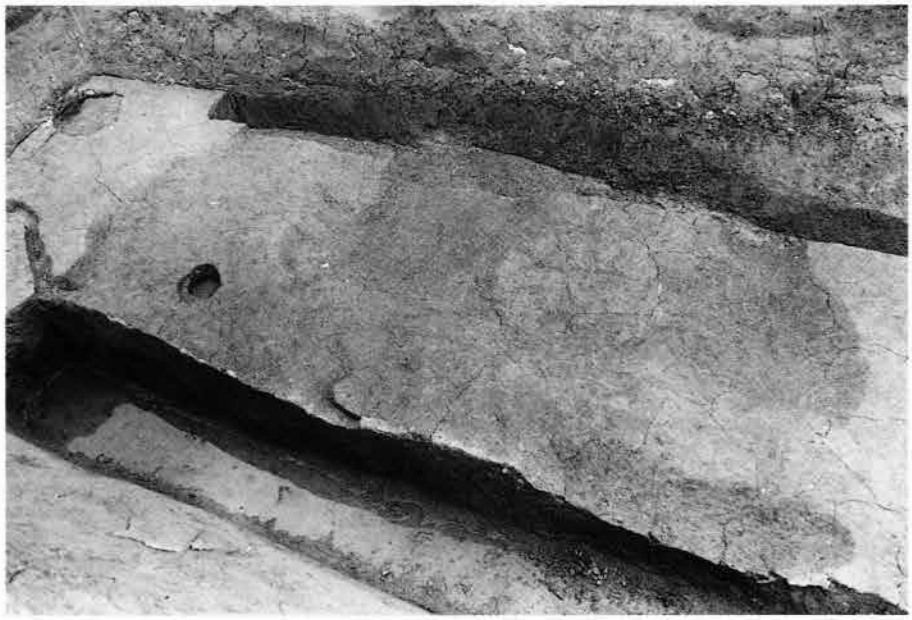
図版第９　名神大山崎ジャンクション関係遺跡

(1) ＩＫ25-２次調査地全景
(南東から)

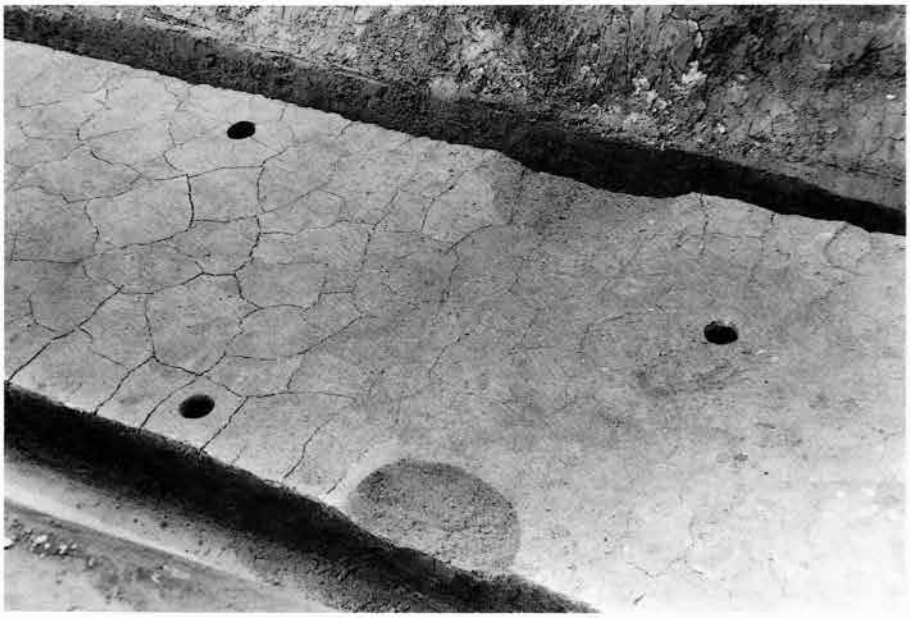
(2) ＩＫ25-２次第６Ｐｙ検出遺構(南から)

(3) ＩＫ25次調査地全景
(南東から)

図版第10　名神大山崎ジャンクション関係遺跡



(1) ＩＫ25次ＳＨ01検出状況
(南から)

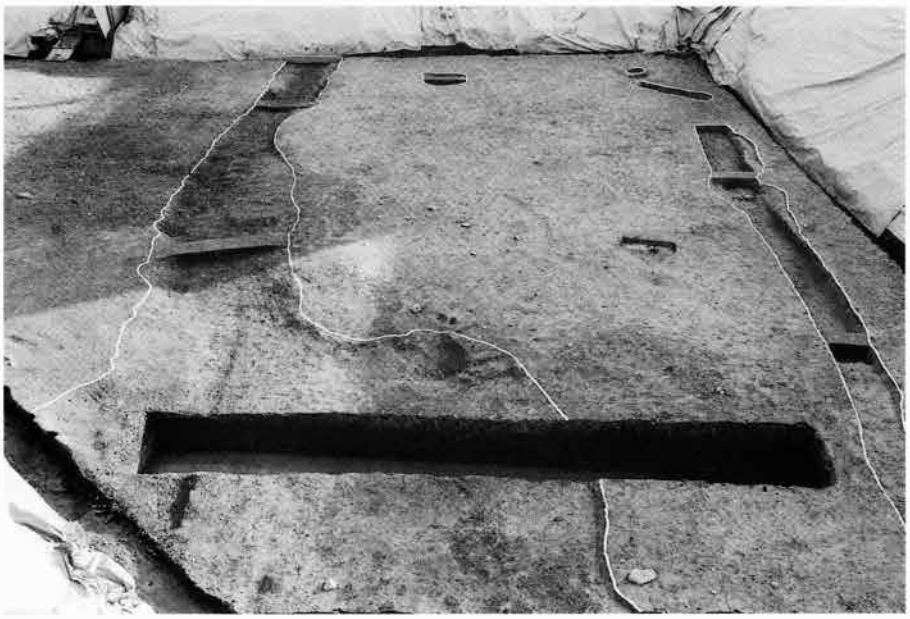


(2) ＩＫ25次ＳＨ02検出状況
(南から)

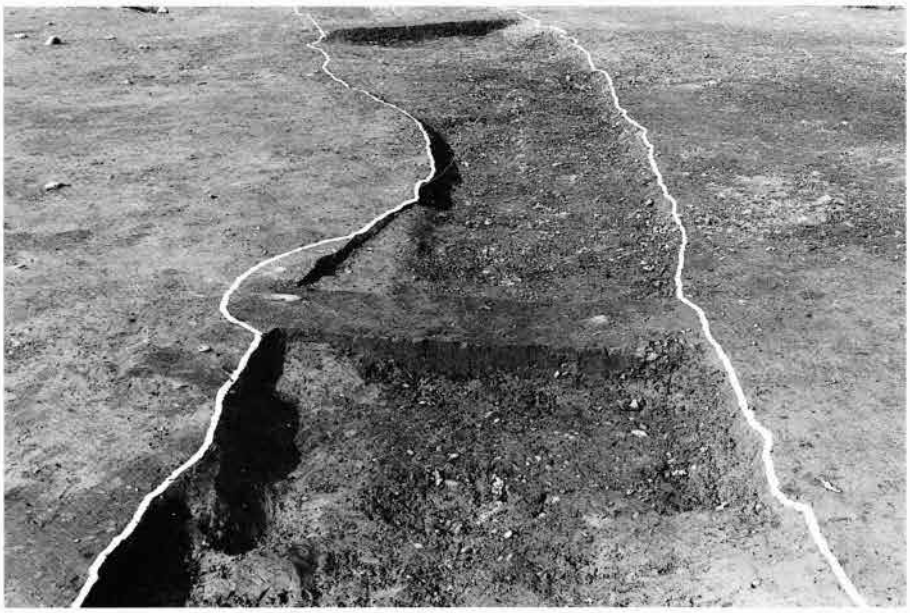
(3) ＩＫ28次調査地全景(北から)

図版第11　名神大山崎ジャンクション関係遺跡

(1) ＩＫ25-３次調査前掘削状況
(南から)

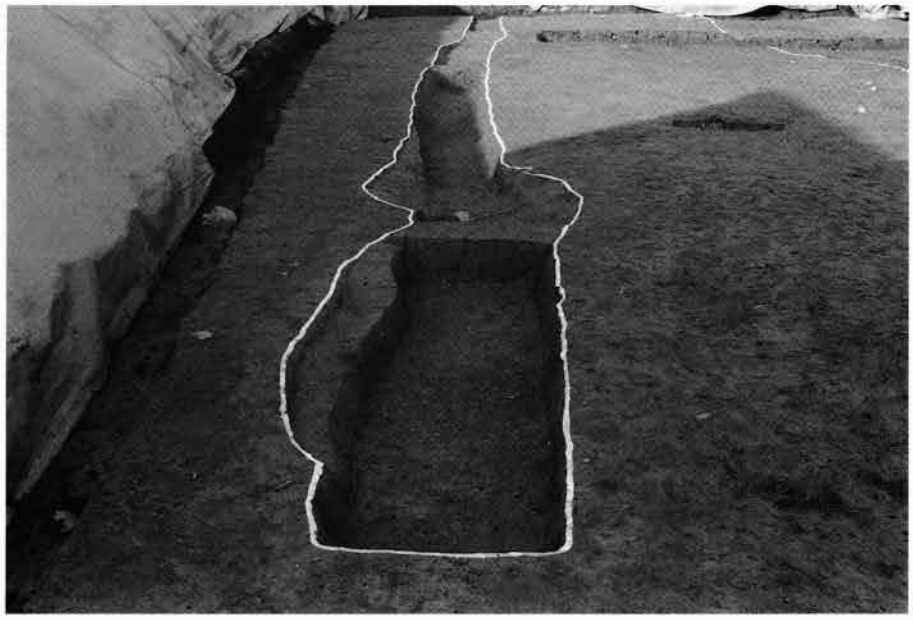


(2) ＩＫ25-３次遺構検出状況
(北から)



(3) ＩＫ25-３次ＳＤ03(南から)

図版第12　名神大山崎ジャンクション関係遺跡



(1) ＩＫ25-３次ＳＤ01(南から)

(2) ＩＫ25-３次遺構検出状況
(東から)

(3) ＩＫ25-３次ＳＫ02(北から)

図版第13　名神大山崎ジャンクション関係遺跡

(1) ＩＫ25-３次ＳＫ02土器出土状況(第15図６　北から)

(2) ＩＫ25-３次ＳＥ05土器出土状況(第14図２・４(水面下南から)

(3) ＩＫ25-３次ＳＥ05土器出土状況(第14図１・３　北から)

図版第14　名神大山崎ジャンクション関係遺跡

(1) ＩＫ25-３次ＳＥ05土器出土状況(第14図６　北から)

(2) ＩＫ25-３次ＳＥ05土層断面(北から)

(3) ＩＫ25-３次調査地遠景(東から天王山を望む)

図版第15　名神大山崎ジャンクション関係遺跡

1

7

2

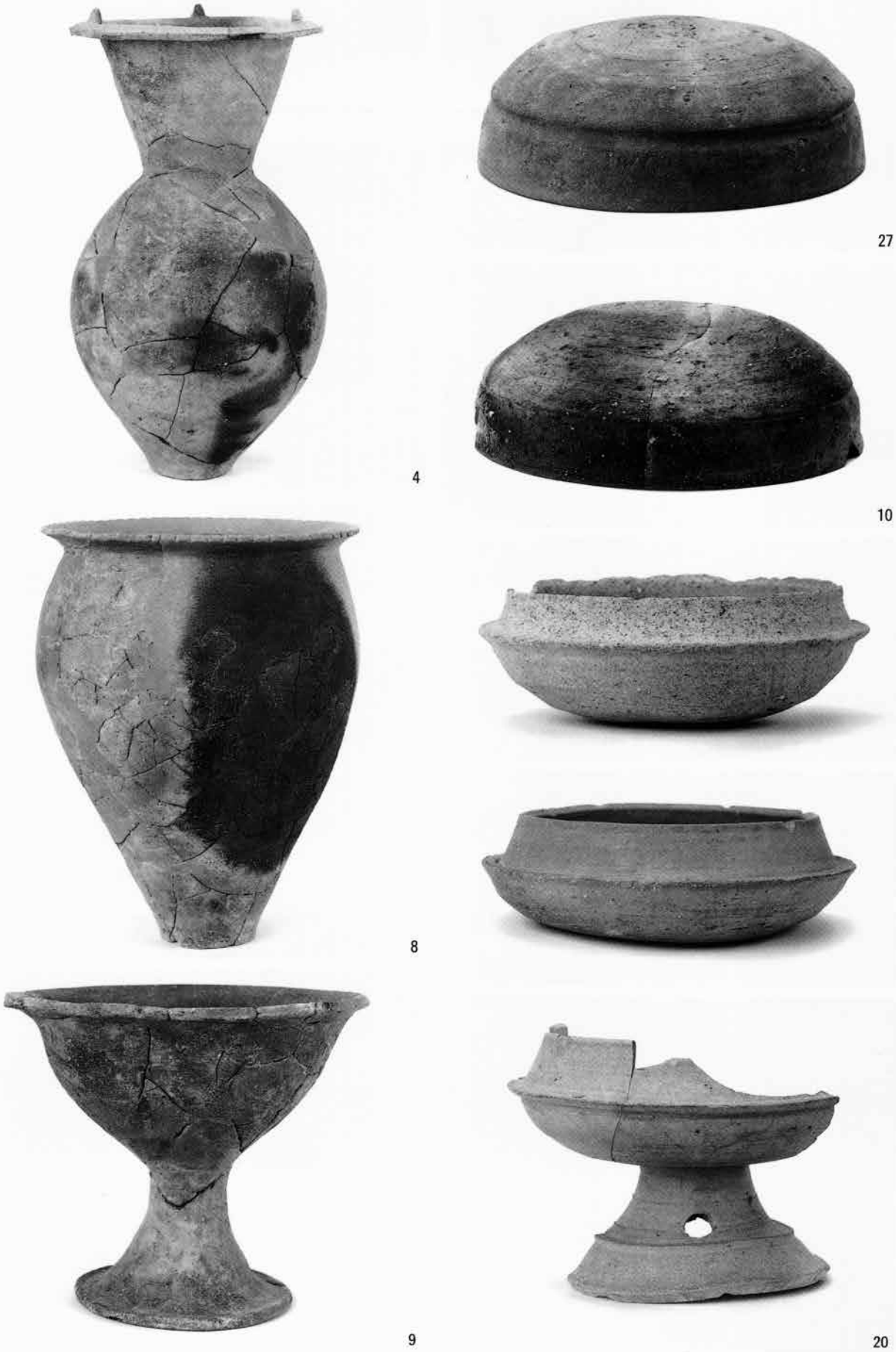
3

5

3 底面

右京第589次　出土土器(1)　(番号は第５図と対応)

図版第16　名神大山崎ジャンクション関係遺跡

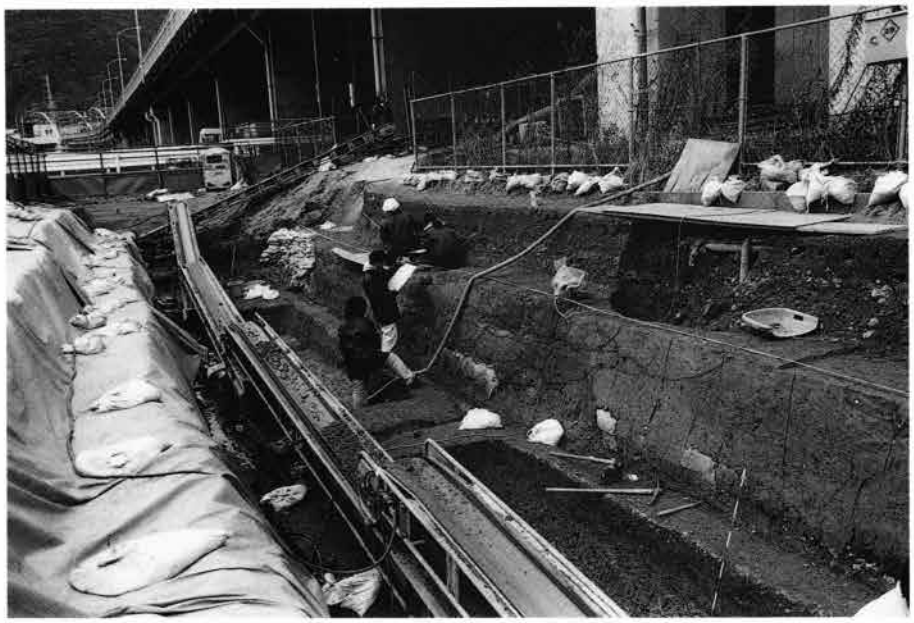


右京第589次　出土土器(2)　(番号は第５・６図と対応)

図版第17　名神大山崎ジャンクション関係遺跡

ＩＫ25-３次　井戸ＳＥ05出土土器　（第14図番号に対応）

図版第18　名神大山崎ジャンクション関係遺跡



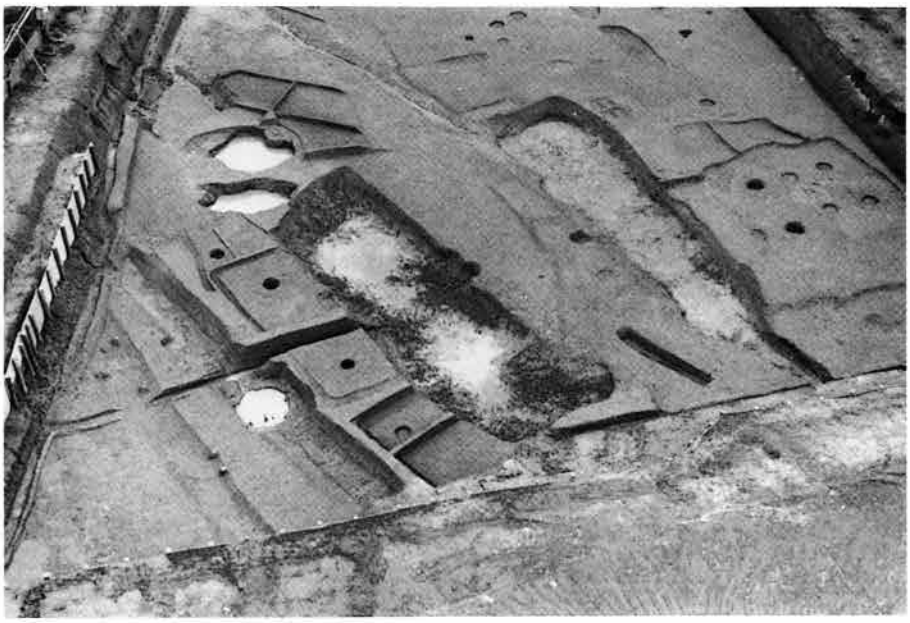
(1)算用田遺跡調査風景
(南東から)

(2)算用田遺跡ＳＤ01土器出土
状況(南から)

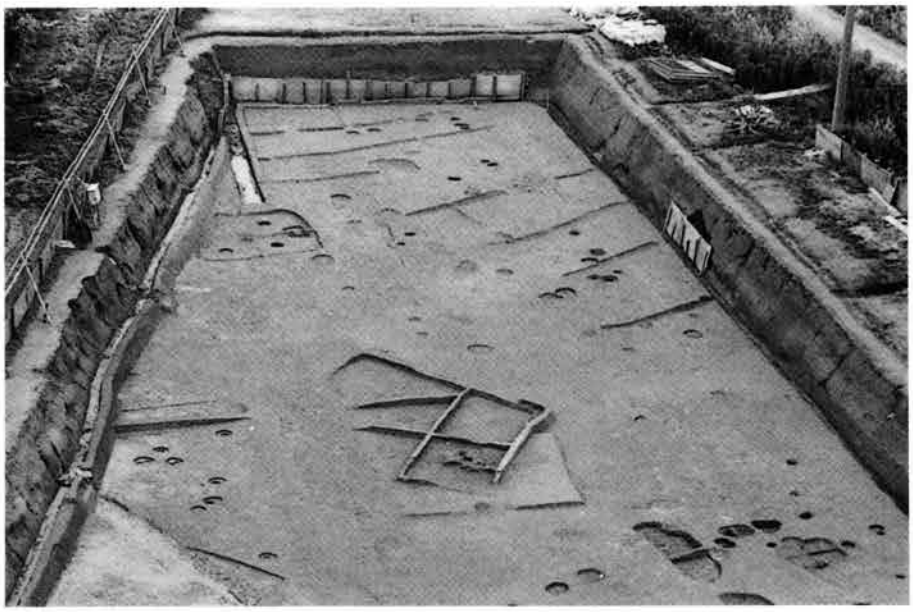
(3)算用田遺跡調査終了状況
(西から)

図版第19　第二京阪道路関係遺跡

(1)E地区第5遺構面全景
(北から)



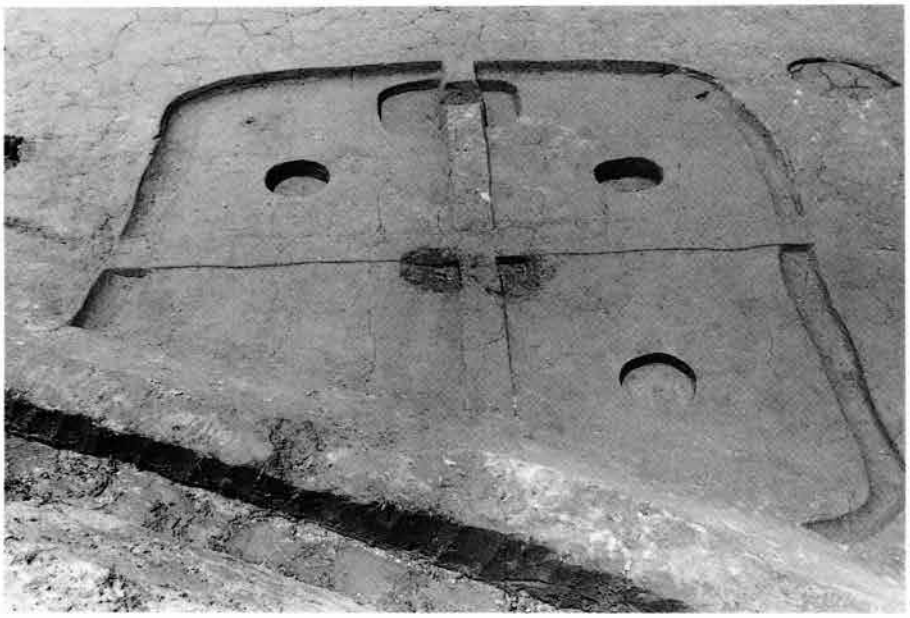
(2)E地区北半部遺構完掘状況
(北から)



(3)E地区南半部遺構完掘状況
(北から)

図版第20　第二京阪道路関係遺跡

(1)E地区SH297完掘状況
(南から)

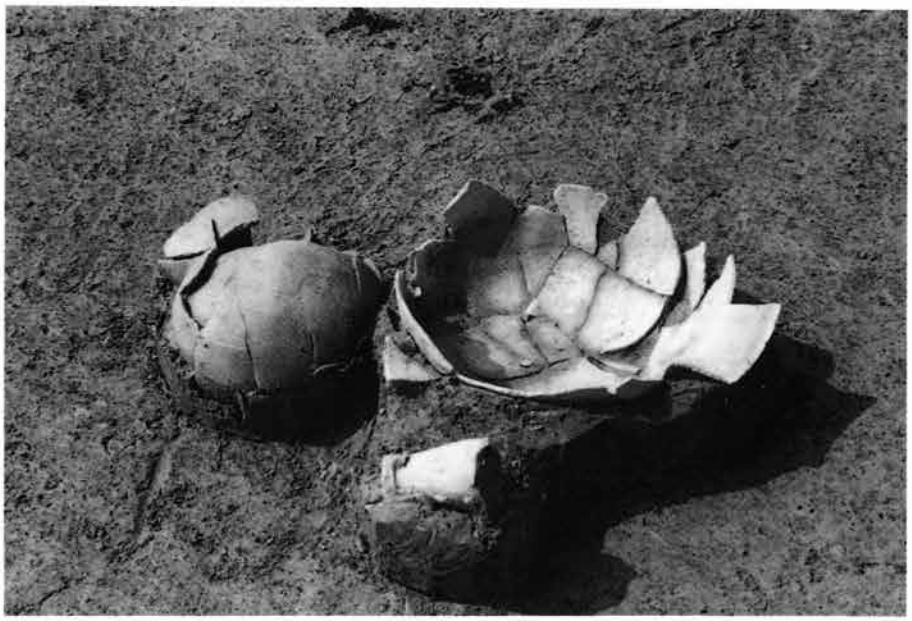


(2)E地区SH300完掘状況
(東から)

(3)E地区SH301完掘状況
(西から)

図版第21　第二京阪道路関係遺跡

(1)Ｅ地区ＳＨ263遺物出土状況(西から)



(2)Ｅ地区ＳＨ301遺物出土状況(西から)

(3)Ｅ地区ＳＤ305遺物出土状況(南から)

図版第22　第二京阪道路関係遺跡

(1)Ｅ地区ＳＥ204遺物出土状況(南東から)

(2)Ｅ地区ＳＥ204遺物出土状況近景(南東から)

(3)Ｅ地区ＳＥ205蒸籠組の状況(北から)

図版第23　第二京阪道路関係遺跡

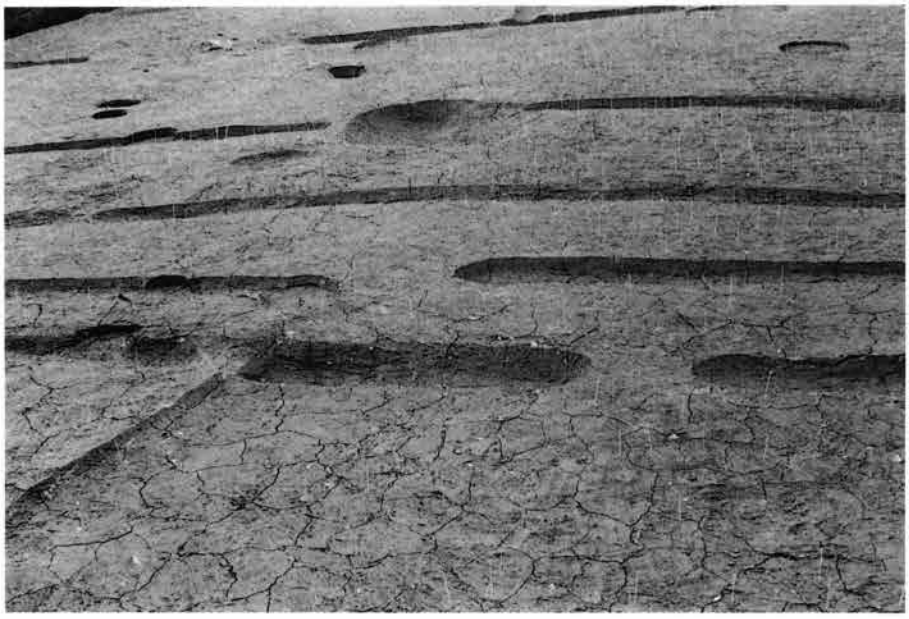
(1)Ｅ地区ＳＥ205最下層の状況(西から)

(2)Ｅ地区のＳＥ223断割りの状況(南から)

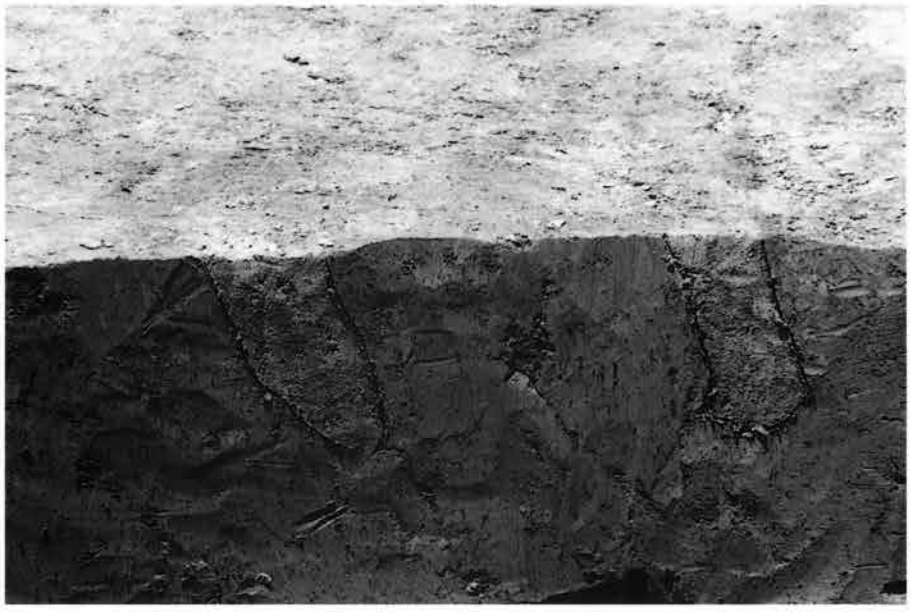
(3)Ｅ地区耕作面の状況(南から)

図版第24　第二京阪道路関係遺跡

(1)E地区耕作溝を切る土拡SK023の状況(南から)



(2)E地区耕作面作物痕跡の状況(竹串部分)(南から)



(3)E地区作物痕の断割り状況(南から)

図版第25　国道１号京都南道路関係遺跡

(1)市田斉当坊遺跡　調査地遠景(南から)

(2)市田斉当坊遺跡　調査地全景(西から)

(3)市田斉当坊遺跡　調査地全景(北から)

図版第26　国道１号京都南道路関係遺跡

(1)Ａ地区調査地全景(北から)

(2)Ａ地区ＳＤ01(北東から)

(3)Ａ地区土器溜まり検出状況
(西から)

図版第27　国道１号京都南道路関係遺跡

(1)Ｂ地区北半部竪穴式
住居跡群(北西から)

(2)Ｂ地区中央部竪穴式
住居跡群(北西から)

(3)Ｂ地区北端部竪穴式
住居跡群(西から)

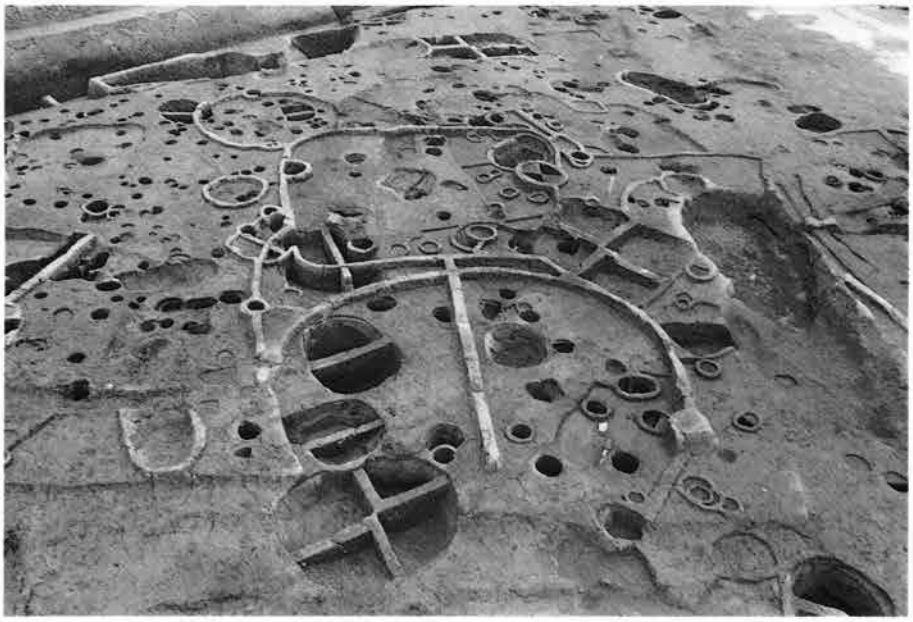
図版第28　国道１号京都南道路関係遺跡

(1)Ｂ地区南北・東西坪境道検出状況交差点付近(南から)

(2)Ｂ地区南北坪境道検出状況(北北東から)

(3)Ｂ地区井戸ＳＥ500検出状況(北から)

図版第29　国道１号京都南道路関係遺跡



(1)Ｂ地区竪穴式住居跡ＳＨ538
・341等検出状況(西から)

(2)Ｂ地区竪穴式住居跡ＳＨ528
・529・150・151等検出状況
(南南東から)

(3)Ｂ地区竪穴式住居跡ＳＨ691
検出状況(南から)

図版第30　国道１号京都南道路関係遺跡

(1)Ｂ地区焼土坑ＳＸ911検出状況(西から)

(2)Ｂ地区土坑ＳＫ1201土器出土状況(西から)

(3)Ｂ地区中央土坑ＳＫ1065・1209断面(南西から)

図版第31　国道１号京都南道路関係遺跡

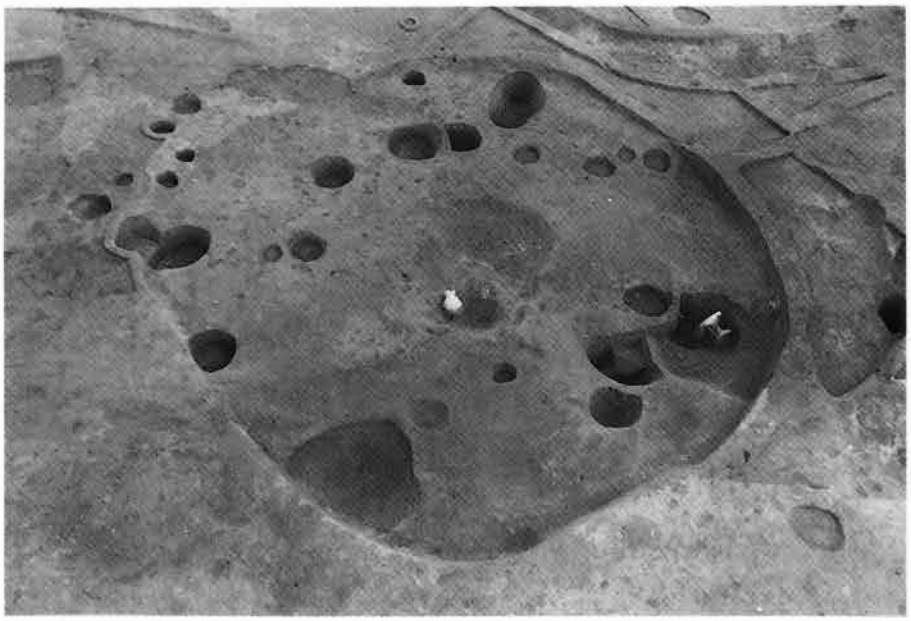
(1)Ｃ地区南北坪境道検出状況
(北から)

(2)Ｃ地区中世遺構検出状況
(南西から)

(3)Ｃ地区中世溝検出状況
(東から)

図版第32　国道１号京都南道路関係遺跡

(1)Ｃ地区竪穴式住居跡ＳＨ132
検出状況(南から)



(2)Ｃ地区竪穴式住居跡ＳＨ092
検出状況(北から)

(3)Ｃ地区竪穴式住居跡ＳＨ080
検出状況(東北東から)

図版第33　国道１号京都南道路関係遺跡

(1)Ｃ地区竪穴式住居跡ＳＨ92・138等検出状況(北西から)

(2)Ｃ地区環濠ＳＤ25・93・114検出状況(北北西から)

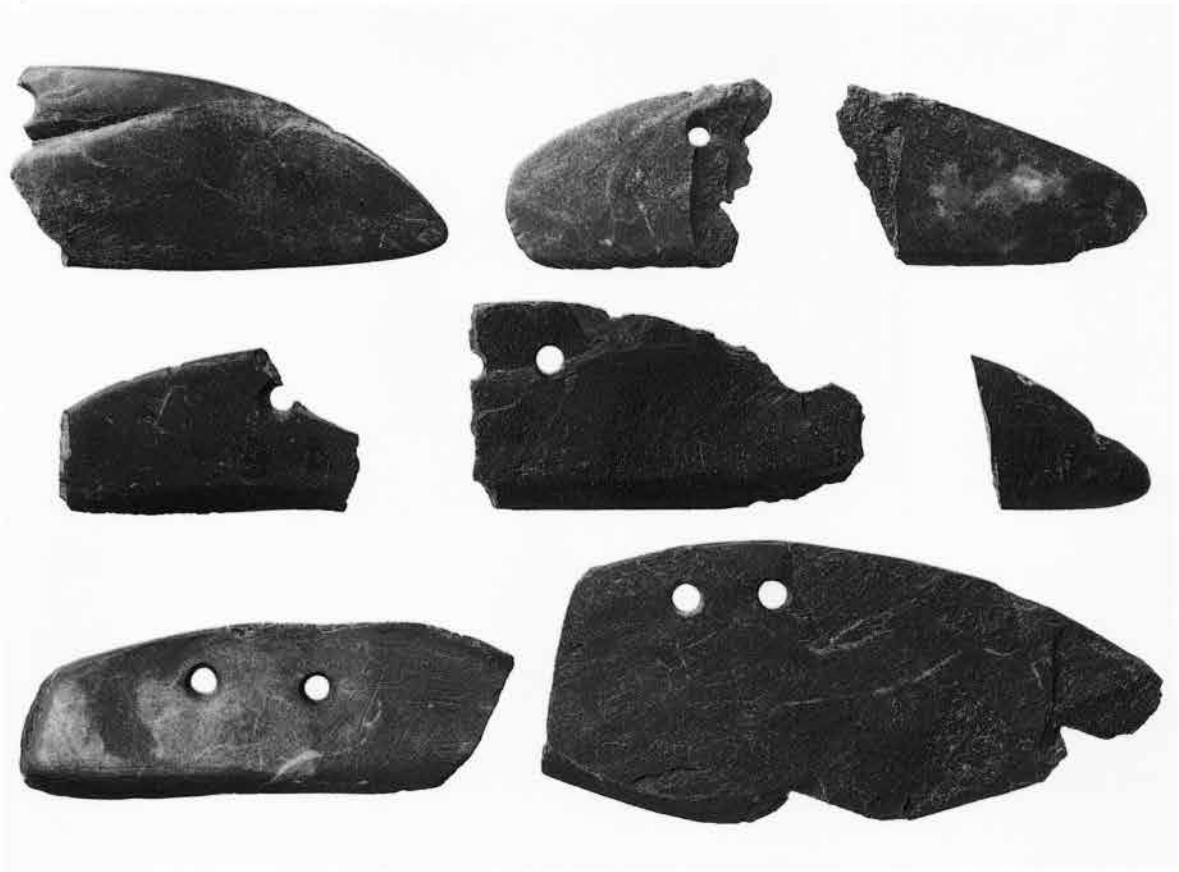
(3)Ｃ地区環濠ＳＤ25・93・114検出状況(南西から)

図版第34　国道１号京都南道路関係遺跡

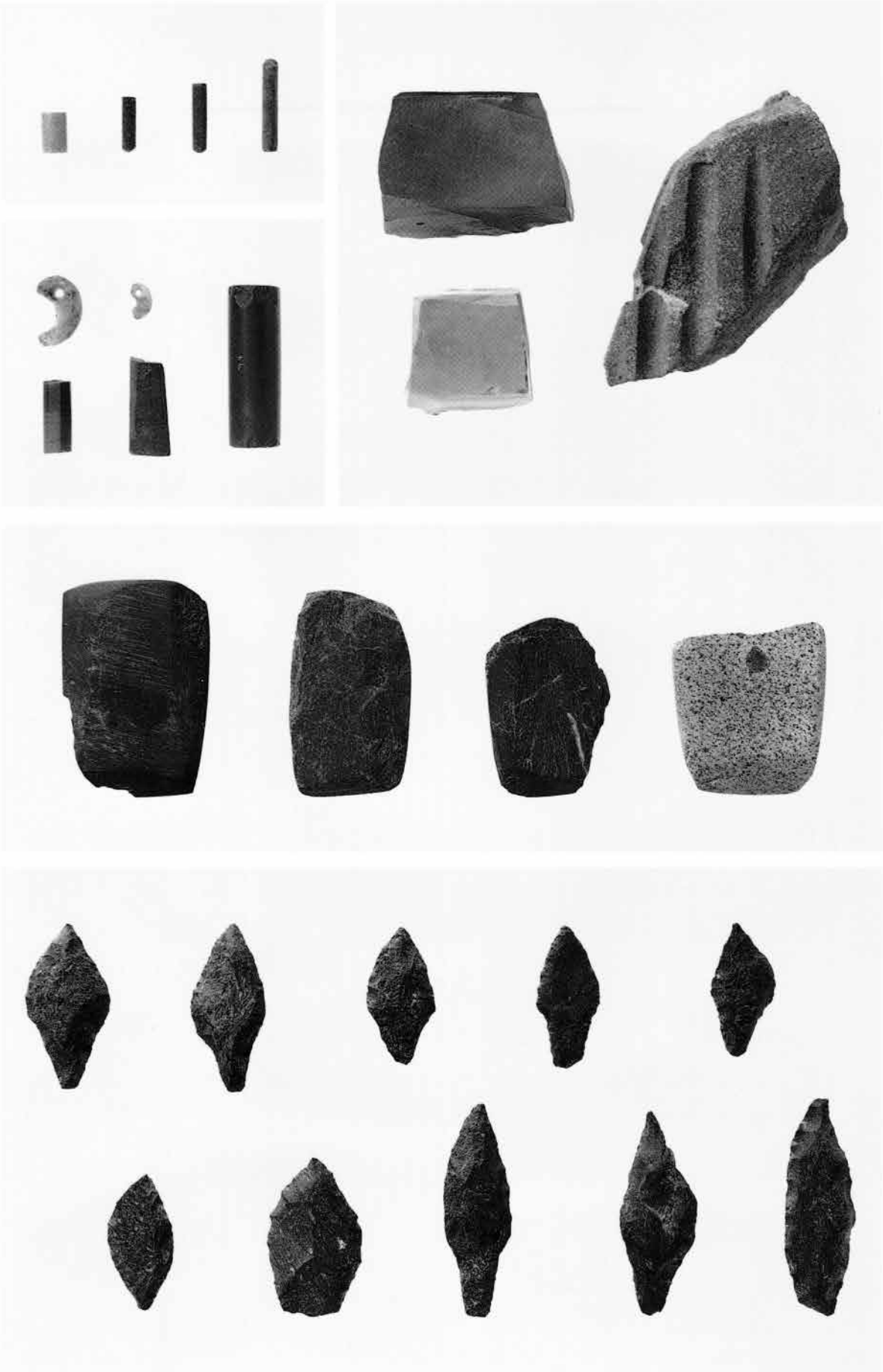
出土遺物(1)　土器

図版第35　国道１号京都南道路関係遺跡

(1)　出土遺物(2)　磨製石剣



(2)　出土遺物(3)　石包丁



出土遺物(4)　石針・玉類・玉原石・筋砥石・石斧・石鏃

図版第37　木津地区所在遺跡

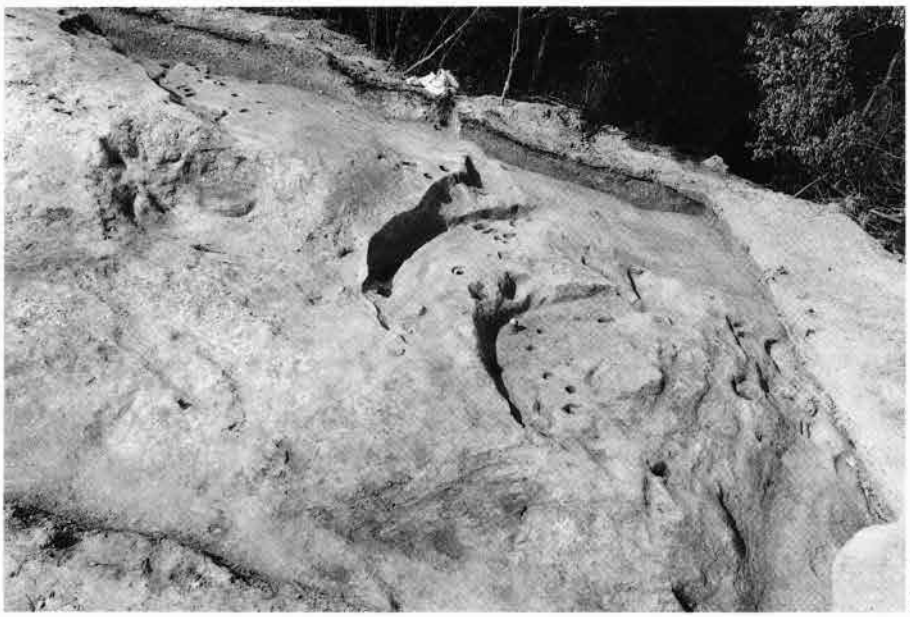
(1)木津城山遺跡調査地全景
(東から)

(2)木津城山遺跡ＳＢ32検出状態(中央ピット掘削前、北から)

(3)木津城山遺跡ＳＢ32検出状態(中央ピット掘削後、北から)

図版第38　木津地区所在遺跡

(1)木津城山遺跡Xトレンチ全景(南から)



(2)木津城山遺跡ＳＢ61・71検出状態(南から)

(3)木津城山遺跡ＳＢ61・71検出状態(東から)

図版第39　木津地区所在遺跡

(1)木津城山遺跡ＳＸ70検出状態(東から)

(2)木津城山遺跡ＸⅡトレンチ全景(北から)

(3)木津城山遺跡ＳＢ121検出状態(東から)

図版第40　木津地区所在遺跡

(1)木津城山遺跡ＳＢ123・124
検出状態(南東から)

(2)木津城山遺跡ＳＸ112検出状
態(北西から)

(3)木津城山遺跡ＳＸ126検出状
態(北から)

図版第41　木津地区所在遺跡

(1)木津城山遺跡片山５号墳全景(南から)

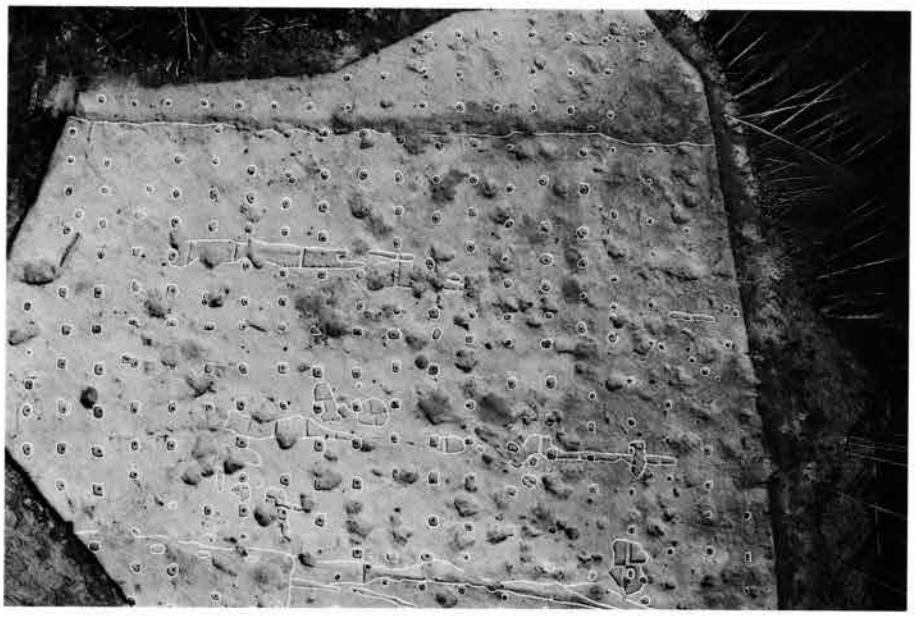
(2)木津城山遺跡片山５号墳内部主体検出状態(南から)

(3)木津城山遺跡片山５号墳内部主体礫敷・遺物出土状態(西から)

図版第42　木津地区所在遺跡

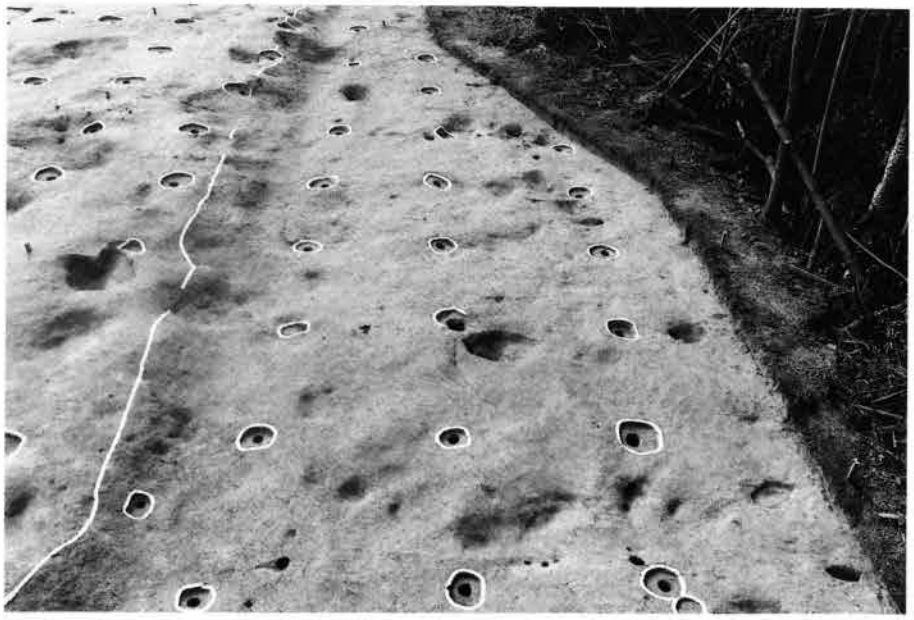
(1)菰池遺跡遠景(東から)

(2)菰池遺跡調査地全景
(南から)



(3)菰池遺跡遺構検出状態
(右が北)

図版第43　木津地区所在遺跡

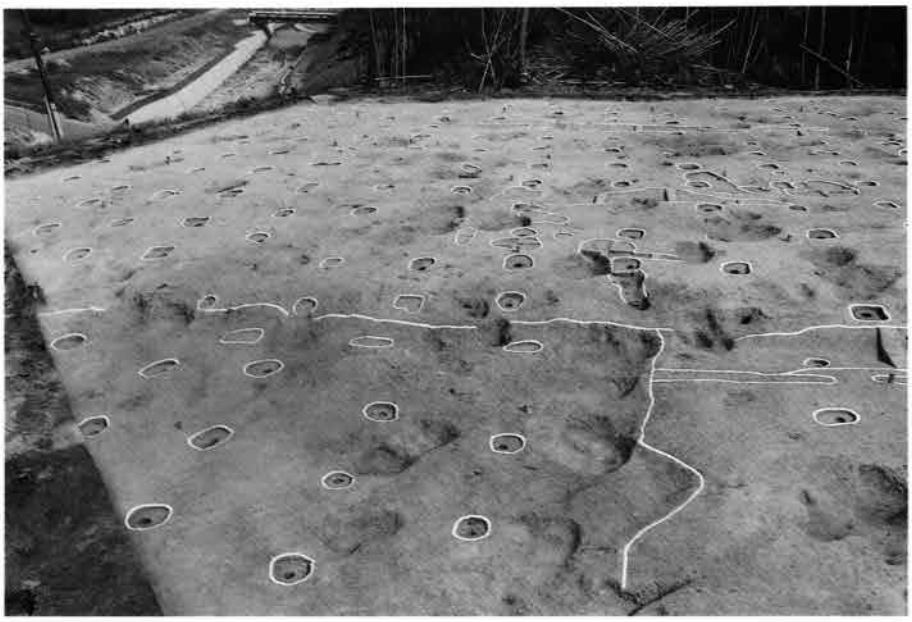


(1)菰池ＳＢ01検出状態
(東から)

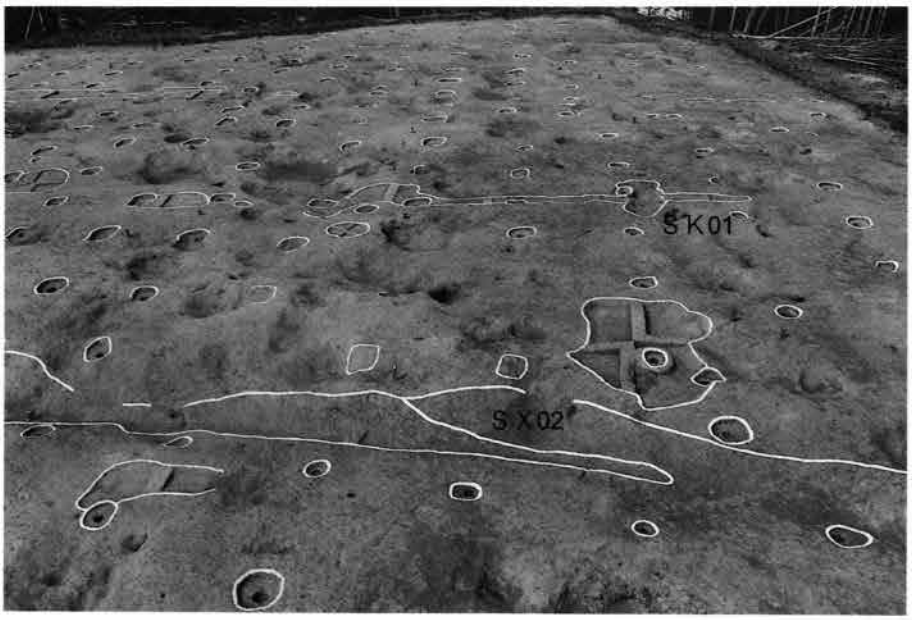
(2)菰池遺跡ＳＢ02検出状態
(東から)

(3)菰池遺跡ＳＢ02・04等検出状態(西から)

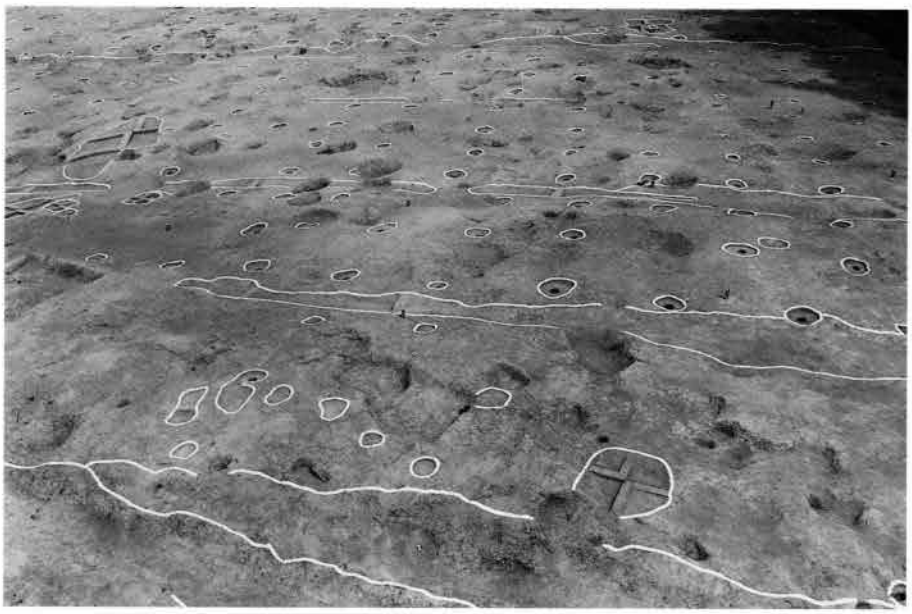
図版第44　木津地区所在遺跡



(1)菰池遺跡ＳＢ02・03・04・07検出状態(南から)

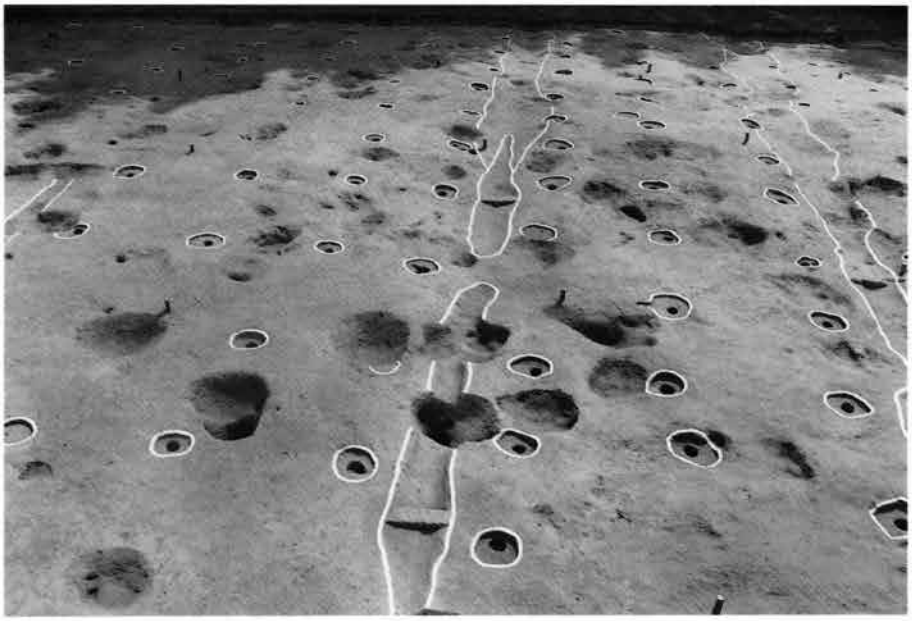


(2)菰池遺跡ＳＸ02東半部周辺遺構検出状態(南から)



(3)菰池遺跡ＳＢ11・13等検出状態(南から)

図版第45　木津地区所在遺跡



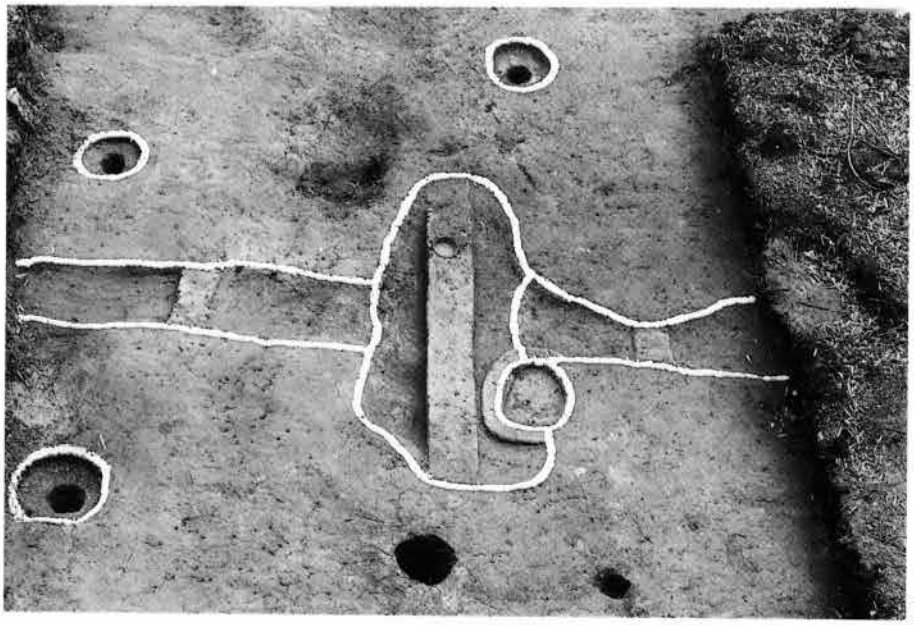
(1)菰池遺跡ＳＡ06・ＳＤ02・ＳＢ11等検出状態(西から)

(2)菰池遺跡ＳＢ13等検出状態(西北西から)

(3)菰池遺跡ＳＤ01検出状態(南から)

図版第46　木津地区所在遺跡

(1)菰池遺跡ＳＸ04東拡張区検出状態(西から)



(2)菰池遺跡ＳＫ01遺物出土状態(北から)

(3)菰池遺跡ＳＫ02検出状態遺物出土状態(南西から)

図版第47　木津地区所在遺跡

11

12

25

34

51

33

43

44

47

出土遺物(1)

図版第48　木津地区所在遺跡

陶棺

3

4

5

1

6

2

10

出土遺物(2)

図版第49　稲葉遺跡第５次

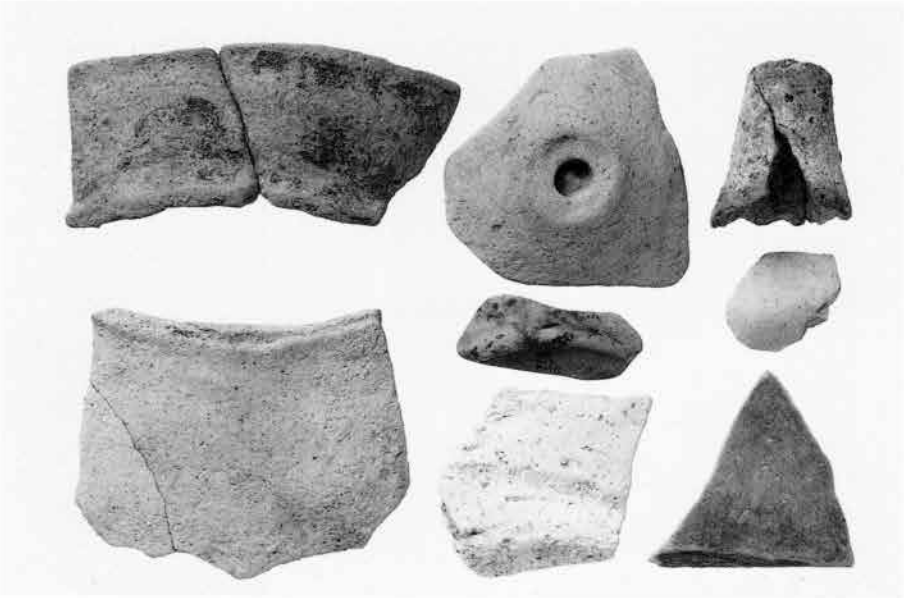
(1)調査前風景(北北西から)

(2)１区全景(北北西から)

(3)２区プラットホーム全景
(北から)

図版第50　稲葉遺跡第５次

(1) 2区全景(東南東から)



(2)出土遺物

図版第51　長岡京跡右京第635次

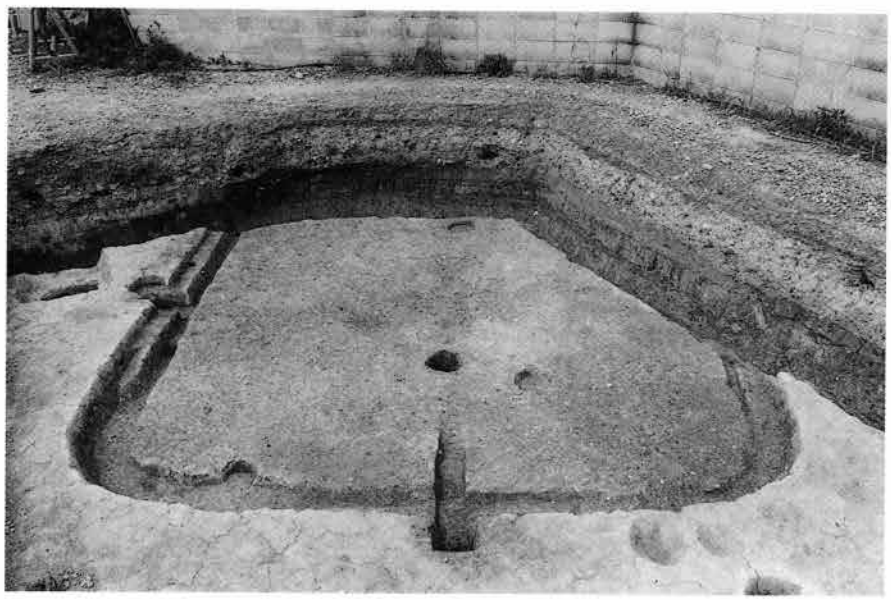
(1)調査地全景　(北西から、調査前)

(2)調査地全景　(北から)

図版第52　長岡京跡右京第635次

(1) S H63507検出状況
(北東から)

(2) S H63507(上層)
(南西から)



(3) S H63507完掘状況
(南西から)

図版第53　長岡京跡右京第635次

(1) S X63502検出状況　(北西から)

(2) S X63502完掘状況　(北西から)

(3) S X63502　(西から)

(4) S X63502北アゼ土層　(南から)

(5) S X63502中央アゼ土層　(南から)

(6) S X63502南アゼ土層　(北から)

図版第54　長岡京跡右京第635次

(1) S B63542　(北から)

(2) S B63543　(南から)

図版第55　長岡京跡右京第635次

(1) ＳＫ63514遺物出土状況　（西から）

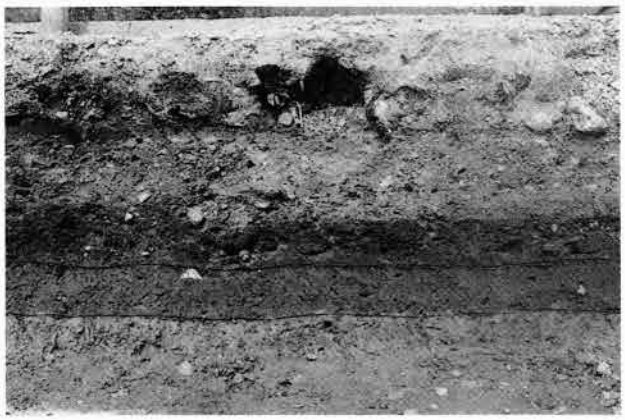
(2) ＳＫ63514土層断面　（西から）

(3) ＳＫ63514完掘状況　（東から）

(4) ＳＫ63533土層断面　（南から）

(5) ＳＰ63525軒平瓦出土状況　（西から）

(6) ＳＰ63534檜皮出土状況　（南から）



(7) 西壁土層断面　（東から）

(8) 東壁土層断面　（西から）

図版第56　長岡京跡右京第635次

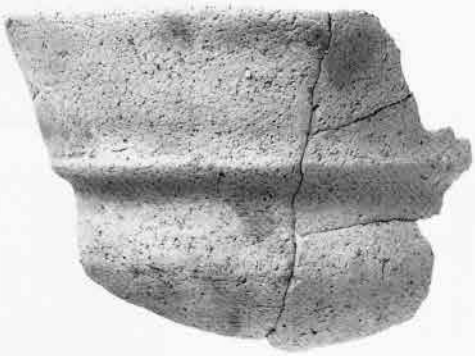
1

2

3

15

20



6

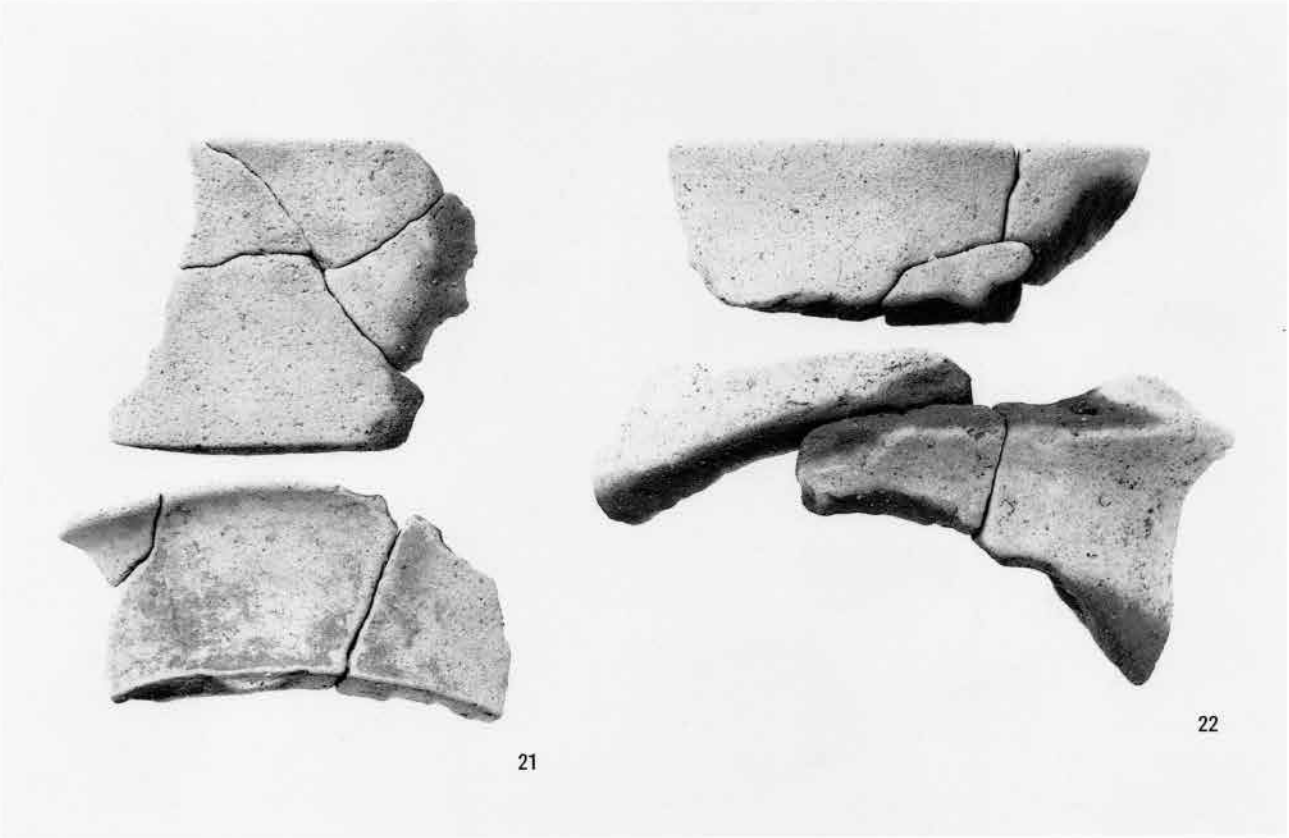
14

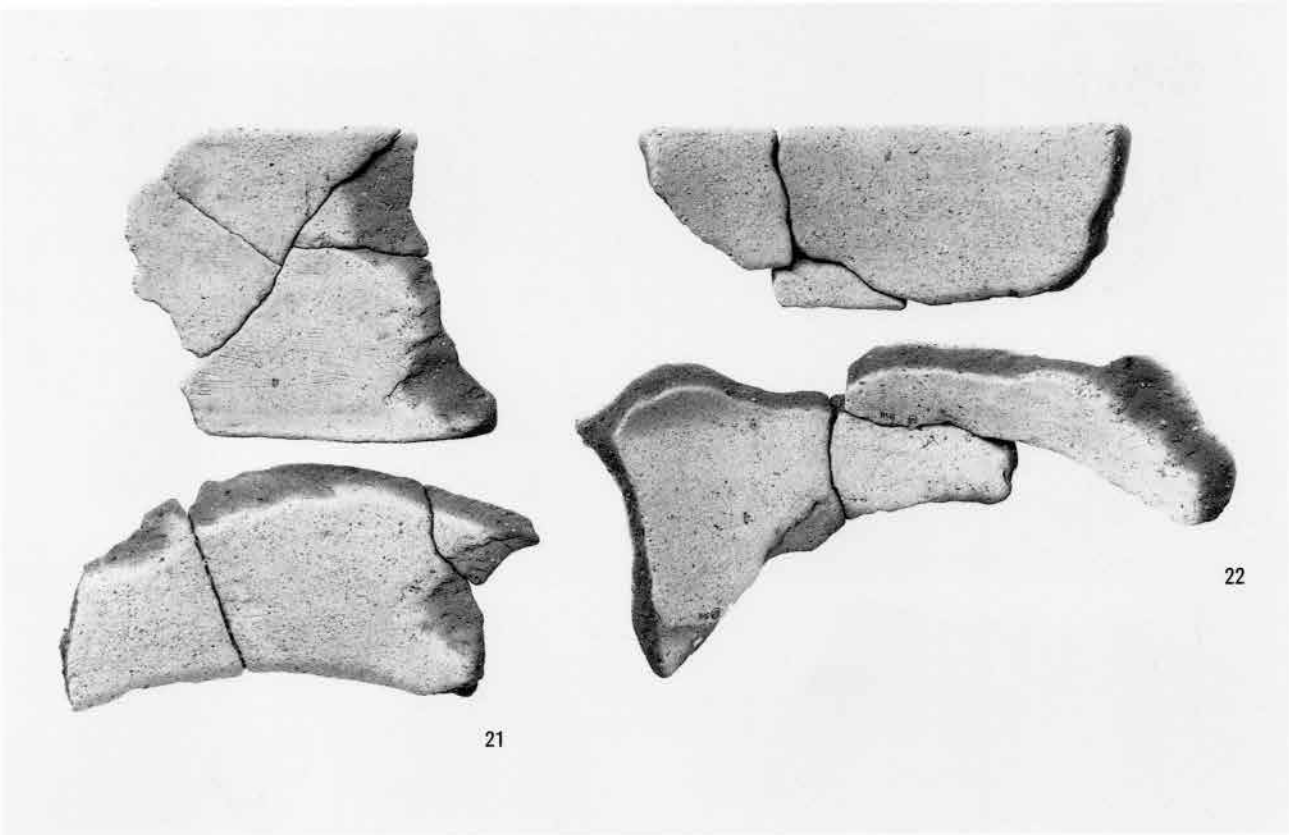
a

b

出土遺物(1)

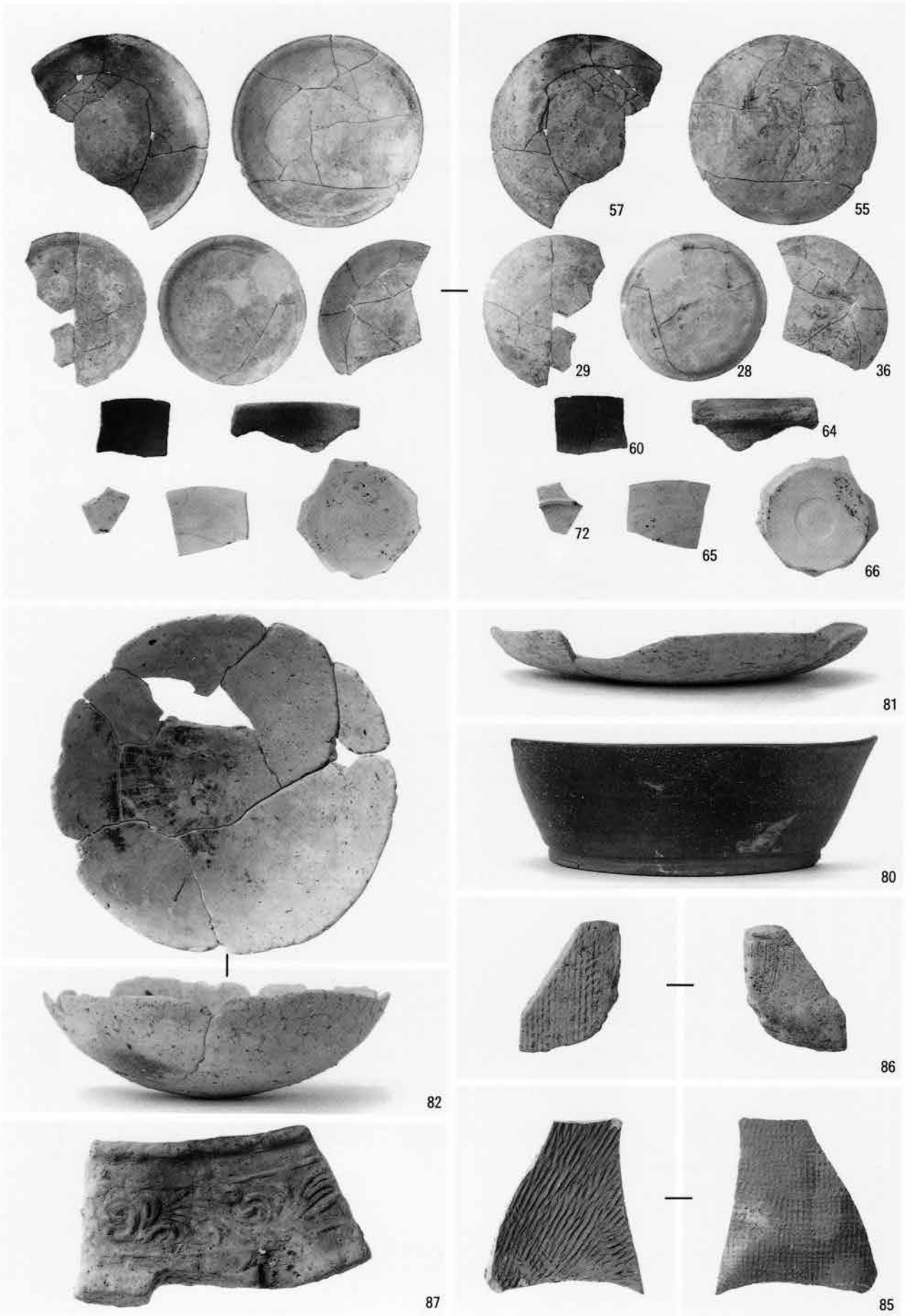
図版第57　長岡京跡右京第635次





出土遺物(2)

図版第58　長岡京跡右京第635次



出土遺物(3)

報告書抄録

ふりがな	
書　名	
副書名	
巻　次	
シリーズ名	京都府遺跡調査概報
シリーズ番号	第90冊
編著者名	石井清司・竹下士郎・中村周平・戸原和人・野島　永・森下　衛・柴　暁彦・竹原一彦・岩松　保・森島康雄・伊賀高弘
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40-3　　Phone　075(933)3877
発行年月日	西暦　1999　年　12　月　26　日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
めいしんおおやまざきじゃんくしょんかんけいいせき 名神大山崎ジャンクション関係遺跡								道路建設
ながおかきょうあとうきょうだいごひゃくはちじゅうきゅうじ 長岡京跡右京第589次	おおやまざきちょうおおあざしもうえのこあざかどた 大山崎町大字下植野小字門田	303	29	34° 54′ 1″	135° 41′ 48″	19980413 ～ 19981211	6,000	
あいけいだいさんじゅういちじ ＩＫ第31次	おおやまざきちょうおおあざしもうえのこあざかどた 大山崎町大字下植野小字門田	303		34° 54′ 1″	135° 41′ 48″	19981214 ～ 19990225	1,100	
あいけいだいにじゅうごじ ＩＫ第25次	おおやまざきちょうおおあざしもうえのこあざごじょうもと 大山崎町大字下植野小字五条本	303		34° 53′ 59″	135° 42′ 00″	19980512 ～ 19981104	780	
あいけいだいにじゅうはちじ ＩＫ第28次	おおやまざきちょうおおあざしもうえのこあざつつべ 大山崎町大字下植野小字土辺	303		34° 53′ 59″	135° 41′ 51″	19980622 ～ 19980728	330	
さんようでんいせき 算用田遺跡	おおやまざきちょうおおあざえんみょうじこあざいじり 大山崎町大字円明寺小字井尻	303	30	35° 44′ 24″	134° 39′ 7″	19981207 ～ 19990126	300	
だいにけいはんどうろかんけいいせき 第二京阪道路関係遺跡								道路建設
うちさとはっちょういせき 内里八丁遺跡	やわたしうちさとひゅうがどうほか 八幡市内里日向堂ほか	210	37	34° 51′ 32″	135° 44′ 19″	19980415 ～ 19980625	1,000	
こくどう1ごうきょうとみなみどうろかんけいいせき 国道1号京都南道路関係遺跡								道路建設

いちださいとうぼういせき 市田斉当坊遺跡	くみやまちょうおおあざいちだこあざさいとうぼう・しんたまき 久御山町大字市田小字斉当坊・新珠城	322		34° 53′ 3″	135° 45′ 7″	19980921 ～ 19990312	6,000	
きづちくしょざいいせき 木津地区所在遺跡								宅地造成
きづしろやまいせき 木津城山遺跡	きづちょうきづかたやま 木津町木津片山	362		34° 43′ 39″	135° 49′ 57″	19980420 ～	2,000	
こもいけいせき 菰池遺跡	きづちょうきづこもいけ・かまがたに 木津町木津菰池・釜ヶ谷	362		34° 44′ 3″	135° 50′ 10″	19990701 ～ 19991029	1,900	
いなばいせきだいごじ 稲葉遺跡第５次	きょうたなべしたなべくどにちょうめ 京田辺市田辺久戸２丁目	342	83	34° 49′ 7″	135° 46′ 17″	19990707 ～ 19990806	290	
ながおかきょうあとうきょうだいろっぴゃくさんじゅうごじ 長岡京跡右京第635次	ながおかきょうしてんじんいっちょうめ 長岡京市天神１丁目	362	91	34° 55′ 14″	135° 41′ 31″	19990520 ～ 19990714	280	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡右京第589次	大山崎町大字下植野小字門田	弥生 古墳	方形周溝墓 井戸・竪穴式住居跡	弥生土器・朝鮮系無文土器 土師器・須恵器	
ＩＫ第31次	大山崎町大字下植野小字門田	弥生 古墳	自然流路・溝・掘立柱建物跡・竪穴式住居跡	土器	
ＩＫ第25次	大山崎町大字下植野小字五条本	古墳	溝・井戸	土器	
ＩＫ第28次	大山崎町大字下植野小字土辺	古墳	溝	土器	
算用田遺跡	大山崎町大字下植野小字井尻	中・近世 弥生	溝 溝	土器	
内里八丁遺跡	八幡市内里日向堂ほか	弥生 古墳	耕作地跡 竪穴式住居跡	弥生土器・土師器・須恵器	
市田斉当坊遺跡	久御山町大字市田小字斉当坊・新珠樹	中世 弥生	坪境道・池状遺構 竪穴式住居跡・方形周溝墓	弥生土器・石鏃・石剣・玉作関連遺物	
稲葉遺跡第５次	京田辺市田辺久戸２丁目	古墳以前	ピット	土師器	
木津城山遺跡	木津町木津城山	弥生 古墳～飛鳥	竪穴式住居跡・テラス状住居 古墳	弥生土器 須恵器・陶棺	
菰池遺跡	木津町木津菰池・釜ヶ谷	奈良 江戸	土坑 掘立柱建物跡	須恵器・土師器・土馬・土鈴	
長岡京跡右京第635次	長岡京市天神１丁目	古墳 平安	竪穴式住居跡 掘立柱建物跡	須恵器・土師器 土師皿・羽釜	

京都府遺跡調査概報 第90冊

平成11年12月26日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷　(株) 大 光 社
〒604-0086　京都市中京区小川通丸太町下ル中之町76
Phone (075)222-1333 (代)